

正副議長経験者に対するオーラル・ヒストリー事業

第71代・72代衆議院議長

河野 洋平

衆議院事務局



## はじめに

国権の最高機関たる国会を構成する衆議院の正副議長を務められた方々から、その在任中に経験されたことや個別の政治的決定の中で正副議長として果たされた役割、判断の経緯や御自身の思い等について率直に語って頂くとともに、人生全般を振り返って、記録に残されていない政治的プロセスの実相やその豊富な政治経験から得られた卓越した知見を披露して頂き、それを広く国民に公開し、そして、衆議院に永久に保存し、後世に伝えることは、我が国の議会制民主主義の発展にとって極めて有意義なことと考えられます。そこで、今般、衆議院事務局として、正副議長経験者に対するオーラル・ヒストリー事業を行うことにいたしました。

その最初のインタビュー対象者として、令和元年五月に、当時としては憲政史上最長の二〇二九日間の長きにわたり議長を務められた河野洋平元議長に対して、衆議院事務局からオーラル・ヒストリーの実施をお願いしましたところ、河野元議長からは、「衆議院事務局であれば、正確に記録を残してくれると思うので、応じることにしたい」と快くお引き受け頂きました。

河野元議長におかれましては、四十二年余りにわたり衆議院議員を務められる中で、議長御就任以前にも幾多の政治的に重要な出来事に関与されましたが、今回、河野元議長御自身の政治哲学、当時の想いや関係者との秘話等を率直に披露して頂いたことをありがたく存じます。本件オーラル・ヒストリーが、今後、我が国が直面する諸課題の解決に向けた政治判断を行う際の参考となり、また将来の歴史的検証に資するものとなることを期待しております。

河野元議長のインタビューにつきましては、河野元議長の御意向も踏まえ、議長秘書として仕えた紅谷弘志元衆議院事務次長をメイン・インタビュアーとし、その他の事務局職員が、本来業務の傍ら、交代でサブ・インタビュアーを務めるという、事務局中心の実施体制で行いました。事務局として初めての試みであり、不十分な点もあろうかと存じますが、御容赦頂ければ幸甚です。

末筆ながら、改めて、本件事業に御理解頂き、コロナ禍による中断を挟み、約三年の長きにわたりインタビュー及び校正に頂いて頂いた河野元議長、秘書の甲賀一雄氏、その他関係各位の御協力に厚く御礼申し上げます。

衆議院事務総長

岡田

憲治

## 河野洋平元議長のオール・ヒストリー実施概要

### 一 インタビュー実施期間

令和元年十月から令和四年六月までの合計三十一回

全ての回を対面で実施（於：政治工学研究所（河野事務所））

※コロナ禍において、アクリル板を設置する等、感染予防対策を講じて実施。また、感染状況に応じて、時間短縮や一定期間中断するなどの対応を行った。

### 二 インタビュー方法

（事前）事務局において必要な資料の収集・整理、年表作成等の準備を行い、簡単な質問票を事前に送付した。また、元議長の依頼を受けて各種資料の準備を行った。

（当日）メイン・インタビュアーによる質疑応答で進行し、適宜、サブ・インタビュアー（事務局担当者）が交代で参加からも補助的に質問を行った。

### 三 インタビュアー

メイン・インタビュアー 紅谷 弘志（元議長秘書・元衆議院事務次長）

サブ・インタビュアー

（交代で一～二名出席）

築山 信彦（元議長秘書）、二見 輝、吉野 貴浩、  
清家 弘司、寺坂 龍児、田中 翔太、岡山 恵梨、  
小田 亜希子、當麻 昇平、亀屋 将紀、佐々木 拳斗、鈴木 真理、森元 千優

記録部同席者

澤口 稔、飯塚 博、森下 めぐみ

※記録部において、速記録（第一次原稿）を作成

同席者

甲賀 一雄（元議長秘書・河野事務所秘書）

### 四 記録の作成

事務局において速やかに速記録を作成し（第一次原稿）、元議長に確認を仰ぎ、必要に応じて修正を行った（第二次原稿）。全てのインタビュー終了後、元議長の意向を踏まえ、その時点で依然として公開が不適当と思われる部分を除外した公開用の記録（第三次原稿）を作成した。

### 五 記録の保存及び公開方法

音声データ及び全ての記録は、衆議院が全ての権利を保有し、責任を持って永久に保存する。

公開については、衆議院ホームページ上での公開を原則とする。

〔備考〕メイン・インタビュアー略歴

紅谷 弘志（べにたに ひろし）

昭和五十三年衆議院に入り、河野洋平議長秘書、委員長、調査局長等を経て、事務次長となり、平成二十八年に退職。





# 目次

〔はじめに〕	1
〔河野洋平元議長のオーラル・ヒストリー実施概要〕	2
<b>生誕から初当選まで</b>	
《河野家の系譜》	7
《政治家一家》	9
《小学校時代(戦争体験)》	11
《中学・高校時代》	12
《大学時代》	14
《社会人時代》	15
《結婚》	17
《河野一郎死去、追悼演説》	18
《衆議院議員総選挙出馬までの経緯》	19
《選挙運動》	22
<b>新人議員時代</b>	
《初当選、新人議員としての活動》	24
《サイパン島訪問》	29
《官僚政治と党人政治》	31
《非核三原則》	34
《日中国交正常化とAA研》	36
《河野謙三参議院議長と参議院改革》	43
《文教族、文部政務次官》	47
《政治工学研究所(政工研)の結成》	50
《自民党新政策綱領案の策定》	52
<b>新自由クラブ時代</b>	
《自民党離党と新自由クラブ結成》	54
《新自由クラブの選挙活動》	62
《新自由クラブの立ち位置》	64
《最初の試練―参議院選挙》	68
《基盤政党論と保守二党論の対立》	71
《続く選挙―二回目の衆議院選挙》	73
《大平・福田四十日抗争の影響》	75
《大平内閣不信任決議案可決》	80
《党勢の復調と国会活動》	82
《中曽根内閣との連立》	84
《防衛費対GNP比1%枠》	88
《新自由クラブの解党》	90
<b>自民党復党</b>	
《自民党復党、宏池会へ》	93
《予算採決の本会議欠席》	97
《永年在職議員表彰での決意》	99

《PKOと日本の国際貢献の在り方》	100
《内閣官房長官として》	105
《宮沢内閣と政治改革》	108
《河野談話》	112
<b>自民党総裁時代</b>	
《河野総裁誕生》	114
《政治改革関連法案成立の経緯》	118
《政治改革法案の評価》	127
《自社さ連立政権の樹立》	132
《自社さ政権の歩みと政権移譲の打診》	136
<b>外務大臣時代</b>	
《小選挙区比例代表並立制で初の総選挙》	146
《内閣の変遷と小淵総理の逝去》	148
《河野外交》	149
《宏池会の退会と大勇会の結成》	153
《生体肝移植》	154
<b>第七十一代衆議院議長</b>	
《第七十一代衆議院議長》	159
《米国下院及び中国全人代との議会間交流》	163
《自衛隊のイラク派遣に係る国会承認》	170
《国会議員の互助年金に関する調査会》	172

《小泉総理への申入れ》	175
《郵政民営化法案衆議院可決・参議院否決、郵政解散》	177
《クールビズの申合せ、議長の挨拶》	183
<b>七十二代衆議院議長</b>	
《七十二代衆議院議長》	185
《後藤田正晴氏の逝去》	187
《議長からの提案―公聴会の在り方等》	188
《教育基本法案、衆議院本会議で与党単独採決》	190
《国会図書館長の人事》	192
《相次ぐ総理大臣の交代》	194
《ねじれ国会における国会運営の在り方》	200
《ガソリン国会における両院議長あっせん》	202
《被爆地広島においてG8下院議長会議を開催》	208
《議長退任、政界引退》	214
〔正副議長経験者に対するオール・ヒストリー事業について〕	221
〔年表・略歴〕	223



○紅谷 衆議院がオーラル・ヒストリー事業を行うことになり、初回を河野元議長にお願いすることになりました。

議長時代を振り返っていただき、当時の出来事や判断、それに關わる当時話せなかったようなエピソードがありましたら、議長在職時を中心ですが、河野洋平という希代の議長を生んだその歴史を生い立ちから辿っていく形で進めさせていただきますと思います。

議員として四十二年余り、議長としては二千二十九日という長期間の在籍でした。私は議長在任中は議長秘書と秘書課長としてお仕えました。その間、イラクへの自衛隊派遣の問題、郵政解散、さらには議員年金問題、そして道路財源の両院議長裁定という大きな出来事がありました。

平成三十一年の今年、引退されてからちょうど十年になります。当時を思い起こしていただいただけでなく、今の政治に対する感想や、これだけは言っておきたいという直言も多々あるかと思えますので、率直にお話しただければと思います。

どうぞよろしくお願いいたします。

### 《河野家の系譜》

○紅谷 河野家のルーツを遡ると、四国・伊予の河野水軍に行き着くということ、日経新聞の「私の履歴書」の中で書いておられます。水軍の末裔というと海賊というイメージが強く、有名なのは村上水軍や越智水軍、紀州には熊野水軍があります。村上水軍という政治家では村上正邦さんや村上誠一郎さんがそうかと思えますが、お二人はいかにも水軍の末裔という感じがするのですが、河野先生を見ていると、水軍の末裔とはほど遠い印象です。

しかし「私の履歴書」の中では、私も父も強情で気が強いのは水軍の血が流れているからだろうとおっしゃっていますけれども、ご

自分の性格からそれを感じられることはあるのでしょうか。

○河野 僕は四国の河野水軍の伊予大三島を訪ねてみたことがあります。相当な砦があつて何度も戦い、結局は源氏に呼ばれて関東まで出てきて、源氏は鎌倉で幕府をつくるのだけれども、余り近くてはいけないというので小田原まで下がって、そこに住みついたようだね。その末裔だということだから、やはり脈々と血は流れているはず。

それで、自分の父のことなのですが、世間では、河野一郎というのは相当剛腕というか剛直と言われていたんだけど、昔のことを整理して振り返ってみると、河野一郎より河野謙三の方が頑固なんだね。

河野一郎というのは意外に柔軟なところもあつて、一時は軽井沢に立てこもつて自民党を離党するとか河野新党論とかをやったんだけど、それなんかも大野伴睦さんとか松村謙三さんという友人や先輩と会つて話をして、最後はそういう先輩の説得を入れて止めるんです。

ところが、河野謙三という人は、参議院改革を主張して議長選挙でもみくちやになるんだけど、この人は最後まで頑張るんです。世間では河野謙三という人は割合と柔らかな調子で兄貴とは大分違つて言われているけれども、一番近くで見ている僕からいうと、謙三という人は相当頑固だなという感じで、僕は、どっちかというところ謙三に似ているんです。ふだんは割合と柔らかな調子に見えるけれども、離党するかしないかというときには最後まで頑張つて突っ切つちやうわけです。そこは、おやじの方がむしろ、先輩や友人の意見を聞いて踏みとどまったんです。

どうも、あの頃の方が、政治家同士の友情とか、政治家同士の濃密な話合いというのがあつた。僕らの時代になると余りそういうのがなくて、表向きの友情関係というのはあつても、最後まで本当に

抱きついて心中しても引き止めてやろうというのは余りなかったし、それから、政治生活を続ける上でも、この人のことが一番という人が余りいなかったのかもしれない。

ただ、僕には鯨岡兵輔さんとか宇都宮徳馬さんという先輩がいて、それから、あの当時、僕に一番影響が強かったのは意外なことに松野頼三さんで、その人たちから相当丁寧に慰留を受けたけれども、とうとう振り切って離党したところを見ると、やはり相当頑固なところがあつて、それは水軍の血が流れているからかもしれないというふうに思いますね。

○紅谷 先生の地元の小田原や平塚辺りでは、今も水軍が由来の、河野姓は随分あるのでしょうか。ちなみに、河野姓が一番多いのはやはり河野水軍発祥近辺の愛媛、広島のようにです。

○河野 小田原や平塚にはそんなになくて、ほとんど親戚ぐらいじゃないかな。

西日本の方ではカワノなんです。だから、僕が初めて入閣したときに後藤田さんが官房長官で、組閣名簿を読み上げたときに河野（かわの）洋平君と言われて、誰のことかとしばらく気がつかなかったことがありますね。

○紅谷 今お話にもありましたが、源氏方について小田原の方に行つたということですが、鎌倉幕府の成立が十二世紀ですから、八百年余りの河野家の歴史があるわけですね。

○河野 小田原辺りで一番暴れ回つたのは北条早雲で、歴史では相当な存在感を示し、小田原城という大変な名城、難攻不落の名城を残すんです。

一方、我が家の方は、そういうのとは余り関係なくて百姓をやつていたんです。余り大した百姓じゃなかったようですが、江戸時代に二宮尊徳との縁で農業の教えを受けて、二宮さんの農業改革の仕事に、かばん持ちをせずとつて歩いていたらしいです。

○紅谷 それは、河野先生からいうと高祖父、河野一郎先生の曾祖父の治郎右衛門という方が、二宮尊徳のかばん持ちをしていたようですね。

○河野 そうです。弟子で付いて歩いて、いろいろ教わつて、我が家に残っている「分をわきまえ、度を過ぎずな」という家訓があるんです。分をわきまえというのは、分を越えちゃいけないと。度を過ぎしちゃいけないというのは、決めたラインを出ちゃいけないと。「分をわきまえ、度を過ぎずな」は、おやじからは余り聞かなかつたけれど、謙三さんからは結構聞かれました。

○紅谷 二宮尊徳と河野家との繋がりというのは、河野治郎右衛門さんの奥さんの妹が二宮尊徳と夫婦だったとのことですが。

○河野 これは余り大きい声じゃ言えない話だけど、二宮さんというのは女房が複数いてね。厳密に言うくと、夫婦だったのかはよくわからないところもあるんですよ。

二宮尊徳を大切にしていた時代が二十年ぐらい前まであつて、戦争前に小学校に通っていた頃は、薪を背負つた二宮さんの銅像がありましたよ。小田原に私の実家がありますけれども、小田原市の隣に豊川村という村があつて、その間に酒匂川が流れていて、その向こう岸に二宮さんの実家があつて、今でもその実家があります。今は記念館みたいになつていて、ちよつとした展示があつたりしていますね。

二宮さんは、種粃を蒔いて、米ができたなら、まず蓄える。つまり、来年の分はまず蓄えろという。米を来年の分を取つて、残つたのを売つて得たお金で飲んじゃいけない、土地を買いなさいと繰り返言われたようです。それで、高祖父は土地を少しずつ買つて、ちよつとした地主になつて村長をやつたりしていました。

だから、戦争中に僕が疎開して小田原の家に行つたときには、米倉がありましたよ。そこへ年貢米を持つてくる人もいましたね。

○紅谷 そういうこともあって、河野家というのはずっと農業に携わっていて、お父様の河野一郎先生は、朝日新聞では農業関係の担当で、後に農林大臣の秘書官を務められたのも、そういった影響があったということでしょうか。

○河野 そうだったと思います。だから、農業のことはよく知っていました。父は、終戦直後に公職追放になるのですが、何もするところがないので家へ帰って百姓をやっている以外にないんです。何の抵抗もなく百姓をやりましたね。僕らもその百姓のせがれだから農作業をやりました。

僕がまだ小学校三年ぐらいで父が追放で帰ってきて、毎朝早くたたき起こされた。行くぞと言われて、おやじの自転車の後ろに乗せられ、どこへ行くかというと自分で田植した農地を回って歩いて、水がちゃんが入っているかどうか、稲の成長具合はどのくらいか、葉っぱの色とか、それから分けつといって、一本ずつ植えたのが三本になったり五本になったりして増えていくのをチェックする。それから、夜中に変なやつが来て水門を開けられちゃうと、そっちへ水が全部行って、こっちに水がなくなることもあるものだから、ちやんと水があるか大丈夫かと毎朝確認に行く。それがまず百姓の最初の仕事でしたね。帰ってきて朝飯を食べて、それから田の草を取れとか何々しろとか言うから、いかげんなものじゃなくて、本当に百姓だったんですよ。

僕は、中学までは小田原の中学で、自宅から通って、さつき言ったように地主だから、その当時は農地改革の前だから、百姓は小作人がやって地主はそんなにやらないだけども、それでも田んぼの真ん中に住んでいて農業をやっていたから、百姓のことはよく知っていましたよ。

だから、自分は農家の生まれ、農家の育ちという意識はありません。

## 《政治家一家》

○紅谷 河野家はずっと農業に携わっていたということですが、一方では政治家一家と言われています。その系譜についてお聞きしたいと思います。

河野先生御本人はもちろんですが、祖父の河野治平さんが県会議長、お父様の河野一郎先生はもとより、叔父が河野謙三先生、さらに、いとこには田川誠一先生もいらっしやいます。ご子息は河野太郎先生ですから、本当に政治家一家と言っていると思います。

○河野 僕からいえば祖父で、一郎の父親の河野治平という人は地方政治家でした。今の東京大学、その当時の東京帝国大学農学部に行つて農業技師になるんです。京都の農業試験場に勤務したり、養鶏業をやつて県の連合会の会長をやつたりして、やがて県会議員になつて県会議長までやるんです。

治平は、子供の一郎と謙三を杉浦重剛という人が主宰していた称好塾という塾に預けるんです。

杉浦重剛という人は滋賀県の人で、この人がつくつた学校が今も東京に残っています。今はもう普通の学校だけれども、その当時は非常に日本的というか、欧米かぶれは駄目だという主張をする人です。昭和天皇にご進講をなさっていた人でした。杉浦さんは、イギリスに留学したりして外国経験もすぐあつて、外国のことなんか一切知らない国粋主義者ではなかったんです。国際的な知識を随分持っているが、やはり日本という国を大事にしなきゃいかぬというのを強く言っていた人で、その人が主宰していたのが称好塾です。そこは昔の塾だから、住み込みで行儀作法から雑巾がけや庭掃除もやっていたようです。

河野謙三という人は非常に真面目な人で、称好塾に入つてきちんと卒業というか、終わるまでそこで勤め上げるんですが、一郎は途

中で逃げ出したりして余り熱心じゃなかったんですが、杉浦重剛という人の影響はずっと受けていて、僕は父から天皇家に対する尊敬とか大分言われてきたから、皆さんは分かっているでしょうけど、皇室に対しては割と丁寧だったと思うんですが、それはその影響があったんです。そういう影響を子供の頃から受けていたんだろうと思いますね。

○紅谷 河野一郎先生の話がありました。河野一郎先生は朝日新聞社に入られて、農林省の担当になり、その縁で大臣秘書官から政界入りされたということでしょうか。

○河野 父は朝日新聞の農林省担当で、その後山本悌二郎という農林大臣の秘書官をしました。畜産会の幹部にもなって、愛甲豚という豚の産地である平塚から、畜産関係者をバックにして選挙に出て当選するんです。それは小田原にいた鈴木さんという大物とは戦わないためだったのですが、これが先に行って僕にもいろいろプラスにもなって、鈴木家はもう丸々僕を応援することになったんです。それで僕は、小田原と平塚と拠点を二つ持って選挙をやるといふ非常に有利な選挙をできることになるんだけど、元をただせば、そういうことがあったんです。

それから、僕が政治生活で一番大きな影響を受けたのは、いとこの田川誠一です。年齢が二十歳くらい離れていたのですが、僕はずっとおじさん、田川のおじさんと言っていたら、おじさんじゃないと言った怒られました。民政党的の中のいい部分を引き継いでいたみたいな感じの人でした。

○紅谷 田川先生は、芯のある頑固な政治家という印象で、自民党国対が全委員会強行採決の指示を出したのですが、社会労働委員長だった田川さんだけは従わなかったという記憶があります。

○河野 物すごく頑固でした。一人だけ絶対強行採決はやらないと言って頑張った、そのときの社会党の筆頭理事は田辺誠さんですが、

ここで強行採決をやらなければ順々にちやんと審議はするから、やるなど言っていた。僕は、あの頃、田辺さんと国会の廊下ですれ違つて会うたびに、河野さん、俺らが田川を絶対守るから心配するなと何回も言われたことがあるんです。田川さんもやはり政治家一家で、この人は、朝日新聞を出て松村謙三さんの秘書でした。とても信頼されて、松村さんがやっていた日中間問題を田川さんが引き継ぎました。

○紅谷 そういう政治家一家を支えられたのが先生のお母様ですが、田川家から嫁がれ、お父様は衆議院議員で、お兄さんも県会議員です。だから、やはり政治家一家の育ちだったわけですね。

○河野 私の母の照子は、田川家からお嫁に来たのですが、田川家というのは民政党だったんです。河野家は政友会で、その頃は政友会と民政党は張り合っていたから、そんなところから嫁をもらおうということは余りなかったはずなんです。一郎とは見合い結婚です。田川家が、河野一郎と娘を見合いさせるに当たってあらかじめ河野一郎のことを調べていて、その調べた文書が田川家に残っているのを田川誠一が私にくれました。結構よく書いてあって、これならもらうだろうというような内容でした。

田川家は横須賀の名家で、そこから嫁に来たんです。だから、田川誠一は私のおふくろの兄貴、つまり長男の息子ですから田川家の跡取りです。母はそういう家で育ち、物静かで絶対外へ出ない人でした。余りべらべらしゃべる人ではなく、僕が酒を飲んで遊んでいたときでも特に何にも言わないんです。私はあなたのことを信頼しているから何も言わないと言っています。父が六十七歳で死んで、母はまだ五十代で未亡人になり、一時すごく落ち込んでいましたけど、俳句を習ったり俳画という絵を習ったりして、晩年はずっと俳句をつくっていました。句集も何冊かあります。とにかく草花を大事にする人で、僕も草花が好きなのは、完全におふくろの影響ですね。

## 《小学校時代（戦争体験）》

○紅谷 少年時代を振り返っていただきたいのですが、特に小学校時代は戦時中で、いろいろご苦労があったようですが、どんな時代だったのでしょうか。

○河野 私が生まれた昭和十二年は二・二六事件の影響を受けていて、軍部が政治に介入した政党政治が危機の時代でした。昭和十一年から十二年にかけては内閣が脆弱で、軍部の言いなりで首相が決まった。無茶なときに解散させるから選挙に負けて、首相が替わるという政治的に難しい時期でした。そんなときに生まれた私は、父が同僚の政治家のアドバイスを受けて、太平洋上の波、平らかなれということでした。「洋平」という名前が付けられたんです。

父の河野一郎は、昭和七年から国会議員になっていて、僕は河野家の次男なんです。兄と姉がいたんですが、兄が病気で死んで男がいなくなり、昭和十一年の選挙で父が逮捕されていた最悪の状況の中で私が生まれたので、非常に喜ばれたと聞いています。

父は新聞記者上がりで、議員としては生意気だったようです。徹底して官僚や警察、軍部とも喧嘩するものだから、反発を買って物すごい弾圧を受けて、しょっちゅう選挙違反で引つ張られて刑務所に入ったりしていました。

昭和十一年、十二年というのは、政治も非常に不安定で軍部が非常に強かった。昭和十一年の選挙では、あの頃は乱暴で、おやじは選挙中に逮捕されていたから獄中当選なんです。当選したけれども容疑者として警察にいて、警察の中で、おまえ当選したぞなんという時代です。候補者が逮捕されるぐらいだから関係者は何十人も逮捕されて、その当時はやはり相当ひどい拷問があって、自殺する人まで出るという惨たんたる状況だったようです。

僕は神奈川県平塚で生まれ育つんだけど、平塚は軍需工場があ

った上に、湘南海岸から米軍が上陸する可能性もあって危ないというので、小学校三年のときに小田原に疎開しました。だから平塚第一国民学校に入学したんですが、三年から小田原の千代小学校に転校するんです。当時はまだ小田原市ではなく足柄下郡豊川村で、そこへ疎開するんだけど、小学校がなくて隣村の小学校に通ってました。結構遠いところまで通っていたという記憶です。

小学校の頃は、家にも道端にも防空壕があつて穴が掘ってあるだけなんだけど、危ないときはそこへ飛び込むか、橋の下へ潜り込めと言われましたね。

学校では、警戒警報が鳴ると授業を止めて帰れと言われたけれども、家まで結構遠いから、家に着くまでには、大体、飛行機は一度上空に来て、家に着く頃にはもうどこかに行つて終わっているみたいなこともあつたけど、相当怖い思いをしましたよ。今でも仲よくしている小学校の同級生の中には、落ちていた不発弾を拾つて、パンと指を飛ばされた仲間がいます。そういう不発焼夷弾が落ちていたりするような環境でした。

昭和二十年に戦争が終わると普通の学校に戻るんです。それまでは男の先生はみんな兵隊に行つて、女の先生が年寄りの代用教員しかいなかったのが、頑丈な男の先生が除隊して帰ってきたので、先生が相つきつく荒っぽくなったという印象でした。

小田原は田舎ですから、春と秋の農繁期は学校は休みで田植や稲刈りをする。僕ら小学校の三年、四年でも、田植前の田んぼを耕すんです。そのころはトラクターなんかから、馬か牛で田をならす作業、馬の鼻取りというんだけど、馬の鼻の前を捕まえて引き回すのを子供がみんなやっていましたし、場合によっては長い竹ざおで引いたり、そんな作業を随分しました。

田舎の学校だから、稲刈りの前後はイナゴ取りがあつて、学校を挙げてイナゴを捕まえて、それを煮て食料にしたものです。

そして、小学校五年の頃に進駐軍による教育改革があつて、六・三制の義務教育になり、中学が全部義務化されるんです。

○紅谷 その頃は、一郎先生が公職追放になつてた時期ですね。

○河野 おやじは苦心惨たんして、終戦直後に自由党の幹事長になつて鳩山一郎を担いで、戦後第一回目の選挙で勝つたけど、勝つて鳩山内閣を組閣しようという日の朝、公職追放になる。それが昭和二十一年六月で、僕が小学校四年から中学校三年の昭和二十六年夏までの約五年間です。本当に進駐軍による追放というのはひどいもので、一切の公職が駄目だから、その日から給料ゼロだからね。どうすることもできないんです。

おやじは、結局、日魯漁業という会社に世話になるんです。平塚常次郎という人が社長で、どういう縁があつたのか分からないけど、その平塚さんが吉田内閣の運輸大臣で入閣して社長がいなくなつて、おやじは最後は社長までやつたんです。

日魯漁業は、当時は日本とロシアの間のサケ・マスを、国境すれすれで海軍に守られながら捕つたという、相当無茶なことをやってた。その経験があるものだから、ずっと後の話だけれども、おやじは日ソ漁業交渉に割とすつと入るわけです。

自由党が選挙に大勝して、鳩山一郎が組閣しようと思つたら公職追放。父は幹事長で、全国に候補者を立てていて落選した人もいたから、自分は追放になつたけど、その人たちの面倒を見るわけで、それが公職追放令違反と言われて逮捕されるんです。

○紅谷 そういう中で洋平少年は過ぎられるのですが、少年期ながらも政治や政治家に対する印象はお持ちだったのでしょか。

○河野 おやじの政治活動の厳しさというのを見ていたから、もう政治家は絶対嫌だと思つてたね。僕は生まれていないけれど、選挙違反でおやじが捕まつて、獄中当選という激しい選挙だったという話を聞いていたから、姉と二人で、もうどんなことがあつても父

親に迷惑がかかるようなことはやっちゃいけないという、自分を律するとうか、自分をすごく縛っていましたね。

そのころは優しい少年だったから、政治家はとても嫌だなと思つていました。だけれども、やはり門前の小僧で、政治は嫌だなと思いつながら訪ねてくるお客はほとんど政治家だし、そういう人にかわいがられて、興味はあつたんだね。

### 《中学・高校時代》

○河野 昭和二十四年に小田原にある私立の相洋中学に入学しました。父親からこの学校に行くように言われ、試験を受けて入ったんです。通学には、まず東海道線の最寄りの鴨宮という駅まで行くんだけど、家からは歩いてたつぷり三十分はかかつて、そこから電車で小田原まで七分、駅からは学校がある小峰の丘まで二十分ぐらい山を登るといふ非常に鍛錬される通学でした。

相洋中学は小田原の小峰山にあつて、その麓にある割と大きなグラウンドで野球なんかしていたのが、二年のときに急に工事が始まつて、あれよあれよという間にそこは競輪場になつてしまつて、授業中にジャンジャンと鐘が鳴ると覗いては怒られたものです。学校の通学路には、焼きイカの屋台があつたり、酔っぱらつたおじさんがいたりする中を通つていたという思い出があるね。

僕は卓球部に入つていて市内の大会に出たりしてはいたけど、ピンポン程度の腕前で余り大した印象はないな。公職追放令違反で逮捕されていた父が入つていた刑務所が、中学校がある山の向こう側にあつて、実際に入つていたのは二か月くらいなんだけど、それが随分嫌だったという思い出があるなあ。

父は、私が中学三年のときに追放解除になり、自由党に復党して鳩山政権樹立に立ち上がるんです。衆議院がいよいよ解散になり選

挙を迎えると、追放になった人達がみんな当選したんです。戦前派の国会議員で割と骨っぽいのはみんな追放になって、その穴が空いたところへまず吉田茂さんが入ってきて、そこへ大蔵省や運輸省のOBを呼んで、池田勇人さんや佐藤栄作さんが来て官僚派ができた。鳩山さんたち戦前派は当選すると党人派といい、官僚派と対峙するんです。そこから徹底抗戦が始まるわけです。

中学三年になると、父から我が家はみんな早稲田なんだから早稲田に行けと言われてたけど、そう簡単に行けるものじゃないので困惑した思い出があります。父は、大学は試験が難しいから高校なら何とか滑り込むだろうという思いだったようだけど、小田原と東京では学力が相当違うからすごく骨を折った。いろいろな先生が来てくれて、ぎゅうぎゅうに詰め込まれて、それで試験を受けて、やっと早稲田に入るところまで辿り着いたんです。

昭和二十七年四月に早稲田高等学院に入って、平塚から通っていたけど、これも結構時間がかかったんです。朝の六時頃の電車に乗って、八時に早稲田の図書館が開くので、別に図書館で勉強するわけじゃないんだけど、いつも一番乗りだった。それは友人のノートを写すために毎朝図書館に通っていたということもあったからね。

高校の途中からは、母と姉と一緒に住んでいた平塚から、目黒で父と一緒に住むようになり、それから父との関係が非常によくなった気がしました。

○紅谷 話が少し脇道にそれますが、河野一郎先生は牧場主で、しかも菊花賞に勝つほどの馬主でもあったようですが、その影響で先生も小学生の頃から競馬場に行くようになって、議長時代もそうでしたが、馬との関わりが生活の一部に組み込まれているようでした。それは、先生とお父様との関係だけでなく、ご子息の太郎先生も、子供の頃は父親と話をするために必死で馬の血統を覚えたというふうに話しておられます。

先生と馬の関わりはどのようなものだったのでしょうか。

○河野 父は公職追放で何もすることがなくて、競馬でもやらないかと誘われて行くようになった。それで一人で行きづらかったのか、僕が中学に入る頃にはよく競馬場に連れていかれましたよ。

おやじを競馬に誘った何人かの人とは僕も随分長く付き合いしました。例えば、横浜の沖仲仕の親分の鈴江繁一さんや明治座の社長だった新田新作さん等、全く世界の違う面白い人たちとの付き合いは、その追放中にできたんです。

おやじと僕は年が四十違うし、おやじは政治に没頭しているから、話を合わそうと思うと馬しかなかったんですよ。風呂なんかしょっちゅう一緒に入るんだけど、話すことがないから一計を案じて、馬の話をするれば一番いいというので話していました。

その当時、競馬というのは、その週の出走馬が金曜日になるとガリ版刷りの出馬表に載って、新橋や東京駅の前で売られているのを買いに行くんだけど、それを子供が買いに行くのは気が引けましたよ。でも、その一枚があれば父とは一週間くらい話ができましたね。

○紅谷 今も那須の牧場によく行かれますが、馬というのは先生にとつてどういう存在なのでしょう。

○河野 もう癒しそのものですね。

○紅谷 何度か那須の牧場に伺いましたが、牧場に河野一郎先生の部屋を造られて、そこにあるデッキからの景色がいんだという話をしておられました。河野一郎先生の部屋がそのまま残されているのですね。

○河野 おやじは雷が嫌いだね。ところが栃木県というのは雷が名物だから、絶対に落ちない部屋を造ってほしいと言うから、一か所だけコンクリートで雷が落ちない部屋を造ったんです。もう他は全部潰したんだけど、あの部屋だけは潰すわけにはいかないからそのまま残っているんです。

おやじと馬の話をする切りがないね。

○紅谷 高校時代に話を戻しまして、高校の帰りにお父様の事務所で手伝いをされて、そこで政治家を間近で見えるようになったのとですが。

○河野 父は、日魯漁業が持っていた東京駅の丸ビルに事務所があって、僕はそこに寄ってお茶くみをしていろいろなことを耳学問をしていました。その丸ビルの事務所の秘書が木部佳昭さんと佐藤孝行さんなんです。

○紅谷 その当時は、お父様が自由党内での吉田派と鳩山派との間の対立の中で、党を除名されたり、日本民主党を結成されたりした激動の時期で、政治に対する関心も高かったのではないのでしょうか。

○河野 鳩山一派が自由党に復帰する頃で、父が最も信頼していた三木武吉さんとともに中心的存在でした。事務所には多くの議員が入り込んでいたし、父と立会演説会に一緒に行って、政治の熱気を感じてはいたけれども、自分が政治家になろうという気はなく、野次馬的に興味はあつたくらいです。

高等学院は二年になると理工系と文系とに分かれるんですが、頭のいい人はみんな理工系へ行っちゃう。その次に文系の中の上位十人ぐらいが政経学部へ行き、僕は八番目か九番目ぐらいのぎりぎりの位置でしたが、早稲田大学の政治経済学部に入ることになったんです。

## 《大学時代》

○紅谷 大学に入学されたのが昭和三十年四月でした。昭和三十年という年は、言うまでもなく自由党と日本民主党の保守合同と左右社会党の再統一があった、いわゆる五五年体制のスタートの年です。一郎先生は保守合同の中心的役割を担われ、また、鳩山内閣の農林

大臣として国政の中心で活躍されるようになった頃ですが、どういう大学時代だったのでしょうか。

○河野 父の政敵だった吉田茂首相が昭和二十九年十二月に造船疑獄で内閣総辞職に追い込まれ、父は、保守合同を推進した三木武吉とともに鳩山内閣を実現させ、農林大臣になって日ソ漁業交渉をまとめ、日ソ共同宣言の締結にも力を注ぎました。また、春秋会つまり河野派を結成したりと絶頂期に入っていくわけです。

僕は大学に入って競走部に入ったんです。別に陸上競技の記録を持っていたわけでもないのだけど、競走部の監督が青木半治さんで、競走部に入るようにと言うんです。高校の頃にちよつと長距離を走った程度なのに、何でそんなことを言われたのかよく分からないんです。

入部しても箱根駅伝のメンバーについていくのは無理で、二年のときに君は主務、サブマネジャーをやれと言われ、四年のときにチーフマネジャーをやっていました。そのころのマネジャーは大変で、金集めも練習場の確保も、みんなマネジャーがやっていたんです。

早稲田の競走部は名門だけれども、ずっと低迷していたのが、僕が三年のときに日本学生陸上競技対校選手権大会で優勝し、さらに連覇して、とてもいい思いをして卒業しました。父も競走部のOBだったので、とても喜んでいましたね。

○紅谷 議長時代によく青木半治さんを訪問されていました、日本陸上競技連盟の会長をされていた方ですね。

○河野 そうです。陸連会長や稲門体育会会長をされて、僕は青木さんから陸連の会長も稲門体育会の会長も引き継ぐんです。

○紅谷 競走部に入られました、早稲田は政治家の登竜門と言われていた雄弁会が有名で、お父様が政治家として絶頂期の頃であり、その後を継いで政治家になるために雄弁会に入るといってお気持ちはなかったのでしょうか。



○河野 そんな気持ちは全然なかったですね。早稲田の雄弁会というのはすごく政治性の強い集まりで、僕は一番嫌だった。僕は雄弁会と応援部は大嫌いだったんです。今は応援部にはお世話になってるけれどもね。

○紅谷 その頃の雄弁会のメンバーには政治家が多いのではないのでしょうか。

○河野 その頃は、もうやや語り草だけでも海部俊樹さん。これがとにかく海部の前に海部なく、海部の後に海部なしと言われて、永井柳太郎以来の名演説と言われていました。そのほか藤波孝生、西岡武夫、渡部恒三、松永光という人達がそうでした。その人達はみんな当時から政治家志望ですよ。その頃、雄弁会のキャプテンいというものは、物すごく壮絶な争いをやってみたいで、キャプテンになるとやはり政界入りのチャンスがすごく広がるというんです。だから、やはり今言った人たちはみんな演説は上手でした。

## 《社会人時代》

○紅谷 昭和三十四年に大学を卒業されて社会人になられますが、就職先は、お父様が基幹産業である製鉄業を推していたにもかかわらず、御自身の意思で丸紅飯田を選ばれたということですが、今まで進路についてお父様に対してノーと言うことはなかったのではないのでしょうか。

○河野 そうですね。遅ればせながらやつと自我に目覚めてきたんだね。大学時代に競走部のマネジャーとして部を支える仕事をずっとやっていたので、社会人との付き合いが多くなって就職の際にいろいろな知恵がついていたんです。それから、父がそれまでの反主流派で苦勞している間は物を言うような雰囲気じゃなかったけど、鳩山内閣ができて政治の中枢に入るようになって、大臣を経験した

りして多少ゆとりができて、息子が多少何か言っても、まあそうかそうかと言ってくれるような雰囲気が出てきたということもありました。それから、私と父が二人で目黒に住んでいて、非常に関係が良くなっていたということもあつたかな。

就職の際に、父は川崎製鉄を勧めてくれたんだけど、僕は外国に行きたいという気持ちが強かったものだから、商社に行きたいと言って意見が違つたんです。父は商社へ行くのは認めてくれたけど、行くなら財閥系ではなく伊藤忠や丸紅という関西系の商社へ行けと言うんです。父はいつもの体制派に対する反目心からそう言ったのでしょうか、それで僕は丸紅にターゲットを絞って、昭和三十四年四月に入社したんです。

丸紅は本社が大阪で、当時は東京駅から夜行に乗って行くんですが、父が見送りに来たので僕はびっくりしました。父はやはり僕を離すのが嫌だったみたいだね。

丸紅には二年ほどいて、最初の一年は大阪で經理の仕事をしていました。ちょうどコンピュータを導入したときですが、並行してそろばんも使っていた過渡期で、これがなかなか合わないんだ。僕は営業經理という部署にいて、毎日夕方五時になると手押し車で社内をぐるっと一回りして、みんなの売上伝票を集めてきて計算するんだけど、合わなくて毎日夜中までかかりましたよ。

その後、東京へ転勤になって食糧部へ行きました。ちょうどインスタントラーメンが爆発的に売れ始めた時期で、日清のチキンラーメンは他の商社が扱っていたので類似商品を扱ったり、シーズンになると函館に行つてサケ・マス漁船の食料の積込みの仕事をしたりしていました。

そんなことをしているうちに、丸紅には海外研修制度があつて、僕はアメリカ西海岸のサンフランシスコ支店に足場を置いて、スタンフォード大学の聴講生になったんです。大学はサンフランシスコ

から車で一時間ぐらいのところにあつて、時々支店に来て報告するという生活でした。

○紅谷 その当時の国内政治は六〇年安保闘争の頃で、岸内閣が退陣し、お父様は池田内閣発足後は主流派になりますが、新党結成に動かれたり大変な時期だったのではないでしょうか。

○河野 アメリカにいた間、日本の政界は安保闘争や浅沼さんが刺殺された頃で、アメリカで新聞を見てびっくりしました。激動の一年、正確には十か月前後だと思いますが、その頃父が春秋会をつくって、春秋会というのは派閥でいうと第三派閥ぐらいなだけけど、どうしてもやはり官僚派にかなわないんだ。それで、じれて軽井沢に集まって新党結成をもくろんだけれど、松村謙三さんから、早まったことをしちやいけないと説得を受けるんですね。

あの河野一郎が、松村さんの話を怒らないで聞いて、最後は説得されて止めるんですよ。それが僕にはどうも不思議でならなかったね。

アメリカ生活は十か月ぐらいで日本に帰ってきたけど、父から、丸紅を辞めて自分が経営している小さな会社で、日本糧穀という穀物を輸入する会社に行くように言われ、そうしました。

○紅谷 丸紅を辞めるように言われたというのは、政治の道へ進む方向が決まったということだったのですか。

○河野 変な話だと思いつつも、まあいいやと辞めたんだけど、少しそういう思いはあったんだろうなあ。父は明らかに自分の後を俺にやらせようと思っていたんだ。僕には武治という兄がいたけど小さいときに死んだから、父にしてみれば僕しかいないと思っていたんだね。四十を過ぎての子供だったので相当焦っていて、早く一人前にしなければという思いだったんだろうなあ。

日本糧穀に入り、ロサンゼルスへ行って穀物の買い付けをしていたのですが、そのときにお世話になったのが日系人のジョージ・ア

ラタニという人で、それからの人生でいろいろな影響を受けました。

○紅谷 ジョージ・アラタニさんは、私もG8下院議長会議でロサンゼルスに行ったときにお会いしましたし、議長公邸にも訪ねて来られましたね。

○河野 そうです。すごく古いお付き合いで、商売しているときの相手だったんですが、ミカサ陶器というブランドのコーヒーカップなんかを作ってホテルなどに置いたり、とてもいい仕事をしておられた。もう亡くなりましたけど、この人には指導もされ、長い期間とてもよくしてもらいました。

○紅谷 日本糧穀のほかに富士スピードウェイでも仕事をされていたようですが、これはいつ頃で、どういう経緯だったのでしょうか。

○河野 日糧と同じ時期です。富士スピードウェイは、父を応援する財界人が集まって話をしているときに、アメリカにNASCARというモータースポーツ統括団体があつて、そこから自動車レースを行うエージェントをもらったけど、年寄りの集まりでよく理解できなくて、何だか訳が分からないうちに、これは若い洋平にやらせようという話になったんです。

富士の裾野に百万坪の土地をリースしてスピードコースを造ったんです。その工事を毎週現場まで見に行つて、でき上がったのは父が死んで僕が選挙に出る半年前でした。落成式の記念レースで死亡事故が起き、亡くなったのが選挙区の人でした。後援会長に呼ばれて、辞めないと選挙にならないと言われて富士スピードウェイを辞めたんです。

○紅谷 選挙の話が出ましたが、この落成式の前の昭和四十年七月にお父様が亡くなりましたが、それまでは政治への思いはどうだったのでしょうか。

○河野 政治よりも商売の方が自分で好きなようにできたから面白かった。だから政治に積極的に関わっていかうという気持ちはなか

ったですね。

しかし、父は明らかに後を私にやらそうと思っていたようでした。父にしてみれば、私しかいないから、早く私を一人前にしなければと思い、日ソ漁業交渉でロシアに同行させて、フルシチョフ第一書記と面会させたり、嫁さんをもらうのを早く進めたりして、僕は二十五歳のときに結婚したんです。

### 《結婚》

○紅谷 御結婚の話が出ましたので、お父様の勧めで見合いをされたとのことですが、先生が二十四歳で奥様が十九歳と非常に若かったのですね。

○河野 若いんだよね。彼女は全く学生気分で、短大のテニス部で色は真つ黒。テニスの練習の帰りに見合いの場へ現れたほどで、どっちもちよつと冷やかしか気分だったんだ。ところが、翌日に父からどうなんだと言われたから、結構いいんじゃないなんて言ったら、それならすぐ返事をしろと言われた。女性側を待たせるなんてよくない、卒業したら結婚するということでもいいから、とにかく承知したとすぐ返事をしろと言うので、とんとん拍子で結婚が決まって本当に早かった。女房からは、私は何のために結婚して河野家に来たか分からないと死ぬまで言われたよ。二十歳で結婚して、二十一歳で太郎が生まれ、私は本当はもっと青春を楽しみたかったのに、強引に結婚させられてと言っていたな。しかも子供が次々と三人生まれ、さあこれからと思ったら、今度はずっと選挙だと。

○紅谷 披露宴を地元平塚だけでなく小田原でも行ったということはお父様としては自分の跡取りと考えられていたわけですね。

○河野 披露宴は私の顔と名前を少しでも周知してもらおうと思つたに違いないんだよね。東京でも大阪でも行ったので四回やったん

です。女房は、えらいところへ嫁に来たと思つたみたいだね。

女房が育った伊藤家の祖父は、伊藤忠と丸紅の基礎を築いた二代目伊藤忠兵衛さんで、僕はその丸紅の社員だったのに、伊藤忠兵衛というのは歴史上の人物でもう死んでいると思つていたから、女房から忠兵衛さんに挨拶に行ってくださいと言われて驚いたんです。博識で英語をべらべら話し、とても元気でした。女房の父親はその忠兵衛さんの長男ですが、伊藤忠にも丸紅にも入らず、生産会社がいいと言つて呉羽紡績という会社にいたんです。

伊藤家は英国流のスタイルで、父親は会社が終わると家へ帰ってきて、家族が全員テーブルに着いて一緒に食事をするんです。河野家はみんなばらばらで、おやじなんて帰ってくるのはいつも十時か十一時で、男が家で晩飯を食うのなんか絶対駄目だ、外で食べてこいと言うんだよね。外で食べていると利口になるから、同じ人とはかりでなく違う人と食べて、そこでいろいろな知識を得る。河野家はそういう政治家の家庭で、伊藤家とは全然違うから、女房にとつてはすごいカルチャーショックですよ。

○田中〔衆議院事務局〕 奥様や伊藤家は、先生が政治家になることについてはどうだったのでしょうか。

○河野 絶対反対だったね。結婚するときの伊藤家側の条件は、政治なんかやらないでしょうねという発言が繰り返して、そういうときは河野家側はいつもいいんとしていた。

○紅谷 お父様の、政治家たるもの家でご飯を食べるものじゃないという教えは、先生はどうされたのですか。

○河野 僕はその言葉に甘えて従った。女房は、いつもおふくろと二人で食事をしていて、何ということだと本当にびっくりしていたね。

結婚した翌年の昭和三十八年の選挙は、おやじの最後の選挙で、おやじは自分の選挙区には来ないから全部お前がやれと丸々私にや

らせたんです。あの頃は選挙期間が三週間、立会演説や多くの演説会を全部やらされたけど、演説が下手だったから、しゃべればしゃべるほどみんな沈むので、私もさすがにへこたれて、もう落選しちゃうんじゃないかと思いましたよ。

○紅谷 そんな姿を見て、奥様はどう思っていたのでしょうか。  
○河野 女房は、これはおかしいと思っていたんだと思うね。でもその頃はおやじは一番上り坂で、年齢もまだ六十五歳で次の総理候補の一人だったし、周りに俺は七十二歳になったら辞めるとか言っていたらしく、まだあと十年くらいはやるだろうとみんな思っていたんですよ。

### 《河野一郎死去、追悼演説》

○河野 父は建設大臣やオリンピック担当大臣として東京オリンピックの下支えをし、池田勇人総理退陣後は後継総理と目されていたけど叶わず、佐藤内閣では大臣の就任要請を拒否し、その一か月後の昭和四十年七月に大動脈瘤破裂で急死したんです。六十七歳でした。

○紅谷 河野一郎先生を辿っていくと、反主流という時期が長く、安保条約の採決では欠席されたり、新党結成に動いたり、さらには池田内閣退陣後には総理の直前までいかれ、河野先生と非常に似たような経歴だったように見えます。

○河野 おやじからは余り学んでいなかったものだから、もうちょっと学べばよかったのだけど、それでも、ある意味では僕はやはりおやじを引きずっていたね。例えば、おやじが死んだ後の選挙で、僕は選挙中は河野一郎とは一言も言わないとか、当選後は、おやじは農林、建設だけれども、僕は農林と建設は一切触りたくないから文教と外交になったんだよね。だから、いつも、おやじの後はやり

たくないと思いつながら、終わってみると、ずっと同じことをやっていた。確かにそうだ。

○紅谷 河野一郎先生が亡くなった昭和四十年七月は参議院選挙中で、その後の国会で追悼演説があり、先生はお母様とお姉様と一緒に初めて国会に行かれました。

河野一郎先生は、家族が政治の場に入ることを余りよしとされなかったようで、先生もそのとき初めて国会に入れ、それからずっとそこが先生の生活の場になっていくわけですが、初めて国会議事堂や本会議場に入られた印象をお聞かせください。

○河野 初めて行ったときは、石造りの大変いかめしい大きな建物に入って、とても緊張しましたね。

今言われたように、うちのおやじは家族が政治に関わることを好まなかった。例えば選挙中に母親が選挙に関わることはほとんどなく、だから母親も国会へ行ったことはなくて、姉と私と三人、追悼演説があるから行ったけれども、本当におずおずとした気分で行きました。

追悼演説は、社会党の河野密さんが行ってくれ、普通は同じ選挙区の相手の政党の人がやるのだけど、社会党の方から、政治キャリアや父の経歴にふさわしいレベルの人を探そうと思うがいいかと予め話があって、河野さんを選んできたんです。僕らは傍聴席の一番前に座って、下をのぞいておやじの席に白い花が置いてあるのが見えました。

○紅谷 お話のように、追悼演説は通常は同一選挙区で他会派の議員が行うという慣例でしたから、社会党の平林剛さんでしたが、まだ当選一回でしたから、社会党の副委員長で同じ朝日新聞の記者、当選回数も近かったので河野密議員になったようです。

○河野 とても真摯な印象でした。社会党の人の演説というのは、割と少し高調子の演説をする人が多い中で、とても静かでしたし

聞かせる話しぶりでした。

○紅谷 拍手が鳴りやまなかったようですね。

○河野 そうでした。僕は初めての経験だから、そもそも追悼で手をたたくなんというのはちよつと思議な気がしたよね。だけれども、随分拍手があつて、それはとてもありがたく、せがれの知らないことも随分話をされました。改めておやじを認識したという感じがしましたね。

○紅谷 追悼演説で本会議場の傍聴席に入られたのが国会への第一歩で、それから二年後には議員席に着かれ、約四十年後に議長席に着かれた。そのスタートでしたね。

○河野 考えてみれば随分昔だね。半世紀以上前か。

### 《衆議院議員総選挙出馬までの経緯》

○紅谷 いよいよ選挙に臨まれるのですが、選挙に出ようという決断をされるまでの経緯をお聞かせください。

○河野 全然そうは思っていないかったですね。僕は政治家になることに非常に懐疑的でした。おやじの近くで見ていて、政治家には本当に天下国家のことを心配している人と、名誉とか立場に興味があるという人の二種類いるんだと思っていました。

前者は、政治家になつてこういうことをやりたいという目的意識がはっきりしていて、後者は、とにかく当選すればいいというだけで先のことは余り考えていない二種類で、おやじのところに入りする政治家をそう思いながら見ていて、自分はその前者の方になれるかという自信がなかったし、そうかといって、もう片方ほどつまらないことはないと思つたから、僕は政治家は絶対やりたくないと思つていました。

おやじが死んだ直後は、謙三も私の出馬には反対でした。おやじ

はおやじで、おまえがやる必要はない、政治家はここで終わつてもいいんじゃないかとも言つていました。

もともと、小田原には鈴木一族の鈴木英雄さんという政友会の大物がいたんです。だから、おやじは小田原からは立候補できず平塚から出ていたんです。謙三が私を連れて、一族の鈴木十郎さんという小田原市長に、もう河野家には誰も選挙をやる者はおられませんから、今度は鈴木家でどなたかお出してください。我々河野一族はその方を応援しますと挨拶に行つた。そうしたら鈴木十郎さんは、鈴木家は国政をやるつもりはないので応援しますから、どうぞ河野家で後継者をお探してくださいという話でした。それでも、選挙は大変だから、一時はやらずに済むかなと思つていました。

○築山〔衆議院事務局〕 河野謙三先生も当然その思いを分かつていて、当然次だという思いもあつたのかなという気もするんですけども、鈴木市長にもう引きますよと言われたのは本心だったのでしようか。

○河野 謙三自身は政治がそんなに好きじゃなかったと思う。それでも、謙三という人は言い出したら絶対聞かないからね。

○紅谷 それは、あの参議院議長選挙のときの河野書簡を見ると、そう感じますね。

○河野 議長選挙のとき、絶対、誰が何と言おうと私はやりませんとか、やりませんとか、謙三はそこはもうすぐきつかった。一郎というのには、言つたけれども新党も断念するし、いろいろなものもぎりぎりのところでみんな断念しているんですよ。そういう割と柔軟性が一郎にはあつただけで、比較すれば謙三にはない。

○紅谷 私も、河野密さんの追悼演説の中で「剛直のゆえに、ときには誤解を招くこともありましたが」という部分から、周りはそう感じていたんだと思つましたね。

○河野 結構そこは柔軟なんですよ。

晩年、おやじと何かで話をしておやじはこう言っていたじゃないか、どうしてそれを最後まで頑張らないんだと言ったら、おやじは政治ってそんなもんじゃない、自分の言うことが全部通るなら、それは民主主義じゃない。俺らは百回言って三回か五回通ればそれでいいんだ、あとの九十五回はほかの人の言うとおりにならなきゃ民主主義じゃないじゃないかと言った。そのときはちよつとおやじを見直したね。

僕は政治家になる前に、おやじと話をしておやじも商売も同じようなものだ、いい商品を持っていけば売れるけれども、いい商品じゃなきゃ売れない、みんな同じようなものだ、僕はそのころ商社にいたからそう言ったら、おやじは、そうだけど、政治というものは相手が誰であれ、法律をつくったら、その法律があまねくみんなに公平にかぶらなきゃ、共産党だろうが何党だろうが、全部その法律は同じようにかぶるから、共産党は駄目だとか、あいつは嫌だとか言っていたらできない。君の商売は嫌なやつには物を売らないだろうけれど、政治はそうはいかない。幾ら嫌な人でも、法律を作るときには、全員がその法律によって守られたり制約されたりする。だから、そこは君の言うのと違うんだと言われた。

そんなこともありました。

○築山〔衆議院事務局〕 河野議長御自身は、失礼ながら、かなり剛の部分はあるなという感じはありますけれども。

○甲賀〔河野事務所〕 私は四十年近くお仕えし、まさに、お父上一郎先生、おじ謙三先生のDNAを引き継いで、一見柔に見えますが、最後の最後のところでは本当に剛直だと思います。

○河野 いやいや、それはいろいろ御迷惑かけました。やはり今でもちよつと気にしているのは国会図書館長の人事だけでも、あれはちよつと事務局には迷惑をかけたね。

○紅谷 それは改めてお聞きするとして、それでは、お父様の後を

継がず政治家にならなくてもいいと思っていらいしたのでしょうか。

○河野 そうです。ところが四十九日の法要で、後援会が追悼式をやった後に、それを後援会総会に切り替えると言って、やや出来レースなんだけど、僕の出馬を求める決議をしたので、それを聞いた謙三が、おまえやるかという話に急に変わったんです。

○紅谷 その場には奥様やお母様もいらしたのですね。

○河野 女房も母も聞いていました。最初に思ったのは、おふくろは、おやじが選挙違反で引つ張られたりして、ずっと嫌な思いをしてきたから、きつとおやじが死んでほつとしてるんじゃないか、これで終わったと思ってるのに、また息子が選挙をやるといふと、おふくろがまた苦労するんじゃないか、それが一番心配なところでした。ところが、意外にも選挙をやれとは僕には言わないけれども、弔問に来た評論家の細川隆元さんが、大野伴睦も河野一郎も死んで保守の党人派がみんななくなつて官僚がのさばつて困つたことだと言ったんです。そしたら、おふくろが、またそのうちにいいのが出るでしょうと一言言ったんです。それはどういう意味か僕は考え込んで、結局、僕はぐずぐずしているけれど、どうせやるだろうと思ってるんじゃないかと最後は理解して、それで最終的に出ようと腹を決めたんです。

○紅谷 政治家になることに反対だった奥様はどうだったのでしょうか。

○河野 女房は、嫌だとは言わないけれど、やる気はないし当然やらないと思つていたので、だんだん無口になつていくんですよ。

義父へ相談に行つたら、自分の娘が政治家の妻が務まるかをとても心配して、それでも反対はせず二人で相談して決めればいいと言ってますよ。

そこで、二人で考えるために旅行に行こうと言つて那須の牧場に行つたんです。すると女房の方から、もう戻れないんじゃないのと

言われて、こんなことを言わせちゃかわいそうだ、まずかったなと思っただけでも、女房の方がもう腹をくくっていたんだね。最後はしようがないという感じでした。

だから、僕が政治家になるときの動機はとても消極的なんですよ。

○紅谷 立候補すると決められた後、飼料会社と富士スピードウェイの会社はどうされたのですか。

○河野 もう借金も全部返して整理しました。富士スピードウェイは、そんな簡単じゃなく随分いろいろあつたけど、三菱地所へ引き取ってもらいました。

日糧については、私の仲人をしてくれた鈴木九平さんという日本水産の社長だった人が、社長から何からみんなやってくれるということになったので、仕事を全部辞めて選挙に出るということになったんです。

○紅谷 そういう経緯でお父様の後を継ぐ決断をされるわけですが、選挙では地盤、看板、カバンがあるかないかと言われ、世襲政治が批判されていきましたけれども、その善し悪しはどうお考えだったでしょうか。

○河野 これは、人間というものは弱いもので、自分の得というものは余り気がつかない。損なところは気がつくけれども、得なことには余り気がつかないんです。世襲批判が出て初めて、ああ、そうか、やはりちよつと恵まれ過ぎているというか、そういう感じは持ちました。

昔は今ほど多くなかったように思うけど、最近はずつと多いですよね。

政治家というのが職業になっちゃったんですよ。マックス・ウェーバーは「職業としての政治」と言っているけれども、僕が一番教えを受けた政治家で鯨岡兵輔さんという人は、履歴書の職業欄に代議士と絶対書かず無職と書く。無職はないだろうと言うと、政治家

は職業でやってはならぬ、俺は職業としてやっているわけではないと言っただけで、ちよつと浮世離れしているかもしれないけれども、僕もかなりそれは納得するところがありました。

だから、職業として政治家をやると、後継者、跡取りみたいなものを取っておやじがつくって、何にも職業に就かないで秘書になつておやじの後をやる、そういうのはどうかと僕も思いますね。

逆に息子はやっちゃいけないのかと言われると、それはやはり息子には息子の職業選択の自由はあるわけだから、ちゃんと自覚があつて政治をやるんだという意気込みで、勉強もしてやるというなら別にやっちゃいけないとは思いません。

僕自身も最終的には政治家になつたけれども、大学を卒業して会社に入ってサラリーマンを経験した。太郎も政治家をやりそうだとは思っていたけど、おやじの秘書なんか全然やる気はなく富士ゼロックスという会社へ行つた。

僕は、政治家というのは理想を持つかどうかで、理想のない政治家は駄目だと思つているんです。だけれども、そう言つて随分叱られ、おまえは駄目だ、上向いて理想だなんて言っているからるくでもない、やはり政治家というのは現実を直視して現実の中でどうするかを考えるべきで、理想なんて駄目だ意味がないと言うので、僕は何人とも大げんかした。僕は、理想を持ってその理想に少しでも近づこうとか近づけようと思つてやるのが政治家じゃないかなと思つていたんです。

選挙への出馬は、おやじが急に死んで、やる以外にしようがないからやつたという事情はあつたけど、理想がないなら政治なんかやる価値がないと思つていて、その上で選挙に出ることにしたんです。

## 《選挙運動》

○紅谷 いよいよ選挙に出る決意を固められますが、いつ選挙があるか分からない中、選挙まで一年半ほどの期間がありました。

○河野 その頃の自民党はスキヤンダルばかりで、荒船清十郎運輸大臣が急行列車を地元で止めたとか、上林山栄吉さんが自衛隊の飛行機で選挙区へ行ったとか、そんな話が毎日のように続いて、最後は黒い霧解散という名前が付けられた選挙でした。現職はみんな駄目で全部新人に総取っ替えなんて言われていたのが、そのうち自民党が全部駄目という話になっていったんです。

神奈川第三区は五人区ですが、おやじが死んで、現職は春秋会の木村剛輔、小金義照、安藤覚の三人が手を挙げ、それと僕で自民が四人出るわけです。一方の野党もみんな強いんですよ。

自民党にとつては厳しい選挙で、とにかく僕が選挙期間中に訴えたのは政治改革です。政治を全部変えなきゃいけないという話で、もうめっちゃくちゃなんだけど、自民党も何もない、現職はみんな駄目という演説をしていましたね。

○紅谷 あの黒い霧解散の際は、前にも後にも例はありませんが、国会に補正予算が提出されて、衆議院の予算委員会も本会議も、参議院の予算委員会も本会議も、全部自民党単独、しかも一日ずつの審議、その上での解散ですから、自民党にとつては非常に不利な選挙だったと思います。

○河野 そうでしたね、佐藤内閣です。神奈川県第三区は定員五人で、自民四、社会一だから、そこから出ることとても荷が重いことでした。

自民党の神奈川県連が僕を公認しないと言うんですよ。現職の三人が公認は三人でいいじゃないかと言い、僕は公認にならないというんですよ。でも、やると決心した以上は、非公認でもやらなきゃ

いかぬと思ったけど、最終的には公認になったんです。

それは、候補者の一人だった安藤覚という人が、洋平君は一郎さんの後継者なんだから公認しないのはおかしいと言ってくれて公認になったんです。ところが、その安藤さんが落選したんです。

○紅谷 昭和四十二年の選挙は、公明党が初めて出てきた選挙でしたし、神奈川三区というのは、野党は強固な地盤を持った人が多かったのではないのでしょうか。

○河野 そうです。社会党は総理大臣だった片山哲を輩出した地で、平林剛、加藤万吉、民社党は国鉄常務理事の河村勝、共産は内野竹千代、公明党は小浜新次というお相撲さん。だから野党も結構強くて、選挙結果は自民党の当選は自分一人で、自民一、野党四になった。県連へ行ってもどこへ行ってもみんな機嫌が悪くて怒られましたよ。

○紅谷 当時の神奈川県選挙区は三区までで、一区、二区は、横浜や川崎という都市部。三区は、それ以外の非常に広い地域で、東京の通勤圏の地域もある一方、農業や漁業が中心の地域もあって、幅広い支持が求められる選挙区で、選挙運動は大変だったのではないのでしょうか。

○河野 そうなんです。いろいろな業界をバックに、いろいろな人が出ていました。

今言うように、神奈川県を三つに分けているんだけど、一区は横浜だけ、ここは藤山愛一郎とか、まさに都市型の人が出た。二区は川崎と横須賀、これは間に横浜が入って飛び地の、繋がっていない変則だけれども、二つの市が第二区。それ以外が全部第三区なんです。

ですから、すごく面積も広いんですね。北は東京と山梨県に隣接し、西は静岡県に隣接して、湘南海岸。そういう物すごく広い選挙区で、東海道線がその中を突っ切って、それから小田急線、この二



本が動脈ですね。

僕は平塚で、小田原、平塚というのは東海道線沿線ですから、どつちかというところと東海道線沿線が地盤。小金さん始めほかの人はみんな農村部を走っている小田急線沿線なんですよ。

社会党は、平林剛さんが富士フィルムの労組、もう一人の加藤万吉さんは国鉄労組。民社党の河村さんは国鉄のOB。そこへ小浜新次さんが出てきたわけです。四十二年の選挙の時は、公明党が全国一斉に候補者を出したから、どのくらい獲るかわからないし、どうなるのか、これが一番不気味でしたね。

○紅谷 本場に広い選挙区で、幅広い支持が必要だったかと思いますが、応援弁士には多彩な人がいらしたようですね。

○河野 余り国会議員に応援してほしくなかったけど、それでも何人か押しかけて来て、それは当選したら俺の派閥に入れという青田買いみたいなもので、中曽根さんは頼まないのに来て演説していたし、もう片方の森清さんも来た。それから佐藤栄作さんも一度は来ましたがね。だけれども、そういう政治家の応援よりも、別の世界からの応援が嬉しかったですね。

やはり何と云ったって圧倒的に人が集まったのは長嶋茂雄さんでした。これはすごかったね。僕はファンではあったけれども長嶋茂雄という人をほとんど知らないんですよ。僕をとて支持してくれたいベースボール・マガジン社の池田社長がお願いしてくれました。長嶋さんが宣伝カーに乗って長嶋だと言ったら、うわつと子供が車を取り巻いて動けなくなるんです。それでサインしろというわけです。三か所ぐらいやりましたが、どこへ行っても、ものすごい子供で驚きました。長嶋さんの演説は、幼なじみの河野ヨウイチ君がとか、次へ行くと、ヨウゾウ君とか言っていて、名前が違うんですよ。彼は全然意に介さない。それでも、とにかく大変な人を集めて、知名度が上がったことは間違いないですね。

○紅谷 女優の藤村志保さんと坪内ミキ子さんも応援に来られたと聞いています。

○河野 当時「三姉妹」というNHKの大河ドラマをやっていて、藤村さんはそれに出ていたんです。藤村さんと坪内さんは、二人とも大映の女優さんです。永田雅一という大映の社長が、俺がおまえの応援はできないから、うちの女優を代わりにやるからと言いつつ、それで来てくれたんです。藤村さんは選挙区の愛川町という町の人、坪内さんは早稲田の後輩ということになってくれ、二人ともとても人氣がありましたね。

応援の中で助かったのは、三門博さんという浪曲家です。おやじが浪花節が好きで、三門さんの浪曲のすごいファンだった。浅草の国際劇場で浪曲大会があると行こうと言われ、僕はまだ高校生だったから浪曲大会に行くのはちょっと辛かったけど行っていいんです。この人はとても律儀な人で、おやじが死んで僕が選挙に出るといふ話を聞いて、洋平さんが選挙をやるなら私が手助けしましょうと言ってくれた。僕の選挙区では三回ぐらい浪曲をやりましたね。そうすると、これは長嶋さんと逆でお年寄りがいっぱい来るんだよね。お年寄りは全く僕らには手のつけられない層だったので、たくさん集まってくれてすごく助かりましたね。

それから、あとは陸上競技の先輩で、田島直人さんや西田修平さんというオリンピックの往年のメダリストが何人か来てくれました。この人達は、演説なんでものじゃなくぼそぼそしゃべるだけだけど、来てくれただけで選対の陣営のテンションが上がるんです。当時は選挙期間が三週間だから何回か空気が沈滞する。そういうときに来てくれると一気に盛り上がるから、それは助かりましたね。

さらに、栃ノ海という横綱。小さな横綱で余り強くなかったかもしれないけど、おやじがひいきにしている、彼は引退していたけど選挙応援に来てくれました。

## 《初当選、新人議員としての活動》

○紅谷 多才な弁士の応援もあって、選挙区の神奈川県第三区では、自民党の現職が全員落選する中、唯一の当選を果たされました。

○河野 そのときは「黒い霧解散」と呼ばれた選挙でしたから、あの意味で新人はかなり有利ですよ。だから初当選者が結構な数で、三、四十人の同期がいたと思います。

○紅谷 公明党が全員初当選だったので、新人議員が百人ほど多かったのですが、自民党だけでもそれぐらいの数はいました。

○河野 同期はいろんな人がいましたよ。塩川正十郎さんが一番年長で大御所、ソ連大使だった山田久就さん、大村襄治さんは自治省、古屋亨さんは内務省、山下元利さんは大蔵省で鳩山一郎総理の秘書官、青年会議所の武藤嘉文さん、藤波孝生さんと佐藤文生さんは県会議員。塩谷一夫さんは静岡県長の部長、NHKの水野清さん、箕輪登さん、加藤六月さんも同期でした。

○紅谷 私が委員部で新人だった昭和五十年代半ばには、今名前が出た皆さんは現役でいらっしやいました。個性の強い人が多かったという印象です。

○河野 葉梨信行さんもいた。最年少が山口敏夫さん。それから福島で医者をしていた菅波茂さん。僕はとても仲よくしてもらった人で、菅波さんと藤波さんは俳句の宗匠でした。あの頃は、徹夜国会がしょっちゅうありましたが、あの二人は一晚中俳句をつくっているから平気なんですよ。

菅波さんという人は三木派だったから、ロッキード批判、田中批判という政治姿勢だった。ところが、彼が亡くなった時に田中角栄さんが葬式に来たので何でかと思ったら、後から分かったんだけど、娘婿の田中直紀さんを選挙に出すんだと。田中真紀子さんから、うちの亭主が出るから応援してよと頼まれたりしましたよ。



それから坂本三十次さん。初登院した日に会館の部屋に入ったら、突然「隣の部屋の坂本だ。よろしく」と言ってやってきたんです。私よりも十五歳も年上で剣道の達人でした。三木派で、同じ党人派として肌が合い、外交・軍縮でも一緒に行動しました。河野謙三参議院議長誕生の際には、党の意向に反して三木派として支援の中心となつて動いてくれて、私にとつては忘れることのできない友人でした。私が議長時代の平成十八年に亡くなりました。

自民党以外では、社会党の河上民雄さんは学者でも誠実な人でした。斉藤正男さんは文教委員としてお付き合いし、加藤万吉さんは同じ選挙区でした。公明党は昭和四十二年の総選挙が第一期生ということもあり、後に委員長になった竹入義勝さん、矢野絢也さん、石田幸四郎さん、政審会長で作詞家でもあった正木良明さんともいました。共産党には弁護士松本善明さんがいましたね。

○紅谷 新人議員としての国会活動ですが、所属委員会は、一年生は運輸、建設、通信は人気があつて入るのが難しく、国税、地方税関係の大蔵や地行も専門的で難しいのですが、お父様が大臣だった農林や建設ではなく、文教委員会と大蔵委員会に所属されましたが、希望して入られたのでしょうか。

○河野 議員になつた時の経緯から、特にどの委員会に入つて何をしようというのが、恥ずかしながら余りなかつたんですよ。建設は、ずっとおやじがいたところだから、局長や役人はみんな知つていたので行けば楽だったかもしれないけど、最初から行く気はなかつた。

それから農林は、僕は割と農業は好きだったけど、こんな難しい役所はないというふうに頭から思つていたんです。おやじといろいろな話をしていたら、農政は片方が喜ぶと片方はすごく嫌な思いをする。つまり両方がいいとはなかなかいけません。米価を上げれば消費者が困るだろうし、だからといって抑えれば農家は食えなくなる。

だからバランスを考える農林の仕事はとても難しい。国内でも国際的にも難しく、あんな難しいものはないと聞かされていたから嫌だと思つていたね。

だから建設とか農林は、選挙区との関係からすればすごくいいけれど、あれこれ考えてだめとなり、空いていたのは文教と外務なんですよ。

文教とか外務というのは、当時は全く票にはならないし、もつと露骨に言えば全く金にならないところなんで、空いているわけです。高見三郎さんという文部大臣をされた文教族の人と廊下でばったり会い、河野一郎さんのせがれだと言われ、君はこの委員会へ行くんだと聞かれ、何も決めていませんと言ったら、それなら文教委員会に入れと言うんです。ああ、そうですかと言ったら、君ね、教育が一番大事だ、何よりも教育を一生懸命勉強するのは大事だから文教委員会へ入れと。僕は高見さんというのはほとんど知らない人なのに懇々と言われて、そういうものかなと思ひました。

それで、ちよつと仲間と相談しますと言つて帰り、一番親しく文教族だった西岡武夫さんに電話したら、文教へ入つて一緒にやりましょうと言われ、藤波孝生さんも仲間なので話したら、文教はいいんじゃないの、僕も入るよと言つたので文教になつたんです。だから、たいした根拠はなかつたんだけど、それが文教族としての始まりでした。

そうしていたら、今度は山中貞則さんと廊下で会い、大蔵委員会に入つたかと言われるので、いや、国対から大蔵は一年生は入れないと言われましたから入つていませんと答えたんです。

○紅谷 山中貞則先生は河野派のメンバーだったのでご存じだったのですね。

○河野 この人は河野派だったけど、一匹オオカミと言われていました。河野派だった多くの人は中曽根さんの下に集まつていたけど、

山中さんは自分は河野一郎さんと直接の関係だったと言い、ずっと中曾根君と呼んでいて、とにかくとても誇り高い人でした。

山中さんから大蔵委員会の件は俺が言っておくと言われ、次の日に大蔵の委員部から委員会ですから来てくださいと電話がかかってきた。僕は入った覚えはないと言ったら、届が出ていないと言われたので委員会へ行きましたよ。そうしたら一期生は入れないと聞いていたのに、山下元利さんや古屋亨さんは入っていたんです。彼らは官僚上がりで即戦力なんだね。

ところが、入ったのはいいんだけど、政府演説や質疑を聞いても何を言っているのかよくわからなくて、隣の山下元利さんに教えてくださいよと言ったら、あの人は親切で丁寧に教えてくれた。

大蔵委員会の理事に毛利松平さんという人がいて、委員会の定数確保の担当でした。一番前の席から三人足りないとかと言うんだよね。しようがないから、第十委員室の部屋の前で人が来るのを待っていましたよ。

○紅谷 院内三階のエレベーターと階段の間の部屋ですね。当時は委員室は院内にしかなくて、そこが第十委員室でしたが、その後議事堂分館ができて第八委員室になり、今は第五委員室になっています。

○河野 その場所で、エレベーターを降りてくると階段を上がってくるのと両方を見ながら、済みません、委員室に入ってくださいと、間違えて社会党の人に頼んで、俺は社会党だと怒られた。

○紅谷 あの部屋は大蔵委員会の定宿で、入り口が一つしかないの強行採決には最も向かない部屋だと言われていました。

○河野 そうです、強行採決があると逃げられない部屋だった。そういうのをみんなあそこで習いましたよ。

○紅谷 私が委員部の若手のころもそうでしたが、自民党には定数担当の理事がいて、定足数には非常に注意を払っていました。

○河野 社会党のうるさ方がいて、しょっちゅう見に来ては一人足りないとか二人足りないとか言うんです。

○紅谷 あのころ、大蔵の社会党理事は堀昌雄さんという長老で、与党からも一目置かれる存在でした。国対からは副委員長が定期的に戻ってきて、委員会が止まったことがありました。

○河野 そうでした。僕なんか委員会にいても議論は全然わからず役に立たないから、毛利さんに言われて定足数の確保にだけは協力しましたよ。

○紅谷 新人議員としての戸惑いは随分あったでしょう。

○河野 まず、うっかりすると議員会館まで帰れなくなることがありました。どっちが東だか西だかわからず、どんどん行って参議院の方へ行ったりしました。おやじの追悼演説で初めて国会に入り、当選して登院したのが二回目だから、他の人はどうしてよく知っているのかと思うぐらい院内のことは知らなかったですね。

最も戸惑ったのは強行採決で、もともと強行採決には反対だったんだけど、文教委員会は強行採決が何度もあったんですよ。

文教委員会所属になって党の文教部会に出席すると、真ん中に座っているのは灘尾弘吉さん、坂田道太さん、高見さんで、灘尾さんは内務官僚だったけど、坂田さんも高見さんもそれぞれ自説があつて、坂田さんは、どっちかと言えりべらるな人でした。

文教部会というのは、とにかく一番大きな仕事は日教組対策なんです。教育の場にながらストをやるといので日教組対策ばかり。森山欽司さんを筆頭に日教組対策の鬼みたいな人達が、毎回日教組の問題について語るのを閉口し、それは僕にとってはとても面白くなかった。そんなことばかりでいいのかなという思いがあつたけど、灘尾さんや坂田さん、高見さんの人柄にとっても惹かれたんです。

一方では若い議員もいて、そのころ昭和会という昭和生まれの議員の会ができて、谷川和穂さん、海部さんが昭和生まれの一番上で

す。西岡さんが事務局長をしていて、そういう人との付き合いが出  
てきて、文教委員会や文教部会はとても居心地が良くなったんです。  
何をやるというわけではないけど必ず出て、最後まで居残って話を  
聞いていることで、だんだん存在を認められるようになっていきま  
した。

その部会で一番最初に言われたのは、アメリカの空母エンタープ  
ライズが佐世保へ入港し、そこで学生と警察官がやり合うからそれ  
を見てこいというので、佐藤文生さんと二人で佐世保へ行きました。

駅へ着いたら、学生はプラットホームから飛びおりて線路の石を  
投げるので危なくてしようがないから、たまたまビルの屋上から視  
察しようとしたら先客がいて、それが田英夫という人でした。

彼はまだTBSのキャスターで、佐世保の学生闘争を取材しに来て  
いて一緒になった。その後、田という人とても仲よくなったけど、  
馴れ初めはそこでした。

一方、文教委員会は何度も強行採決をするんです。まず最初に教  
頭法、学校の教頭職を法制化して、管理職、管理制度をつくろうと  
いう内容。それに対して、日教組は管理制度はだめだと反対し、何  
回もはね返される。それで、文教部会が文部省に対して、どうやっ  
て教員を管理するかを考えて、教頭は一般の先生と校長先生の間  
の中間管理職にする。こちら側につけるといって教頭法という法律を作  
って、管理を強化するというをやった。その管理強化に日教組  
は当然のことながら反対する。

それから、教育の現場に人材を確保する法律。これも野党は反対  
なんです。委員長の八木徹雄さんが病気になるって、僕に委員長代理  
をやれと言われ、強行採決をしたんです。僕は強行採決は反対だっ  
たけれども、自分でやらなきゃならぬ羽目になって、浜田幸一さん  
の助けで抱きかかえられて委員長席から降りたことがあります。

○紅谷 今は当選一回で理事になることはありませんし、委員長代

理までしているんですね。

○河野 それで、本会議で委員長報告もしろと言われ演壇に立った  
ら、社会党の角屋堅次郎さんから名指しで思い切りやじられた。付  
き合ったらいい人だったけど、その時は顔を真っ赤にして議席から  
怒鳴っていましたよ。

○紅谷 当時の委員長代理の指定文書と、その後八木委員長が亡く  
なって、河野委員長代理名で理事に香典をお願いした文書が委員部  
に残っていました。

○河野 ええ、委員部にはそんな資料が残っているの。僕が昭和四  
十六年四月に委員長代理になって、七月に八木さんは亡くなったん  
です。僕は八木さんに呼ばれて、こういうことだから君がやってく  
れと言われ、そうですかと受けた。

それで、強行採決をやったら国対に呼ばれて、よくやったから希  
望する委員会に入れてやるから、希望する委員会はあるかと言われ  
たけど、返事をしなかったら国対の方が気を利かせて、君の選挙区  
は河村勝が相手だから、運輸委員になっておくといいと言われたん  
です。委員会に行かなきゃいけないし、かえって面倒だと思っ  
ていたら、小此木彦三郎さんが運輸委員をやりたいと言っていると聞  
いて、僕が替わってあげますと言って替わったんだ。

○紅谷 文教委員会をやっていた当時の第三委員室というのは、社  
会労働委員会と文教委員会が使っていました。強行採決が本当に  
多い部屋でした。

○河野 そうでしたね。しかも日教組出身の議員はみんな体操の先  
生じゃないかと思うほど、ぼんぼんと飛んで委員長席まで行った。

○築山〔衆議院事務局〕 そういう文教委員会で、やはり大学紛争  
の関係では、大学運営臨時措置法が一番大きな法案でした。

○紅谷 ちょうど七〇年安保闘争の真っただ中で、羽田闘争や佐世  
保エンタープライズ入港阻止闘争があった昭和四十三年ぐらいから

が、大学紛争が全国に広まり激しい時期だったかと思えます。

そういう中で、大学運営臨時措置法は昭和四十四年の常会に提出され、文教の理事として、また文教族と言われるようになった中で、この法案に対する思い出をお聞かせいただければと思います。

○河野 それは何といつても大仕事でした。

大学紛争の事の起りは慶応の学費値上げですよ。それに追随して早稲田も値上げをし、さらに私学の大手が学費の値上げをすることに對して学生が反対するという形で起こったんだけど、大学紛争が激しくなるとして学外で更に過激になり、最初は商店が学生にとっても好意的で、警察が来て学生が店の中へ逃げ込むとかくまったりしていたけど、そのうちショーウィンドーを割ったりするものだから、店が学生を入れなくなるとして学生は本当に困った。過激な学生運動は孤立し、最後は講堂に立てこもったりするようになるんです。

一番の危機は、東大の入学試験ができなくなるというんですね。伝統ある国立大学の一番の中核が、入学試験ができないということになったら大変だ、何とか入学試験をできるようにしろということけれども、一方でタカ派文教族は入学試験なんか止めろ、捕まえた学生は全部退学させろと言う。しかし、捕まえただけで退学はだめだろうと僕らが反対したら、おまえらあんな学生の味方かと言っちゃ怒られた。そんなことがあって、大学運営臨時措置法という法律をつくろうということになるわけです。

法律を作っても、学校当局が、その法律は文部省が取り締まるんじゃないくて、大学の自主性を尊重するのだとだめだと言うので、その主体をどこにするかという議論があって、結局、会社更生法みたいな、つまり大学が助けてくれと言ったらその法律が出ていく、助けてくれと言わなければその法律は出ていかないという仕組みにしたんです。

ところが、大学が理事会や自治会を学生に抑え込まれて、そうい

うことを言わなくなるんです。でも、結局は大学が助けてくれと言ったら、つまり難破した船に浮き輪を投げるようなもので、この法律はその浮き輪なんだと説明してできたんです。

○紅谷 大学運営臨時措置法は昭和四十四年五月に提出されますけれども、その前年の十一月の第三次佐藤内閣で、穏健派と言われた坂田道太先生が文部大臣に就任しておられます。

○河野 はじめは坂田大臣で大丈夫かという声はあったけど、誠実な対応をされました。ただ法律はなかなか通らない。社会党が徹底的に反対して物理的な抵抗をするんです。委員長の太坪保雄さんは本会議の間に委員長席を占拠されるといけないから、私はずっと委員長席に座っていますと言って、本会議に出ないで委員長席に座っていたりした。休憩中に社会党が委員長席を占拠したりしたこともあって、とても苦労したんです。なかなか審議ができなくて本会議だけで五日間ぐらいかかった。

毎晩夜中まで審議して、採決は全部半歩で一日に四回も五回もやるわけです。採決して参議院に送った時には、会期末まで二日しかないんだよね。

僕ら衆議院がへとへとになっていると、参議院の人が来て後は参議院に任せると言い、本当にやるのかと思ったら、参議院は一回も審議をやらないまま通した。

大学協会は、そんな法律は一切使わないと言って、大学連盟はそういう決議をするんです。ただ、私立大学協会は、作ってもらってありがたいと言っています。

大学紛争を収めるために作った法律なのに、その採決の仕方が強引過ぎて、これじゃだめだと言われていたけど、二ヶ月ぐらいたったら俄かに法律の効果が出て、あつという間に大学紛争は収まりました。これが不思議でした。

ちようどその頃に衆議院が解散になり、学生運動がそのままだつ

たら僕ら文教族はひどい目に遭うなど言っていたら、選挙の頃にはもう完全に大学紛争は収まっていた。

○紅谷 その年の年末、昭和四十四年の十二月が選挙でした。

○河野 その時はほっとしましたね。

僕が文教族というのはそういうことで、当選三回の終わりに自民党を離党するのですが、それまでに文部政務次官や文教部会の副部長もやって、ずっと文教族でした。

### 《サイパン島訪問》

○紅谷 初当選から二年後の昭和四十四年の常会が終わった後に、河野先生の平和や戦争に対する意識形成に大きな影響を与えたと思われるサイパン島に訪問されます。議員として初めての外遊ですが、これはどういう経緯で行くことになったのでしょうか、党の派遣だったのでしょうか。

○河野 党は全然関係ないです。僕には党からの外遊なんて声はかららないし、文教委員会の海外派遣でもなく、国会が終わったから選挙区回りでもするかと思っていたら、静岡県選出で父の秘書をしていた木部佳昭さんと呼ばれて、海外に出かけるけど一緒に行かないかと言われた。どこへ行くとも言わないんだけど、いいですよ、どこへでも行きますと言ったら、一緒に行こうということになったんです。

そうしたら、何も言わないでついてこいと言うので行ったら、園田厚生大臣のところに行っただけです。そこで初めて聞いたのは、遺骨収集の現場を見に行きたいと思う。サイパン、テニアン、コロール、あの辺はまだ遺骨収集がほとんど手がついておらず、このままにしておけないから厚生省もちゃんとやってほしいと言ったら、園田大臣は、君が現地をよく見て報告書を出してくれたら厚生省で

もやるからという話でした。

それでは、河野君と二人で行きますからとなって、行くことになったんです。

○紅谷 サイパンへ行かれたのは、議員としては木部先生と二人で、他に厚生省の援護局の職員などは同行したのですか。

○河野 議員は二人で、他に三人の同行者がいました。一人は木部さんの選挙区の熱海ワニ園のオーナー。それから大倉さんというホテルオーナーの一族の人、そしてもう一人は僕の秘書で父の代からの秘書の石川達夫君で、全部で五人で行きました。

東京から、米軍基地しかないグアム島へ行きました。小さなドレイブインみたいなモーターに泊まって、サイパンやテニアン、ヤップ、コロール島の事情を聞いて、県庁所在地みたいなのがコロールで、行こうというけれど交通機関がないから、飛行機をチャーターして行っただけです。

最初にサイパンへ行っただけで、プルプルと頼りない飛行機で、パイロットが、去年の秋までは四機あったけど墜落して二機になったと言った。飛行場なんて無くて原っぱの滑走路へ降りるんですよ。

サイパンで遺骨収集の現場を見に行っただけで、それが本当に凄まじく、二度と見たくないというような凄惨な光景でした。

○紅谷 終戦から二十年は経っていますよね。

○河野 そうですね。二十年経ってもほとんどそのままで、弁当箱みたいなものと水を入れる瓶の横に寝たまま機関銃を持っている兵士の遺骨と、とにかく話にならないほど酷かったですよ。

○紅谷 サイパンは、第一次世界大戦後は日本が統治していましたから、日本人がたくさんいたと聞いています。

○河野 多くの日本人がいたから、現地の人も日本語が結構できたんです。日本が統治していた頃は電車が走っていたけど、もう電車

なんか跡形もなく、あの頃はよかったと現地の人は言う。花子さんとか太郎さんとかという名前の人がいて、日本の歌を歌っている人もいましたね。

○紅谷 サイパンには一番多いときで三万人ほどの住民がいたようですが、軍人だけではなく民間人も含め一万人余りが亡くなったと言われていますから、そこらじゅうにまだ遺骨があったのでしょうか。

○河野 そう、あるんですよ。それはすごかったですよ。

日本人が飛び降りて自殺したというバンザイクリフは、立ち入り禁止で行かせてもらえない。不発弾もあるから危ないと言われた。

コロールの島の中へ入っていくのに、車もなきや何にもないからどこへ行くのも歩いていく以外にないわけです。唯一川をモーターボートでさかのぼって行くけれど、大きな倒木があつてストップし、そこからは道なんかないから川つぶちをジャブジャブ歩いていくんです。案内してくれる現地の人は、蛮刀というのか刀で木を切りながら道を作ってくれて、どこが終点かわからずに歩いて山のてっぺんまで行ったら、あの向こうの山に野戦病院があつて、そこに何十人かいたけど全員死んだから、遺骨がそのままあると言うけど、そこまで行ったら帰りは夜中になると言うので行けなかつたんです。○紅谷 戦後二十年も経っていたのに、日本人で訪れる人はいなくなつたのですか。

○河野 ほとんどいなくなつたんです。時々遺骨収集で遺族の人が来たらしいけど、現地の人が、誰の骨かわからないのを集めて渡し、それを持って帰つたという事はあつたらしいだけで、それ以外はほとんど来なかつたんですよ。

木部さんの選挙区の人から、当番兵だつた時に中佐が死んだのでサイパンの山の麓に埋めてきたから、骨でも持って帰ってきてくれと言われた。二十年も経っているし、地図を描いたって道もないか

らわからないんだけど、こつちを向くと何とかが見えるところに大きな岩があつて、その下にありませんからと。そうしたら本当にあつて、刀を抱いて寝かせてあると言われたけど、刀は錆びて針金みたいになつていります。下顎を持って帰ろうというので、しゃれこうべの下顎を外してポケットに入れて、そんなことをしてはいけならしいけど、持って帰ってきました。

それで地元の歯医者さんに見せたら、間違いなくカルテどおりに虫歯の跡があつて本人だと言っていました。そういうのがそのまま残っていたんです。

ペリリュー島、今のパラオは、この前上皇陛下が行かれましたが、あそこは日本軍が全滅した場所です。

聞き取りをすると、弾に当たつて死んだのもいるけれど、かなりが餓死ですよ。そこら辺でタコつぼみみたいなのを掘つて、その中で機関銃を構えて、敵が来たら撃つつもりでいたんだけど敵は来ない。そのうち水がなくなり食料がなくなつて、餓死してしまつたんです。戦争というのは本当に不条理なものだよ。

サイパンだけではないだろうけど南方の戦死者は四万人。しかも南洋庁があつたから民間人の死者もかなりいたようだね。帰り損ねて帰れなくなつたんだろうね。

○寺坂〔衆議院事務局〕 河野先生の自伝の中で、そこでの光景を見て、もう戦争をさせない、それが政治の役割なんだと思つたと書いていらつしやいます。相応な衝撃を受けられたのですね。

○河野 全くそうでしたし、本当にショックでした。あの時に、戦争だけはやっちゃいけない、戦争というのは本当にひどいものだ。しかも、作戦とか上官の命令は拒否できないから、そこで機関銃を構えたまま餓死するんだからね。普通なら逃げて帰ってくるよね。本当にすさまじい光景を見せつけられた。

それがサイパン島の訪問でした。



## 《官僚政治と党人政治》

○紅谷 昭和四十年代に入ってから、河野一郎、大野伴睦という、いわゆる党人派の大黒柱が次々に亡くなって、池田、佐藤という官僚派の総理が続きますが、その後派閥が分裂して、党人派はだんだんなくなり、官僚派の佐藤派も田中角栄さんが継ぎ、党人派と官僚派という境がだんだんなくなっていったように思います。

国会議員になって、派閥には入られていたのでしょうか。

○河野 当選直後は無派閥です。

それは、父が死んだ後、春秋会河野派が中曽根さんと森清・重政誠之さんグループとに分かれ、中曽根さんの方が春秋会から出て新政同志会という派閥を作る。森・重政派はそのまま春秋会に残るものだから、春秋会は河野一郎の次の会長は森清さんになるんですが、大部分は中曽根さんの新政同志会に行くんです。ただ、中曽根さんは中曽根さんで、俺は河野派を継承しているんだと言っていた時もあるんです。

森・重政派と中曽根派はどこが違ったかという点、佐藤栄作さんとの関係をどう見るかという点で意見が違ったんです。森・重政は徹底的に反佐藤でいく、それが河野一郎の遺志だという面が強く、一方の中曽根さんは河野派というグループの存続が何より大事だから、手を握るまではいかなくても、時には佐藤栄作を認めてでも自分たちの存在を大きく残すことが大事だという、やや戦略的な面が強かった。

ただ、中曽根という人は、演説をやらせると一流だったから、選挙のためには中曽根の方にいた方が有利だという人が、みんな行っただけです。一方、森・重政というのは、パフォーマンスが余り得意じゃなかった。

ところが、中曽根さんは、すぐに佐藤さんと手を握って佐藤内閣

で入閣するんです。それで、森・重政派の人達は、河野一郎の遺志を全然継いでいない、裏切りだと言って怒るわけです。

そうやって両派が対立しているところに僕が当選したのだから、両方とも自分の方へ来いと言ってくるから、どっちにも行けなくて無派閥でいたんです。

僕は無派閥でいて、一年生議員でまだ三十歳になったばかりなのに、無鉄砲にも両派を何とか一緒にしたいと思って、一つになつてくださいと両方に言いに行つたんです。

そうすると、中曽根さんの方は、河野派は俺の方だと言い、森・重政の方は、割と僕の言うことをそれなりに聞いてくれて、一つになればその方がいいと言ってます。

それで、僕は何とかなるかもしれないと思って、中曽根派にいた園田直さんとか櫻内義雄さんに話をし、それで森さんのところへ行って、森さん、中曽根さんを長にすれば向こうは一緒になつてくれるから、あなたは長を譲ってくださいと言ったんだ。河野一郎が初代春秋会会長、二代目は森清で、譲っても中曽根は三代目になるんだから、あなたは二代目として上から見たりやいいんだから、譲つたらどうですかと、若いのが生意気に言いに行きましたよ。そうしたら森さんは、俺は全然こだわらないから、中曽根君がいいなら会長で迎えても構わないと言う。

うまくやったな、これは一つになるなと思って喜んでいたら、その三日後だけに森さんが突然亡くなってしまふんです。もう完全に合同は無理。森・重政派で森が死んだから、あとは中曽根派が吸収するだけなんです。もう統一はだめだと断念して、僕は中曽根派へ入るんです。

中曽根派には田川誠一さん、藤波さん、それから木部佳昭さんがいたんです。田川さんは、僕が無派閥でいる時は派閥で聞いた話を僕に伝えてくれて、今度は何かあるからとか一々連絡してくれてい

た。僕が中曽根は余り好きじゃないと言ったら、好き嫌いなんか言っ  
ていられないよ、入ればいいと。ところが、入ったらすぐ田川さん  
が中曽根さんと喧嘩して出て行って、僕一人中曽根派に残ったと  
いうことがあります。

僕は官僚派が嫌いだったけれど、その頃からどれが党人派でどれ  
が官僚派かわからなくなった。さつき話があったように、佐藤派の  
後継が田中角栄、実際は田中さんにならないけど総理は田中さんにな  
るんです。片方の中曽根さんというのはよくよく見れば官僚だから、  
自分は官僚派の中曽根派にいて、向こうは田中派だし、何かわけが  
わからなくなった。ただ、その頃でも三木武夫さんという人は党人  
派なんです。だから非常に親近感があつたけど、なぜかもう一つ  
行き切れなかったですね。

三木派は、番町政策研究所という事務所を構え、三木武夫さんとい  
う人は戦前派の保守系代議士で、この人だけは追放にならないん  
です。なぜならアメリカの大学への留学歴があるから、進駐軍が追  
放しなくてもよさそうだと思つたんじゃないかな。保守の戦前派は  
追放で十年ぐらいブランクがあるから、その間に三木さんは地歩を  
固めるんです。更に、松村さんと一緒に派を作つて、番町研に立て  
籠るんです。

三木さんの、そういうちよつとバタ臭い保守というのは魅力でし  
た。加えて、僕の仲間はほとんど三木派でした。坂本三十次さん、  
西岡武夫さん、山口敏夫さん、塩谷一夫さん、みんな三木派。彼ら  
は来い来いと言ってくれたけど、何でかそこまではいかなかった。  
けれども非常に親近感があつたから、僕は中曽根さんの家なんか行  
つたことはないけど、南平台の三木邸にはよく行っていましたよ。

○紅谷 今お話がありましたけれども、昭和四十三年の総裁選で、  
中曽根さんは佐藤総理の三選を支持して、それに反対だった田川誠  
一さんは派閥を出られた。

それでも先生は中曽根派に残られたのですか。

○河野 いたんですよ。それは、あの佐藤再選か三選のときに、中  
曽根さんは佐藤支持だと言ひ、僕は中曽根派にいるけれども佐藤批  
判をして支持しないと云つたのに、それでもいいからいると云う。

だから、中曽根派にいて公然と佐藤批判をし、テレビでも中曽根派  
の河野さんと言うけれども、ずっと佐藤批判をしていましたよ。そ  
れでも中曽根さんは、まあ、一郎のせがれだからということもあつ  
てか、目をつぶってくれていたんだな。僕を少し甘やかしたかもわ  
からない。

○紅谷 その頃には、党人派と言われるのは、もう三木派だけだつ  
たのですか。

○河野 本当に三木派だけでした。大野伴睦さんも亡くなつていた  
からね。大野さんのところには中川一郎さんがいて、他は村上勇さ  
んや船田中さん、水田三喜男さんがいたけど、はっきりとした党人  
派とまではいけませんよ。一番党人派らしいのは田中角栄さん  
だった。だから、福田か田中かというときには田中を支持しまし  
たよ。佐藤のときにはいつも三木でしたから、総裁選で投票して勝つ  
たことがないんだ。僕が推す方はいつも負ける。

○紅谷 それが昭和四十年代前半で、四十年代後半に宏池会は大平  
派に衣替えしましたが、ここは圧倒的に官僚中心の派閥だったと思  
います。

○河野 ここは本当にすごい官僚集団です。

ただ、この官僚はちよつと違つていて、大平という人は傑出して  
いたよね。池田という人は、亡くなる直前にしか会っていないから  
余りよく知らないけれど、池田、大平というのは傑出していたんじ  
やないかな。

○紅谷 今は、官僚派、党人派という分類は全然通用しないと思ひ  
ますけれども、その流れというのは残つているのでしょか。

○河野 いや、もうないかもしれないね。最近はむしろ、官僚出身と二代目、それから地方議員と、三つぐらいに分かれているのかな。官僚出身というのが恐らく三割五分から四割ぐらいいるんだろう。それから二代目もやはり四割近く、もっといるかもしれない。ただ、二代目で官僚というのもあるだろうし、あとはその他というのが一割ぐらいかな。官僚派が多いけど、必ずしも全盛でいくかどうかはわからないよね。ちよつと最近はできが悪いものね。

二代目というのが小渕さんとか橋本さんとかという人達だよ。だから、こういう人がある意味じゃ党人派なんだけれども、根っからの党人派じゃない。僕の友達で佐藤文生とか坂本三十次とかというの根っからの党人派で、この連中はきつぷもよかつたし、たつき上げだからすごく現場のことをよく知っていたよね。

○紅谷 そういう派閥の変質のような時期だったので、同期で拓世会を作ったり、アジア・アフリカ問題研究会（AA研）だとか、そういう政策的な集まりになってきたのは、そういうところからなのでしょう。

○河野 そうですね、本来、派閥というのはリーダーがいて、そのリーダーの人間性とか政策とかに魅力を感じた者がついていってグループを作ったのが派閥なんだけれども、今は何だか株式会社みたいになって、みんなで総裁選の時に株を持っていてから、社長がいなくなるとその次の専務が社長になるから、リーダーの魅力とかじゃないんですね。むしろ数が力、武器になってそこに集まっているという印象です。だから非常に魅力的なリーダーというのはいないですよ。

昔の派閥は一週間に何回か昼飯会なんかやると、リーダーが一人でしゃべって、それを聞いてみんながこういう主張をしようとなっていたけれど、今はリーダーがどっち向いているかなんて関係なく、中堅クラスの政策通がいろいろなことを言っているから派閥はま

まらないで、七、三とかに分かれて、三割ぐらいの反対がいつもあるというような格好ですよ。

昔は、それはそれで例えば三木派なんかを見ていても、やはりいろいろな人がいて必ずしも全部すっきり三木さんの主張でまとまっていたわけじゃないけれど、それでも何となく最後は三木さんに一任とかいって会長に全部任せて、こうしようやつたんだけれどもね。

○紅谷 確かに、昭和から平成にかけて、派閥は三角大福中と言われて右から左まであり、中曽根が一番右で、三木派が一番左。それで大体、自民党の派閥の中で政策的にどっちなのか、そういう一つの道しるべみたいなものがあつたと思います。

○河野 それで分かつたよね。今はもう全然そういうのは何派だかなんてわからないものね。派閥の長というけれども、派閥の中でそんなに傑出しているわけじゃないから、派閥は選挙制度が変わったからなくなつたとかじゃなくて、人間的にそういう人物がいなくなつたというのが一番大きな要因だと思えますね。

○清家〔衆議院事務局〕 昔でしたら、自民党の中で疑似的な政権交代があつて切磋琢磨しましたけど、今は一強じゃないですけども、余りそうじゃないことを言うと、いろいろ問題が出てきてしまうというところがあるのでしょうか。

○河野 合わせなきゃいけないのは大変だよ。多様な議論がなくなつたね。

○紅谷 それは、自民党には右から左まで多様な意見があつて、法案が出てくるまでに部会や政調で事前に十分議論したから、余り質疑しなくていいんだとよく言われたのですが、今は自民党の中にそういう幅広い議論があるのでしょうか。

○河野 そうだね。本来、幅広い意見があつて、それを集約して自民党の意思決定にしていたのが、最近は政策に関する派閥の主義・主張の違いが見えにくくなつてしまつたように感じますね。

○紅谷 先生が初当選された昭和四十年代の派閥と今とでは隔世の感がありますが、昭和五十一年に新自由クラブを結成されて離党されるまでは、ずっと中曽根派に所属されていたのでしょうか。

○河野 中曽根派からは出たんです。僕は中曽根派にいたからって中曽根派で金をもらった記憶もないものね。

### 《非核三原則》

○紅谷 非核三原則は、国会で決議されているように、国是として堅持することを意思表示しています。非核三原則が問題になったのは、一番最初はビキニ諸島での第五福竜丸の被爆が発端かと思いますが、国会で非核三原則というと、ちょうど先生が当選された昭和四十二年に佐藤総理が初めて国会で非核三原則が国是だという答弁をされました。

○河野 三原則というけれども、最初は二・半ぐらいだったんだね。持たず、つくらず、三つ目は、むにやむにやなんだよ。国会の議論の中に載せたのは佐藤総理で、その後三木さんがそれを補強するわけです。

僕はそこが不思議で、僕が自民党を離党する大きな理由に、自民党の政策綱領改正委員会というのがあって、僕は自民党の総理が非核三原則を言い始めて、国連を始めとして世界中に非核三原則を評価する人が多いのに、何で自民党は党議に非核三原則を入れないんだ、自民党の党議に非核三原則を入れればいいじゃないかと言ったら何故か怒られて、袋だたきに遭いましたよ。

あの頃から、核保有の野心を持っている議員が自民党にはたくさんいるんじゃないかと僕は疑っているんです。今でも、あわよくば核は持とうという非常に強い野心を持っている人がいる。これは原爆を絶対手放さないというしつこさの裏返しで、もう核保有は絶対

諦めないということですよ。

だから、今は持てないけれども、永遠に持たないと封をすることは絶対だめだということがあって、非核三原則に対する自民党内タカ派の反対、抵抗というのはすごく強かった。それが強いほど、こっちは絶対やってやると頑張ったから、とうとう最後は追い出されたんだけれどもね。

この非核三原則と慰安婦の二つの問題は、僕の政治生活の中で、悪い意味じゃなくて、すごく大きなダメージでした。この圧力が僕の行く手を相当阻んで、それと闘いながら乗り越えてきたから、非常に思い出が多いですね。

非核三原則と言わなくても、核軍縮だけでもやりたいということ、政治家としての最後の集大成がG8議長会議の広島開催ですけども、そこへ向かう核問題をずっと言ってきた一番最初が、自民党の党議への非核三原則挿入だったんです。あの頃は世界も核実験は南方に行けばやってもいいみたいな話で実際にやっていたわけだけれども、福竜丸で被害が出て広島と重なるから、日本人にとって一番機微な問題なんです。

○紅谷 お話があったように、沖縄返還との関係があり、なかなか持ち込まずについては本当はどうだったのか、密約があったのではないかと後から問題になりましたけれども、そうはいえ、国是というところで守られてきて、本会議でも何度か、国連軍縮総会の関係ですけれども、決議の中で国是と言っています。しかし、今の内閣も同じ表現はしていますが、以前に比べると、非核三原則については余り議論されなくなったように思います。

○河野 だから、圧力が減っているんですよ。これは今の話だけれども、それを一番感じるのには、やはり核兵器禁止条約。あの条約を日本が棄権しちゃうんですよ。これは私が教えている早稲田大学の講義でダブルスタンダードだと話しましたがけれども、核廃絶の先

頭に立つと一方では言いながら、一方では核の傘に入っている以上は余り激しくはできないと言っているわけですよ。

これは、広島へ行ってみると、つくづくそう思うものね。それで、ひところは核兵器というのは使えない兵器だ、持つのは持ったらいいが、どうせ使えない兵器だからと誰もがそう思っていたんだけれども、このごろは小型化してピンポイントで使える兵器になっているから、いろいろなところに搭載して核兵器を実用化するということをロシアが一遍やったんだ。

これぐらいは、本当は僕らのところにやらなきゃいけないかったんだけれども、やはり世代が替わると、だんだん圧力が薄れて原爆投下を容認する失言が出てくる。

それは人間というものがいないなら、核というのは一番安上がりで一番やつつけちゃうのに簡単な道具であるかもしれないけれども、そんなわけにはいかないよね。いかないですよ。

○紅谷 非核三原則の議論が国会でどの程度なされているかはわかりませんが、少なくとも非核三原則に関する国会決議は、昭和五十三年が最後です。

○河野 平成ではやっていないのですか。

○紅谷 私は昭和五十六年に外務委員会を担当していましたが、元駐日大使だったライシャワーさんが、アメリカの核兵器搭載船が日本に寄港の際にわざわざ兵器を降ろしたりしない、と発言したという「ライシャワー発言」があつて問題になりましたが、それ以降あまり問題になつておらず、政権交代の際に、密約問題で核の持ち込み等について議論になつた程度ではないかと思ひます。

○河野 そうだよな。あの密約問題というのは、外務省の吉野北米局長のイニシャルの入つた書類があるというので、民主党政権になつて、北岡伸一さんが調査会をつくつて調べ、核搭載艦の寄港については広義の密約があつたというふうに報告書を出したんですよ。

僕が外務大臣のときにも、そういう密約があつたんじゃないかという質問があるというので、吉野さんに電話して、そういう意味じゃないよねと言つたら、ええ、そういう意味じゃありませんと言うから、それでもいいと思つて国会で答弁したんだけど、彼が署名した書類なんかあるんだよね。いまだに僕は真偽がよくわからないんです。まだきちんと決着がついていなくて闇の中みたいで、よくわからない。

○紅谷 令和になつてからの非核三原則は、アメリカはトランプ大統領になり、ロシアと中国を意識し核攻撃発言が出たり、日本でも三原則はわかりつつもということ、防衛大臣経験者からその見直し発言が出てきていますけれども、そういう現状を率直にどう思つていらつしやいますか。

○河野 僕は、本当に核という兵器だけは、我々の時代に、核兵器禁止条約のときに決着をつけたかつたね。

手がかりが全然なかつたわけじゃなくて、例えばトラテロルコ条約とか、国際条約の中には核を持ち込ませないという何カ国かの条約があつたり、それから、ニュージーランド、オーストラリアの方にもあるから、核を持ち込ませないというグループというのがだんだんできて、それが地球上を全部カバーするようになれば、核を保有する意味がなくなつて、核をなくし、核を全廃させるためのアプローチをするいろいろな道があつて、その道をみんなで本当に一生懸命探さなきゃだめだと思ひますよ。

僕は、日本が出した国連決議なんかも、あれは僕が外務大臣のときに最初に出した決議ですけれども、それをもう四半世紀経つてもいまだに同じようなことを毎年やっているんです。今年も通りましたと外務省が報告に来るから、何年経つても同じことをやっていると、何の効果もないならもうやめて、他のやり方にしたらどうだと、僕は提案者だけれども言うんですよ。

とにかく、みんなで一生涯命懸絶のための道を探す、それから、それに向かつて一歩ずつ前進する努力というのはどうしたって必要なんじゃないかと思うけど、それをやり切れなかったことはとても僕は残念だね。

議員として最後だと思つて、G8下院議長会議を広島でやったけれども、あれだつて、あのときの米国議長のペロシ発言がそのままオバマのプラハ演説に繋がつて、そこで明らかに核については今までのアメリカの姿勢と全く違う姿勢を出したけれども、日本と同じように、アメリカの本音も核でとにかく威張つていようと思つているんだから、だめだね。

だから、プラハのオバマ演説の直後に、この演説を維持しようと思つたら、国際世論がみんなでこれが大事だということを支えないとアメリカ国内では抑え込まれるから、国際世論でこれを支えなきゃだめだ、そのためには日本が一番最初に国会決議でオバマ演説を評価する、これを支持するということをやるべきだと言つて、あのときは議長だったから、いけないかもしれないけれど、誰かを呼んで国会決議をやつたらどうだと言つたりしたんだけど、たまたま運が悪く、あの直後に北朝鮮がミサイル実験をやるんだよね。

それで自民党は、オバマ演説の支持は本音では嫌なわけで、北がミサイル実験なんかやるものだから、そっちへ関心が移つて、けしからぬという決議になつてしまう。その決議の中で、オバマ演説を一言でもいいから書いてみてくれと言つたけれども実現せず、それでも国会のオバマ演説についての支持決議が終わつちゃうんだよね。

だから、あのオバマ演説についても、日本の姿勢は余り明らかになつていない。あれは広島から出たというふうに僕も思っているものだから、ちよつと残念だよ。

○紅谷 お話があつたように、議長としてG8議長会議を広島で行

つた意義というのは、ペロシ下院議長という、今まで広島を訪れた米国の要人の最高位の人に来てもらったただけでなく、オバマ大統領の広島訪問に繋がった橋渡しの役割を果たされたのだと思います。そこは広島G8下院議長会議のところでお話しいたきたいと思

### 《日中国交正常化とAA研》

○紅谷 河野先生の当選二回から当選三回の昭和四十四年から昭和五十一年の間には、自民党を離党し新自由クラブ結成という大きな決断があります。その間の大きな政治的な出来事としては、日中国交正常化が挙げられると思います。

河野先生は、議員になる前から民間の交流団体の一員として、国交がない時代に変な思いをされて中国に行かれたと聞いています。議員になってからも中国との関係では中心的な役割を果たしてこられました。議長時代には日中議会交流をスタートされました。

議員引退後の今も、日本国際貿易促進協会の会長として中国の要人と交流されています。このように先生は中国との関係を一貫して重視されてこられました。そのように先生は中国との関わりはいつから、どういう経緯からだったのでしょうか。

○河野 中国とはいろいろな関係があつたんです。議員になる前に飼料の輸入会社をやつていて、その頃は鳥の餌のトウモロコシの輸入が多かつたんです。トウモロコシはシカゴの相場でアメリカから買うことが多かつたのですが、それでは大商社の下請ばかりで面白くなくて、それまでは余りなかつたことですけれども、日本からトウモロコシの種をタイへ持つていって蒔いてもらつて、できたものを買うという仕事。それと同時に、中国が輸出するならそれを買うに行くという仕事で、これは共産国貿易だから大手の商社はやらな

いわけです。中国の方も、アメリカと取引のある商社には売らないので中小貿易会社の出番で、そこで働いていたことがあったんです。議員になってからは、河野謙三、田川誠一という私の叔父やいとこが中国に関心を持っていたので、その影響を受けたと思いますね。父の河野一郎も、田川さんの影響で中国の要人と内緒で会ったりしていたんです。そういうのを横で見たり聞いたりしながら、中国には強い関心を持っていました。

そんな中で、鈴木九平さんという私の仲人が、中国貿易をやるなら中国へ行って見たらどうだと言ってくれたんです。その頃は、中国へ行こうと思ったら中国側からの招待状がないと行けないんです。貿易をやっていましたから、広州貿易会という大きな貿易の交流会に出席するという事で、招待状をもらって行くんです。

しかし、行くといっても大変で、香港へ行くのにもアメリカ資本の飛行機には乗らない方がいいと言われ、ヨーロッパ系の飛行機で香港へ行って、泊まるホテルもアメリカ人が泊まるホテルはだめだとか言われて、物すごく神経を使った。ホテルに泊まると夜中に中国の出先の人が部屋に来て、行きたいならパスポートを貸せと言われパスポートを持って行ってしまふんです。次の日に手続はしてくれてもパスポートは返してくれず、汽車の切符をくれて香港から中国行きの汽車に乗るんです。

香港から羅湖というところへ行くのですが、羅湖の駅では中国の人民解放軍が鉄砲を持ってずらっと並んでいるところへ降りていく。そこから小さな橋を渡ると反対側が中国で、ものすごく開けた湿地の町深圳がある。深圳の駅へ行くと、待合室には真っ赤な表紙の毛語録が山のように積んであって、世界各国の翻訳本の中から日本語のものを見つけて、それを見ながら広州まで行く。

広州の駅に着くと、また中国側の旅行社みたいな人が待っていて最寄りのホテルへ行く。エレベーターはなく、暑いさなかで蚊はブ

ンブン飛んでくる本当にひどいホテルでした。翌日は、広州貿易会という見本市へ行きましたが、内心は北京へ行きたくて来ているところへ、北京から来いと連絡があつて、明日の飛行機に乗れというわけですよ。

広州からはノンストップの便もあるのに、その日は各駅停車みたいな飛行機に乗った。飛行機の中では、男のパーサーが毛語録を一緒に読もうなどと言ったりし、いくつかの空港に寄ったあとと北京に着いた。

北京では、ちゃんとした人が中国は何を目指しているかという講義をし、夕方になると晩御飯をごちそうしてくれて、夜は京劇やミュージカルみたいなものを見せてくれた。そういう日程が三日か四日あつて、段々に中国に対する認識を新たにして帰ってきたんです。それが中国との取っかかりです。

○紅谷 そうすると、最初に中国に行かれたのは、結婚されてから国会議員になるまでの昭和四十年から四十二年までの間でしょうか。

○河野 昭和四十年か四十一年でした。

そういう経験をして選挙に出て当選して、最初に私を丁寧に指導してくれたのは宇都宮徳馬さんです。宇都宮さんの選挙区は東京二区で大田区、品川区なんだけれども、住まいは私の選挙区の神奈川県の大和市という所で、大きな屋敷を構えておられました。

当選して最初に国会に行つたときに肩をたたかれて、僕は君の選挙区に住んでいるんだよ、君に一票入れたからねと言われ、それからいろいろなことを話そうじゃないかとなつたんです。

○紅谷 先生とは初対面でしたが、河野一郎先生と宇都宮先生との関係はあつたのですか。

○河野 あつたんです。そんなに親しくはなかったけど、おやじが経済企画庁長官だったときに政務次官をやっていたようで、君のおやじさんとは政務次官で付き合つたことがあるよと言っておられま

した。宇都宮さんというのは、世に言う政界の一匹オオカミで、最後は三木派にいたけど、いたから何しているというんじゃない、本心に自由でした。派閥とか人事、政局とかについては全く関心がないようでした。ただ、外交、防衛、経済には関心があった、思想的には石橋湛山さんの流れを汲んでいたかもしれないね。

宇都宮さんからは、中国との関係がいかに重要かという話を聞かされました。この人は本当に日中関係を熱心にやると同時に、日本とアルジェリアの関係もやっていたんです。後の話になりますが、AA研、アジア・アフリカ研究会は、宇都宮さんの狙うところはアジアは中国で、アフリカはアルジェリアなんです。周恩来や金日成とも親しくて、金日成と会って話をしたときのことを随分聞かされました。

僕が車で東京へ行く時は大和を通るんです。その時に宇都宮さんがちよつと寄っていけと言われて、そこからは宇都宮さんの車に乗せてもらって、自動車の中でずっと今の外交はという話を聞きながら東京に行くんです。それから、晩飯を食おうとか言われて必ず神楽坂へ連れていかれ、延々と日中関係はこれではだめだという話、なぜ北京で台湾ではないのかという話を懇々とされましたね。それが僕の日中関係に議員として関わった最初です。

その頃、日中関係の議員というのはたくさんいましたが、一匹オオカミで全然連携しないんですよ。宇都宮さんは宇都宮中国をやるし、松村先生は松村中国。強いて言えば、松村さんのところに割と真面目な人で、古井喜実さんとか田川誠一さんが集まっていた。

僕は宇都宮中国なんだけれども、宇都宮さんに指導を受けているうちに、叔父の河野謙三から、やはり中国をやるなら松村さんが本流だから、松村さんの話を聞いた方がいいぞと言われて、途中から松村さんの話を聞くようになったけど、僕はずっと宇都宮さんでした。だから、宇都宮さんは新自由クラブには入らなかったけれど

も、新自由クラブの応援団で、ずっと周辺にはいてくれました。

それから、中国関係では鯨岡兵輔さん。あの人は三木派というより本来松村派で、松村さんを私淑していた。松村さんは農業問題が本筋だった人で、文部大臣もやりましたが、晩年は中国一本やりでした。

おやじが死んでから、河野謙三が私の親代わりみたいに指導してくれましたが、その謙三が中国に割と熱心で、しかもそれは松村中国ですから、松村さんと話し合って中国がどうかと、田川誠一さんも入ってやっていたんですね。田川さんという人は、朝日新聞の記者から松村さんの秘書になるんです。松村さんは田川さんが河野一郎の甥っ子だということは知らなかった。田川さんがいよいよ選挙に出るといふときに、松村派か河野派かで二人でやりとりがあつて、結局、河野派から出るんだけど、その当時は河野派には野田武夫さんという人が同じ選挙区にいて、この人は今の野田毅さんの岳父です。野田さんは、熊本が自分の出身地だから熊本から出るからと言って九州に行つてしまい、それで田川さんが出るようになったんです。

野田さんも自民党の中では日中議連の棟梁だった人で、日中関係は理解者というか、中国関係を政治的に一生懸命やっていた人で、そういう人達が私の周りにいました。

○紅谷 しかし、自民党としては、そんなに多いわけではありませぬ。

○河野 多くない、ごく一部です。後に出てくる福田外務大臣不信任案の時に、賛同者は結局十二人になってしまふわけです。多くなかったです。ただ、田中角栄、大平正芳コンビが日中国交正常化をやったものだから、あれでがらっと変わるんですが、それまでは本当に日陰者ですよ。ほとんどが台湾派ですからね。

○紅谷 その前の佐藤総理、福田外務大臣のころの日中問題に関す



る国会でのやりとり、自民党の中の争いというのはどうだったのでしょうか。

○河野 それは、自民党の外交調査会でしょっちゅうやっていました。いろいろな人が中国へ行っては共同声明を出したりいろいろなことをするものだから、帰ってくると、外交部会や外交調査会では懲罰だと騒いでいた。

そのころの日本には日台条約があるから、北京に行ってそんなことを言うのはおかしいと言うけれど、北京は殊更一つの中国で代表するのは北京政府だと言うわけで、行ったら必ずそれを認めると言うし、行く人もそうだと行うものだから、帰ってくると大騒ぎになる。

○紅谷 親中派の一人が藤山愛一郎さんだったのですね。

○河野 そうです。共同声明に署名して帰ってきて、党は懲罰だと言いだ騒ぎになったんです。藤山さんは外務大臣経験者だし総裁候補だから、自民党としても放っておけない。しかも、松村謙三さんが、晩年これが最後の訪中だというときに藤山さんを連れていって、私が死んだ後はこの人がやるからと周恩来に紹介して、周恩来も藤山さん頼みますよということをやった後だから、自民党の中でも大きな問題になったんです。

○紅谷 藤山先生が中国に行かれたときは、三百人余りの議員がいたそうですが、自民党議員は少なかったようですが。

○河野 社会党が多くて、自民党はまだ少数でした。

吉田内閣と自民党は断じて中国を認めず、国会答弁は全部中共、中国共産党で、中華人民共和国とは言わないんです。けれども、いよいよ最後は田中訪中になるんです。

その前の佐藤内閣の末期、佐藤総理、福田外務大臣のときに、中国の国連復帰、国連加盟という問題があるのですが、日本は中国の復帰は認めないと頑張っていたけど、それはだんだん少数になって、

最後はアメリカと日本と何か国かになって、あとは中国の復帰、国連加盟を認めるというんです。

日本は最後に中国を認めるけれど、国連の決議は中国の国連復帰を認めて台湾政府を除名するという決議です。日本は日台条約があるから、中国の加盟は認めるけど台湾を除名は認めないという立場で、アメリカは、この問題は重要事項だから決議は三分の二でないとだめだというルールを逆手にとって、日本とアメリカが自分たちの仲間を引き込もうとするけど、どんどん中国派が増えていって、最後は大部分が賛成して惨敗するわけです。

福田外務大臣は、最後まで中国は認めないと言い続けて負け、佐藤内閣は斜陽になってきて、国際的にも中国を認めないわけにいかないなという流れの中で内閣は潰れて、本命の福田でなく田中内閣になって国交正常化を行うんですよ。

○紅谷 そこでの日本政府の立場というのは、朝鮮戦争があったので、アメリカ、国連軍と中国が戦っていた状況下という影響があったのででしょうか。

○河野 全くそうです。アメリカはまだ戦っていたわけで、絶対中国を認めないんです。

だけれども、北京政府は中国領土の大部分を掌握し、自分たちが中国国民を代表していると言うものだから、最後は東欧のアルバニアが代表して決議を出して、それが燎原の火のように燃えて、全部中国支持になっていくんです。それなのに日本はアメリカの先棒を担いで絶対反対だと言うものだから、僕らは、そんなことじゃだめだ、もう勝負はあったじゃないかと言ったけれども、反対だと言って、結局負けて帰ってきた。

そこで、福田外務大臣には外交能力がない、これから日中は国交正常化しなきゃいけないのに、福田の手じゃ正常化なんかできないから福田は辞めると言うけれども、辞めないと言う。それじゃ不信

任だといって社会党が不信任案を出して、その不信任案に自民党から十二人が賛成と言ったので、社会党が出した不信任案に、欠席ならまだしも賛成とは何だとさんざん言われました。

最初は二十人ぐらいいいたけど、だんだん減って最後は十二人になるんですね。十二人が、当時は国会のすぐ裏にあった今のキャピトル東急、昔のヒルトンホテルに部屋を借りて立て籠って、絶対賛成するんだと言うけど、僕らは二期生でプレッシャーがかかって大変でした。

一番年長は藤山先生で八十歳近く、そんな長老から山口敏夫だの僕だの若いのが一緒になって、十二人で不信任案に賛成すると言って頑張ったけど、執行部からせめて欠席してくれと言われ、最後はだめだと言いつつ欠席するんです。

福田外相不信任案の採決前に、本会議場前のトイレに入っていたら隣に福田さんが来て、君もようやるなど言われ、ちょっと困った記憶がありますね。

後からすぐ怒られ、総務会では懲罰だと言われたけど、藤山先生とか偉い人がいたから、結局大したお咎めはなかったね。

○紅谷 欠席の十二人は三木派が多かったですね。

○河野 そう、藤山、宇都宮、古井、川崎、田川、鯨岡、西岡、菅波。AA研の一番の中核メンバーだけになって、最後に残ったのが十二人でしたね。

その頃、宇都宮さんも松村さんも、会うたびに中国の話をしてくれたけれども、僕らはそれ以上に二人の人格に、人格的にすごく尊敬できる人だということで、政治家として尊敬していましたね。

○二見〔衆議院事務局〕 佐藤内閣は米国と歩調を合わせて台湾政府を支持していましたし、自民党内も北京政府を支持しないというのが圧倒的だった中で、河野先生がここまで少数派として取り組んでこられたのは、どのような背景やお考えがあったのでしょうか。

○河野 僕が日中と言ったのは、きつと佐藤さんが台湾だと言ったせいもあるね。もちろん宇都宮さんや松村さんが言われたことが正しい理論だと思っていましたけど、ここまで一生懸命やったのは、多少は反佐藤の流れの中で、勢い余ってやっていたところもあったかもしれない。

○紅谷 藤山さんはテレビでしか存じ上げませんし、宇都宮さんは辛うじて国会の中で拝見した程度ですけれども、どのような方だったのでしょうか。

○河野 藤山さんは、日本商工会議所の会頭から政治の世界に入ったんです。バッジもつけないで岸内閣で外務大臣をやられて、その後、選挙に出て政治家になるのですが、そのときに財界人は挙げて反対で、あなたは財界の藤山なんだから、ああいう汚いところへ入るのはやめなさいと言って皆が止めるけれど、藤山さんは、ここまですりかかったから自分はやると言って選挙に出るわけです。そこで皆が、絹のハンカチと呼ばれていた藤山さんのことを、絹のハンカチを雑巾にしたと言うんですよ。けれども、藤山さんはそこは割合と頑固で、そういうことは聞かないで政治家になられた。だから、そこらの政治家とは、挙措動作が全然違っていたね。

大日本製糖を始め大きな会社を幾つも持った藤山コンツェルンと言われた財界人で、赤坂にホテルニュージャパンを造って、その二階に自分の事務所を持っておられて、僕らはよく行きました。自宅は今の白金の都ホテルの場所にあつて、僕が自民党を離党する前の晩もあそこにいました。政治家とは話題も違うし、たたずまいが全然違う人でしたね。

宇都宮という人は、ミノファージェン製薬の社長をやっていて、強力ミノファージェンシーといったか、僕が肝臓で倒れて病院にいるとき、ずっとその強ミノの点滴を受けていた。宇都宮さんは強ミノは何にでも効くと言っていましたよ。

晩年は、屋敷を売ったお金で軍縮資料という雑誌を出し続けるんです。これは立派な雑誌で、ちゃんと朝日新聞に広告を出して、軍縮問題を語る学者が自分の意見を発表する場所がないから、この雑誌を出版して書きたい人は誰でも書けという人でした。党や派閥から金をもらおうというのは全然ないから、本当に自由にやっていますね。

○紅谷 話が戻って恐縮なのですが、国連でのアルバニア決議案は可決しましたけれども、日本はアメリカと歩調を合わせて台湾支持ということで反対しました。一方で、アメリカはその後にキッシンジャーが隠密訪中してどんどん話を進めていきましたけれども、アメリカ国内ですら内密にしていましたので、当然、日本は全く知らないで日本だけが取り残された。

それが表に出たときの日本政府や国会はどんな状況だったのでしょうか。

○河野 アメリカはニクソン大統領で、タカ派で中国とは全然だめだったんです。むしろ台湾に一生懸命武器を売ったりして台湾を応援していたから、まさかそのニクソン政権が頭越して、日本に一言も話をせずに、北京と外交関係を正常化するとは思いませんでした。キッシンジャーという人が隠密外交で全部話をつけて、米中関係が前進するよという新聞発表をした日が参議院の議長選挙の時だったんですよ。その頃は、中国問題で佐藤さん、福田さんはみそをつけ、それで総裁選挙に入るといふ時期ですね。

○紅谷 キッシンジャーが訪中したのが昭和四十六年の七月で、ちょうど参議院選挙の時でした。

○河野 その参議院選挙が終わった直後に謙三が河野書簡という手紙を参議院議員に出して、重宗さんがもう一回やると言っていたのを、重宗反対という火の手を上げて猛烈に激しい議長選挙になるんですね。途中で自民党の執行部は、重宗をおろすから河野もおりる

と言うんだけれども、河野はおりないと言うので、最後は本当にガチンコ勝負になる。その議長選挙の押し詰まったぎりぎりのところでキッシンジャー訪中が発表されたんです。だから、そこで佐藤内閣は本当に踏んだり蹴ったりになっちゃうわけです。

キッシンジャー訪中で佐藤総理はメンツを失い、その直後の参議院議長選挙では河野謙三に負ける。そこで佐藤は引いて福田へという既定路線が崩れて、福田、田中の一騎打ち、角福戦争になるわけですけれども、福田絶対有利だったのが田中にひっくり返されて、佐藤さんは完全にだめになるんです。最後にむちゃくちゃな記者会見をやって佐藤時代は終わっちゃう、そういう時代です。だから、そのころは、めっちゃくちゃだけれども、物すごく活気もあるし、毎日大騒ぎだったという時代でしたね。

○紅谷 中国との国交正常化と福田外相不信任案の中で、AA研の話がありました。後に先生も会長に就任されますが、どういう政策集団なのでしょう。

○河野 AA研はやはり宇都宮徳馬さんなんです。インドネシアのバンドンに非同盟諸国の首脳、東西対立の中で東でも西でもない非同盟の国が集まって、第三の主張、極をつくって平和な世界を作ろうとするわけです。

吉田内閣は、東西対立で完全に西側アメリカ側にいたけれども、鳩山内閣は吉田さんと少し距離を置いて、日ソ交渉を熱心にやるとか言って冷戦の関係、対立からはちよっと引いていたものだから、そのバンドン会議に着目して閣僚を送るんです。

会議には各国の首脳、中国は周恩来、インドネシアのスカルノ、インドのネルルが出席し、その会議を評価したということがAA研の一つのベースで、東西じゃなくてアジア、アフリカに着目した研究会をつくろうと結成したんです。

AA研は、割と党内野党的な人の集まりのように思われていたけ

ど、中国の国連復帰の時、いち早くそれを認めたのは木村俊夫経企庁長官で、公職にある人が中国に言及し、この人がAA研だったものだから、AA研もクローズアップされました。それまでは反党分子の集まりみたいなことを言われていたけど、そうでもないという評価ですね。

AA研では、宇都宮徳馬さん、木村俊夫さん、伊東正義さんといった人が中心にいて、とても教育的で一つ一つ丁寧に教えてもらいました。僕らは中国問題なんて最初は全然わかっていなくて、何で中国がそんな難しいのかとか、極端なことを言う台湾と北京の違いでさえ最初はよくわかつちやいないんです。多少歴史的なことは本なんか読むからわかるけど、なぜAA研は北京を支持するかという話なんかは、繰り返し宇都宮さんが言い、木村俊夫さんが言い、それから伊東さんが言いでした。

中国が国連に復帰して日中が国交正常化されたので、AA研の仕事がやや終わったというか、一つの目的を達成したような感じだったんだけど、国交正常化は内閣が決めて国会では議論がないものだから、タカ派は正常化はけしからんと言って、国会の承認が必要な航空協定に反対した。そこで青嵐会と毎日すさまじい議論をしました。

○紅谷 所管の外務委員会では、青嵐会の委員が日中航空協定に反対していました。

○河野 物すごい反対だった。藤尾正行さん、中川一郎さん、それから石原慎太郎さん。自民党の中でも本当にひどかったんですよ。外交部会で、核拡散防止条約の前段で核の使用を制限しようという議論をしようとする、こっぴどみじんになるほど激しく叩かれた。源田実さんという日本海軍航空隊の最高のパイロットだった人が、参議院議員でいて議論に参加されると、こっちは大変でした。

毎日の議論の前に、伊東正義さんが集まれと言って僕らが行くと、

こういう議論があるから、こういう反論をしようじゃないかと相談するんだけど、伊東さんが集めると宏池会の人ばかり来るんです。けれども、会議に行くと宏池会は品がよくて何にもしゃべらないので、鯨岡さんと僕が二人で一生懸命しゃべりました。

○紅谷 AA研は、日中関係が正常化して役目を終えたんじゃないかというお話でしたけれども、軍縮議連のメンバーというのもAA研の流れがあったのですか。

○河野 流れはそうです。この軍縮議連も創設者は宇都宮徳馬さんです。

宇都宮さんが、自民党の政治家のスキヤンダルで、俺はあんな連中と一緒に席を同じくしているのは恥ずかしい、嫌いだといって議員を辞め、もう議員なんかやらないと言う。それを、何とかもう一度やってくださいと僕らが頼みに行き、結局、衆議院はやらぬけれども参議院ならばやるといっているので、参議院選挙に出るんです。当選するかどうか心配だったけれども当選した。

その選挙中に、選挙公約だと言って、当選したら軍縮議連をつくらせて軍縮活動をやる、と掲げた。その頃の世界的流れは軍拡一辺倒で、世界が軍拡に流れている時こそ軍縮をやらなきゃだめだと言う。いつでもこの人は反対派なんですよ。

忘れもしない、選挙の最後の演説を新宿の駅前やって、僕と田英夫と二人が両側にいた。つまり、実際は無所属なんだけれども、新自由クラブと社民連が推薦して、こっちは押しかけ女房みたいなもので横にいたら、河野君と田君を事務局にして軍縮議連を作ると言っている。当選したら、約束だからと言われて軍縮議連を作ったら物すごく大勢三百人以上が入ったんです。

最初は共産党を入れるかどうかと言っていたけど、宇都宮さんは全部入れると言って全部入れた。そうして作ったのに、いよいよ発会式の前に私は会長をやらないと言い出したんです。俺がやると

会自体が色がつき過ぎるから俺はやらない。大石武一さんがいいと言つて、大石さんが初代会長になった。当時、大石さんは環境庁長官で尾瀬沼の保存とかで国民的人気があつたんです。大石初代会長、二代目三木武夫、その後、総理経験者の鈴木善幸さんや村山富市さんなどが務め、僕が議長就任後も会長をやっていたけれども、その後政権交代等があつて消滅したような形になつてしまつた。

だから、そうやつて宇都宮さんがやり僕がやるから、みんな同じ仲間になつちゃうんだ。日中も、A A研も、軍縮もそうだ。でも、みんな少数派でしたよ。

### 《河野謙三参議院議長と参議院改革》

○紅谷 昭和四十六年七月に参議院選挙がありました。当時の参議院は独自性がなく衆議院のカーボンコピー、果ては参議院無用論まで言われていました。

参議院議長選挙があり、河野謙三先生は、自民党候補がいる中で河野書簡を出されて議長選挙に出られ、当選されます。

河野謙三議長の人となりについて、お聞かせください。

○河野 当時は佐藤内閣で、長期安定政権だった。それを支えていたのは自民党の参議院で、そこには重宗雄三さんというリーダーがおられ、そのリーダーシップのもとに自民党参議院は一枚岩と言われていたんです。

なぜそうなつたかという点、佐藤さんも重宗さんも郷里が山口県で非常に仲がいい。だから佐藤内閣が内閣改造をする時には、必ず参議院枠は重宗さんに任せ、重宗さんが推薦すると必ずなるから、参議院議員で重宗さんの覚えがよくないと大臣になれないという構図で、重宗さんは参議院を完全に掌握していたんです。一方で、参議院の中では重宗天下というのをおかしい、もつと参議院も自由で

あるべきだという空気がずつとあつたんですね。

河野謙三は、最初は緑風会なんです。緑風会というのは一番理想的な参議院像だと、僕は今でも思っています。衆議院は政党政治で自民党と社会党のやり取りで法案が参議院に来る。参議院に来たら、政党に所属していない緑風会という自由な立場で、是は是、非は非として、自由に判断できる存在であるべきだというのが緑風会の本来の趣旨でした。しかし、緑風会の議員といえども、選挙になると自民党か社会党に推薦してもらわないと選挙にならないわけで、そうすると、だんだん自民党も社会党も俺たちの推薦が欲しけりや自民党に入れとか社会党に入れとか言つて、どんどん崩れて緑風会はなくなつてしまふんです。

それで、河野謙三さんも自民党に入る以外にないのでやむなく自民党に入る。委員長や副議長はやるけれども大臣は絶対やらない。何回も打診があつて断り続けるものだから説得力がありました。謙三は大臣をやりたければ衆議院に行けばいいんだ、参議院はチェックすべきで大臣なんか望んじやだめだと言うものだから、結構煙たい存在でもあつたんです。

ところが、そういう存在ではあつたけれども、さっきの話のように、佐藤の言うとおり重宗がやるものだから、これでは衆議院のカーボンコピーじゃないか、これなら要らないじゃないかという参議院無用論が出てきて、参議院選挙でも投票率も上がらないとかいろいろ批判をされながら選挙をやるわけです。

選挙が終わつて新しい参議院議員が決まつた直後に、河野謙三は参議院のあるべき姿を記した河野書簡を全議員に出しました。それは割と軽い気持ちで出したと思うんだけど、意外に共感を呼んで、本人も引つ込みがつかないようなところがあつたと思います。

元は重宗じゃだめだという話で、途中で重宗が引つ込むということになつて、これで重宗体制を崩そうじゃないか、野党も支持する

ぞと言うけど、これぞという人がいなくて、結局、おまえが手紙を出すからこうなったんだからおまえが出るというので、責任をとらされるような格好で謙三は手を挙げることになるわけです。

○紅谷 最初の頃は、自民党の長老格が河野謙三さんを議長と言っていたようですね。

○河野 桜会という集まりがあつて、そこに長老が集まっていたんです。そこに謙三も入っていたものだから、河野書簡はいいじゃないかと桜会が支持するんです。重宗さんの方や党の執行部は、桜会が言う程度じゃ問題ないという状況でした。

そこで私が、もしかしたらこれは反佐藤の蟻の一穴になる可能性があるから、これは勝負した方がいいと思つて、坂本三十次さんのところへ行つて、これこれしかじかと言つたら、坂本さんが、それは面白いから三木に手伝わそうじゃないかと言うので、二人で三木さんのところへ行つて説明したら、三木さんは、それはいいとなつた。

三木派の参議院議員で小山邦太郎さんがやりましようと言つて、参議院の三木派十人近くが桜会を応援するという話になつた。そうしてると、自民党の執行部の方は簡単じゃないぞという話になつて、重宗をおろして木内四郎さんを立てるから河野もおろせということになる。

そうしたら、桜会の中にはそれでいいんじゃないかと言う人もいたけれど、今度は三木さんが絶対おろるべきじゃないと言つて頑張るんです。謙三も、河野書簡というのは重宗がいかにかぬと言つていんじゃないやなくて、重宗の息のかかったのが出るというなら参議院改革ができないから同じだと言つて頑張つたんです。

桜会は一時は冷めたけど、最後は謙三は私一人でもやります、桜会には御迷惑かけませんと言つたので、桜会も謙三さん一人でやるわけにはいかないといつて、またみんな立ち上がつて、やろう

という話になつたんです。

そうすると、社会党が河野謙三を推すと言い、各党も言いに来る。毎日新聞の三宅久之さんという記者も自分で共産党へ行つたりなんかして、共産党も河野謙三ならやりますという話になる。

そういう動きが漏れて、執行部は河野謙三は野党と結託しておかしいと言つたわけです。すると謙三は、俺は世論と結託はするけれども野党と結託なんかしていいと言ひ返したりしてね。

そのときはホテルニュージャパンに立て籠つて、せりふを考えた声明を書いたり、新聞記者まで集まつてきて声明文を書いたりしていた。そうしていると、そこへ保利茂幹事長、それから中曾根さんも説得に來ました。謙三は一々会うのが嫌だから帰してくれと言うので、僕は玄関番をやつていたから、もう帰つてくれと言つて中曾根さんと大分やり合い、結局無然とした顔をして帰つていきました。

いろんな人から、おろろ、おりた方がいいんじゃないかと言われただけど、結局選挙になつちやうんです。勝つか負けるかわからず、最後まで五、六票足りない。足りないけれども何とかなるんじゃないかという気持ちもあつて選挙に突っ込みました。問題は、自民党の中で何人が河野謙三と書くかだったんです。

議長選挙の本会議は、延会になつて議場からみんな出たんです。その時の自民党執行部からの指示は、誰を入れたか確認するために隣同士が投票用紙を見せ合うということになつていた。ところが、何人かが議場から出たときに、ポケットに投票用紙を入れてトイレで書いてくるわけです。それで投票に行つて河野謙三の票を入れた人がいた。

だから、結局最後まで誰が書いたかよくわからないですよ。○紅谷 議長選挙は無記名ですから、誰が入れたのかわかりませんからね。

○河野 木札は持っていくけど無記名だからわからない。三、四人はわかったけれど、最後の三、四人はわからない。とにかく僅差だったと思う。

○紅谷 当時の記録によると、自民党から十五名が造反して河野謙三さんに入れ、票数としては百二十八票と百十八票で十票差でした。○河野 謙三が当選した瞬間に、傍聴席で万歳と叫んだのがいました。坂本三十次さんです。隣に自民党の副幹事長が並んでいるのに、傍聴席で一人で万歳をしている。僕は通路一つ隔てていたけど逃げちゃったんです。後で坂本さんが、洋ちゃん、いなくなつてひどいよ、万歳と言って周りを見たら俺一人だったと。坂本さんは本当に勝負をかけていて、真剣で一生涯命でした。

○紅谷 石原慎太郎さんも河野謙三さんに投票したようですね。

○河野 彼は初当選直後で、右も左も全然わからないんですよ。だから余り派閥の関係とかはなかった。

神奈川県出身で湘南高校なんですけど、そこで河野鉄雄という河野謙三の長男と同級生なんです。河野鉄雄は謙三の秘書をしていて、どうも石原との連絡があったらしく、石原が途中で桜会の控室に来て、俺は石原慎太郎という者だ、助太刀に来たとか言っていたという話でした。彼が来たので途中ですごく元気になりましたよ。

選挙結果は本当に僅差でした。一時は桜会も崩れて、もうやめようと言った人が三、四人いたんです。そういう人が最後は抱き起こして戻ったんです。

参議院選挙の直後だから、選挙違反が随分あったようで、それをネタに執行部がゆすつたり、いろいろなことをしたらしいな。

○紅谷 河野書簡は大きく四つの柱があつて、一、正副議長の党籍離脱。二、参議院から大臣、政務次官を出さない。三、党議拘束の緩和。四、審議時間の確保です。

この四つのうち、正副議長の党籍離脱については直ちに実行され

ました。しかし、参議院から大臣、政務次官を出さないこと、党議拘束の緩和については、なかなかそうはいかなかったようです。

○河野 それは、河野謙三議長が誕生してから各党にそれを正式に申し入れたんですが、各党がいい返事じゃなかった。

個々の議員はみんな賛成したのに、党の意思としては決められなかったんですね。一年たつてから趣旨に賛同したとかという返事が来るんです。

○紅谷 河野書簡については、衆議院でいう議会制度協議会に当たる参議院問題懇談会という協議機関を作つて、そこで有識者を入れて議論して、一応合意はされたようです。

○河野 謙三議長の私的諮問機関ができるんです。河野義克さんという参議院の前の事務総長が中心になられて、秋山ちえ子さんとかが入っていたと思いますが、そこから提案もあつたんですが、理想ではあるけれども簡単にはいかないということで、ペンディングのままでした。

そういう経過もあつて、謙三は議長になった直後から参議院の院内を歩き回つて、傍聴者の通路のエレベーターがどうか階段がどうか、女性用のトイレがないとか、そんなことを幾つか言つて直したんです。でも、参議院改革の本質のところは実際はなかなか実現しない。本人は党籍を離脱してみたり、与野党七、三の構えで、野党の意見をより聞こうとかはやつたんですが、参議院全体を動かすところまではいかなかったと思いますね。

○紅谷 ただ、党籍離脱、いわゆる会派だけではなく党籍まで離脱されたわけですから、議長の中立性を担保する明確な形を示されたということかと思えます。

○河野 それは大変なことだったんです。与党から出す議長候補を必ず複数出して、どっちにするかは野党が決めるなんという話まであつたんですよ。与党がこの人と言つて、それを野党がうんと言

のは、野党に全く選択肢がないからだめだ、だから二人出してくれというような話まで野党側からあったかな。

○紅谷 それは、与党が議長を出すからには、野党も受け入れられる人を出してほしいというのは、いまだに残っていると思います。

○河野 議長というのは、でき得べくんば全会一致で決める。全会一致で決めるためには、あらかじめ野党の了解を得られるような候補にするというのは、人格の問題も見えちゃまずいわけだけどもあるだろうなあ。

○紅谷 近年政権交代が何度かありましたけれども、その過程で、あれは副議長でしたが、野党が候補を内々出してきたら、与党から異論が出て候補者が変更になったことがあります。

常任委員長でもそういうことがあり、候補者を議連理事会に事前に披瀝するというルールになっていました。

それから、参議院の審議時間の確保については、今も三週間は確保するという暗黙のルールは生きていると言っていると思います。

ところで、河野先生は謙三議長から、議員になるに当たって影響を受けたというお話でした。河野謙三議長から三十年近くたってから衆議院議長に就かれましたけれども、就任されるに当たって、河野謙三議長からの教訓、参考にされたことがあれば、お聞かせください。

○河野 僕は自分の議員生活を振り返ってみて、前半は謙三に影響されましたね。誰かに教わらないと何にもできなかったから、割と謙三の指導力が強かった。謙三と一郎というのはみんなに比較されて、一郎さんは頑固で剛直で、謙三さんは話のよくわかる柔軟な人だというのが一般的な評価なんだけれども、意外に一郎の方が柔軟で謙三の方が頑固なんだよ。

さっきの議長選挙の時の謙三を見ると、本当に頑固ですよ。議長になつてからも最後の方は相当頑固だった。

それに比べると、一郎というのは頑固だという割には、例えば軽井沢で河野新党を作ろうというときに、最後は大野伴睦さんや松村謙三さんの説得を入れて断念したりして、意外に人の言うことをよく聞いていたんですよ。

あの頃は政治家同士の友情というか、君の将来を考えればこうすべきではないかとか、夜中まで二人っきりで話をして、それじゃ、そうするかと決めたりして、結構人の話を聞いていたんです。あの頃がそういう時代だったのかもしれないけれど、一郎という人は一本調子で何でもこうだ、というのでもなかったように思います。

河野謙三という人は、とてもいろいろなことを経験した人なんです。衆議院は、河野一郎追放後に身がわりみたいな形で出て落選して、次の選挙で当選して、そうしているうちに一郎が追放解除になったから辞めたんです。衆議院から参議院へ回って五期やりましたをして、それだけ非常に長い議員歴がありながら、閣僚は一切断つて、僕の知っている限りでも二回は閣僚就任の誘いというか打診があつたけれども一顧だにせず断っていた。自分は参議院議員である以上は、院の仕事の委員長はやるけれども閣僚はやらない。議員として務めるのだと、そこは非常にはつきりしていた。

しかも余り出しゃばらない人でした。いつも一歩下がって全体を見ている、とても経験豊かな人でした。だから、余り直接言われることはありませんでしたが、その都度いろいろなことを言ってくれました。

加えて話術の大変巧みな人で、特に座談は上手な人でした。大演説をぶつという人じゃないけど、演説も決して嫌いじゃなく出ている、全く自分のペースで小さい声で言う、そういう話をする人でした。

議長になつて、よく言われているのは七、三の構え、つまり野党



の方に七分向いて与党は三分でいい、七、三の構えでやるべきだということをしきりに言っていた。

それからもう一つは、やはり国会というものは有権者あつてのものだから有権者を大事にしなきゃいかぬというので、議長になって最初の改革というのは参観のエレベーター設置でした。

そのほかに僕が非常に印象に残っているのは、政治資金規正法案です。採決の結果が可否同数になり、識者に言わせれば、可否同数のときは否と言うべきなのを、可と言って法案を通したんです。それは、あの法案が非常に大事だということ自身は知っていて、何回やつても通らないで来た法案を、ここで決着をつけた方がいいというので、可と言ったんでしょうけれども、あれは非常に印象に残りましたね。

○紅谷 政治資金規正法の採決で可否同数になり、議長は可と決裁された。議長決裁で可とされたのは、新国会になってからは初めてでした。ただ、この法案は同時に議題となつて可決された公職選挙法と一体だったので可と決裁した、という理由だったかと思えます。河野議長時代にも、イラク特措法でしたが、可否同数になるかもしれないということで、過去の事例を引つ張り出して御説明した記憶があります。

○河野 そうでした。同数になるとどうするかと、みんな心配していたけど、ならなかったよね。郵政民営化の時も、積み上がっている木札を見て、可否同数になったら僕はどうすればいいか議長席で考えたことがあります。

○築山〔衆議院事務局〕 可否同数になったら、どういう判断をされるつもりだったのでしょうか。

○河野 物によるでしょうね。一番可否同数になりそうだと思つたのは臓器移植の法案ですね。あれは、とにかく各党が党議拘束を外したから、何票になるか全くわからなかったんです。結果は大差で

したが、本会議開会前には、もしかしたら同数もあるかもしれないという思いはありましたね。

○紅谷 河野謙三議長は、議長を二期六年でしたが、一期目は野党の力で議長になり、二期目は自民党を含めた支持で議長に再任されました。議長のあり方を示されたという印象が強い方で、そういう意味では、私が、河野議長の側におりまして、そこらあたりは謙三議長の影響があつたのかなと感じていました。

○河野 他にモデルはいないわけですからね。あれを見ていて、やはり野党に支えられた議長というのは、困ることは、議運をやつても何をやつても、与党から連絡する人もいなきや誰も報告にも来ない。謙三議長には、栗原祐幸さんだけが自民党の議運のメンバーで来てくれていたようです。

○紅谷 最後にありますけれども、どこかの連載で、河野先生は議員としては、父よりも河野謙三さんの方が影響が大きかったかもしれないと言っておられましたか、如何でしたか。

○河野 僕は自分の議員生活を振り返つてみて、前半はやはり謙三に影響されました。父が亡くなつていてよくわからないから、誰かに教わらないと何にもできなかつたから、割と謙三の指導力が強かつた。だけれども、議員生活の後半は、やはりおやじのことがいろいろ思い出されましたね。

### 《文教族、文部政務次官》

○紅谷 三回目の衆議院選挙が昭和四十七年十二月に行われて当選され、第二次田中内閣の発足で文部政務次官に就任されました。

今とは自民党内の役職の序列が若干違うのですが、当時は各委員会の理事を経験し政務次官を経て、部長から委員長、それから大臣という順序だったかと思いますが、文部政務次官というのは、

初当選からの経歴からして適材適所だったかと思いますが、如何でしたか。

○河野 初当選のときから党の文教部会に入って、文教委員会では理事も経験したし、文教には藤波孝生さんや西岡武夫さんとか仲間がいました。僕が文部政務次官になって、西岡さんが文教部会長になるのか、そんなことで比較的慣れていたら意外と不安はなかったですね。

ただ、何人かの先輩から、ここで文部政務次官をやったら本当の文教族になるから、他をやったらどうだという話があったんです。それも一つの考えだと思っただけで、何になりたいという希望も余りなく、黙っていたら文部政務次官と言われて、ある意味でほっとしたというのが本音だったんです。

○紅谷 その時の文部大臣は、タカ派と言われていた奥野誠亮先生でした。

○河野 それが最大の問題で、本当に頭を抱えましたね。

一期生、二期生で文教族の走り使いをやっていたときに、一番の仕事は日教組対策。当時は、何とあったって日本の文教政策をやるときには日教組をどうするかでした。

奥野大臣は、日教組はだめだという側の大將です。奥野さん、森山欽司さん、それから内藤蒼三郎さんとかです。文教部会の大御所は灘尾弘吉さんで、非常に温厚な人柄だったけれども、内務省出身だから日教組には相当きつい人でした。

反対に、そうでないのは坂田道太さんとかで、どっちかという話し合おうというタイプの人だったから、僕らはそういう人が頼りだったんです。

当時の日教組は積極的にストをやっていたから、子供たちを人質にとつてストをやるのはけしからん、自民党側は教師は聖職者だから、ストなんかやっちゃいけないとしきりに言うんです。

そんな対立をしている中で、奥野大臣はすごく剛直で、日教組とは一切会わないし口もきかない。しかし、文部省の現場は、日教組とやりとりしないと事柄は進まないわけです。大臣は絶対だめというから、役所の半分ぐらいは同調する人がいたけれども半分ぐらいは困って頭を抱えていました。

○紅谷 今でこそ教員の組織率は低いですが、当時はほとんどが組合に入っていて、しかも総評の中でも日教組は中心的な組合でしたから、話をしないと進みませんね。

○河野 僕ら若手の文教族にはタカ派もいましたが、日教組と会って話をしているんじゃないかと思っていた。日教組も何か手がかりをとるので、僕らのところへもアプローチもあった。当時は、榎枝という人が日教組の委員長でしたが、榎枝さんなんかから、会ってみないかとかいう話もありました。そんなのを片手で持ちながら奥野さんの下で働くわけだからきつくて、奥野さんは日教組が来るといなくなるという状況でした。

ただ、自民党の文教部会は、その頃は若手が相当強くなっていて、西岡さんや藤波さんが文教部会を仕切りかけていて、灘尾さんたちは上座に座っているけれど、実際何かをやるのは西岡さんになる。西岡さんという人は、日教組と話をしながらも反面では物すごくきつい人でした。

西岡さんに政務次官をやることになったと言ったら、俺ら文教部会で全面的にバックアップするから思い切つてやれという話をしてくれ、奥野大臣と衝突するんじゃないかと半分楽しみにしていたらしいけれども、衝突もせず十カ月ぐらいの任期でした。

○紅谷 そうすると、奥野大臣は、日教組に関しては河野政務次官にお任せだったのですか。

○河野 任せたというより、大臣は日教組問題を一切やらないわけだから、その問題になると、文部省の役人は政務次官室へ来て頼み

ますという話になるんです。

それで、そのころから仕掛けがあった人材確保法は、教員の給料をばんと上げようという話で、その魂胆は日教組が給料を増やせという要求だから、向こうの要求より高く給料を上げようと。そんなこと言っただけで財源をどうするんだ、公務員の給与を全部上げるとなると大変なことになるので、教員の給与だけを上げて、ほかの公務員の給料は上げないのだから大騒ぎになったんです。大騒ぎになりましたが、最後は、田中総理が理解があつて、やっさいいんじやないかと言ってくれ、それで、人材確保法を通そうとなつたけれど、これが通らない。日教組は給料を上げてくれるからうれいけれど、自民党に上げられるのは困るから断固反対で大騒ぎになりました。

○紅谷 そのころ、榎枝さんというのは日教組の委員長でしたが、総評の議長もやっていたのではないですか。

○河野 そうなんです。だから、割と視野が広く加盟組合全体のことを見ていたから、単体の利益というわけにはいかなかったんです。義務教育では日教組対策が一番大きな問題で、もう一つは、子供の数が急激に増えて学校が足りなくなる人口急増地区の学校対策。神奈川県なんか五十校だか百校の学校を作らなきゃいけないみたいな大変な騒ぎで、あのころは仮設の教室をあっちこっちに作っていた。義務教育では日教組と学校不足ですね。

そして、もう一方で大学紛争。めちゃくちゃな大学紛争をやっていたわけですが、僕が政務次官のころには収まっていたんです。三回目の選挙のときには影響があるんじゃないかと思っていたけど、むしろ支持されて勝ったんですけど、それまでは文教政策が振り回されたということがあったんです。

政務次官当時のもう一つの案件は、高等専門学校の増設や技術科学大学の創設です。豊橋に技術科学大学を作ったときは、自分で行って決めました。

それから、一県一医大ですね。それは、大学紛争の巢窟は医学部で、医学部だけ五年制なものだから、そこに人が溜まる。そこで、田中総理から、医学部は独立医科大学にして、影響されないようにしたらどうかとかという意見が出る一方で、足りないから各県に一校ずつ医科大学を作れと言われて作ったんです。

実は、文部省ではそんなにスキャンダルというのはなかったんですが、医科大学を作り始めたら、誘致運動や作ろうとした際にすごいスキャンダルが起きたんです。

○紅谷 中選挙区ですから、静岡に作れ、いや浜松だという誘致合戦があつたわけですね。

○河野 そう、静岡県が大騒ぎになって、西と東で引っ張り合いになった。ちょうど高見三郎先生が静岡出身で、高見大臣のときに引っ張りっこになって、大臣も裁定できなくてお手上げになった。それで部会が入って、どっちか決めたらどうかとか、いろいろな話がありました。

それから、田中総理から大学を全部地方へ出したらどうだという話があつて、あのころ、明治から青学から、みんな郊外へ行っただけです。失敗で今はみんな戻っているけれどもね。

○紅谷 学生が都心に集まらないよう地方に分散させようという政策でしたね。

○河野 環境のいいところへ行けとか言つてね。

それから、青年の家というのを各県が作ったから、文教予算は増えたんです。概算要求で前年の何割増しとかいうけれども、何に使っていいかわからなくて、やたら青年の家とかを作った。

失敗もあつたけれども、一番文教が伸びた頃でした。

## 《政治工学研究所（政工研）の結成》

○紅谷 自民党には、政策や理念を共有する集団として派閥があつて、選挙や人事での後ろ盾となり、また総裁ポストに向けて一体となつて活動しています。お父様の河野一郎先生は春秋会という河野派を結成し、また先生ご自身も当選直後は中曽根派に所属されていきました。この頃は三角大福中と言われた五派閥がある中で、個々の政策についての集団として政治工学研究所を結成されました。これは先に話がありました。佐藤内閣の政治姿勢に対する不信を機に、党改革を主張するメンバーで結成されたとのことですが、そもそも政治工学研究所という少し変わったネーミングですが、結成の経緯をお聞かせください。

○河野 最初は自分の事務所のつもりで作ったんです。講師を呼んで、いろいろな人の話を聞こうと思つて作つたんですが、お願いすると結構な講師が来てくれて、一人で聞くのは申し訳ないから一緒に聞かないかというような誘い方で、拓世会の仲間にも声をかけて話を聞いたりしていました。政治的な行動を何とか政策的に集まろうとかいうのは最初は余りなかつたんですが、だんだん何か政治的にやろうといつて集まる場所がないか、それじゃ少し大きい事務所が集まろうかとなつた。

おやじは、東京駅の前にある丸ビルの四階に事務所を持っていて、議員会館を使ったことがないんです。その頃の議員会館は木造の汚いものだけど、国会のすぐ脇にあるから便利なんです。おやじは、国会議事堂にいて議員会館を行ったり来たりしているだけでは世間の話が聞こえない。何がみんなの一番の関心事かを一番敏感に感じるのは、あの中だけにいちやだめだ、外にいなきやだめだと言つていました。

そんなことが耳に残っていたものだから、僕もずっと外の事務所

にいて、会館では一遍も仕事をすることがないんです。会館はいつも秘書が座っていました。

そんなこともあつて、最初はみんなが集まりやすいヒルトン、今のキャピトル東急が便利だから集まつたんだけど、お金がかかるから事務所をつくらう、それなら名前もつけなきやいけないとなつた。政治工学研究所という名前は、政治にも工学的な見地、つまり、政治はいまだに義理と人情で動いている面があつて、それは大事だけれども、一方でやはり工学的な見地から政治を見る視点も大事で、これからの政治はそういう部分を見ていかなきやいけないと、僕がつけたんです。

政工研という事務所で作っているうちに、名前を何かつけようといつて藤波さんに頼んだら青嵐会になつたものだから、それはだめだと言っているうちに、もう政工研でいこうとなりました。

○築山〔衆議院事務局〕 座長は河野議長ではなく藤波さんにお願ひされたんですね。

○河野 そうです。僕の事務所で作つて僕が座長だと、何か一人でやっているようになるし、藤波さんという人が座ると様になつて、みんな余り文句を言わなかつたね。同期では僕は歳が下で、僕より下は山口敏夫さんしかいなかったんですよ。

○紅谷 新自由クラブ結成までの三年近くは、ずっと藤波先生が座長だったので。

○河野 そうでした。藤波孝生という人は面白い人で、国会議員で一番尊敬するのは前尾繁三郎さんだと言うんです。どうしてかと聞いたら、前尾さんのように二番目にいて存在感があるのがいい、ナンバーツの存在感というのがいいと言ふ。前尾さんは一番になりかけたけれどもクーデターで潰された。藤波さんはそれがいいと言ふんです。そこだけ変な人だなと思つていました。

だから、みんな安心して付き合ふんです。この人は余り野心がな

いから、付き合っているも危ない目には遭わない。河野さんだと付き合うとどこへ連れていかれるかわからないけど、藤波さんは安心だということでした。

○紅谷 文教族や拓世会のメンバー、さらに早稲田の関係の人たちが多かったようですが、一時かもしれないませんが、小沢一郎さんや橋本龍太郎さんも入っていたようですね。

○河野 ええ、入っていました。小沢さん、橋本さんは慶応です。早稲田では渡部恒三さん。それから拓世会の縁で坂本三十次さんとかも入っていた。でも、それは昼に来てライスカレーを食べて帰るだけだから、いざ不信任案に賛成しようとか何かリスクを負うことになる、すぐ五人とか七人に減っちゃう。平時にライスカレーを食べて人の話を聞こうというときには二十人余りがいたんじゃないですかね。

講師は、すごくいい人が次々に集まったから、おもしろかったですよ。

○紅谷 この頃は、派閥ではない集団には政工研以外に青嵐会もありましたが、他にもあったのでしょうか。

○河野 ちょうど派閥が壊れ始めたころですよ。派閥がみんな代替りしたんです。初代の派閥のリーダーというのは強くておっかなくて、非常に権力があつた。佐藤栄作さんとか大野伴睦さんとか河野一郎とか、睨まれたらしくんじやうようなすごい人が派閥のリーダーだったけれど、それがみんな亡くなったりした。二代目になると、どつちかという、みんな仲よくしようという親睦的だったから、たがが緩んだというか、隣の派閥と一緒に飯を食べても何のお咎めもない。初代のころは、そんなことをしたら呼びつけられて怒られたんじゃないかと思えますよね。

それで、この頃に派閥横断的な集まりが随分できて、宮沢喜一さんが、水野清さんや林義郎さん達に声をかけて、宮沢さんをキャッ

プにして平河会をやったのが派閥横断では一番早い方じゃないですかね。あとは、小坂徳三郎さんの新風研です。それから政工研と青嵐会。青嵐会はやはり派閥横断で、すごい猛者が集まって、何しろ集まったときに血判を押すというので、みんなでばかじやないかと言っていたけれども、血の団結とか言ってやっていました。そういうのはみんな派閥横断でしたね。

だけれども、総裁選挙というと結局全部本家の派閥へ戻るわけですよ。

○紅谷 政工研と青嵐会が非常に存在感があつたのかと思います。田中内閣が倒れて、その後の三木総裁が選ばれる過程で、政工研から総裁候補を出そうという話があつたようですね。

○河野 僕らの仲間は理屈が多かつたから、あれはだめ、これもだめ、誰もいないなら自分たちで決めて担ごうじやないかという話になった。具体的に、藤山愛一郎さん、石田博英さん、宮沢喜一さんの名前を挙げて、三人のところへ行くのだけど、みんなあつさり断られた。

藤山さんは、北京に行っておられなかったけど、僕らがたがたやっていたら、急いで帰るといつて北京から帰ってこられたんですが、そのときは時既に遅しかったです。

宮沢さんが一番冷たかつた。私はもう四十を過ぎて、この年になれば、人間は自分の器量はわかつています、出るわけにはいかないし、私は大平派について大平がこの選挙を戦うんですから、お帰りにくださいと、全然だめでした。

石田さんは、年寄りには全部下がってもらって新しい人に出てもらうことにしたいとか言ったら、君、僕は幾つだと思っているんだと言つて、その年寄りと言っている方に俺は入ると。それで、河野君、君は幾つだと言われて、何歳と答えたら、ちようどいい、君がやつたらいいよと。それが悪かつたんです。それをみんな聞いていて、

もう洋ちゃんがやれよみたいな話になった。

○紅谷 皆さんは派閥に入っているのですから、問題はなかったのですか。

○河野 そこはさばさばしていて、今では考えられないほど、すごく自由でした。

結局、総裁選は行われなかったけど、それでも推薦人が二十人やるんだから集めようなんて、塩谷さんとか佐藤文生さんとかが紙を持って歩いて、三人集まったとか四人集まったとか言っていました。結局、椎名裁定で三木さんになって総裁選はなくなりましたから、事なきを得て誰もけが出ないで済みましたが、突き進んでいたら何人かけ人が出たでしょうね。

○紅谷 政工研は、その後新自由クラブに繋がっていくと言っているのでしょうか。

○河野 そうですね。

アメリカと日本の旗振りで、中国の北京政府の国連加盟に反対したけれども大惨敗する一方、福田外務大臣の不信任案も通らない。

結局、中国は国連に加盟し、台湾は追放され国連から出てしまう。これから国連活動をやるといったって、難しくなるし大変じゃないかというので、僕らは、こんなことじゃだめだと言っていたら、青嵐会は台湾を担いで、相変わらず蒋介石の恩義、信義を忘れちゃいかぬとか言っていて、ずっと論争が始まっている中で、田中内閣、大平外務大臣で日中国交正常化をやるわけです。

ところが、田中さんがスキャンダルで辞めて三木さんになって、三木さんも辞めて福田政権になると、青嵐会から石原慎太郎さん、中川一郎さんが入閣する。それで、ほとんど発言しなくなり、僕らだけになってしまった。僕らは、福田さんと余りよくなかった。

僕らは三木内閣のときに離党しましたが、政工研で離党したのは五人しかいません。藤波さん以下は残って、最後、決別は結構大変

だったんだけど、残った連中が、君らの路線を死守するとか言ってくれましたが、すぐにやぐになっちゃいました。

○紅谷 政工研が結成されてから五十年近く経過するのですが、今も河野事務所の郵便受けには政治工学研究所とあり、歴史を感じます。

### 《自民党新政策綱領案の策定》

○紅谷 河野先生が自民党を離党される大きな要因となった、自民党新政策綱領案の策定についてお伺いしたいと思います。

立党二十年に当たって、松野頼三政調会長から、新たな政策綱領を策定するので、小委員会の座長をやってほしいという話があったということですが、松野先生とはどういう関係からそういう話があったのでしょうか。

○河野 それが本当に不思議なんです。僕は、それまで松野という人とは全く話をしたこともなく、よく知らない人だったんです。それが、突然、国会の廊下で会ったら、河野君ちよつと来てくれと呼ばれて、我が党は立党二十年を迎えて来年がその党大会だから、何かやらなきゃいけないと考えたら、政策が問題だから政策綱領の見直しをやりたい。親委員会は各派閥の領袖が並んで動かないから、君ら若手が集まって小委員会で作ってほしい。新しい時代だから新しい者が考えを出したらいいんじゃないかと言われたんです。

ちよつどその前に、石田博英さんが、自民党が選挙で余り強くないのは政策がもう古くなっているからで、自民党は政策を変えないとこの先やっていけないという論文を中央公論に書いたんです。僕らはそれにとっても感銘を受けていたけれども、松野さんの頭の下の敷きに、その石田論文が多少あったと思います。

その石田論文をめぐるは総務会で議論があり、総務会長から、石田君のところでは委員会をつくって話し合ったらどうだとなって、石田委員会というのができるんです。その石田委員会に十人ぐらいが指名され、僕はたまたま二年生で指名されて入った。そこに松野さんもいたんです。

僕は、松野さんに、小委員会の座長は三年生ではとても無理ですと言ったら、この党は君のおやじなんかで作った党なんだから、思い切っているなことを言ったらいいんだ。俺が見てやるから心配しないで、仲間を募って小委員会であたき台を書いてみると言われた。とにかく、この人はすごく口説き上手な人でした。

口説かれて引き受けたけれど、考えてみたら自民党の政策綱領を作るなんて大変だよ。僕も心配だから、松野さんに言われて石田さんのところに相談に行ったら、石田さんは危ないな、余りむきになって一生懸命やらない方がいいぞ、石田委員会で出した案は全部引き出しに入れられたままだからね、と言われたんです。

宮沢さんにも相談に行き、さらに松野さんのところに行ったら、憲法については書いても書かなくてもいいよ、余り変にいじくり回さぬ方がいいよと言われたんです。でも、書かないわけにいかないのではないかと言ったら、松野さんは、憲法はこのままでいいんじゃないかと思ってるけど、どうしてもというならば、この憲法を認めるかどうかを再承認というか、これでいいかどうかを、みんなでマル・バツをつけて、国民が承認したという儀式をやるといいはいいかもわからないけど、いじるといったって、いじりようがないだろうという話でした。

そんなことをやればいいのかなどと思ってやることになり、メンバーも松野さんに見てもらい、これでいいんじゃないかとなったんだけど、これが大騒ぎになりました。

○紅谷 小委員会のメンバーの人選に制約はなかったのですか。

○河野 君がピックアップして名簿を持ってこい。そうしたら俺が足したり引いたりしてやるからということだったけど、ほとんど触らなかつたですね。

○紅谷 そのメンバーは、林義郎さん、鳩山威一郎さん、他は仲間内みたいな若い人達で、ハト派的で先生の考え方に近いような方ばかりが集まったという印象ですが、異論は出なかつたのですか。

○河野 それでいいと思っていたし、選べと言われればそうなるよね。

松野さんにも了承してもらったのに、初日から大騒ぎになって、びっくりしました。会場へ行ったら一杯で、青嵐会がみんな椅子に座っているの、恐る恐るメンバーの席をあけてくださいと言ったら壁側に移り、その中で開会しますと言くと、渡辺美智雄さんだったか中川一郎さんだったか、このメンバーを選んだ理由をまず最初に説明しろと言われた。御一任をいただいておりますので言ったら、誰が一任したんだと。松野さんと言うわけにもいかないからね。

○紅谷 それは、事前にたたき台の案に護憲や軍縮が入っているといることが分かっていたのでしようか、それとも、メンバーを集まったのでしょうか。

○河野 どうも、僕がやるというのが気に入らなかつたらしい。つまり、福田先生の不信任案のときに騒いだり、若くせに生意気だ。小委員会とはいえ座長とは何だと言われ、最後は、おまえなんか自民党にいる資格はないとまで言われて、スタートから大騒ぎでした。

憲法について何か書くのか書かないのかというので、恐る恐るだけれども憲法については書かない、だめともいいとも書かない、それから非核三原則は党是に入れる。非核三原則を入れて憲法を落とすと言っただけで、かっとなつて怒られた。

○紅谷 非核三原則は国会決議をしているのに、なぜ怒られるので

しようか。

○河野 そう、やっています。だって、佐藤さんや三木さんが自民党の総裁が総理大臣として発言して、これを党是にするというのは誰にはばかる必要があるかと思つて書いたら、それをこっぴどく怒られて、おまえは正気かと言われて、正気もくそもないだろうと思つたけれども、その頃の党内には、声高に核武装論という人が結構いたんですよ。当時は、まだ国防部会の中には源田実さんとかがおられたから、再軍備論とか核武装論というのがちらちらあつたけれども、それは彼が言うから仕方ないというか、それを政策の真ん中に据えようなんという気は全然なかつたんです。

それでも、松野さんが最後に引き取つてくれて、タカ派の代表とハト派の代表を政調会長室に呼んで、議論の最初に松野さんが、河野君はちよつと外へ出ていてくれないかと出されて、参りました。

こつちはどんだん譲歩するだけで、幾ら譲歩してもそれでいいというわけにいかないと言ひ、もうだめだと思ひました。

○紅谷 翌年の党大会では、その政策綱領はどうなつたのでしょうか。

○河野 次まで繰越しになるんです。結局、三年後に政策綱領の改正というのをやりました。僕は離党していなかったけれど、そのときに政策綱領改定委員会とかというのがあつて、委員長は井出一太郎さんでした。井出さんだったから誰も文句を言わず、やはり人徳というのはどうしようもないと思ひましたね。井出さんが報告して全く異議なし。信用があるのとなじのじや、かくも違ふかと思ひましたよ。

自民党つて人なんです。だって、政策綱領の中身なんて誰も読まないで、あの人がやるからいいだろうという話ですよ。

今の憲法改正だつて、国民投票に付したら、誰が提案者かによつて通つたり通らなかつたりすると思ひます。だから、やつたらいい、

今だつたら絶対通らないから。

○紅谷 自民党の新政策綱領の策定に関わられたのが昭和五十年の秋で、その翌年の六月には自民党離党を表明されるのですが、やはりこの件で相当ダメージを受けられたのが、きつかけになつたのでしょうか。

○河野 そうでした。こたえました。これはもう自民党には私のいる場所はないなとときに思ひました。

文教部会の仕事は、私学振興法がいいところまでいつていたから残念だつたけど、一方で、ロッキードの裁判が進んでいたので、もうそれどころじゃなかつた。

五十一年の十一月が衆議院の任期満了で選挙だつたんです。僕が六月に離党すると言つたら、みんなから止められ、松野さんからは夏にはロッキードの白黒がつくから、それまで我慢して、それでだめなら離党しろ、俺も一緒に出てやるから、それまでは俺に身柄を預けるとさんざん言われました。

松野さんには、ありがたひけれども八月の判決まで我慢したら、任期満了の選挙まで数カ月しかなくて何もできません。新党を作ろうと思つたら、選挙までに新党の周知徹底をして、候補者を集めてお金を集めなくてはならないから、もうぎりぎり、これ以上延ばせないんですと言つたんです。

松野さんには、政策綱領のときに、すごく世話になり、僕をかばつてくれた恩義があつたけれど、これだけはだめですと言ひました。

### 《自民党離党と新自由クラブ結成》

○紅谷 新自由クラブの結成は昭和五十一年六月ですから、もう四十年以上前になりますが、松野政調会長から依頼があつた自民党の政策綱領の策定作業の挫折が、いつまでたつても変わらない自民党



からの離党の核心の一つになり、その直後に起きたロッキード事件が、離党の引き金になったと述懐されています。

そこで、まず離党という大きな政治決断に至った経緯と、新自由クラブの政治理念について、お話ししたいと思います。

○河野 少し脱線して、後ろに戻ってから話をさせてもらいます。

父が死んで、父の後援会が強烈で、どうしても後をやれというので担ぎ出されたのですが、私は当初、政治をやる気、政界に入る気はなかったんです。

大学を出て商社勤めはとても快適で、その商社を途中で辞めて小さな会社の経営に関わるようになっていたけれど、政治をやるという気持ちよりも、商売、経済界で働きたいという気持ちがあったんです。その頃は父が政治をやっていましたから、余り父の迷惑、足手まといになってはいけないということもあって、少し避けていたんです。

父が死んで、後をやれと急に言われて非常に躊躇したんです。なぜかという、政治家である父の横にいて、出入りするたくさんの政治家を見ていたけれど、その政治家をどうも好きになれなかったんです。それは、自分の選挙のためにこういうことをやりたいという陳情が多かったり、話を聞いても余り天下国家を論じたり、こういう政策が必要じゃないかという話はあまりなくて、それよりも選挙区事情を話したり、自分の利害に関することばかりでした。それは、先輩政治家のところを頼みに来るのだから、今にして思えば当然かもしれないけれど、そういうことばかり言うものだから、政治家という人種について余り好感を持っていなかったんです。

はっきり言って、政治家には二種類ある。天下国家を論ずる政治家と、全く地元優先の政治家との二種類あるというふうに僕には見えていたんです。

しかし、父が死んで後をやれよと言われたときに、果たして自分が政治家になってそのどっちになるのだろうか、とても前者の方にはなれる知識も能力もないし、かといって後者ではつまらないという気持ちがあったから、非常に逡巡していったんです。

だけれども、その後先輩の政治家に会って、偉い先輩の政治家が僕のことをとても心配してくれて、松村謙三さんや池田総理とも父が近かったものだから、葬儀が終わった後にお礼に行くと、君はどうするんだと言われて、躊躇している場合じゃないだろうと言われてました。人によっては、慌てるな、立ちどまって考えることも大事だと言ってくれた人もいたけれど、おおむね強い勧めで、自分どうしようかと考えている間もなくやらざるを得ないというふうに、引きずり込まれたような格好だったんです。

何も分からないから、党本部に通って毎朝の部会や先輩政治家の集まりや、誘われて夜の会合などに参加してみた。でも何処に行っても本場の国政、現下の政治問題を議論するのを聞いた事はなかったんです。それで政治に嫌気がさして来ていました。

そう思っていた時に石田博英さんに出会ったんです。前にも話しましたが、石田さんは中央公論に論文を発表され、それが党内で若干問題になって石田委員会ができ、僕もメンバーに入ったんです。

この石田委員会に入れてもらった事が私の政治家人生に大きな方向性を与えてくれました。終戦後の日本がどう進んでいくか、これまであまり深く考えていなかったいろいろなことに、進んで行くヒントを得たのは、振り返ってみるとこの委員会でした。

そこは宮沢さんや松野さんとかの政策通の人が、日本の現状と未来について議論していて、私には物を言う能力もキャリアもないから黙って聞いていたけど、そこで憲法の問題や非核三原則の問題なども議論されて、僕は自民党に来て良かった、初めて政治家になって良かったという気がしたんですよ。

そこでの答申案は、誰かの引き出しに入っただまお蔵入りになつてしまうのですが、そのときの意見が僕には非常に新鮮で受け入れられるものだった。それが頭にあつたものだから、松野さんから政策綱領策定に関わってみないかと言われたときに、あの時の議論を少しでも反映できればいいなという気持ちがあつて受けたんです。それで、その議論を一生懸命並べて作った案からは、憲法問題は抜けていたし、自民党が後生大事にしていたものをみんな落としていたので叱られたんです。加えて、ちよつと生意気だと思われていたんだね。

それでも少しずつ案を固め、いいと思つて一生懸命作った案を親委員会へ説明に行ったけど、何回目かでやはりこれはだめだなと思ひましたね。あのときは、自由主義政党というのは自民党しかないし、その党だと思つてきたら全然違うから、ここは私のいるところじゃないなという気がしていた。しかし、この党以外に行く先はどこにもないわけで、それがだんだん高じて、それならもう自分で作る以外にないという気持ち芽生えていったんですよ。

だけれども、先輩で僕のことを見てくれた人がいて、おまえ、自民党の中で何を言つてもいいが、離党ということだけは絶対言つちやだめだとくぎを刺されたんです。

実は、そのときまでは余り離党という気はなかつたんですよ。それが、逆にああそうか、離党という方法があると気がついたので、しかし、他の人に離党しようとする誘いをかけるなんて事は怖くて言えなかつたですね。そういう時間が何カ月か続いているうちに、ロッキード事件が起きるんです。

それまでの間は、ここにはいられないけど行く先はない、どうするか、こんなことでいいのかみたいな話はみんなにずっとしていったんです。当時は文教族で文教部会にいましたから、西岡武夫さんとか藤波孝生さんとか、そういう人たちとずっと話をしていました。

そこにロッキード事件が起きて、これはもうこの党にいたらだめだと。それに共感してくれた人たちの中には、こんなところにいたんじゃないや選挙で当選しないという人もいたんですよ。僕はそう思つていなかったけど、人によつては、自民党じゃ選挙にならない、みんな落選するから新しいものを作らなきゃいけないと。変えようといつたつてもう変えようがないから、段々に新しいものを作らなきゃいけないという気持ちになつていきましたね。

○紅谷 それは、具体的には離党ということ、西岡さんや他の誰かと相談されたということですか。

○河野 ロッキード事件でコーチャン証言とかがあり、党の中核の人たちが容疑を受けて、毎日のように新聞に大見出しで出るわけです。あれを見るたびに、ああ、もうだめだと思つていましたね。

それで、朝飯会の文教部会が終わつてみんな帰つた後、四、五人が集まつて、最初は幹事長室へ言いに行こうとか、総務会に出て何か言おうとかと言つていたけど、幹事長は中曽根さんで、総務会長は灘尾先生だからおつかないし、中曽根さんはむしろ逆の方でしたからね。そう言つていけると、部会の席で参議院の有田一寿さんが、僕はほとんど知らない人だったので、河野さん、こんなことじやとてもだめですよという話をされたんです。やはりこういう人がいるんだなと思ひましたね。

あとは、田川誠一さんですね。田川さんも、これはとてもだめだけれど離党だけはだめだと言つていたんです。それが最後のころは田川さんが一番強硬になつたんですよ。

ロッキード問題が本当に深刻になつて、西岡さんと話をしたら、党内で徹底的に何かやる以外にないけれど、それでだめなら離党するしかないかもしれないと彼も言つたんです。

ただ、最初は大勢がそうだとおっしゃっていただけ、いざ本当にやるかとなると、みんな躊躇したんです。離党しかなかったのは三

木派の人が多かったんです。三木派は、そのころから党内では一番最小で弱小派閥だったから、割と批判的な意見を言えるグループだったんですね。

○紅谷 しかし、当時は三木総理で、西岡さんや山口さんは三木派だったのではないですか。

○河野 そうなんです。だから三木派が離党すれば三木さんの足を引く張ることになってしまふ。

ほかに塩谷一夫さん、坂本三十次さん、菅波茂さんとかみんな三木派だったんですよ。塩谷さんなんか、三木の足を引く張るわけにはいかないから、河野さんの言うとおりで、ここは三木を守って、三木がだめになったら離党するという感じでした。

それから、他の人たちを誘うと、離党はいいけど何人離党するのか、三人や四人じゃ全然問題にならないから、二桁離党するのなら一緒にやってもいいという人が多かった。

田川さんも、俺は十人目の離党者になると言うんです。九人探してくれば十人目は俺が名前を書くから九人探してくれ。今はおまえと俺と二人だから、あと八人探さなきゃいかぬというので、それから離党者を探し始めたんですよ。

ところが、これが難しく、新聞に書かれたらおしまいだから、口が固そうで真剣に考えてくれそうでとか条件がいろいろあったけれども、それでも一時は十五人ぐらいはいるんじゃないかなと思っていた。その中には参議院議員だった細川護熙さんもいて、当時は大蔵政務次官で、僕が大蔵省に行つて話をしたら、是非行つてもいいと最初は言っていたんですよ。

参議院では有田さん、細川さん、秦野章さん、まだ二人ぐらいいましたね。参議院で五、六人、衆議院で十人近く、全部で十五、六人にはなるんじゃないかなと思つていたんですよ。

ところが、いざとなつたら、やはり選挙に自信のない人はできな

いんですよ。それから後援会が強いところはだめで、静岡の大石千八君は、NHKのアナウンサーをやっていたとても優秀な人で、彼もこのままじゃ絶対だめだという武闘派のハト派だったけど、最後はどうしても後援会長がいいと言つてくれない。静岡というのは自民党の組織がすごく強いところなんです。大石君は、泣く泣く離党はできないけれども会合にはずっと出ますからと。そういうのもうれしいような困つたような。塩谷さんも同じで、彼は余り選挙が強くないで、やはり後援会に振り回されるんです。

結局、あれもだめこれもだめで、どんどん減つて六人になったんです。

○紅谷 それでも藤波先生は来てくれると思つていらしたんですね。

○河野 彼だけは最後まで絶対来ると思つていた。

だから、彼が来ないのが僕にとつては最大の読み違いです。みんなも藤波さんは来ると思つて数に入れていたから落ち込んだね。発表前日の夜、伊勢まで行つて藤波さんと話し合つたけど、なぜか途中からだめだと言ひ出したんですよ。この人は何をすることもとても慎重な人だった。僕とは相当固い契りを結んでいたけど、だめだったね。彼が来てくれていれば、僕と西岡さんとの意見の違いは取り持つてくれたと思うんです。彼が来てくれなかったのが最大の誤算だし辛かつたね。

○築山〔衆議院事務局〕 離党後も藤波先生の集会に行かれたようですよ。

○河野 そうなんです。仲がよかつたから、離党以前から約束していた彼の後援会の総会に来てくれと言つたので行つたら、田川さんにそんな甘い態度でやるなら俺もついていくのを考えるときんざん怒られたね。確かにそうだよ。飛び出して自民党批判をやっている中で藤波後援会に行つたら、そこに中曽根派の代貸しのような存在だった稲葉修さんが来ていてぼろくそに言われた。この人は僕をと



でも可愛がつてくれていたものだから、言いたい放題言われたよ。今まで養殖の池で飼っていたのが、偉そうな顔をして川へ飛び出して川を下って、戻ってくるわけがないだろうと言われました。

それから、三木派の菅波茂さんという福島県いわきのお医者さんで、とてもいい人だった。この人も、俺はいつでも政治行動をとむにする気持ちはあると言っていたけど、結局、三木に言われて断念するしかないということだった。

○築山〔衆議院事務局〕 三木総理は、ロッキード事件を責任を持って解明すると言われ、三木派は党内改革を目指していたけれども、周りが三木おろしに走って、そこが一番嫌気が差したところでしょうか。

○河野 それはもちろんありますね。離党すると言ったら菅波さんが来て、洋ちゃん、一緒に行かなくて悪いけど、頼みがあると言うから何だと言ったら、離党する前に三木のところへ行って二人で話をしてくれと言うので、離党声明を出す前に会ったら、三木さんから、君の言ったとおりには僕はしているのになぜ支持しないんだ、逆に足を引っ張ることになるじゃないかと言われて、ちよつと辛かった。

離党に際しては、三木さんと松野さんが一番参りましたね。不思議なことに、三木さんを一番支持して支えたのは松野さんなんです。松野さんは佐藤派で、佐藤派は三木の足を引っ張って三木降ろしをしていたのに、松野さんだけは一人で三木さんを支えていた。

僕は中曽根派にいたけど、中曽根さんというのは薄情で、幹事長なのに全然止めないんです。どうしても出るのかと言うから、出ますと言うと、じゃ、命ある限り踊りたままとか何とか言っていた。政治家というのは毀誉褒貶があるから、この後に話しますが、西岡さんとの話で、彼は自民党基盤政党論で、自民党の改革をやるので自民党に戻れと。僕は保守二党論だから、もう一つの保守をつく

るんだと論争になって、それで別れて復党しちゃうんだ。けれども、それから十年もたないうちに、今度は僕が自民党に戻って、彼が自民党から出て行って二党論の方へ行く。そんなことばかりだったな。

僕は、三木さんとはよく会って話をして、阿波戦争の時には徳島へも選挙応援に行っていましたよ。

○紅谷 三木さんと後藤田さんの対立ですね。

○河野 後藤田さんが選挙に出たときに、三木さんに頼まれて反後藤田で散々やったんだ。それが最後は後藤田さんと一番仲良くなっただから、わからないものだよ。

離党する前に、椎名裁定があつて三木さんが総理になるんだけど、その直前までは総裁選をやるというので、今度は自分たちで候補者を担いで戦えという話になって、それで、宮沢さんと石田博英さんと藤山愛一郎さんの三人に手を挙げてと頼みに行つたけど全部断られた。それで、誰も担げないなら、おまえがやれと仲間から言われたときに椎名裁定が出て、三木さんになるわけです。

それまで、椎名さんというのは自民党の老害の象徴なんて言っていたんだけど、僕が引退してからだけど、国会図書館で椎名さんの回顧録を読むと、あの人も自民党改革を一生懸命考えて書いているんですよ。それは僕らが言っているよりよっぽど積極的な党改革案で、老害なんて言わないでこの人を担げばよかったと思つた。本当に目先の印象や知識で走って随分失敗しているよね。

○紅谷 今の椎名先生の話は私もお聞きしたのですが、自民党には、当時なかなかそういうことを表で言えない雰囲気があつたのでしょうか。

先ほどの政策綱領についても、瀬戸山三男先生が賛意を表されたようですが、自民党の中でもタカ派的な印象で、とても示された案に賛成されるような方じゃないと思つていました。

○河野 そういう雰囲気がありました。瀬戸山さんはタカ派で、頑固な老人という感じの人でしたよ。だから、瀬戸山さんからの手紙はすごく嬉しかったですね。

○紅谷 話に戻りますけれども、新自由クラブ結成に当たって、結局、藤波さんや大石さん、塩谷さんも、それから竹内黎一さんも最後には加わらなかったのですが、今は離党できないけれども後から新自由クラブに加わるという話はなかったのですか。

○河野 全然なかったですね。マスコミはあと何人来るとかいろいろ言つたけど、僕は、自分で一人ずつ当たってみて、もうこれで終わりだ、後は選挙が増えるかどうかだと思つていました。

しかし、選挙がなかなか辛かった。さっき言つたように、大石千八さんとは永原稔さんを当選させたことで、後で大石さんが来るという可能性が無くなったような格好でした。竹内黎一さんのところも木村守男さんを立てて、竹内さんから俺のところまでやるのかと言われて困つたけれども、自民党は全選挙区に出ているわけだから、どこで立てたつて誰かとぶつかるんですよ。

○築山〔衆議院事務局〕 大石武一農林大臣はそれで落選したような感じになつたのですか。

○河野 ええ、そうでした。菊池福治郎さんという人を立てて、大石さんは現職の農林大臣だったから絶対当選すると思つていたら落選して、大石さんに怒られたよ。

○紅谷 その後何年かたつて菊池さんは自民党に行き、大石さんは新自由クラブに来るのですね。

○河野 そうです。大石さんが来てくれてね。だから、わからないんですよ。でもそういう動きが小選挙区制になったら完全になくなりました。一人区だから、入りようもなきや出ようもないから、なく力性があるというか、複数区だから有権者も一人ぐらいそういう保

守がいてもいいじゃないかみたいなことになるけれど、一人区じゃ絶対そうならないからね。

○紅谷 その後、新自由クラブとして選挙を十年ほど戦われますが、中には、自民党で公認されないから新自由クラブでという人もいたのではないですか。

○河野 最初の選挙のときに、候補者を絞るかどうかで党内で相当議論したんですよ。山口君が選対委員長で、しきりに二十五人は絶対出さなきゃ選挙はできないと言う。

一方で、田川さんと有田さんは、候補者は少なくともいい。絞って本当にいい人だけ立てればいいので数は要らぬと言うけど、山口君は選対の責任者だから山口案になって、二十五人出そうというけど、最後の五、六人は誰でもいいから担いで立てろみたいな話になってしまった。それがまた、マスコミはわかっちゃいなくて、候補者は何ぼでもいると思いついてるけど、実際は探して歩くけれども、なかなか見つからないんです。

選挙運動の基本なのに、明らかに自民党でいつでも自民党へ帰っちゃうだろうという人もいましたよ。中曽根さんの秘書のまま出てきて当選したけれども、最初から自民党的な言動でしたね。

○紅谷 話が藤波先生に戻りますが、私が河野先生の藤波先生に対する思いを感じたのは、藤波先生の訃報を聞いたのが広島へG8下院議長会議の下見に行っていたときで、帰りに、宇治山田の御自宅へご一緒しましたが、わざわざ行かれるんだなあと思いましたね。

○河野 そうでしたね、行きました。一番大事なときに一緒にやなかったけど、一番好きなタイプだったんですよ。

最後は中曽根さんに抱え込まれちゃったね。中曽根さんも藤波さんを随分大事にしていたから、何事もなければ、恐らく中曽根さんは藤波さんに後をやらせたかったんだと思う。

○紅谷 新自由クラブ結成までにはいろいろなことがあったと思いますが、その中でも、お父様の河野一郎先生は保守二党論を掲げて新党結成寸前まで行かれましたが、結局は松村謙三さんや大野伴睦さんの説得で断念されたということがありました。

○河野 そうです。父は何度か自民党の総裁選で苦汁を飲まされた。自分が出なかつたけれども誰かを担ぐわけですよ、鳩山さんを担いだり、岸さんを担いだり。なぜ岸さんかというと、鳩山内閣のときの幹事長が岸さんだったから、鳩山さんが死んだ後は岸さんを担いだ。

だけれども、終わった後で僕に、俺の政治生活の中で岸を担いだのが最大の失敗だったと言っていた。彼とは人生観も違うし、結局はやはり戦犯なんで、ああいう戦争をした人を担いだのはやはり良くないと言っていた、そのときは一生懸命岸さんをやったけど、石橋さんの二、三位連合に負けて挫折するんです。

そんなことがあって、もう自民党の中で人を担いで総裁選なんかをやるのは嫌だから、自前の党をつくって政治に関わった方がいいというので、相当深刻に考えて保守二党論を掲げるんです。

軽井沢で派閥の勉強会をやって、あのころの派閥の勉強会は三日ぐらいやるんです。そのときに、政治評論家の藤原弘達さんとか細川隆元さんが講演するんだけど、その人達が何も知らないで保守二党論というのもあるんだと講演するんです。その後で父が二党論を選んで離党すると言うので、二人はびっくりしてあれはあくまで理論であって、やるべきでないと言って止めるんです。

だけれども、その軽井沢で勉強会をしている間に、父は腹心の森清さんと重政誠之さんに言って、新党に参加するかどうかをみんなに確認して、場合によっては判こをつけてこいみたいな話で、二人がその勉強会の合間ずっと走り回るんです。当時、春秋会は三十人ぐらいいたけど、それまでいいぞと言った割には、いざとなると、

やはり選挙区事情もあるのかなんとかといって、判こをついたのは十人ぐらいいいかいありませんよ。

それで、森さんも重政さんも、これはちょっと慎重に考えた方がいいということになって、そこで父は孤立して物すごく窮地に立つけれども、何人でもいいからどうしてもやりたいというんです。

そうすると、当時、春秋会の中の長老格で後に議長をやられた山口喜久一郎さんなどが反対で、もうちよつと我慢すればチャンスが来るんだからと一生懸命止めに入るけれど、父は我慢できないんですよ。とうとう固まらずに勉強会が終わって、みんな松村さんのところへ行ったり大野さんのところへ行ったりして、止めてくれと頼みに行くわけです。

その反面、河野新党論が出たら、佐藤派は出て行ってほしいと喜ぶんだ。新聞なんか引越しの荷物ぐらい一緒に作ってもいいみたいなことを書いて、それでまたこっちはかつかとす。

それで、にっちもさっちもいなくなるんだけど、松村謙三とか大野伴睦という人がわざわざ家に訪ねて来たり、それから松村さんのところには父が訪ねたのかな、その二人はすぐく父のことを心配してくれていて、今やっちゃだめだ、君の時代が絶対来るから待って止めて止めるんですよ。それで、結局最後は、やめるんです。

あの頃は、友情とか政治家同士が説得したり慰留したりというのがあったね。僕るときは、ほとんど慰留なんかなかったものね。僕の新自由クラブのときは、本当に涙が出るほど慰留したのは松野頼三さんで、この慰留には困ったね。それから三木さんは総理大臣だったけど、三木さんの家で説得された。それと、ある意味で石田さんですよ、余り無理しない方がいいんじゃないか、それでもやるなら大いにやれとかという話だった。

父が保守二党論を途中で挫折したということがあったから、おまえが頑張ったんじゃないかと言う人もいる。そうでもないんだだけ

ども、そのころから二党論というのがあるんだという思いがあったことは間違いなく、やはり一つじゃだめだという思いがありましたね。

有権者が選択肢を持つのが選挙ですよ。しかし、自民党がダメだから社会党というわけにいかないから、もう一つの保守があると受皿になると思ってやっただけです。一回目の選挙では、やはり物すごい受皿になり、その受皿は何かというと、結局、共産党に行く票をみんな獲ったんです。僕らは十何人に一遍に増えたけど、その数だけ共産党が減ったんですよ。

でも、次の選挙では今度は共産党が増えて、こっちは減ったんです。それは、こっちが当選したときに、共産党はみんな次点だったから頑張ったんですよ。次は僕らがみんな次点になった。

あの前は、政治不信があつて共産党は四十議席になったんです。それでロッキードになって、共産党は百ぐらいくもいれなかつた。思ったこともあるんです。それは、自民党票が流れ出すと、社会党は中途半端で受皿にならないから、共産党までいってしまうのではないかと、僕らはその自民党から流れ出る票を止めなきゃだめだというのでやっただけ。そういう意味では一回目の選挙は成功だった。それは、新自由クラブが増えたということながら、保守票が共産党まで行かずに止めたというのが成功だったと思えますね。

○紅谷 当時の共産党は、国会で委員長を取っていましたが、理事にもなっていたので、それなりの存在感がありました。

○河野 もし新自由クラブをつくらなかったら、共産党はもっと地歩を大きく固めたかもしれない。共産党もそのつもりで候補者もたくさん出すし、勝つつもりでいたんだ。あの頃は、こんなに右傾化する政治になるなんて、思いもよらなかったからね。

## 《新自由クラブの選挙活動》

○紅谷 いよいよ初めての選挙になりますが、新自由クラブは、衆議院議員が五人と参議院議員が一人の六人で結成されて選挙に臨みます。選挙になります、政治資金、組織、それから候補者の問題もあり、選挙活動は大変だったと思います、いかがだったのでしょうか。

○河野 やはり一番はお金でしたよね。今のように政党助成金はないし、離党しようといつて集まったけど、数は減って六人になって、六人で離党した後どうするかという相談をしかけたら、西岡さんから金もなく無手勝ていくのは無責任じゃないか、金の準備はちゃんとできているかと相当厳しく言われました。しかし、そのときお金なんかありませんよ。借金する以外にないと言ったら、借金で政党を作るのは無責任だ、二億や三億の金を準備してもらわなきゃ新党なんてできっこないと、西岡さんはとても慎重だったんです。

それを、まあまあといつてみんなで抑え込んで、財界出身の有田さんが、河野さんと一緒に金づくりはやるからと言って引き取ってくれて、だから有田さんは、離党の最後のところでは物すごい存在感だったんですよ。ぐずぐずしている人を捕まえて、とにかくやりましょうと、「愚直にやりましょう」と有田さんが言われて、それで愚直という言葉があつた頃の新自由クラブのキーワードになるんです。有田さんはクラウンレコードの社長だったから一人で財界人を回って、お金もある程度手当てしましたと言ってくれた。僕は責任があるから、自分で銀行から数億の借金をして準備しましたね。

離党してから選挙まで半年ぐらいたったが、その間はお金がないんですよ。第一声を小林正巳さんの地元の兵庫県の明石でやろうというけど、そこへ行く宣伝カーもない。それで何十万かでレンタカーを借りましたね。看板かけて色塗って、辛うじて明石に合っ

たんです。僕らの選挙というのは、とにかく叫ぶ以外には武器が何にもないわけで、車とマイクロホンがなきゃ選挙はできないから、とにかく車を一台借りて、明石で始めた。

そこからは、行く先々で全く自然発生的にボランティアが募金してくれるんですよ。それで募金箱を急遽作って、一日に三十万ぐらい集まったりしたね。

○紅谷 自民党の金権批判をしていただけですから、個人からの寄附を基本と考えられたのだと思うのですが、そのカンパの箱というのが憲政記念館に寄贈されていたので見てきましたが、いかにも即席で作ったという印象の、とても小さい箱でした。

○河野 新自由クラブの形見の品一式を憲政記念館に寄贈したんです。

個人からの寄附だけで賄うのはとても難しかったけど、我々の主張があつたので、金の処理だけは物すごく神経を使ったんです。有田さんがそこは全部やってくれることになって、すごく苦労されたんです。

一年たつて初年度の政党の決算報告をするのだけど、誰から幾ら集めて何に使ったかというのをメディアはみんな見ている、詳細に出せというんです。企業献金は一切しないと断っていたけど、企業からの金をもらわなきゃ一定の額は集まらないんですよ。百円、二百円の金を幾ら集めても、それは三百万、五百万は集まるけれども、やはり一千万、二千万は出ていってしまうわけですからね。

それで、企業献金ゼロは無理だという話になって、これがまた党内で大論争になって、そんなこと言つたって実際問題無理だから企業献金をもらおう、もらうけれども一定のルールを作ってもらわなきゃいかぬ。正確には忘れちゃいけないけれども、全体資金のうちの企業献金が半分を超えない範囲でもらおうと。そうすると一千万を企業からもらうためには、一千万を個人献金で集めなきゃいけないわけ



で、なかなか大変ですよ。

○紅谷 当時、ソニーの盛田社長がジェット機を提供してくれたという話もあったようですけれども、財界として応援するというわけにはいかなかったのですか。

○河野 そうはいかないから、応援してくれたのは財界主流の人達ですよ。一人は牛尾治朗という青年会議所のボスで、若手の財界人を集めてくれて積極的に応援してくれた。その中から佐藤敬夫さんが出てきたんです。佐藤敬夫、小坂英一の二人は青年会議所の中では一番優秀な人材だと思って担いだんです。

それから、盛田昭夫さん、梁瀬次郎さん、堤清二さんといった人たち。

盛田さんは、金を出せといつたってなかなか出せないから、飛行機を使っていいよと言ってくれたけど、当時はジェット機が降りられる飛行場がないから、一回か二回使ったかな。貸していただいたものの使い方がなかなか難しく、でも、とてもありがたかったですね。

ヤナセ自動車の梁瀬さんという人は、本当に涙が出るような人だったね。後に僕が小平さんを担いだときにも、自民党へ戻ったときにも批判されたけれども、梁瀬さんだけは、洋平君がどこへ行こうと俺は君を応援する、何でもやると言ってくれた立派でありがたい人でした。この人が一番そういう意味ではファンでいてくれたね。

○紅谷 私は、新自由クラブが結成された時は学生でしたが、当時、これは参議院選挙の話ですが、五当四落というふう言われて、五十年代初めの大卒初任給が十万円にもいってない頃ですから、五千万も出さないと当選できないのかと思っていれば、五千万じゃなくて五億だということです。四億じゃ落選、五億出さないと当選できない、そう言われていました。あの頃の選挙はむしろちや金がかかる選挙

○河野 そうでした。あの頃の選挙はむしろちや金がかかる選挙

をやっていたんです。それを僕らは全く金のかからない選挙をやるとういうわけだから相当無理があつて大変だった。本当に武器は車に乗って叫ぶことだけで、ほかに何にも選挙運動のしようがない。だから、工藤晃君が横浜で当選したけれども、彼は、最初から最後まで録音テープに僕が声を吹き込んだのを車で流し続けて、彼はそれで当選しちゃったんだ。しかもトップ当選だからね。

あのとき、神奈川県一区から五区まで五人立てて五人とも最高点で通ったんですよ。工藤晃さん、川合武さん、甘利正さん、田川誠一さんと僕と。そんなことは後にも一回だけだったけど、相当地なブームでしたよ。

○紅谷 当時の企業献金に関する新自由クラブの方針は、個人献金を主体とするけれども、節度を持って企業の献金を期待しました。

○河野 そんな言い方しか出来なかったんですよ。それも党内ではさんざん議論して、本当は企業献金は止めるだったんだけど、しようがないということだった。

○紅谷 ご自分でも数億の借金をして結党の資金を作ったというお話でしたが、お父様から引き継がれた会社はどうされたのですか。

○河野 潰しちゃったね。自民党の代議士を四十年やったら、大体東京近辺に家を持っているよね。僕は自分の家も父の家も全部売っちゃって、いまだに一軒もないんだから。まあ、あれだけのことをやったんだから、しようがないよね。

○築山〔衆議院事務局〕 「私の履歴書」には、最初の新党結成の資金を先生が負担されて、結構最後まで悩まされたと言われており、随分苦労されたようですね。

○河野 本間に、借金しましたからね。それで、ちょっと党勢が落ちると、貸した方は本間に返すか返すかと来るんだ。勝っているときは黙っているけど、一回置きに勝ったり負けたりしたから、ごそつと負けたときには、貸した方はみんなびつくりしたんだよね。

やはり政党というのは、選挙で戦って勝たなきゃだめなんですよ。特に我々は選挙で有権者の支持を得て議員を一人ずつ増やすしか方法がない。新自由クラブ十年の間に衆議院選挙と参議院選挙を九回戦ったから、毎年のように選挙をやって毎年のように金の苦労だったね。

金がなかったからマイクで叫ぶしかない。だから、みんな演説はうまかったよ。山口敏夫君なんかもうまかったね。新自由クラブの第一声を西明石の駅前で行ったら、ちょうど雨が降ってきて、トップバッターの山口君がやるのを聞いていたら、巨人、阪神戦は雨が降ったら止めるけど、我々は雨が降っても止めないとか言っただけなんだ。だから、幾ら降ったって止められなくなったよ。

○紅谷 京都市役所前での加地和さんの応援では、暴漢が選挙カーに上ってきて、危機一髪だったようですね。

○河野 本当に危機一髪でしたね。あの頃は、今週は新自由クラブがどこで演説するからと週刊誌が書いてたんですよ。だから、どこへ来るかわかるから待ち構えているんですよ。ホテルを出て、歩道を歩いて渡った市役所前の角でした。加地君が暴漢を羽交い締めしている写真があつて、僕が写った後に加地さんの顔があるのを選挙ポスターにしたんだ。選挙ポスターに二人も三人も顔が写っているのなんか珍しいよね。

加地君は京都市会議員で弁護士でした。自民党を離党して、行き先は決めないで、無所属でやるつもりでいたんですよ。

### 《新自由クラブの立ち位置》

○紅谷 新自由クラブの最初の選挙は、昭和五十一年十二月の衆議院選挙で、結果は十八人の当選という大躍進で華々しいスタートでした。選挙後に初めての通常国会を迎え、予算や法案の審議に入っ

ていくことになりましたが、新自由クラブは一体どういうスタンスで臨まれるのか。選挙で自民党は思いのほか減らず二百六十という数で、過半数は確保しましたが安定多数というだけで、予算委員会は逆転委員会でした。そういう状況ですから、自民党は新自由クラブがどういう姿勢で臨むのか、また、野党の方も非常に気になっていた存在でした。

そういう中で、昭和五十二年二月に、新自由クラブとして、河野代表が初めて本会議で代表質問に立たれました。その中で、自民党に対しては時代的役割は終えたと言い、野党に対してはイデオロギ―から抜け切れない既存の政党と断じておられます。

そこで、新自由クラブの国会対応がどうだったのか、そのメルクマールが予算への賛否かと思えます。昭和五十二年から昭和六十一年までの間、最初の予算には賛成されました。その後は賛成もあり反対もありで、連立になれば当然賛成することになりますが、新自由クラブは、国会にどういうスタンスで臨まれたのかお伺いしたいと思えます。

○河野 この頃の政治情勢、バックグラウンドをちよつと説明しておくと、昭和四十七年の選挙で共産党が大躍進して相当な議席をとった。総選挙での大躍進と同時に、地方の首長でも共産党が知事選でも勝つんです。

全国の主要な知事でも、共産党若しくは共産党が関わる人が知事になるということで、自民党の心ある人は相当危機感を持っていたんですよ。

ロッキードに象徴されるスキャンダルが出てきて、もう次の選挙では共産党に相当やられるんじゃないか、自民党票は社会党に行くかもしれない。つまり、自民党がだめということになると、途中の受皿がなく、社会党に行くか共産党に行くわけです。

僕らはそう考えていて、国民は自由主義社会、自由主義経済体制

というものを評価しているにもかかわらず、政治がちゃんとしていないと自由主義社会を進めていくような政治ができない。つまり、自由主義政党というのは自民党一党しかなくて、この党がスキャンダルにまみれて票が逃げると、一遍に社会党や共産党に行く可能性があると、僕らは相当深刻に危惧していたんです。そうしているところへロッキード事件が起こったものだから、これはいかぬというのが離党の発端でした。

○紅谷 昭和四十七年の選挙で共産党は三十九議席に増やし、加えてロッキード問題となると、更に増えるのではないかと思われたのですね。

○河野 ものすごく増えて、次は相当いくだろうと。だから、共産党は自信満々で次の選挙に臨む、そういう状況だったんです。

それで今の質問で、予算のところを答える前に選挙のことだけ言おうと、そこで僕らが離党して、自民党でない保守政党を作ったものだから、そこにまた一種の日本人的感情で、新自由クラブいぞぞということでブームに沸いたものだから、自民党から逃げた票が共産党へ行かないで、みんな第二保守党の新自由クラブへ落ちたわけです。共産党は、絶対来ると言っていたのが、新自由クラブに全部ひっかかっちゃった。その証拠に、新自由クラブが大躍進して十八議席とったときに、共産党は十九議席で、多くが次点で落ちているんです。だから、宮沢さんはとても心配していたけど、君が頑張ったから、共産党へ行かずに自由主義の最後のとりでを守ったと言いました。

党を離党するというのは大変なエネルギーが要るんです。最近の人は離党届をぼんと出して離党していくけれども、あの当時、僕は本当にへとへとになったんですよ。

それで、離党できたというのでほっとするんだ。それから、それじゃ政策をどうするんだ、基本的な立ち位置をどうするんだという

話が、みつともない話だけれども、離党した後でそういう議論になったわけです。

西岡武夫さんだけは、離党する前からそういう問題があるから簡単に離党はできないと、離党に一番慎重だったんですが、僕はそれを押し切って今は離党することが大事だということで離党した。彼は、新しい党を作った以上は基本理念とか主張は絶対大事だと言いつづけていたので、彼が幹事長兼政調会長をやって基本理念の作成や政策を全部やったんです。当時は、西岡幹事長兼政調会長、山口国対委員長という布陣でした。

それで、すぐに予算審議になるんだけど、さあ、その予算にどう対応するか。最初にぶつかったのは、私は最初から政府予算には反対と言う。ところが西岡さんは、良いものは良い、悪いものは悪いと言わなきゃだめだと言うし、山口さんは、国会対策上自民党と付き合ってみたり、いろいろなところと調整をやっていた。僕は、基本的には与党に対して反対するのが野党だから、どんな場合でも反対というのが原則だ。一方、西岡さんは、いや、そうじゃなくて対案を持って臨んで、これが良いと言わなきゃならぬという主張。

そこで党内で大論争をやったわけです。僕は、そんなこと言ったら、何兆円という国家予算を、議員は十八人いるけど、政策スタツフは全然いなくて二、三人の事務担当しかいない。そのスタツフをもって大蔵省が作った予算案に対抗できる対案ができるはずがないじゃないか、だから対案を云々するよりは、とにかく反対だ。

僕は、野党というものは、とにかく政権に反対をして、それを潰すことが野党の最大の仕事で、潰して潰して潰して自分の順番が来るまで潰し続ける。割り切ってそう臨まなくてはだめだ。是々非々というか、反対も賛成もあっていいけれど、予算は対案といっても無理だから反対と言ったけど、それは結局党内の少数意見でした。

次に出てきた問題は減税要求です。野党一致の減税案というのが

毎年出て、それに乗るか乗らないかというところで論争になる。ところが、その野党の減税案には乗れる部分もあるけど絶対に乗れない部分もあって、西岡さんたちは、これには絶対乗れないと言っています。政府案に対案もできない、野党の減税要求にも乗れないとなると、どうするんだという話になって、今言うように、予算委員会は与野党が拮抗しているから、新自由クラブの賛否しだいで否決する可能性もあるから、逆にこっちが追い込まれるわけです。

最後は、野党の修正要求に乗るか、そうでないなら賛成するかの二者択一という話になって、初年度は、もう賛成しかないということになったんです。ですから、結果は賛成だったけれども、そこまでするプロセスでは大論争があったんです。

○紅谷 当時の経緯は、野党から一兆円減税の統一要求が出され、内閣は三千億の減税に応じたので、新自由クラブは賛成したようです。ここで非常に大きかったのは、内閣は予算の内閣修正をして三千億の減税を認めたわけで、今まで内閣修正には内閣の面子から応じて来なかったもので、そういう意味で、新自由クラブの影響は大きかったのだと思います。

ただ、世論はどうだったのか、他の野党はどう見たのか。予算は一年間の国全体の政策の方針なわけで、それに賛成するというのは野党として如何なのかという批判があったと思います。

○河野 極端に言うと、予算に賛成したらもう野党とは言えないよね。

私は、野党は本来反対すべきだと党内では言ったけど、河野さんは余り論理的じゃないというんですよ。論理的かどうかは別として、今も言ったように、大蔵省が各省を集めて作った予算案よりいい案なんというものは我々のスタッフで本当にできるかと、何回も議論したんです。

しかも、そういう議論をしながら、一方では次の参議院選挙の準備のために候補者探しで全国を回るわけです。国会対策をしている人は、国会対策でぎりぎりして嫌な思いをし、僕らは全国を回って歩いていろんなことを言うけれども、次の日の新聞を見ると、何だ賛成するんじゃないか、おまえのところはどうなっているんだとか言われ、本当につらい年度末だったんです。国会対策はやはり難しいものだなと思いついていましたね。

○紅谷 翌年が参議院選挙でしたが、予算に賛成したことで影響があったのでしょうか。

○河野 参議院選挙は本当に戦いにくくなるんです。そこへもってきて、次の参議院選挙をどうするかということになって、その当時はまだ全国区がありましたから、全国区はどうにも手に負えないわけです。だって、北海道に行け、沖縄に行けといつたってどこに行つていいかわからないんだから。

だけれども、とにかく戦う以上は準備を少しづつしていたら、本部の選対関係者から、参議院は新自由クラブから出すのはやめようと言いつつ出さすんですよ。僕らも、参議院は緑風会的なものが理想だから政党がかかわるべきではない、政党が参議院の公認候補を出して戦うというのは本来おかしいんだという理屈でした。

それじゃ参議院はやらないのかというと、十八人はみんな、これだけ頑張ったんだから参議院選挙をやらぬ手はないだろうと言う。一方で候補者を探しているのに、本部へ帰ると公認候補を出さなさいかという議論になるものだから、準備がなかなか進まなかったんです。

最後は、公認候補を出すには出したけれども、変な理屈をつけて、当選したら党議拘束を止めようとか言つて、そうすると選挙運動に行つても、通つてもどうなるのみたいなことを言われると、選挙にならないわけです。だから、まず参議院はそこで準備がとて遅れるわけです。

さらに、西岡さんと僕との路線論争みたいなものも始まるから、党は推進力がほとんどなくなつて、浮いていただけで精いっぱいみたいな、外には言わないけど、内情は相当深刻だったんです。

○紅谷 前年十二月に総選挙があつて、常会を挟んで七月には参議院選挙ですから、全く間がありませんでした。

先ほど話しましたように、予算は、昭和五十二年度は賛成された。それから、今はありませんけれども、いわゆる値上げ三法、公共料金については全て国会の議決でしたので、国鉄、郵便、健保に対する賛否は、ほとんどは賛成されている。唯一反対されたのが、昭和五十四、五年のちよつど路線対立があつた後の予算かと思われまふ。

○河野 路線論争をやつて、西岡さんと僕の違ひは、西岡さんは自民党基盤政論、日本の政治をやつていくのは自民党しかないんだと。その自民党がだらしなから我々はショックを与えようと思つて離党したんじゃないか。

それに対して僕は、いや、そうじゃないだろう。やはり国民に、有権者に選択肢を与えることが我々の仕事なので、これから先も保守は二つあるべきで、常に有権者の選択肢として存在しなきゃだめだという保守二党論だったけれども、西岡さんは、河野さんの主張はわかるけど、そんなことは無理だ、それよりは、やはり自民党をきちつと立て直して自民党で政治をやつていくのが現実的で、それしかないんだと言い、毎晩、深夜まで論争していた。しかし、全然妥協点がなく、他の人達は、二人で何をやつているんだとあきれ返つて、しかも、それが党首と幹事長だから、みんな困つちゃうわけです。

○紅谷 党内の路線対立はありましたが、国会の中で新自由クラブらしい存在感を見せたのは国会改革案で、今までにない主張を幾つかされたと思います。

○河野 新自由クラブは、代表が本会議の代表質問、幹事長が予算

委員会という運用をしていたんです。西岡幹事長が予算委員会の質疑問頭で、大臣が全員座っている必要はないから退席していいという提案をして、それは西岡さんに言わせると、自民党の国対にいた頃、何とか大臣が並んでいなくていいようにしようと言つたことを言ったのに、自民党は他の野党との関係があるから乗つてこないんです。大臣方お帰りくださいと言つても誰も帰らない。それどころか、他の野党から、理事会の話と違ふから待てと言われて、予算委員会が止められて西岡さんは質疑できないんです。自民党は、野党でちゃんと意見をまとめてこいとか言い、一野党対政府というんじゃない話ではないということになつて、提案はしたけれども実現しなかつたんです。

○紅谷 西岡幹事長は提案されていますが、予算の理事会で、当時は総括質疑と呼び五日から一週間ぐらいありましたけれど、その間ずっと全大臣出席と決めていたので、その決定を変えることができないという結論でした。

○河野 そうでしたね。そういう理由があることは間違いないんだけれども、国会運営上言つてはみたものの、なかなか実現はできないということになつた。

ただ議員が十八人いたので、ほとんどの委員会に委員がいて、僕は懲罰委員だったから国会活動はほとんどやつていなくて外回りばかりだったけど、各委員会でもわづかながら質疑はできて、十八人では議員立法の提案ができない。三人足りないからできないんですよ。さつきから言うように国民の支持率が高いけれども、国会において一番最小政党だから何もできないという実態があつて、その世論との乖離というのか、ギャップに随分悩まされたんです。

あんなにみんな応援したのに、国会へ行ったら何にもしないじゃないかと言われる。だから、あと三人通つていけば、議員立法ができたもつといういろいろなことができたんだけど、それが支持

者にわかってもらえなくて、すごく辛い思いをしたんですよ。

○紅谷 予算委員会では全大臣が出席する必要はないとか、赤字だった国鉄の無料バスは返上するというのが、国民的にはアピールにはなったと思います。

○河野 国鉄バスの返上は、できることだけでもやろうという話で、他にもいろいろ言ってみただけ、なかなか実現できない。国会の場はやはりどうしても数が決定的な力を持つから、少数ではできないということだったんです。

○紅谷 先ほどの予算に戻りますけれども、新自由クラブが賛成したので、与党としては委員会の否決は何としても避けたい事態でしたから、本当に安堵したと思われまます。

○河野 そのとき、予算委員会には田川さんと大原一三さんの二人の委員がいて、田川さんは私と割と近くて断固反対だったけど、大原さんは大蔵省出身の人だから、野党の修正なんか見ても、やはり政府の言っている方が本当だよなんて言っちゃうんだ。

○紅谷 このときは賛成だからよかったです、昭和五十四年度予算は反対だったので、大原さんは本会議を欠席されました。

○河野 五十四年のときには、予算委員会で委員長が賛成の諸君は起立願いますと言うけれども、新自由クラブが立たないものだから、みんなでおおつと言って、とうとう否決になるんです。

だから、さつきも言うように、外づらは一生懸命繕ったけれども、党内の賛否の葛藤は相当あったんです。やはり委員会活動をやっていると、しがらみができるし相手の理屈もわかってくるからね。僕は、その時外回りをやっていたから、とにかく絶対反対と言っていましたね。

そして、西岡さんとの論争が続いているんです。西岡さんという人は本当に真面目で、正当な主張を絶対曲げない人、妥協性のない人だったから、こっちも妥協性がなかったせいもあるけど、二人で

にっちもさっちもいなくなつて、それで西岡さんは突然離党するんです。

○紅谷 新自由クラブは、十八名という少数ながら、予算委員会ではキャスティングボートを握っている存在でした。

また、支持率の話が出ましたけれども、単に与党からの票だけではなく、今まで選挙に行かなかった人たちの票が新自由クラブに行つたのではないでしょうか。

○河野 それはあつたと思うんです。だから、あときは投票率がグンと上がったんです。投票を締め切つて投票率が出たときに、自民党は、これはやられたと思つたらしいからね。

### 《最初の試練―参議院選挙》

○紅谷 昭和五十一年十二月の衆議院選挙は大躍進でしたが、翌年夏の参議院選挙では三人という結果でした。

○河野 正直、参議院は、支持率からいくと七、八人は当選するんじゃないかと思つていた。思つていたというよりマスコミがそう言つていたんです。それが三人だったものだからマスコミは大惨敗と書くけど、考えてみると生まれたばかりの小政党が三人通れば大惨敗というほどではないのかもしれない。当時の世論調査では一三%の支持率で、自社に次いで高い支持率だったから、候補者を探すのも、あなたが立候補してくださいれば当選は全然心配ありませんよと言つて口説いて歩いたんです。

大平側近で、高名なエコノミストだった大来佐武郎さんを口説き落とし、タレント弁護士だった円山雅也さん、青年会議所の前の会頭だった佐藤敬夫さん。それからもう一人は、中央公論の編集長だった笹原金次郎さん、彼はメディアの中では一番信頼の高い立派な人だったんです。

四人通ればいいと言っていたら、当選は円山さんだけでした。佐藤敬夫さんは五十一番の次点。全国区で五十一番になれば大体は六年の間には繰り上がるんだけど、このときだけは誰も辞めないうし亡くなる人もいなかった。とうとう六年間次点のままだった。

大来佐武郎さんは、僕は大来さんが当選してくれば政策委員長が代表をやってもらってもいい。そうすれば新自由クラブの政策が安定して、経済界なども安心して支持してくれるだろうから切り札だったんですよ。年齢的にも代表をやってもらってもいいと言っていた。大来さんも、さんざん考えた末やってみましょうと言って立候補されたけど、選挙の途中でどうも拍子が悪いというんです。それは、大来佐武郎という名前が読めないからで、平仮名にしてくれと地方から言ってきたんです。ビラを張って頼みに行っても、名前を正確に読める人が少ないというんだ。それで大来さんに平仮名にしましょうと言ったら、いや私はこの名前で社会的評価を受けているので、名前を平仮名にする気はありません、読めない人の支持はなくてもいいですみたいな話になった。

これはいかんなと思っていたら、選挙戦の途中で選対委員長の山口君から、このままいくと四人とも落ちるから、誰か一人切らなきゃだめだと言われたんです。誰か一人というは、笹原金次郎さんしかいないわけですね。切れといたって選挙は半分過ぎていて、笹原さんの票は独特の票だと思っただから、降ろしてその票が他の三人にまわるとも思えなかった。笹原さんという人はとても立派な人だから、もしあなたが降りてくれれば他の三人が水面上に浮かび上がることが出来るから降りてくれと言えれば、彼は降りてくれたかもしれないけど、そんなことをいう気はなかったですね。それに、笹原さんの後援会長と名乗って旗を振ったのは有吉佐和子さんなんです。ああいう人がやり出すと怖いもの知らずにやるから、笹原さんに降りてくれとは言えないと言ったら、山口君は、そんなに甘いことを

言っていたらみんな落ちちゃう、それでいいならやったらいいよと言われて、そのときにはもう本当に進退きわまって、すぐきつかったですね。

結果は、円山さんの他はみな落ちて大失敗でした。

地方区には九人立てたのかな。立てないと全国区が戦えないから、地方区も立てなきゃだめだということで、それは確信が持てたわけじゃないけれど、全国区の応援といっても足がかりが何もない。福島の石原健太郎君は、石原幹市郎さんという自治大臣や福島県知事をやられた人の息子さん。北海道は坂東さんという大学の先生で、北海道放送の朝のキャスターで大人気だという、大阪は中村鋭一さん、鋭ちゃんといえど泣く子も黙るといって、とにかく毎朝、阪神が勝つと「六甲おろし」を歌うというので大人気のパーソナリティーだった。個性的な人を揃えたけれども、そのさなかに、本部では参議院を戦うかどうかなんてやっているわけだから、頑張ったけれども地方区は当選二人、全国区も一人だから、それを考えると大惨敗ですよ。

○紅谷 大惨敗という結果でしたが、原因は何だったのでしょうか。  
○河野 それは、明らかに西岡さんと僕の路線論争で推進力を全く失ってしまったのが原因だろうね。実は新自由クラブは路線論争が決着しないものだから、結党大会というか全国大会を開けなかったんですよ。

新自由クラブの立党は昭和五十一年で、全国の代議員大会を開いたのは五十三年二月ですが、とても気まずい全国大会になった。それは、僕が代表挨拶をするという原稿を西岡君が書き直したんですよ。僕の挨拶はその頃から中道に振っていたのを、彼はもう一度本来の保守に戻さなきゃいかんという主張で、とてもちぐはぐになって、その後、地方の大会を徐々にやろうと回っていて、東北大会の日に彼は離党するんです。

○紅谷 新自由クラブは、参議院選挙での惨敗、西岡幹事長の離党という危機に直面している中で、都知事選の候補者問題が出てきました。

○河野 新自由クラブは、東京都知事選挙で牛尾治朗さんを担ごうとした。牛尾さんは僕と良かったのは間違いないけれども、西岡さんとも悪くなかったし、みんな、最初は牛尾でいいんじゃないかというんで走ったんですよ。僕は、そのつもりでいたら、西岡さん達はどこかで降りたらしく、途中からは走っているのは僕一人になったんです。

牛尾さんは、大平さんととても良かったから、牛尾を担げば、大平と新自由クラブでいけると思っていた。そうすれば中道も絶対乗ってくるということでいたのが、牛尾を担いでいるのが新自由クラブだというのが少し早く出たものだから、自民党の都連が引いたんですよ。

それで、奥野誠亮さんが、この人は内務省で、鈴木俊一さんを引っ張り出したんです。それで大平さんはできないということになり、牛尾さんも大平がだめだということで降りてしまった。それも新自由クラブ内部分裂の一つの要因だったんです。

都知事選は、鈴木俊一、太田薫、麻生良方。新自由クラブは自主投票ということになるんですが、最後には責任をとって僕に出るという話になった。牛尾で走って出ないものだから、今さら鈴木に乗りかえるのは後追いまいたいなことで自主性がない。かくなる上は代表が自分で都知事選に出ると言われたんです。

都知事を経験してまた戻ってきたらいいじゃないか、我々はそれを待っているともみんな言ってくれた。だから、全くそういう選択肢がなかったわけじゃないけれど、みんなに離党を誘って新党をつくっておいて、一年か二年で自分は都知事をやるというのは幾ら何でも無責任だと思っただし、自分の目的と違うからできないと断ったん

です。あの頃はとても思い上がっていたから怖いものがなくて、やれば勝つに決まっていると思っただけで、それでもやるべきじゃないと思っただけでしたね。

今だから言えるけれど、鈴木俊一さんは、最後は、深夜に平塚の僕の家まで来て、河野さん、私を担いでくれませんかと言われて、いや、そうはいきませんと言って断ったけれども、大先輩に悪いことをした。そういう紆余曲折がありました。

○紅谷 河野先生の都知事選出馬という話は、党内から出てきた話なのでですか。

○河野 それは、どこまで本心かわからないけど、中道の仲間の佐々木良作さんとか田英夫さんが、彼らは自民党を負かしてやろうと思っているものだから、君が出れば勝てるかもしれないと思って随分しつこかった。それに山口君も西岡さんも、ここは君が責任をとってやった方がいいと。それと、新自由クラブ都議会に若手の主戦論派がいたんですよ。伊藤公介君という人は、やはりここは党としてきちんと河野さんが出た方がいいと。ちょうどその前に都議選をやって、新自由クラブの都会議員が七、八人いて、その中には小杉隆君もいた。一時は都知事選は太田と河野との一騎打ちになるかもしれないと言われていたんです。

神奈川県知事選に長洲一二さんが出るときにも一時担がれたことがありましたね。それは、藤山愛一郎先生から出てくれないかと言われたけれど、そのときは、とにかく国政を目指しているもので、途中で横道にそれる気はないと断ったんです。いろいろなことがありました。

新自由クラブは、その後の衆議院選挙も十八議席から四議席に大惨敗。参議院選挙の三議席は、言われてみれば大惨敗なんだけれども、そんなに大きな直接的なダメージじゃなかったように思うんです。ただ、そのときに刀祢館正也さんが、議員総会で「勝ちに不忠



議の勝ちあり、負けに不思議の負けなし」という言葉があるように、その敗因をきちっと探して繕って戦えば次は勝てるから頑張りましようと言つて、おお、そうだと云つたけれども、惨敗して四人になつちやうんだ。

刀祢館さんはとても立派な人で、ランドセル無用論というのを主張したりした西宮の教育長でした。とてもユニークな文教政策を実践していて、西岡さんの文教政策に傾倒して西岡さんのところへ来ていた人なんだ。選挙も実に新自由クラブらしい、きれいな選挙で勝つたけれども、一期で亡くなつてしまつたんです。

○紅谷 参議院選挙では、新自由クラブの得票率自体は非常に高く、衆議院選挙のときよりも高かつたけれども議席は伸びませんでした。

○河野 参議院というのは二人区が多いから、ナンバーツーにならないと当選しないんですよ。衆議院は三人区とか四人区があるから新自由クラブは三番目か四番目にひっかかるけど、参議院の二人区では自民党と社会党がとちやうんですよね。

だから、全国区で議席を取りたかつたけれども、まさか一人とは思わなかつた。しかも、落ちた人はみんな、それぞれ意味のある人だつたから、とても残念でした。

### 《基盤政党論と保守二党論の対立》

○紅谷 新自由クラブが選挙で負けた一つの大きな要因であつたという、党内の路線対立についてお聞きしたいと思います。

昭和五十四年の衆議院選挙の前に、路線の対立から西岡幹事長が離党されましたが、その要因だつた基盤政党論と保守二党論についての対立はいつからだつたのでしょうか。

○河野 ほぼ最初からあつたんです。本当に路線論争だつたけれども、正直言うと、その裏には資金問題もあつたんです。党の財政に

ついては企業献金で賄うべきでないという主張だつたけど、いざ新党を作ってみると、企業以外で金を出してくれるところはやはりないんですよ。

僕らは、個人献金に頼つて戦うんだと言つていたんです。最初の選挙では集まつたけれど、個人の献金は続けて何年もとはなかなかならなくて、だんだん先細りになつていった。そうなると、やはり企業の献金をもらわなきゃだめだということで、有田さんが財政委員長をやつておられて金集めをしてくれたけど、党内では、あまり企業からもらうのはいかぬものかみたいな話もあり、有田さんは、それじゃやりやうがないみたいになつた。

最初は、企業献金はできるだけもらわないようにしようとか、企業献金は一部だけ認めようとか言つていたのが、それじゃとても賄いきれないから、企業献金は半数を超えてはいけなかつたとか、党財政の半分を超えてはいけなかつたとか、いろいろな説明をつけていたけれども、立候補者は増えていくのに財政力は少しも増えないという状態でした。

しかも、毎年、衆議院をやり参議院をやり、統一地方選挙をやりと選挙が続きました。とにかく新自由クラブ十年のうち九回も国政選挙をやり、資金はすつからかんになつて、財政的には本当にうちもさつちもいかなない状況でした。そういう問題を抱えながら路線論争をやつていくから、周りでは何をやってるんだと思つていたでしょうね。

西岡さんは、自民党を離党する前から、数億円の離党資金は準備していなきやおかしい、それもなく離党しようというのは無責任だとまで言つていた。それを突つ切つて離党したから、だんだん西岡さんの正論が効いてくるんですよ。

そうしているうちに、西岡さんは自分が幾ら正論を吐いても河野はわかつてくれないとか、党がこのままじゃだめになるとかという

ことを相当深刻に考えられたと思うんです。僕は今でも西岡さんという人は尊敬しているし立派な人だと思いますが、とにかく妥協をするとか、この場面では何とかしようという気持ちには全然ない人だった。だから、基盤政党論でぶつかると、他はもうどうにもならなかったんですよ。僕の方も譲らなかったんだけどね。

それで、最後は代表と幹事長の対立だから、代表の人事権で幹事長を更迭したらどうだみたいなことを周りが言い出したものだから、西岡さんは、俺がいて邪魔なら党を出ると言って飛び出してしまった。

やはりそれは大きなダメージになったし、しかもそれを新聞に連日書かれてイメージが悪くなりましたね。

○紅谷 山口さんも、考え方は西岡さんに近かったのではないですか。

○河野 そうです、近かったです。

それは、西岡さん、山口さんほともと三木派で一緒だから、ずっと二人は話合いをしていたんです。結成時の六人は、西岡さん、山口さんが慎重な考え、僕と田川誠一さんが急進的な考え方で、小林正巳さんと有田一寿さんというのが真ん中でした。

○紅谷 路線の対立が結党のときから底流としてくすぶっていたので、党大会をなかなか開けませんでした。参議院選挙後の昭和五十三年二月に初めて党大会は開かれたものの、活動方針案の文言に基盤政党という文言があったので、おかしいというような話になったわけですか。

○河野 そうです。基盤政党論という文言もおかしかったんですけども、一方で、そのころから私は中道四党首会談を始めただけです。公明党の竹入義勝、民社党の佐々木良作、社民連の田英夫と僕の会談は密かにやるけれども、これがどういいうわけか翌日の朝には全部漏れちゃうんですよ。

竹入、佐々木というのは、とてもぴたりいつていたけれど、二党だけじゃインパクトが足りないもので、少しでも数を増やしたいと思っただけ、私を誘い、田君を誘って中道四党。

そうすると、西岡さんたちは、河野さんは竹入とかに誘われてひよるひよる出ていくものだから、結果、向こうはプラスになるけれども、こっちはマイナスになると。つまり一種の純血主義で、保守たるものが、わけのわからぬ中道と仲よくなかちやいかぬという。だけれども、僕はうちだけでは数が足りなくて国会対策で苦労しているから、少し間口を広げたらいいじゃないかと言うけど、そこはなかなか理解されない。

僕は、全国を歩いてみると、やはり選挙区によっては公明党の支持を得た方が当選の可能性があったり、民社党と組んだ方がいいところもあるの、竹入さんや佐々木さんと仲よくしていくことは絶対マイナスじゃないと思っていた。特に僕は、これは余り言っちゃいけないことかもしれないけれども、竹入さんを信頼していたんです。竹入さんは僕には、河野さん、これは気をつけた方がいいとか、これはやらない方がいいとか、いろいろなことを言ってくれた人でした。

○紅谷 そういう中道政党との連携からなのか、新自由クラブは、昭和五十四年度予算に初めて反対されました。五十四年度予算というのは、早期警戒機のE2C予算の執行について、激しく与野党が対立した予算委員会でした。

○河野 そうでした。予算委員会は、自民党が委員長を出しているから野党の方が一人多くて、予算委員会では予算案を否決するんです。しかし、本会議では可決した。

西岡さんや大成さんが離党するのはその四カ月後だから、それが最終的に引き金になったという感じだね。

○紅谷 予算審議後の昭和五十四年六月に新自由クラブの両院議員

総会で、河野代表が西岡幹事長に辞任要求を突きつける場面があり、それで一応おさまったと思われましたが、直後に西岡さんが離党されたようですが、河野先生が辞任要求を突きつけたというのは、想像できない光景ですが。

○河野 それは、そのときに小林正巳君という、おとなしい人だったけれども、河野さん、西岡さんを切る以外にはもう我々が生き残る道はない、代表として最後の責任を果たすべきだと言ってこられ、やむにやまれぬ状況だったんです。

その後には街頭演説に行くと、西岡さんはそこで、明日からは河野を支えて、全力でやりますと街頭では演説するけれども、一カ月後の東北ブロック会議の日に離党しちゃうんです。さらに、その二日後に、菊池福治郎さん、大原一三さん、大成正雄さんの三人が離党するんです。

それで、党は小さくなってしまいうけれど、路線論争は終わって決着はつくんです。

### 《続く選挙―二回目の衆議院選挙》

○紅谷 昭和五十二年の参議院選挙は惨敗という結果に終わり、その後も党内の路線対立から西岡先生その他三人の衆議院議員が離党し、結党三年での痛恨事でした。しかも、その直後の昭和五十四年十月に新自由クラブとしては二回目の衆議院選挙を迎え、非常に厳しい状況で選挙戦に入っていくことになりました。

○河野 二回目の選挙なので、一回目に比べれば事務的な準備はできるけれども、やはり何といっても幹事長の離党ですね。それと同時に、今言うように、四人離党したということで、大変厳しい選挙になった。それでも一定の支持率はあったので、そんなに負けないんじゃないかという思いがある一方で、これは本当にひどい状況だ

と、非常に不安な気持ちで選挙に入ったんです。

選挙を戦ってみると、一回目とは違って有権者の期待感みたいなものがまるで無くて、そうなると思いがけないものだから、非常にふわふわした選挙をやってしまった。厳しいなと思いがながら戦ったけれども、十八人いたのが四人になるとは予想外の敗北でした。私と田川さん、山口さん、新しく田島衛さんの四人でした。スターティングメンバーだった小林さんが落ちたのは辛かったです。

参議院選挙で大来さん、佐藤さん、笹原さんの三人を全国区で落としたことで、いろいろなところに影響がでた。特に大来さんには西岡さんの後の政策面の柱になってもらおうと思っていたのを落としたということで、政策的にも不十分だったのが原因だったと思います。

結果、主要な委員会には入れないし控室も狭くなるし、財政がさらに厳しくなりました。今は政党交付金があるけど、当時はそんなものはないから党職員を賄うこともできない。しかし、党職員を減らすわけにもいかなかったから、無理して抱えられるだけ抱えていましたが、一時は本当にしよぼくれていたんです。その直後に、自民党が党内分裂をして、選挙直後から大平、福田の対立が始まって首班指名もできないという騒ぎになりましたから、こっちがしよぼかれていられないような状況になりました。

○紅谷 当時の新聞報道では、新自由クラブは非常に苦戦するのではないかと、ただし減るは減るだろうけれども十議席ぐらいは獲るだろうという予測でしたが、結果は四議席という惨敗でした。

それはやはり西岡さんの離党で、新自由クラブのイメージが傷ついた面はあると思いますが、前回の選挙と比べて、選挙民の期待感が随分違ったという印象だったのでしょうか。

○河野 それはそのとおりですね。それと、前にも言いましたけれども、前回は、共産党と入れかわ

って当選したんですね。だから、新自由クラブが増えた分だけ自民党が減ったわけじゃなくて、共産党が減ったんです。だから、共産党が次は新自由クラブを狙って猛烈にやっていたので、今回は我々が減った分は共産党が復活したんですね。

前回、こっちは上位当選していたから、共産党が次点だったというのに余り気がつかなかったんです。それが四人になった最大の原因でしょうね。加えて、投票日は台風で大雨だったから、組織戦がやはり強かったんですね。

○紅谷 共産党は、前回のロッキード後の選挙は、三十九議席からほぼ半減したのが、今回の選挙は今までの最高で、十九人から一挙に四十一人になり、次点の共産党が新自由クラブと入れ替わったという感じでした。

○河野 完全に入れ替わった。四人になったけど、次点が十人くらいいたから、得票数と議席との関係からいうと、新自由クラブは、何百万か獲って四人というすごく勿体ない票になったんです。

だから、物すごく割の悪い選挙をやったんですね。最後の決め手は浮動票だったんですが、共産党と新自由クラブが浮動票を取り合った結果、共産党に取り返されて、共産党躍進、新自由クラブ惨敗ということになったんです。

○紅谷 自民党も敗北で、保守系無所属を取り込んで過半数を維持しましたが、選挙前に財界が新自由クラブを非常に警戒して、自由社会研究会という集まりを作ったというのですが、それはどういう団体だったのですか。

○河野 自由社研は、発起人というか中心だったのはソニーの盛田さんと、もう一人いました。それが、日本の民主主義というか自由主義が危ないと言って、僕らは、自由主義、民主主義を守るために共産党に票が流れちゃいかぬと思ってやっているんだと幾ら説明しても納得しない。中には新自由クラブは自由主義を食い散らす害虫

みたいなことを誰かが言い出して、若手財界人と若手自民党が集まったんです。結構一生懸命で、毎週金曜日だけに集まって、朝飯を食べて、頑張れ頑張れみたいな話をやっていましたよ。

皮肉な話で、この後の四十日抗争で、当時、安倍晋太郎さんが福田さんを応援してくれと言ってきて、君が福田を応援してくれば自由社研に推薦してやると言ってきた。しかし、自由社研というのは新自由クラブを潰そうと思っただけじゃなく、冗談じゃない。そんなものに推薦されてもうれしくもないから、だめだと断ったこともありましたね。

○紅谷 新自由クラブは、選挙が終わった後の十一月に、代表が河野先生から田川先生に交替されました。

○河野 それは大平支持の後の全国代表者会議で僕は辞めるんです。辞めると言ったら、みんなから、ここで辞めると、大平支持で責任を取ったと言われると悔しいじゃないかと言うから、あれは間違っていたなかつたんだ。これは選挙の敗北の責任だと一生懸命言い、幾ら記者会見で説明しても翌日の新聞記事は大平支持の責任と書かれて、随分悔しい思いをしました。

○紅谷 田川代表、山口幹事長という体制になりましたが、河野先生は役職に就かれていたのですか。

○河野 無役でした。無役だったけれども、地方遊説だけはずっと続けていましたね。

○紅谷 その頃は、もう地方組織とか選挙体制は整っていたのですか。

○河野 何もないんです。選挙が終わったばかりで、半年で選挙があると思っていないから、落選した連中は金もないし、選挙体制をそのまま続けるということとはとてもできないから、選挙事務所も閉めて、もうだめだと言っていたんです。

それを田川さんが代表になって、あの人はこつこつ歩く人だから、

そんなことを言わないで頑張れと言って、尻をたたいて頑張らせているうちに選挙になったんです。それが格好の選挙運動になったわけです。

田川代表はともしつかりやって、もうだめだと言っていた連中を一人ずつ呼んだり、あるいは自分が出て行ったりして抱き起こして頑張れと言って歩いた。ただ、頑張れと言うけれども、本当は気つけ薬を持っていかなきゃだめなのに、その気つけ薬がないんだ。それでも田川さんは相当活を入れて回ったんです。

○築山〔衆議院事務局〕 代表を辞めることについては、選挙直後には田川さんと相談されていたんですか。

○河野 そうです。そのときには、辞めるなど田川さんには止められていたんです。止められていたけれども、これだけ壊滅的に負けて誰も責任を取らないわけにはいかないじゃないかと。しかも西岡離党の原因をつくって、敗北の原因は僕だということとは非常にはつきりしていましたから、田川さんには辞めますと言っていたんです。

### 《大平・福田四十日抗争の影響》

○紅谷 総選挙で惨敗して議員が四人になり、これからの国会にどう臨んでいくのかという中、自民党内の分裂で大平・福田四十日抗争が起こり、新自由クラブは巻き込まれていくことになりました。

○河野 選挙で四人になって、これからどうするかと言っていたら、首班指名にどう臨むかという話になったんです。どう臨むかといったって、普通はそれぞれの党首に投票する。ただ、このままいけば自民党が二つに分かれて自民党同士が一位、二位の決選投票になるから、社会党は全部棄権だと言っていた。

それで、我々も最初は棄権かと言っていたけれども、そこで田川さんの提案だったか、それは自民党からも冗談半分で、決選投票に

なったら頼むよな程度の話で、こつちも冗談半分に、そのときはそのときでと言っていると、自民党内の対立がすごく過激になった。

大平さんの方は自民党の総裁ですから、自民党として正式に新自由クラブという政党に大平を支持してくれと言ってくるんです。だから、考えましようという返事をした。

福田さんの方は、福田に入れてくれと言ってきたても、全く非公式なわけです。村田敬次郎さんが僕と割と親しかったものだから、福田さんを応援してくれないかと最初に言ってきた、最後の方は安倍晋太郎さんが出てきたのかな。

僕は、自民党を離党して新しい政党を作って一緒にやっていきたいから、福田を応援してくれと言うなら真面目に考えるけど、党内の反主流派だということで応援しろと言われても、それはできないとお断りしました。

最初は、大平に入れてくれれば連立しようという話は全然なかったんです。むしろこつちが勝手に、少しでもましな方を選ぼうよと、よりまし政権という言葉を使っていたんです。

○紅谷 大平さんと福田さんの争いというのは、三木総理の後継は福田総理でしたが、その後福田さんと大平さんが争って、田中派が支援した大平さんが勝ったものですから、その対立がずっと続いていたのでしょうか。

○河野 そうでした。だから、大平か福田かというのを真面目に考えれば考えるほど、例えば、田中に支持されている大平を新自由クラブが担ぐのかという意見もあったんです。田中政治を徹底的にだめと言ってきたんだから、その田中に支持されている大平はまずいんじゃないかと。田中を批判してきた福田の方が、そういう点から見ると筋じやないかという主張もあって、そんなことを福田派はしきりに言ってきましたから、そこはちよつと悩むところだったんです。

四十日も抗争をやられると、いろいろなうわさがあった、毎日毎日違うことを言ってくるんだ。それで、意を決して大平で行くぞと言うと、いや大平と福田はもう仲直りして大平一本になったから、そんな四票ぐらいどっちに行つたつてどうつてことないから止めた方がいいと言われたりして、とても迷つたんです。

○紅谷 自民党の中が完全に二分された状況でしたけれども、これほど自民党の中が対立したことは今までにあつたのでしょうか。

○河野 今までにないでしょうね。だから、我々はこのチャンスしかない。僕らはその頃から自民党一党支配の政治を変えるには、自民党を減らすことがいいんだけど、なかなか減らないなら割る以外にない。大平、福田の対立に割り込んでくさびを打つことが必要だというのを、田川さんがイニシアチブを取っていて、僕もそれに全く賛成だったんです。

その時に気が楽だったのは、二回目の決選投票で自民党のどっちかを選べばいいということだからだったけれど、そうしたら大平さんから、一回目から入れてくれと言われて、これはちよつと困つたんですよ。

政党として一回目はやはり自分のところの代表に入れ、二回目に被選挙権がなくなれば、それはどっちかを選ぶか棄権とかとなるけれども、大平さんは、一回目を勝つたら地すべりの票は来るけれど、負けたら逆に四票や五票積み上げても間に合わないぐらい負けるから、河野さん、この勝負は一回目が勝負の分かれ目だから一回目から頼むと言うんです。その気持ちはわかるけど、僕の方だつて自分の党の代表に入れなかつたら何のための選挙だったのか、政党なのかわからないからと言つて、それはわかるけれども、君のところの問題よりもお国の問題の方が大きくて大事じゃないかと、そういうやりとりをしましたね。

その中で、考え方は一緒なんだからと連立の話が出てきたんです。

そのころ、大平さんはしきりに、こんな遅れた政局をつくつているのは国政だけで、地方政治はみんな連合政治になっていっているじゃないか、もう政党ではなく、いい方に付くということではないんじゃないかと言う。僕らも考え方はそう思っているという話ですよ。

○紅谷 最終的には大平総理から連立政権の呼びかけがあつたようですが、総理指名選挙までの間には、大平派、福田派からの話だけでなく、中道として方向性を出そうという話はなかつたのですか。

○河野 中道は自分たちの主張にとてもこだわつて、一回目は竹入、佐々木に入れ、二回目は棄権するから、どうぞ勝手にやってくれみたいな話だったんです。

僕らも、ぎりぎりのところでは中道と一緒にやる方がリスクは少ないというので、我々は大平に入れるつもりだと言つて声をかけてみたけれども、自民党を支持するわけにはいかないと、最後まで全然乗つてこなかつた。

あのころの公明党と民社党は、福田と大平のどつちかわからなかつたんですよ。公明党は恐らく田中との関係から大平だつたと思うけれども、民社党は田中批判をやつていましたし、あの頃の民社党は相当右ですから、やはり福田の方が良かったのかもしれない。

○築山〔衆議院事務局〕 大平総理からは、連立という話以外に大臣の話とか何か約束みたいなものはあつたのですか。

○河野 ポストの話はなくて、一緒にやつてくさいという話だったんですね。

最後に国会周辺でいろいろ話を聞いたら、どうも今夜、大平と福田は手打ちをして一本になるといふ話があり、それなら付き合つていふことはないと言つて家に帰つたんですよ。当時は平塚に住んでいて、十二時過ぎでしたか家に着いたと同時に、大平さんから電話だといふから何事かと思つた。

そうしたら、河野さん、ぜひ力を貸してほしいと言つてから、私は

大平さんを支持するつもりでいますよと言ったら、それはありがたいと。

そこで一回目からお願いたしたいと言うから、それは幾ら何でも全員の党員への裏切り行為になるから無理で、一回目は私に入れて、決選投票になって大平ということに決めていきますと言ったら、いや、それではだめなんで、一回目から応援していただかないと勝てませんと。勝てませんといったって、そう簡単に結構ですとは言えない、明日の朝みんなで大平さんの申出を話しますからと言って電話を切ったんです。

それで、翌朝、本会議を開く日の朝ですが、たった四人だけけれども議員総会をやって、田川さんは、とにかく福田を阻止しなきゃいけないんだから、一回目からやったらいいじゃないかと言って、山口君もそうだなと言い、一期生だった田島さんは発言せず従うというので、一回目から大平で行くことになった。

党の筋としては、直前の総選挙で新自由クラブに投票した人ほどうなるんだと、比例代表でも入れているわけだからね。首班指名のときは党はないのかということになるから、そこは相当深刻に悩んだのは事実なんだけれど、あと数時間で首班指名選挙で、もうしようがないということになった。

それで、大平に一回目から行くことについて、最後のところの決心をし結論を出した。大平は連立、連合の時代に対応した多様性を重んじた政治をやるという考えを支持しよう。何も担保はないけど大平の言葉を信用しようというので、賭けたんだ。

とにかく大平さんを一回目から勝たせなきゃしようがないからと決心して、結局それで勝ったようなものですよ。四票差じゃなく十票差でしたけれどもね。

ところが終わってみて大失敗だったのは、そうやって深刻に悩んだ結果なのに、参議院を忘れていたんだ。参議院議員が五人いたの

に相談するのを全く忘れていて、終わってから参議院の仲間が怒鳴り込んできた。参議院の人達は、俺らは大平と言われていないから河野と書くと言うんだ。事前に何の相談もなく何だと言って怒られてね、それが理由で円山さんが離党するとか、その後は参議院はごたついた。大平を支持したばかりに、こっちが党内不和というか、党内の問題を引き起こしてしまつて大失敗だった。

○紅谷 自民党の主流派は大平さんを支持する大平派と田中派で、反主流派は福田派、中曽根派に加えて、三木派も入っていたのは田中さんとの関係だったわけですか。

○河野 三木派は、反田中で固まっていたから、福田さんに行っただけですね。

○紅谷 これだけ大きな亀裂が入ると、自民党分裂という話はなかったのですか。

○河野 一時はあったんですよ。大平、田中の方は自分たちが自民党だと当たり前を考えていたけど、福田の方は違った。ただ、福田は、常に我が輩は保守本流だとか言っているから、動くつもりは全然なかったけれど、三木派とかは、本会議場で対立するなら分裂して対立しないと政党政治としておかしいという話があったんですよ。それは実際はできない事ですが、その頃はかつかしていたからね。

しかし、自民党の中にこんなに大きな対立ができたのは、やはり大平と福田という人材があったからですよ。ただ、本会議場までそのまま持ち込むというのは、ちよつとあり得ないことだけれどもね。この時は、議運はどうしたんだったかな。

○紅谷 召集日に議長と副議長、議運委員長を決めて、本会議はその後一週間ぐらいはセットだけしてずっと流会で、自民党待ちでした。もうこれ以上待てないということで、総理指名に入りました。

自民党では、この事態の打開策として、総総分離案という話も出ていたと記憶しています。

○河野 福田さんは総総分離論だったんですよ。総理と総裁を分けてやるんだと福田さんが言い出したけれども、大平さんは蹴ったんですね。

○紅谷 主流派、反主流派が拮抗して、主流派の本拠地は党本部、反主流派は院内でした。

衆議院の方は反主流派が多かったので、後継は代議士会で決めるべき、主流派は、参議院が多かったので両院議員総会を開くべきだと主張し、党本部と院内に分かれて激しい対立でした。

○河野 激しかったね、あの本会議場なんかどきどきしたね。

当日には、新自由クラブはどうも一回目から大平に入れるらしいとささやかれていたんです。それは大平の方がしゃべった。

○紅谷 衆議院では決選投票で大平さんが指名されますが、参議院は、反主流派が少なかったものですから、大平さんと社会党の飛鳥田さんの決選投票になりました。

結局、大平総理ということで首班指名が終わり、組閣に入ります。○河野 組閣も、最初から連立でポストという話ではなかったんですよ。

初めは、田中六助さんが、新自由クラブは院内会派という話を持ってきたので蹴ったんです。そうしたら、もう少し突っ込んだ話をしようと言ってきたので、田川さんは、田中、山口ルートは危ないから、少なくとも鈴木善幸さんが言ってくれば正式ということでもこっちも受けとめると押し返した。

それは田中六助さんにしてみればメンツはないのだけれども、それでも大平を支持してもらいたいからと善幸さんが出てきた。それで、これまでの話はスタンドプレーや個人プレーじゃなくて大平の本心だということが確かめられたから、あとの細かいことは佐々木義武さんにやらせるということになったんです。

田川、佐々木というのは科学技術特別委員会と一緒にあったから良

かったんです。それからはずっと佐々木さんが使いに来て、最後に大平の方からということ、誓約書みたいなものを持って来て政策を幾つか書いて、これで一緒にやろうと言ってきた。

○紅谷 それで、連立ということになって、法務大臣なのか文部大臣なのかという話が出てきたわけですか。

○河野 途中で古井喜実さんが、文部大臣でどうかと言ってきたので、みんなに言ったたら、文部大臣なんてだめだ、新自由クラブが入閣するなら、ロッキード問題をきちっと指揮できる法務大臣でなきゃだめだと言って返した。そうしたら、田中六助さんが、田中派とは腫れ物にさわるようにしているので、これで新自由クラブを法務大臣にと言ったたら一発でだめになるから勘弁してくれと言い、あくまでも文部大臣でどうかと言うから、それは正式にお断りしますと断ったんだ。

そうしたら、どうするかという返事が来ないうちに組閣になって、記者会見で文部大臣は大平さんが兼務するという。それは明らかに新自由クラブに文部大臣のポストを準備しているんですよということと世間に表現したわけだ。

しかし、なかなか決められず、伊東正義官房長官が、内緒で二人で会いたいと言って来られ、どうしても文部大臣はだめですかと言うので、こっちは法務大臣を発表してしまっただけで受けないと言ったら、伊東さんが、それは非常に難しいのもう一度大平に言いますが、できないかもしれないと言ったんだ。それで僕はすごく怒って、連立でやると言ったのに何だ、これは嘘なのかと言ったら、伊東さんもかっとなつて、大平はうそをつくような男じゃありませんと言われた。

数日間、文部大臣は大平兼務でやっていたところ、伊東さんがもう一度会いたいと言ってきて、都ホテルで内緒で会ったら、伊東さんが、大平は自分の信念を貫くつもりでいるから、ここは条件を呑



んで一緒にやってもらいたいと言うから、伊東さん、それは幾ら言われても無理だ、僕は党の代表として選挙をやったばかりですよ、選挙をやったばかりでそんなことはできませんよ。だって、大平を支持しただけでもぼろくそに言われているのに、ここで入閣したら、ポスト欲しさにやったんじゃないかと言われるから、幾ら何でも受けられないと言った。

伊東さんは、事ここに至ったら、もうこれ以上こちらもなすべがない、党内的にも全く無理だから、申し訳ないがお受けできない。本来なら大平がお詫びかたがた挨拶しなきゃいけないが、官邸から出られないので勘弁してくださいと言った。それで、もう勝手にしてください、私の方はそれを条件にやったわけでもないからと言って、それで終わりになったんです。

その後、すぐ伊東さんから連絡があつて、あした文部大臣を発表しますが、それを済ませたら大平がちゃんと挨拶したいので会ってほしいということになって、院内で党首会談をやつたんです。

メディアが写真を撮って退出したら、大平さんが、私はここで土下座するというわけです。河野さんが背負った支持者からの非難とかを考えると、私はその責任はどのくらい重いものかということがよくわかる。河野さん、私は一生をかけてこの御恩に報いるつもりだから許してもらいたい。大平さん、許す、許さないの問題じゃないですよ、政治的な問題だから、やったけれどもできなかったら、しようがないじゃないですか。いや、あなたはそう言うけれども、私はそう簡単にありがたいというわけにはいかないんだよ、一生をかけて償いますとかと言われた。

僕もそこでちょっと考えて、自民党の総裁が一生をかけて償うと言うんだから、何かのときに条件を言えるからいいかなと思ひ、連合政治を目指して一緒にやることにしましょうかと思ひ、別れた。ところが半年後に大平さんが死んでしまうんですよ。

○紅谷 そのときの自民党は、反主流派が田川さんの法務大臣には随分反発したということのようですが、自民党の主流派、反主流派の対立はどうなったのでしょうか。

○河野 組閣になったら大臣の数を分けて、それで仲直りしちゃうんだけれども、双方に不満は残ったんです。

それで、残った文部大臣を何派がとるかで喧嘩になった。我々も山口君の発案だつたと思つたけど、こつちから入ることはもうないから、我々が推薦する人を文部大臣にしろと言つて民間人を推薦して、その中から採つたらどうだという話をした。しかも、そのときは大来佐武郎さんが外務大臣で、この人は新自由クラブの公認で落ちた人だから、そうすると、この内閣に二人、新自由クラブが入ることになるんじゃないかという勝手な解釈をしていた。

だけれども、その文部大臣を巡って、宏池会の不満が強くなったんです。宏池会のポストをあげていたから、宏池会の中が収まらなくなつて谷垣専一さんになるんです。谷垣禎一さんのお父さんです。新自由クラブは、こちらの推薦した民間人も採らないばかりか、自分の派でポストを取るようじゃだめだなんて言っていた。

ようやく大平内閣はスタートしたけれども、最初からぎくしゃくして、半年たつたあたりで不信任案が出て通つたんですよ。○紅谷 大平派の谷垣さんが文部大臣になって、連立構想は完全に消えましたが、それに関しては、新自由クラブの支持者やマスコミの反応はどうだったのでしょうか。

○河野 それからの一カ月ぐらいの新聞の論調のひどさ。裏切り者とか言われ、惨たんたる状況だった。新自由クラブの党内からも、この間まで言っていたこととどこでどう変わったのか説明してくれというので、全国大会をやつたり地方別に会議をして回つた。それは、直前の路線論争のときにも一遍やって、その後またやるわけだから、ちよつとしんどかつたけど、やらざるを得なかつたんです。

## 《大平内閣不信任決議案可決》

○紅谷 自民党の分裂騒動に始まった選挙後の国会は、与野党の対立が激しかったわけではありませんでしたが、会期末にいつものように内閣不信任案が提出されて、新自由クラブは乗るかどうかについて随分議論があったようです。

○河野 新自由クラブは不信任案に賛成したんですよ。だから、もうめちやくちやなんだよね。選挙で大平批判をして、総理指名では支持して、そして不信任案には賛成するんだから大揺れなんだ。その都度、真面目に考えてやってるけど、終わってみると、右に行ったり左に行ったり揺れに揺れて、だから支持者を振り落とし走っているようなものでしたよ。

○紅谷 確かに、総理指名をした人の不信任案に賛成するというのは、よほどの事情がない限りは考えづらいですね。

中道でも随分話はされたようで、公明党は不信任案を出すことについては賛成していたのですが、民社党の春日一幸さんは、自民党で造反があるかもしれないから危ないという話をしていたようです。

○河野 あの頃は、中道四党首会談というのをやっていたけど、四党ともに党首と執行部とが違っていたんですよ。

公明党の竹入委員長は僕らととてもよくて、田中さんと悪くはなかったものの割と筋を通す人だったけど、矢野書記長は自民党に理解があったんです。民社党は、佐々木委員長は僕らと一緒にだけ、春日さんはこれまた少し違う。強いて言えば社民連の田英夫さんと阿部昭吾さんとかは割合とよかったです。

○紅谷 新自由クラブは、不信任案が可決されるという予想はされていたのでしょうか。

○河野 誰も可決されると思っていないんじゃないかな、誰もと言うとおかしいけれども。

○紅谷 おっしゃるとおりで、私は当時委員部にいましたが、事務方も可決されるのは全く予想もしてなくて、部屋で内閣不信任案が可決されるのをテレビで見ている、委員長と理事にサインをもらう書類があるものですから慌てて書いて、サインをもらうのに大慌てでした。

○河野 私も、会議が始まるころには、いつもの出すだけの不信任案だと思って、遊説で東京駅まで行っていたら、何かちよつとおかしいから戻ってくださと言われて戻ったんだ。だから、ぎりぎり不信任案の投票には間に合った。

○築山〔衆議院事務局〕 空席が目立つ中で、明らかにこれは危ないのに何で突っ込んだのかなというのが非常に不思議で、普通は議場内交渉をやったりして、確認するはずですけども。

○河野 あそこでは党の国対も全然機能してないから、出席者を数えるとかなんとかいうのは全然できなかっただろうね。

○紅谷 どこもかなり混乱していて、福田派は出席して反対という方針でしたが、福田さんが本会議場に入れなかったり、中曽根派は途中で方針が変わったりしました。

○河野 中曽根さんは外に出てしまっただけで中に入れなかったんです。堂々めぐりしている最中までわからなくて、途中からこれはおかしいぞといつて、終わってみたら不信任が可決しちゃったんだ。

○紅谷 議場内ですからやり取りがわかりませんが、もう止められるような状況じゃなかったのでしょうか。

総選挙後に特別会が召集されて一週間余り首班指名ができず、迎えた最初の常会では内閣不信任案が可決されて解散という異常な国会で、議員の任期はわずか八か月でした。

○河野 これは異常ですよ。灘尾議長は苦労されたりかな。

それと、ちよつと人ごとみたいなことを言えば、やはり大平派、宏池会の国会対策というのが全然だめだったんですよ。あのころの

国会対策といえば田中派の人ばかりで、特に宏池会は、国対はもう一番苦手というか、やらないところなんだよ。

○紅谷 当時、宏池会というのは、お公家集団で国会対策は苦手だとよく言われていました。

○河野 そうそう、宏池会は、税調は一生懸命やっていたけれども、国対は全然やらなかった。

○清家〔衆議院事務局〕 やはり国会議員としては国対をよく勉強し、汗をかく必要があるというお話でしたが、先生からご覧になられて、国対というのは何を学べて、それを生かす方法は何だと感じられたでしょうか。

○河野 国会対策をやっていると、国会にいる時間が長くなりますが、それはとても大事だと思いますね。

国政の主戦場は国会の委員会であり本会議です。国会議事堂の中に長くいると、政治の流れを肌身で感じる。こうなっているなどか緊迫しているなどが分かり、それが非常に大事だと思いますね。

例えば浜田幸一さんという人は、国会が好きなんです。国会にいる時間がすごく長い。だから、いろいろなことも覚えるし知るから、彼は党本部へ戻ってきてても強いんですね。今が何だということを一番よく知っていた。

文教委員会で、僕が当選二回で委員長代理になって強行採決をやったら、浜幸さんが飛んできてくれて、私がいるから大丈夫ですと言ってくれましたよ。

○紅谷 浜田先生は、私が予算委員会担当で、売上税問題のときの予算の理事だったのですが、強行採決になったら、部屋の後ろの方にいたのがいつの間にか委員長席まで来て、委員長の砂田重民さんを守っていましたね。

○河野 どこからか突然現れるんだよね。本当に不思議な人で修羅場は手慣れたものでした。

とにかく、自民党というのは多士済々いろいろな人がいて、いろいろな考え方を自由に言えたんだよ、僕らはめっちゃくちゃだったけれどもね。

○紅谷 自民党の派閥は、右から左までの幅広い意見があって、いろいろな考え方があるんだというのがわかりましたけれども、最近はそのような幅広い意見が余りないように感じるのですが、いかがでしょうか。

○河野 そうですよ。だから、いろいろな意見があっても、あの人は清和会だ、あの人は宏池会だとすぐわかった。具合が悪かったら清和会の誰とかに言えば大体収まりがつくなというのがあった。

僕は中曽根派にいたときには勝手なことを言うだけ言って、最後まで、稲葉修さんとか大石武一さんとかに呼ばれて、おまえ、もういいかげんにしろと、はい、わかりましたと収まったことがある。そういう派閥の主張と仕切りがあつたんですよ。

昔は派閥の親分が若手を連れて全国を演説して歩くんですよ。僕は中曽根派だけど、大平さんが東北遊説に行くときに、派閥が違うのに一緒に連れていかれて、移動中の汽車の中で大平さんがいろいろな話をしてくれ、そういうものかなと思いつながら、東北を何カ所か回って帰ってきたことがある。その後少したって、福田赳夫さんから、北海道へ遊説に行くんだが一緒に行かないかと誘われ、羽田空港に行ったら、お供は僕と山村新治郎さんの二人で、中川一郎さんの応援に行つたんだよ。

だから、そういうところは派閥なんか関係なく、派閥の親分が若手を連れて、いろいろなことを話をしてくれたりしていた。

橋本龍太郎さんがよく言っていたけど、初めて社会労働委員会で質問をしていたら、河野一郎がずっと後ろで立って聞いていて、終わって廊下へ出たら、いい質問だったなと、おまえのおやじに褒められた。だけど、左手をポケットに入れているのは止めた方がいい

と言われた、そんなところまで先輩が注意をしてくれた、そういうことがあったらしいんだ。

僕は交通安全対策特別委員会で初めて質問したんだけど、竹下さんが会議録を十部ぐらい選挙区に配ったらどうだと、印刷したのを届けてくれた。竹下さんは、聞いているわけじゃないけれど、やはりああやられると、ほろっとするよね。

### 《党勢の復調と国会活動》

○紅谷 大平内閣不信任決議案は五月十六日に可決されましたが、解散は三日後の十九日でした。内閣不信任案可決当日に解散しなかったのは初めてなのですが、これは参議院選挙の日程が決まっていた、六月二十二日に同日選挙を行うためでした。前回の選挙から八カ月弱ですから、候補者はいるのでしようが、参議院と同日選挙ですから組織や財政面もさることながら、前国会での経緯もあって大変な選挙だったのではないかと思います、いかがだったのでしょうか。

○河野 前の選挙で大敗した後に田川さんが全国を回って歩いて、次点だった人達を激励すると、悔し涙をばねに頑張ったんですよ。

世間では、風に吹かれて通ったり落ちたりするのはだめだみたいと言うけれど、初めはまさに逆風だったんですよ。物すごい逆風にさらされていたけれども、あの八カ月という短い期間にみんなの努力で追い風が変わったんです。それで現職の全員と落選していた人のうち八人が当選したんです。大平さんが選挙の最中に亡くなってしまったのには本当に驚きました。僕は大平さんを吊問しようかどうかしようか大いに迷ったけど、選挙で敵対しているところへのこのことお悔やみに行くことはできないと心に定めて、徹底的に戦いました。自民党は完全な分裂選挙の様相だったのが、途中から黒いリ

ボンをつけて吊いだと言いつし、あつという間に一つにまとまった。しかもダブルだから自民党は両方とも大勝し、野党は徹底的にやられた。そんな中でよく我々は生き残ったと思いますよ。

○紅谷 自民党は過半数ぎりぎりだったのが一挙に三十ぐらい増やす、社会党は変わらずで、公明党が二十五減らし、民社党も減らす、共産党も十数減らすという結果でした。

参議院でも自民党は過半数を獲ったので、ここ何年かの与野党伯仲状況が一挙に解消しました。

○河野 自民党以外で勝ったのは僕らだけで、不思議な選挙でした。しかも大平さんが亡くなったから、八カ月前には連立と言っていたのが、もうお呼びでないという感じだった。僕らは八人増やしたことは間違いないけれども、結党当初の十八人の頃が忘れられなくて、やはり国会は数だということで、社民連との連合になっていくわけです。

○紅谷 自民党が大勝したので、中道勢力の結集とか、国会の対応をどうしていくのか目標を失ったようにも見えますが、新自由クラブはどういう方向性で進もうとされたのでしょうか。

○河野 そこは、すっかり目標を失ったという感じでしたね。

最初の選挙では第二の保守政党になろうという目標だったけれども、西岡離党で夢が破れ、次の選挙では四人になる。その後十二人に増えるけれども、最初の頃の勢いは全然なく支持率も下がったので、田川さんが、もう一回足を地べたにつけて組織づくりからやらなきゃだめだ、上を向いてああだこうだ言っているのはだめだ、地道にやろうという話になったんです。

一方、参議院では新自由クラブの当選者は誰もいなくて、当選は推薦した東京の宇都宮徳馬さんと大阪の中村鋭一さんだけでした。

○紅谷 衆議院も参議院も自民党が多数になり、中道勢力は対抗策として、公明、民社、新自由クラブ、社民連で連合的な会派をつく

ろうという話があったようですが、どの程度の話だったのでしょ  
うか。

○河野 やっていたけれども、それは政権を目指すとかではなくて、むしろ自分たちが生き残ろうということです。その頃は、何だかやたらに公明党と民社党は近かったんですよ。僕らは数が少ないのでどうということはなかったけど、公明党と民社党はそれぞれがメリットがあるという話で、民社党は公明党の組織、何よりも新聞を毎日出せるのがよいと、公明党は選挙で増える余地が余りないから、民社党が増えることを期待した。しかし、竹入さんと佐々木さんが委員長でしたが、民社党は春日一幸さんの影響力が強かったんですよ。多少冗談もあったけど、公民合併というのがあるんじゃないかと、僕らはちよつと思つた時期がありましたね。

○紅谷 選挙後の総理指名では、宏池会の鈴木善幸さんが選ばれて、鈴木内閣が発足しました。

○河野 鈴木さんは調整型の人だったので、ふわつとした政治でした。

その頃から、中曽根さんは政権を目指して跳んだり跳ねたりしていたけど、まだ田中派の影響力が強かったから、そう簡単に中曽根というわけにはいかないんです。

それで、鈴木内閣の間に中曽根さんはさかんにいろいろなことをやった。行政管理庁長官で専売公社の改革をやり、その後の国鉄改革、そして土光臨調に繋がっていく。何とか田中派の了解をとりたいたいということで、田中さんとの関係を一生懸命繋ごうとしてやっていったけど、僕はそれはわからなかったんだよね。

鈴木さんが一年で辞めた後、中曽根内閣になって、後藤田官房長官というので、中曽根内閣というけれども実際は田中政権じゃないかという話を僕はしていましたよ。

○紅谷 そういう政治状況の中で、先程お話にありましたが、新自

由クラブは、社民連と統一会派を結成されます。当時の社民連は、榎崎弥之助、阿部昭吾、菅直人、参議院は田英夫、江田五月の五人です。参議院は旧知の間柄の人たちですが、衆議院の方は政策的に合うような関係だったのでしょか。

○河野 阿部昭吾さんという人は比較的穏健な人だったけれども、榎崎さんは左寄りだし、菅さんという人は誰も知らなかったけれども、江田さんが菅君の上に乗っていたので、組織的にはいいんじゃないかということだったんです。院内会派をつくって数を増やして発言時間を少しでも長くしたいという話ですよ。だけれども、それは結果的に失敗で、やらなきゃよかったという話になるんです。

その頃は、自民党から出た新自由クラブと社会党から割れた民社党があつて、民社党の方が自民党に近くなって、新自由クラブの方がどっちかといえば社会党に近くなって社民連と仲よくなるという、クロスしているみたいで余り本筋の話じゃなかったし、そんなに一生懸命でもなかったんです。

○紅谷 社民連との交渉は、山口さんや柿沢さんが行っていたようですが、政策的な合意はしていたのでしょうか。

○河野 そのとき僕は無役だったけど、全然していなかった。参議院には柿沢君がいて、彼は割と保守色を大事にしていて、選挙に出るときには相当リベラルだったんです。社民連との統一会派を彼が政策委員長でまとめたんだけど、何故かその直後に離党してしまつたんです。

柿沢君は、新自由クラブは都市型にならないと生き残れないと言  
い、社民連とはそこでは一致していません。ただ、安保、防衛ではやはり保守的で一致できなくて、最後は山口君がもうごちゃごちゃ言うなという話でまとめたと思うんだよね。

その翌日、彼は離党届を出した。この頃は党の組織がもうめっちゃめっちゃだったね。

○紅谷 先ほど院内会派での数の話をされましたけれども、社民連と統一会派を組んでも十五人ですから、会派としては共産党の二十九人の次で、統一会派にどういうメリットがあったのでしょうか。

○河野 院内でのメリットはなかったけれども、次の参議院選挙に繋がっていくと思っていまして。

統一会派の名前をどうするか、比例名簿で田英夫、大石武一、他にもいたけど誰を比例の一位にするか、誰を東京に回すかでもめってしまった。

社民連は、会派の名称を新自由連合とか、社民クラブでどうかとか言ってきた、最後は新自由クラブ・民主連合になって、統一会派で選挙もやっちゃうわけだ。その結果、地方では悪評で、社会党か自民党かわからないようなのはだめだと物すごく叱られた。それで選挙も負けて統一会派は解消したんです。この頃が一番党として何だかわからない時期でした。

### 《中曽根内閣との連立》

○紅谷 新自由クラブにとっては混乱の時期だったようですが、昭和五十八年十二月に総選挙になります。ロッキード選挙と言われた選挙で、自民党は公認候補だけでは過半数が獲れず、追加公認でようやく過半数を確保しました。

新自由クラブは十二人から八人に減ってしまいましたが、ロッキード選挙と言われていましたので、増えてもいい選挙だったと思うのですが。

○河野 中曽根総理での解散で、倫理、倫理とスズムシみたいなやつらだとかとひどいことを言われた。そして自民党が減ったのと同じように新自由クラブも減っちゃったわけだ。

○紅谷 自民党は過半数を確保したとはいえ、国会運営は不安定で

すから、新自由クラブに連立を呼びかけてきますが、その前に、中道保守の大連立構想で河本敏夫さんを担ぐという話が出ていたようですが、どういう経緯だったのでしょうか。

○河野 自民党は選挙で大敗して完全に過半数を割ってしまった。選挙後すぐに、田中六助幹事長が力を貸してくれと言ってきたけど、どういう意味かわからないんだよね。つまり、復党と言っているのか、統一会派と言っているのか、あるいは連立内閣と言っているのか、わからないんですよ。

大平内閣のときに、連立の話がぎりぎりのところまでいって壊れたいきさつがあつて、今回の選挙では十二人から八人に減らした中で、そういう話が持ちかけられたけれども、正直、中曽根さんが頭目ではそれじゃという気分じゃなかったんです。中曽根政権を選挙で猛烈に批判して戦ってきましたから、何よりも中曽根政権に入るのは絶対嫌だという思いが田川さんと僕にはあつたんです。

そこで、田川さんと山口君とどうするか話をしていたら、田川さんが、もう一回何か仕掛けをやるんじゃないかという話になって、河本擁立がいいんじゃないかというので、じゃ、やってみようという事になった。

それで、田川さんが河本さんと割と近かったので、河本さんにやらないかと言ったら、あの人はとても口が重くて余り話さないけど度胸はいいし腹が据わっているから、やる気になればやるかもしれぬと。どうやってやるかというのを田川さんが説明をして、あなたがやると言ってくれば自民党は過半数割れだし、こつちには河本さんが連れてくる三木派もいるだろうし、野党は全部まとめるという話になった。河本さんは、そんなことができずかというので、野党に話をしてみてそうならあなたの手を挙げるかと言ったら、そういう事態になればという話になった。それで田川さんが社会党の石橋委員長と話をし、最初は河本が自民党を離党すれば支持する

という話だったけれども、田川さんが、そこまでは彼は踏み切れな  
いと、そこは結構厳しいやりとりだったけど、最終的には石橋さん  
は腹をくくるだろうと田川さんは思った。

公明党と民社党は、田川さんが僕にやれと言うので、僕は竹入さ  
んと佐々木さんと話をして、本当にできるのか、やるなら俺らはい  
いよという話だった。共産党は声をかけなくても後からついてくる  
だろうから声をかけない。

そうして、社会、公明、民社、社民連をまとめて、河本さんに話  
したら、彼はふっと気がついて、三木さんの許しがないとできない  
と言うんです。

そこで僕は一人で三木邸へ上がり込んで、絶対やろうと言って口  
説いた。いいような悪いような、はっきりしなかったけど、最終的  
には、やれるものならやってみようかみたいな話。でも、一番最後  
になって、三木さんが降りちやうんですよ。

話が漏れて、中曽根総理以下がなんとかしなくてはということに  
なって、最終的に中曽根さんが田中さんを名指しで批判する文書を  
書いて、そうしたら三木さんが、そうなった以上は約束だから降り  
ると言って、降りちやうって大失敗。

一番の失敗は、河本さんを擁立しようとして田川さんと二人で話をし  
て、また二人で走るといけないからと山口君に話したことだった。

彼はいいんじゃないか、俺は邪魔は絶対しないかわりに、河野さん  
この計画が潰れたら次は私にイニシアチブをくれ、私がやりたいこ  
とをやらせてくれ、という話になったんです。

○紅谷 中曽根総理の文書というのは、田中元総理の政治的影響を  
排除するという内容の総裁声明ですか。

○河野 そうです、声明に田中排除を入れるんですよ。

最初は田中政治というのを書かないんですが、三木さんが田中と  
名指しでちゃんと書け、田中政治を排除しろと言って、最後は中曾

根総理が書いたものだから三木さんは反対できなくなった。河本さ  
んから、三木さんが降りましてと電話があり、それで終わりになっ  
てしまった。

何回もそろばんで足し算をし、微差だけでも絶対勝てるという  
話で、社会党も首班指名で名乗りを上げれば乗るといふ話になった  
のに、それもできなくなり、政治の流れが変わる大きなチャンス  
を逃してしまっただけです。

河本擁立が失敗したら、山口君が、それじゃ約束だから後は私に  
任せてくださいと言うので任せたら、その足で中曽根さんと連立の  
話に行っちゃうわけだ。田川さんと二人で中曽根倒閣運動をやって、  
それが失敗すると今度は中曽根連立に行くんだから、自民党もびつ  
くりしたと思うよ。それで連立の話になるわけです。

田中六助、山口という連係プレーで、連立の約束を取り付けてき  
たと山口君が帰ってきて、新自由クラブは自治大臣、国家公安委員  
長で入閣だと言うんです。

僕らは、新自由クラブが入閣する以上は田中追及をやるんだから  
法務大臣でなきゃ絶対だめだと言ったら、山口君が怒って、俺がこ  
れだけ一生懸命やって自治大臣をとってきたのに、法務大臣ならよ  
くて自治大臣ではだめという理屈がわからない。どっちだって連立  
に変わりはしないじゃないかと聞き直られ、しようがないから、最後  
はそれでいこうというので、自治大臣、国家公安委員長で田川さん  
が入閣するんです。

けれども、田川さんは、第一次中曽根内閣のときの代表質問で、  
中曽根さんのことを物すごく攻撃しているんですよ。僕が聞いても、  
背筋が凍るような質問をするんだ。中曽根さんが、松村謙三さんを  
師と仰ぐとか一番尊敬していると言うと、田川さんは松村さんの秘  
書だったから、そんな事は嘘だと言って、本会議での発言が、すご  
かったんですよ。その人が中曽根内閣に入閣するのだから大変だっ

たと思う。

予算委員会では与野党から連日の田川攻撃、新自由クラブ攻撃ですよ。何で入ったんだ、今まで言ってきたことと違うじゃないか、選挙のときに言ったのと違うじゃないかと集中攻撃。田川さんは相当辛かったと思うんですよ。

○紅谷 その後の内閣改造で、田川大臣から山口大臣になりますが、そのときもいろいろあったようですね。

○河野 そうなんですよ。

第二次中曽根内閣の最初の改造で、田川さんは自分が辞めた後は僕にという話だったけれど、山口君が、これは俺が作った連立だから、次はどうしても俺にやらせてくれという話になって、多少もめた末に山口君が入閣するけれど、はじめは科技庁長官だったのが、大臣でなきや嫌だといっごねるんですよ。

僕が代表だったから、手続きとして総理官邸へ行って中曽根さんに連立を継続しましょう。ついては山口君を新自由クラブからとってほしい。できレースだから、中曽根さんもそれでは科技庁長官と言ひ、僕は結構ですと言つて総理執務室を出ようと思つたら、山口君が同席していた金丸幹事長をつかまえて、どうしても大臣にしろとごねるんです。金丸さんも面倒くさくなって、竹内黎一さんの労働大臣と科技庁長官を取り替えることになったんですよ。

田川入閣のときには、新自由クラブが喉に刺さった小骨みたいな感じだったけれど、山口君が大臣になったら、すっかりとげがなくなくて、中曽根さんは物すごく気に入ってべた褒めですよ。

○紅谷 自民党との連立政権は、大平内閣では実現しなかったの、保守合同以降では初めてでしたから、意義があったと考えられたのか、また三年ほどの連立でしたが、新自由クラブに変化はあったのでしょうか。

○河野 自民党の単独政権を終わらせたということだったんです。

新自由クラブ結成前から国会議員活動をしているのは田川、山口、僕の三人だけで、他は新人です。つまり与党がどういうものかというのを全く知らない人たちがばかりだったのが、ここで初めて与党になり、与党つてやはり楽だな、おいしいなということを感じるわけです。それで、急速に党全体に復党願望が出てくるんです。僕は、この辺はしみじみわかっていました。何をやるにしても、やはり自民党はいいなという感じが出てくる。それと同時に、自民党から戻ってこいという話もあって、それはそうだなという感じが日に日に強くなっていくんです。

連立を組んで、僕ら八人が参加したから、予算委員長や各委員長をほとんど取つて、自民党にしてみればとても安い買物をしたような感じですよ。田川さんだけが閣内でいつも渋いことを言うから、それだけが嫌だったろうけれども、全体的には自民党にとつてとてもいい方向に流れていたんですよ。

○紅谷 河野先生は、昭和六十年十二月の中曽根改造内閣で科学技術庁長官として初入閣されました。

昭和六十年というと初当選から約二十年で、自民党の同期の中でもほぼ最後の方の入閣でした。大臣就任に際しては、どういうお気持ちだったのでしょうか。

○河野 中曽根さんとの関係がいいような悪いような関係だったもの、ですから、この入閣は余り嬉しくなかったんです。しかし、選挙区の人達が我慢できないんですよ。選挙で担いでも自分勝手に飛び出してあつち行つたりこつち行つたりして、みんな大臣になつていけるのうちの大将だけはならないと。それは僕としても本当に地元で申し訳ないことで、地元の後援会長が矢面に立って一生懸命抑えてくれていたけれども、もうこれ以上は抑えられません。これでまた、みんながやれと言うのに、あんたがいい恰好していたんじゃない、選挙区がもちませんよと言われ、もうしようがないかなという感じは



ありました。もう一方では、今言われるように、僕が同期で一番最後の最後に残ったので、もうそれはやらなきゃだめだなという気もしていましたね。

しかし、僕が科技庁長官だということで、科技庁はみんながっかりするんですよ。その時、科技庁は二つの大きな法案を抱えていたんです。一つは、高レベル放射性廃棄物をどこかに埋めなきゃいけないという原子炉規制法、もう一つが研究交流促進法。科技庁は、河野長官では一年は寝ているしかないという話になった。そこへ福祉党から移った八代英太さんが政務次官ときたから、これは全然だめだとすっかり意気消沈していったんです。

そうしたら、科学技術委員会の委員長が大久保直彦という公明党の国対委員長で、早大の同級生だったんです。割と仲がよかったですけれども、議員になってからはほとんど付き合ったことはなかった。

大久保が来て、おい河野、おまえはいいところの大臣になったよ、俺が全部やるから任せろと言ってます。任せるも何もわからないんだからみんなやってくれと言ったら、彼が全部やってくれて、法案は二本とも通ったんです。科技庁は、どうしてこんなにうまくいくのかわからないとびっくりしていましたよ。

○紅谷 当時、私は科技特と同じ部屋の建設委員会の担当にいましたので、少し経緯は聞いていました。確かに原子炉規制法というのは、放射性廃棄物を青森の六ヶ所村に埋設するという内容の法案で、社会党の反対が強く、青森の関晴正さんが委員にいて、特に強い反対だったと記憶しています。

○河野 そうそう、関さんが絶対反対だった。大久保君に言われたりして、僕は関さんの青山の議員宿舎へ一升瓶をぶら下げて行って一晩一緒に飲んだことがありますよ。話をすると浪花節みたいな人で面白いけど、翌日委員会に来るとがらっと人が変わった。科技庁の役人たちはみんな逃げて歩いたんだ。

六ヶ所村ともう一か所北海道にも候補地があつて、それが五十嵐広三さんの選挙区で、あの人もここにこしているのにすごかったんだ。その二人が厳しく言っていたけど、なんとか法案が通つたのは、ほとんど大久保君のお蔭でしたね。

五月の連休は大臣がみんなヨーロッパとかアメリカへ行くと言っているけど、こっちは何も声もかからなきゃ構想もないんだよ。そうしたら大久保君が、連休はどうしているんだと言うから、くたびれたから家に帰って寝ていると言ったら、おまえ、こんないときはないんだと言って、科技庁の官房長を呼んで大臣の外遊計画を作れと言って、オーストラリアへ会議に行くことになった。一週間の予定で支度したら、行く数日前にチェルノブイリ原発が爆発して、北欧の国が大気が汚染されていると騒いでいるけど、ソ連に聞いても何もないと言うばかり。そのうちに、チェルノブイリの原子炉が爆発したらしいという話になったけれども、もう明日の朝の飛行機に乗らなきゃいけないとなつて、後藤田官房長官に電話をして、日本にいなきや具合が悪いでしょうねと言ったら、会談の相手も決まっているんだらうから行って、何かあつたら連絡するから戻ってくればいいというんです。

それで飛行機に乗ってシドニーに着いたら、空港に総領事が来て、すぐお帰りくださいと言うんだ。そう言われても日本に帰る飛行機は明日までないからどうすることもできず、とりあえずキャンベラへ行って大臣に会つたけれども、それは、翌日会う約束だったのを繰り上げてもらつて挨拶だけだった。次の日の朝、シドニーまで戻って日本へ帰ってきた。何にもしないで、十何時間飛行機に乗って帰ってきただけでした。

○紅谷 大臣就任の半年余りの間に、チェルノブイリ原発事故の他に、アメリカのスペースシャトルの爆発もありましたから、大きな事故が二つあったわけですね。

○河野 僕が大臣の時に米ソ巨大強力国の一番大きなプロジェクトがぶっ壊れたんだよ。

アメリカのチャレンジャー号というスペースシャトルが爆発したときも大変だった。打ち上げをテレビでみんなで見ている、打ち上げたと思ったら爆発して、もつと行くのかと思ったら落ちてくるんだよ。全員即死だから、アメリカは本当にみんな悲しんで元気がないんだ。

それで、葬式に行った方がいいんじゃないかと思ったけれど、予算委員会の初日に新任大臣がいないのはまずいんじゃないかという話になった。それでも後藤田官房長官が行けと言うので、葬式をどこでやるのかもわからないのにアメリカに向かって飛んだんだ。ロサンゼルスに着いたら総領事から、テキサスのヒューストンの打ち上げ基地に行ってくださいと言われて向かいましたよ。

葬式に出てとんぼ帰りで予算委員会の初日の朝に帰ってきて、ぎりぎり間に合いましたね。

○紅谷 先程から名前が出てきますが、官房長官は後藤田先生でした。私の学生時代でしたが、徳島では三木先生との争いがあった。阿波戦争と言われ、三木派と田中派の激しい政争があった、後藤田先生は剛腕という印象でした。

しかし、いつからか後藤田先生の印象が随分と変わったように思いますけれども、河野先生から見た後藤田先生の印象はどうだったのですか。

○河野 僕は、三木さんとは親しくて、時々三木邸へ行ってお茶を飲んだりしていたから、三木さんから参議院選の阿波戦争だから手伝いに行ってくれと言われ、また坂本三十次さんが一緒に行くこうと言って、後藤田攻撃に随分行ったんですよ。そんなこともあって最初は田中派だし余りいい印象じゃなかった。いい印象じゃなかったけれども、とてもフェアな人でした。いい悪いが非常にはつきり

していて、だめというときはだめだし、いいときはいいし、話をするようになって途中からは結構かわいがられたね。

僕が中曽根内閣の閣議でいろいろなことを言うと、その話は官房長官室で聞くから後で来いと引き取って、行くと俺も君の意見に賛成だけど、総理の顔も一応立ててやってくれよなという話を何回もされた。

僕が憲法記念日でお祝いをやらないのかと閣議で言ったら、中曽根さんは嫌な顔をしていた。それも後藤田さんが引き取って、俺も憲法記念日ぐらいやったらいいと思っているけれど、三木内閣のときの憲法記念日のお祝いは三十年だろう、普通は三十年の次は五十年じゃないかと言われて終わりになったんだ。僕はしょうがないから自分で勝手にやった。

ちょうどこのころ、中曽根さんがペルシャ湾へ掃海艇を出すとかいう話になったけど、後藤田さんが止めたりしてね。後藤田官房長官の存在感というのはすごくありましたね。

後藤田さんは、本当に信用して話ができる人だという印象を持つようになりましたね。

### 《防衛費対GNP比1%枠》

○紅谷 防衛費の対GNP比1%枠については、三木内閣のときに閣議決定しました。自衛隊ができて、どんどん防衛費が膨らんでいったものから、田中内閣のころからの懸案で、それがまとまっていたのが三木内閣でした。ところが、中曽根内閣のときに方針を変えて1%枠を撤廃しました。当時の中曽根総理とレーガン大統領との関係があって、アメリカからSDI戦略防衛構想などの強い要求があったためと言われています。

新自由クラブは、自民党と連立を組むにあたって、政策協定で一



○紅谷 今の1%枠もそうですし、SDI構想についても、国会の宇宙利用の決議との関係、これは昭和四十年代ですが、国会決議の存在を知らない人が多くなったのでしようね。

○河野 国会決議というのは、一回決議をしたらどこまで効力があるのかというのは、なかなか微妙ですよ。だから、同じ決議を繰り返して繰り返してやっているのもあるし、それから、一回本当に大変だというときに国会決議して、それが終われば、もうその決議はなくなってしまうようなものもある。

○紅谷 国会決議の効力という観点からは、国会決議というのはずっと生きています。ただ、それを変えるような法律改正があった場合や、それを変更する新たな国会決議があった場合は、前の決議は変更されたという解釈で、いくら古かろうが変えない限りは生きていくというのが基本です。

○河野 本来そうですね。政権が替わったときに、米の輸入自由化反対についての国会決議があったから、ウルグアイラウンド協定に反対したんだよね。

いろいろ言うけれども、中曽根政権下では結局足元を見られちゃって、やりようがなかったんですよ。それで、山口幹事長だったから、党対党ではなあなあになって、後半はだめだと肌で感じていましたね。

○紅谷 今の防衛費の1%枠もそうですし、SDI構想、それから武器輸出三原則も、アメリカについては例外とするというのが中曽根内閣のときでしたから、新自由クラブとしてはつらい時期に大臣をされていたのかと思います。

○河野 とてもつらい時期でした。だめなら野党に戻ればいいとはいかなくなっているんですよ。田川さんのころは、俺は辞めて野党に戻る、連立破棄だという勢いだったけれど、それが、辞めて帰ると言っても、母屋の方がそんなのはだめだと言うから、本当にこの

頃が辛かった。

それで、六十一年の七月まで連立はやったけれども、七月の選挙で新自由クラブは二人減って六人になる。何より選挙で戦えないんですよ。

僕は、本来連立というのは国会が解散したら一遍解消して、選挙では自分の党の政策を主張して戦わなきゃだめだと言っていたけど、うちの連中は、そんなことをしたらそれで解消して終わりになっちゃうといけないうから、解消は絶対しないというんだ。

僕が選挙の前半で中曽根批判をしたら、中曽根内閣の閣僚が中曽根批判なんかして何だと言われた。しかし、中曽根政治はいいと言ったら、新自由クラブに投票する必要はなく、直接自民党に投票した方がいいということになるから、本当に存在意義がないわけです。

### 《新自由クラブの解党》

○紅谷 その頃、国会では定数は正問題が懸案になっていました。ずっと議論していたのですが、なかなか話がかかれない。それは、中曽根総理が解散して同日選を考えているんじゃないかという憶測があつて、野党がそれについて警戒感があつたものだから、なかなか進まない。しかし、坂田議長から八増七減の調停案が出され、与野党とも受けざるを得ない状況になったという経過でしたが、新自由クラブは反対だったようです。

○河野 それは、九増になれば横浜が一人増えて、新自由クラブの新堀典彦さんが当選すると思っていたのに、どうも新自由クラブが増えるだけだからやめちゃえというので、横浜だけ削られたんですよ。新堀さんはチャンスを失い、新自由クラブとしては党内の混乱を収めるだけでも大変骨が折れたんです。

あの頃は、何人かが集まって候補者の顔まで見ながら増やすか減

らすかとやって、こっちは損だからやめようとかという話になるけど、新自由クラブはその輪に入れないんですよ。結局最後は、あいつのところなら切ってもいいみたいな話になった。

その一方で、中曽根さんは衆参ダブル選挙をやりたくてしようがないんですよ。それで死んだふり解散、俺は絶対にやらないみたいなことを言っていたけれど、実は着々と準備が進んでいて、坂田さんも結局乗せられたような格好ですよ。

○紅谷 議長の調停案が出て与野党が受けた段階では、自民党の中でも宮沢総務会長は同日選には反対でした。

○河野 絶対反対だった。珍しく総務会で頑張ったんですよ。

中曽根総理は、そこでも最後に、私の顔を見てください、私が嘘をつく男に見えますかと平気な顔をして言うんだから、嫌になっちゃうよね。

○紅谷 そういう経緯でしたから、解散は野党の反発がとて強く、本会議ではなく、坂田議長は議長応接室に各党代表を集めました。野党は出席せず、自民党と新自由クラブの代表者の前で解散詔書を読みあげたという、国会史上例のない解散でした。

そして、衆参同日選挙に入っていくのですが、先ほどお話がありましたように、連立内閣を組みながらの選挙戦ですから、内閣批判はできない厳しい選挙でした。

○河野 どこもかしこも八方塞がりの厳しい選挙で、演説ができません。演説のしようがないんですね。

選挙中に新自由クラブ結党十周年をやるうと言うので、小杉隆君の選挙区の三軒茶屋で、宣伝カーの上で十周年の演説をやったんです。結成一年目、二年目というのは、人が集まって整理に困るほどだったのに、幾ら結党十周年の記念日とか言って演説しても人がいなくて辛かった。

そのときにつくづく、これはだめだ、もう党としての意味はない

と思いましたがね。以前は、新自由クラブ推薦というとその候補者の票は増えたけど、そのころは、新自由クラブというむしろ候補者の重荷になって、もう党としての意味がないと、選挙で演説しながら、これはだめだと思いました。

それで選挙が終わったら、即刻、連立解消という話ですよ。僕らの方からは、解消しても閣外協力しようとかという話が多少あったけど、自民党からはもう結構ですよ。

○紅谷 それは当時の河野代表と山口幹事長の対立があったということですか。

○河野 あったんです。山口君はあの頃はほとんど中曽根派だったから、解消しても閣外協力しよう。彼はとうとう閣外協力で押し通して外務委員長になるわけですよ。

連立を解消して僕らは小さくなって戻ったけれども、彼だけは外務委員長をやって、こっちはびっくりしていたね。

○紅谷 選挙の話に戻りますが、新自由クラブといってもなかなか人が集まらないというのは、御自身の選挙でも感じられたのでしょうか。

○河野 それまで選挙をやれば大体一番だったけど、僕はこの選挙では二番でした。このときは本当に辛い選挙だった。

○紅谷 選挙では、自民党は三百人以上当選して大勝でしたから、連立を組む必要がなくなりました。

新自由クラブは八月に解党を決めますが、自民党に戻るといって決断もしなくてはいけませんでした。

○河野 そうでした。正確には自民党に戻ったのは僕と山口君だけで、新自由クラブになってから議員になった鈴木恒夫、甘利明、小杉隆の三人は、自民党に入党するという格好です。田川さんは絶対帰らないと頑張った。

復党のときには、自民党からいろいろなことを言ってきた。僕が

中曽根内閣に入るときにも、河野の入閣については復党が条件だみたいな話があつて、僕は復党が条件の入閣ならお断りしますと言つて、大げんかになつたことがあつたんですよ。劇団四季の浅利慶太さんが僕と中曽根さんの間を盛んに行つたり来たりして、中曽根さんは復党条件の入閣だというから、浅利さんに、そういう無礼なことを言うなら二度と話をしないと云つたら、浅利さんは、本当かどうかわからないけれども、私も腹を決めて、あんたとは二度とつき合わないと言つて中曽根と談判してきたと言つていた。結局、その話は一切なかつたことにして入閣してくれという話になつたけど、そのころから浅利さんは戻れという話をずっとしていたんです。

バッジを付けた人で僕に復党しないかと言つてきた人は一人もいないんです。強いて言えば、そろそろ戻つてほしいと藤波君は言つてきた。あとは浅利、牛尾、そういうバッジを付けていない人たちが、とにかく中曽根もそう言っているからみたいなきことをしきりに言つてきたんですよ。

それで、僕が絶対だめだと言つるので、浅利さん、牛尾さんは専ら田川さんのところへ行つて、河野を帰せと言つていたんです。田川さんが僕に、君の今後の残された政治生活の後半を考えるともう時間的余裕はないから帰れ、帰るなら今しかないんじゃないかと。いや、俺は絶対帰らぬと。それで途中から田川さんも、一遍帰つて出直そうじゃないかという話になつた。

そうしていると、ある日突然、君は帰れ、だけど俺は帰らぬと言ひ出したので、私が帰つてあなたが帰らないなんてそんなばかなことではないので、田川さんと一緒に帰るけれども一緒にやなきや帰らないという話になつた。

結局、最後まで田川さんは絶対帰らないと言ふ。それは、全国に支部を作つて活動をさせて、市議員も何人かいるのに、それを全部置いて自分だけ帰るなんてことはできないだろうと。君と一緒に

帰る仲間の面倒を党内で見なきやいけないだろうから帰れと。これは帰る日の朝まであまだこうだやつたけれど、結局、田川さんは絶対帰らないと言ふので、諦めて最後は帰つたんです。

○紅谷 自民党を出るときにも決断をされましたが、戻るといふ決断は、より一層大変ではなかつたのでしょうか。

○河野 自民党を離党する最後のときに、宮沢さんに離党することになりましたと言つたら、宮沢さんが、あなたが熟慮の上お決めになつたんだからそれはそれで結構、私は何も言うことはないけれど、出るの簡単だけれども戻るのは難しいから、そのことをよく考えて最後の決断をしてくださいと、さんざん言われたんです。

そのときは、戻るわけないんだから心配しなくても大丈夫ですとか言つたけれど、やはり戻るのは難しい。本当に、物事を始めるのは簡単だけれど、手じまいというか、後始末は本当にエネルギーは倍かかりますよ。

○甲賀〔河野事務所〕 我々事務局が知つたのは、昭和六十一年八月十一日で、テレビを見ていたらテロップが流れて、新自由クラブが解党。それから四日後の十五日には党大会を開いて閉じましたから、あつけないなと思ひました。でも、今おっしゃられたように、結局、残務整理が九月から四カ月かかりました。

その残務整理した資料は、ほとんど国会図書館に寄贈しました。○紅谷 河野一郎先生は、一旦は新党結成の決断をされましたが、その後とどまるという決断をされました。

河野先生は、自民党を離党して新自由クラブを結成されますが、自民党に復党するという決断をされることになりました。

○河野 そう言つちやなんだけれども、父が軽井沢で止める決意をするまでに、松村謙三さんとか大野伴睦さんとか、そのクラスの人が本当に膝詰めに出ちやだめだと説得するんですよ。今はああいう人もいないし、そこで、それじゃやめますというの

もやはり相当な勇氣ですよね。

僕が離党するときに、本当に心から止めてくれたのは、一人は松野頼三さん、もう一人は三木武夫さんでした。この二人は本気で止めてくれた。

松野さんは本当に口説き上手だから、本心じゃないと思うけれど、三カ月待って、三カ月たってこの党がよくならなかったら俺も一緒に出てやるから、党改革と一緒にやれと松野さんには言われたね。松野さんは、ちょうどその前に例の党の綱領改正のときの政調会長で随分迷惑をかけ恩義があったから辛かったね。

それと三木さん、総理大臣だからね。夜中に三木さんの家に行って、三木さんの隣に座って膝をなでられながら説得されましたよ。今は懐かしい思い出ですね。

## 《自民党復党、宏池会へ》

○紅谷 昭和六十一年七月の衆参同日選挙で、自民党は大勝する一方で新自由クラブは六議席に減らし、十年間の新自由クラブの活動に幕が下ろされました。自民党に復党されて再スタートされますが、先生は、当選されてからしばらくは派閥に入らないで、半年後に宮沢派に入られました。

当選された六人のうち、先生と鈴木恒夫さんは宮沢派で、山口さん、甘利さん、小杉さんの三人は中曽根派に入れ、田川先生は復党されないと分かれました。いろいろな経緯があつたのかと思えますが、事情をお聞かせ願いたいと思います。

○河野 少しだけ補足をします。

昭和五十八年に中曽根内閣になって連立を組むんです。田川さんが入閣して、その次に山口さんが入閣するんだけど、その頃から自民党復党の動きが非常に強くなって来る。自民党からも呼びかけが

あるし、新自由クラブの中にも、そろそろ自民党へ行つていいんじゃないかという声が出始めてきた。

その頃に、中曽根総理のヨーロッパ訪問があつて、中曽根さんから僕と一緒にいかないかと直接声がかかったんです。同行議員として七、八人行きましたかね。小渕さんが同行議員の団長で、綿貫さんや山東さんも行きました。僕はあまり行きたくないと言ったけど、山口さんなんかはどうしても行けというので連れていかれた。パリでパリ祭のパレードを見たりした数日後に、中曽根さんから、ちょっと二人で話をしようじゃないかと呼ばれ、いよいよ来たなと思つて部屋へ行つたら、こういうことを言つたんです。

中曽根さんは、私がミッテラン大統領と隣同士に座つてパレードを見ていたのを見たかと言うから、見ましたよと。君ね、ミッテランという人は社会党の人だけど、今は考え方もやや保守に変わつて大統領になった。ああいうふう人間は変わらなきゃだめなんだ。世の中も変わるんだから君も変わらなきゃだめだと盛んに言う一幕があつたんです。復党の直接的な呼びかけがあつたのはそのときです。

もう一回は、内閣改造で今度は河野が入るといふときに官邸に呼ばれ、中曽根、金丸の二人がいて、次は河野君に入閣してもらおうつもりだけれども復党が条件だ、今すぐじゃなくてもいいけれども復党の約束をしたら入閣だ。それで、冗談じゃないと喧嘩になつて、それなら、連立を解消しましょうと言って帰つてきてしまった。

そうしたら、牛尾さんを通じて、あの話はなかったことに改めて入閣要請するから入つてくれと、それが二回目の勧誘でした。

入閣して次の選挙になって、自民党が大勝して連立は解消することになるんです。そこで、牛尾さんと浅利さんを通して、あれこれ言わずに戻つた方がいいという話になつて戻るわけです。

自民党に戻つて今度はどこの派閥に入るかという話になつたけれ

ど、僕が面倒を見るどころか、みんなどんどん話が進んでいるんですよ。僕は、中曽根派の代貸しだった櫻内さんから、君は中曽根派にいて離党したんだから、復党したなら中曽根派に戻るのが普通じゃないかといって、俺のところに戻ってこいと言われた。

僕は、いろいろ考えたけれど、基本的に中曽根さんの主張と違ってから中曽根派に戻るといわけにいきませんと。すると、自民党も中曽根派も幅は広いんだし、君だって昔いたんだから戻れないはずはないだろうとか、いろいろな話になったんです。

ところが、僕は同じ新自由クラブにいたけど、山口君とうまが合わず一緒にやるのは難しい。彼はもう中曽根派に入っていたし、僕が離党した直後に、僕の選挙区の神奈川五区に、中曽根派が亀井善之君を刺客に立てているから、僕が戻るといわけにいかないでしょうと、中曽根さんにお断りした。

そのときに小杉君は、河野さんが行くところへ一緒に行きますと。小杉さん、鈴木恒夫さんと僕と三人がどこへ行くか考えようということになっていたけれども、今度は小杉君が中曽根さんに呼ばれて、中曽根さんと懇意だった東急の五島昇さんの二人から、中曽根派へ来るなら東急は全力を挙げて応援するけど、そうじゃないならだめだという話をされた。小杉君は自分の選挙区は東急沿線で選挙に影響があるので考えなきゃいかぬと言うから、それは考える必要はないから中曽根派へ行ったらいいじゃないかという話をして、小杉君は中曽根派へ行くことになって、鈴木君と僕と二人だけが残ったわけです。

みんな宏池会へ行くだろうと思っていたけれども、宏池会の中で反対運動があったんです。それはやはり加藤紘一君が宏池会のプリンスだから、僕が行くと僕の方が年も上だし当選年次も上で、加藤君の上へ行くかもしれないと。それで、加藤君本人はどうかかわらないけれど、取り巻きが心配して河野を入れるなという話になった

んです。

当時、加藤君をかわいがっていた伊東正義さんに呼ばれて、君は小なりといえども一党の党首をやったんだから、自民党へ戻ってどこの派閥に行くなんて言わないで、一人でいたらいじやないかと言われて、一人でいますからと言って半年くらい一人でいたんです。そうしたら、宮沢さんがとても心配をして、宏池会の中には反対もあるけど、それは僕が抑えるから一緒にやろうじゃないかと改めて誘われた。翌年の一月には、僕の選挙区の後援会の総会へ、堀内光雄さんが心配して宮沢さんを連れて来てくれたんです。宮沢さんが、かねてから河野さんを評価していて一緒に政治活動を行いたいと思っているの、派閥にお迎えしたいと選挙区の人の前でいきなり言って、それで入ったんです。

鈴木君と一緒に入ったけど、最初は結構冷やかかなんですよ。でも、ありがたかったのは、名誉会長だった鈴木善幸さんがとても穏やかに迎えてくれて、宏池会の昼飯会に行くと、河野君ここへ座りたまえと、一番正面の席にと言うんです。村山達雄さんとか先輩がいっぱいいるわけです。宮沢さんが言うならちよつと遠慮しようと思っただけれど、善幸さんが言うから、いいかなと思って、上から五、六番目の席にいました。

○紅谷 そのときに、加藤先生はどこに座っていたのですか。

○河野 加藤君は、世話役だったから角にいたんです。後になってそれが非常に役立つときが出てくるんだけどね。

宮沢さんは、宏池会というのは池田勇人さんがつくった派閥で、池田行彦君がオーナーの婿だから、彼をないがしろには絶対できない、加藤君よりも池田君を大事にしなきゃいかぬという気持ちで宮沢さんは持っていたんですよ。

大宏池会構想という宏池会を一つにまとめようという構想があった、僕なんかもずっと後になってから呼びかけられて、僕は、麻生



さんをキャップにするならまとめてもいいという話をしていたら、宮沢さんに呼ばれて、麻生君もいけれど、宏池会やはり池田君の意見を一番尊重しなきゃいかぬから、しばらく余り動かないでくれと言われた。しばらく経ってまた呼ばれて、池田君はまとめる必要がなく、加藤君一本やりだったという話だったので、大宏池会構想というのは、そこで僕はもう止めたんです。

今でも大宏池会構想はあるけれど、その当時の大宏池会構想は、宏池会の本来の主張をきちんと見直して、それを党内でもっと強く言うためには数が要するという構想だったんです。

その頃の宏池会は、鈴木善幸さんがいて、その後、伊東正義さん、田中六助さん、佐々木義武さん、さらに村山達雄さんとか大蔵省のOBがいっぱいいて、昼飯会では減税か増税かとか税の話ばかりだった。

○紅谷 少し戻りますけれども、中曽根派に戻られるのか、宮沢派に入られるのかという話以外に、今までの主張や人的関係から、河本派からの誘いはなかったのですか。

○河野 ありました。これが一番辛かったね。それは、河本さんを担いだ経緯があったし、河本さんの方も俺と一緒にしてもおかしくないと思っていただろうし、それから、鯨岡さんや坂本三十次さん、塩谷さんという友人が多数いたし、ここに行けば居心地は一番良かったと思うね。

僕が宏池会へ入るのは加藤君がとても慎重だし、先に入っていた西岡さんも田中六助さんの直系になっていて慎重で、加藤君は伊東正義さんとよかったから、田中さんや伊東さんも非常に慎重だった。その中でみんなは、宮沢さんが伊東さんなんかの反対を押し切って突っ張るはずはないと思っていたら、宮沢さんだけ頑張ってくれて入ったんです。

そういう状況の中で、自民党に復党して宏池会に入ったけれど、

何の肩書も仕事もないんです。宮沢さんから、しばらく一人でゆっくりされたらどうかとか言われたけど、そうもしてられないと思っていたら、派からは選挙の応援に行けと言われ、そんなことばかりやっていましたね。

○紅谷 宮沢先生の推しで宏池会に入られたということですが、宮沢先生とはお父様の時代から縁があったようですね。

○河野 私の父は官僚嫌いで、大蔵省というのは大嫌いだっただすよ。それなのに、春秋会という会を立ち上げて、その派閥創設の記念の勉強会に、春秋会から次の選挙に出るといって人が集まって、相当な人を呼んで講演をしてもらったのですが、どういうわけか宮沢さんを選んでいました。いまだに、どうして議員でもない宮沢さんと呼んだのかわからないんです。

宮沢という人は池田さんの秘書官で、そういう縁もあって抜てきされて経企庁長官になって、やはりちよつと抜けて優秀だったんだと呼ばれたのかな。

そのとき、僕はサラリーマンで、ああ、宮沢という人が来るんだという程度の関心で、そこで初めて宮沢喜一という名前を聞いたんです。その次に会ったのは宮沢さんに言わせれば、おやじが死んだ葬式のときだと。宮沢さんは、あのとときのあなたの話しっぷりが何とも印象が良かったと繰り返し言われたけれども、僕は全然覚えてないし、宮沢さんがいたことも知らない。

その後は、自民党の綱領起草委員会の小委員長の座長を松野さんにやれよと言われたときに、宮沢さんからは、憲法問題が話題になるだろうけれども、絶対にさわらぬ方がいいですよとアドバイスを受けたりました。

さらに、ロッキード事件が起きて田中派が潰れて後をどうするかというときに、自分たちでこれならいいという候補者を担げという話になって、宮沢さん、石田さん、藤山愛一郎さんの三人を担いだ

んですが、三人とも断られたということもありました。

○紅谷 離党されていた昭和五十一年から復党されるまでの十年間は、宮沢先生とお会いすることはなかったのですか。

○河野 時々会っていましたね。離党するときには相談に行つて、復党するときも相談に行つていたんです。その間は余り会つたという感じではないけど、お互いが物すごく関心を持ち合つて、宮沢さんが新聞の座談会で新自由クラブを評価するとか言つてくれたのを、僕は新聞の記事を見てとても喜んでみたり、僕が何かやつてゐるのを宮沢さんは、あれはいいとか悪いとかと言うようなことがあります。その間は、余り宮沢さんの家まで行つて上がり込んで話をするようなことはなかったですけどね。

宮沢さんと僕は衆議院では同期なんです。昭和四十二年の当選ですが、宮沢さんはそれまで参議院を二期やつて、衆議院に鞍替えしたときに一緒に当選したんです。だから、四十二年組というときには名簿に宮沢喜一とあつたけれども、宮沢さんは参議院をやつて大臣もやつていたので、僕らが一年生議員で拓世会という会を作つて佐藤批判をしているときには出てこないで、全く高みの見物をしていたんです。

宏池会に入れてもらつて、最初から余り居心地が良かったわけじゃないけど、あちこちの選挙のたびに応援に行つて、応援してもらつた連中は選挙が終わると好意的になるといふようなことで、選挙をやるたびに大分変わる。だけれども選挙をやるまでは、新自由クラブには随分厳しく批判されたという恨みがあるから、なかなか馴染めない。

それから、田川さんに言われて、新自由クラブで落選していた候補者を、復党するときに連れて入つたんですが、選挙区では自民党に相手にされないんです。東京の伊藤公介さんは対立候補がいたし、大阪の中馬弘毅さんは大阪府連が絶対入れないと言う。そのう

ち、今度は神奈川県では小此木県連会長が河野一派は絶対入れないと言ひ出した。

僕が自民党へ復党するときに、僕と中曽根さんと党首会談をやるんですよ。竹下幹事長も入り、そこに小此木県連会長も同席して、各県連で入れるの入れないのでごたごたしないようにと竹下さんが言つてるのに、選挙の恨みだからしようがないんだろけれども、あちこちで意地悪されましたよ。

それを田川さんはよくわかつていて、君が戻つて面倒を見るよと言われたから、随分あちこち頭を下げて頼んで回つたけど、半年前まではぼろくそに言つていた相手だから結構厳しかったんだ。そういうことがあつたけど、何とか一応収まつたんです。

宏池会というのは公家集団と言われて、喧嘩しない戦わない集団なんです。それで、戦わない集団じゃだめだ、戦おうと随分言つて回つた。だから、選挙というと必ず手伝いに真先に行けと言われて、宏池会でも選挙の弱いところばかり回りましたよ。

○紅谷 そのような経過があつて、自民党に十年ぶりに戻られたのですが、自民党は変わつていたのでしょうか。

○河野 全然変わつていなくなつたね。復党したときに、なぜ復党したかと聞かれて、自民党も俺らが離党したころとは全く変わつて、良くなつた、きれいになつたから戻つたんだと言つたけれども、実際は全然変わつていなくなつたね。

○紅谷 新自由クラブを経た十年間で、自民党に対する見方は変わったのでしょうか。

○河野 自民党という党は、トップによつて変わるんですよ。だから、大平自民党のころは随分変わったなというふうに思いました。それが、中曽根自民党になつたらやはり昔の自民党だという感じですよ。

ただ、その中で後藤田という人だけがちょっと異質だったんです

ね。中曽根内閣の官房長官をやられて、僕が科技厅長官で入閣したときにも、後藤田さんはいろいろ話を聞いてくれ、後藤田さんの主義主張があつて、そこはすぐ救いがありました。

### 《予算採決の本会議欠席》

○紅谷 竹下総理は、当時の安竹宮と言われる、安倍、竹下、宮沢の三人の候補者から、中曽根裁定で昭和六十二年十一月に誕生しました。自民党内では待望の大派閥の総理でしたから、長期安定政権になるだろうと思われていたのですが、ここでリクルート事件が起こります。

竹下総理は、中曽根内閣での売上税の失敗の後すぐに消費税三%を実現し、本格政権という流れの中で内閣改造をしましたが、リクルート問題の広がりや複数の閣僚が就任直後に辞任し、予算委員会では中曽根前総理の証人喚問要求も出てきて、竹下内閣の内閣支持率が三%台にまで落ちてしまいました。

平成元年度予算は、リクルート問題、中曽根証人喚問問題で紛糾して終わりが見えない状況でしたが、竹下総理が四月二十五日に辞意表明をし、自民党は一気呵成に採決という流れになっていきましたが、その予算を採決する本会議を先生が欠席されたわけですから、その経緯をお聞かせください。

○河野 そこは少し記憶が飛んでいますけれども、今言われたとおりですよ。

中曽根長期政権は党則を変更してまで延々やったけど、偉いというか後継者をちゃんとつくったんです。竹下さんは大蔵大臣を、安倍さんは外務大臣を、それから宮沢さんは総務会長だったか、とにかく三人ともちゃんといろいろな仕事をさせたから、その安竹宮の三人は誰がなつても完全にリリースできるだけの肩ができて準備万

端でした。

ところが、不思議なのは三人で決めろという話になって、三人が一つの部屋に入って二日も三日も話をしたり、ゴルフを一緒にやるとか何やるとかしたけれど、結局決まらない。

それで、中曽根一任にするわけです。中曽根さんは竹下さんを後継に指名して、それだけでいいのに、安倍幹事長を指名し、宮沢大蔵大臣も指名する、そういう状況で竹下内閣ができた。そんな状況だから、その三人が中曽根証人喚問なんかを認めるはずがないんです。

あのときの社会党は強かったですから、中曽根証人喚問をやらないうと予算の採決に絶対応じないと頑張るんです。僕は総務でしたが、総務会ではもつと果敢にいきばきやれとかいう議論が出て、最後の段階で、安倍幹事長から、万策尽きた、これ以上彼らの言うとおりにできないから、ベルを押し強行をやるというんですよ。

鯨岡さんと僕は反対だ、本予算を野党欠席のまま採決するなんていうことは前代未聞で、やっちゃだめだ。社会党が頑張るなら、ここは発想を変えて、中曽根さんに証人喚問に出るように幹事長が説得すべきじゃないかと言ったんです。安倍さんは、そんなこと言っちゃってできないよと言いつつ押し問答になったんです。そうしたら、伊東総務会長が、今の話もあるから、中曽根さんにもう一回言ってみてと言つて総務会が休憩になった。それで会館の部屋にいたら突然予鈴が鳴つて本会議だというんですよ。何だ、総務会で何の経過の報告もないのかと思つたけれども、安倍さんが中曽根さんに出てくれなんて言うはずがないけど、竹下総理は辞意表明をして、相当犠牲を払っていたから、どうしても本予算の採決をやるというわけなんです。

そうしたら、鯨岡さんと議員会館の玄関先でばったり会つて、鯨岡さんは悠々としていて、こんなにお日様が高いのに強行採決もない

ものどかぶつぶつ言っているんです。それより中曽根証人喚問はどうなったんですかと云ったら、やらないで本会議を強行するらしいから俺は帰るから君も一緒に来いと誘われて、車に乗ろうと思つたところへ鈴木恒夫さんが運悪くやってきた。恒さんはどうするんだと言ったら、いや、本鈴がと。本鈴も何もこんなばかげたところへ行っちゃだめだよと言ったら、恒さんも止めましようと言つて会館へ帰つて、僕は鯨さんの車に乗つたんです。どこに行くのかよくわからなかったんですが、ニューオータニのロビーの刀屋さんに行つたんです。そこは鯨さんの行きつけの店で、刀を見ると心が洗われるとか言いながら、刀の講釈を聞いているうちに本会議が終わっちゃつて、欠席。

そうしたら、えらい勢いで怒られた。でも、本会議に欠席した人は何人もいて、金丸さんなんかも欠席だったんだ。

○紅谷 自民党の欠席者は十六名いて、金丸先生は海外旅行中という理由でした。

○河野 そんなにいたんですね。宏池会でも何人かいたのに、僕と鯨さんだけはえらく怒られた。そのときは幹事長は安倍さんだったけれども、もう体が悪かったから橋本龍太郎幹事長代理が欠席者を呼んで嚴重に注意するという話になって、一等先に僕が幹事長室に呼ばれて、洋ちゃん、竹下だつて本当に苦労してやっているんだから、いいかげんにしないでだめだよ、これは相当しこるから簡単に考えちゃだめだ、相当用心しないとだめだよと懇々と云われて、まあ、しようがないかといつて、そこはそれで終わつたんです。

○紅谷 あの本会議は、竹下総理が辞意表明をして臨んだ、いわば職を賭して予算を上げるといふものでしたから、自民党は一気呵成にいく一方で、野党の抵抗は非常に強く、本会議の採決は、議長室の前が野党議員や秘書の座込みで、当時の原議長がなかなか本会議場に入らず、最後は腕を引っ張られながら入った写真が残つていま

す。

ですから、そこまでして自民党は本会議に臨んだというので、後に竹下派から強い反発があつたようですね。

○河野 本予算の採決を与党だけで行つたというのは前代未聞だつたと思うな。

法案の採決ではあつたけど、本予算の採決を与党だけでやるという過去の例はないと聞いていたから、そんな無茶をしちやいけないう言つたつもりだったし、今でも一大汚点を残したんじゃないかと思つている。でも、それは国対筋から見れば、竹下は命を削つてやつたのにけちをつけるのはけしからぬというので、本当に怒つたんだよね。

僕も鯨さんも、与党だけで採決をして上げるのは良くないから、もっと社会党を説得するなり中曽根さんを説得するなりすべきじゃないかと言つていたので、消費税を含めた予算に反対したと言うけど、予算に反対したわけじゃなく手続きに反対したんだと言つても、なかなか理解されなかつた。その結果、後々随分響いたんです。

○紅谷 今おっしゃるように、総予算の採決で自民党単独というのは初めてでしたから、当時の野党第一党の社会党の抵抗が非常に強くて、多賀谷副議長が辞意を表明する。その後、原議長、山口敏夫議運委員長も辞めることになり、三役揃つての辞任でした。

○河野 そうでした。とにかく、与党だけで予算の採決をすることはよくないというのが僕の主張だったんです。

○紅谷 後に河野先生が議長の時にも、やはり与党単独での採決というのはダメだと随分おっしゃっていました。

○河野 僕が議長のとときには共産党や横路副議長などが出てくれたから単独にならなかつたんだ。議長としては野党も入つて議論をしてやつてほしいと思つていたけど、最後に一回だけあつたのかな。



僕と山口君以外はみんな自民党一筋で、もちろん社会党も公明党もいる中で、僕だけが与党も野党も両方経験し、ある意味じゃ二十五年前で一番いろいろな経験してきたなという感じで、改めて政治活動を、一からというよりはむしろマイナスからの出発という状況でした。自民党に十年いた間は文教族でしたが、そこから自民党を離れたので、みんなはそれぞれ専門分野があつて、農林の専門家とか建設の専門家とか財政の専門家とか、僕は何族という専門職がないんですよ。そういうことを含めて、全くゼロから始めなきゃいけないという気持ちでした。

だけでも、相変わらず政治は自民党の一派支配で、派閥は大部分崩れかけていましたけど、それでもまだ派閥の領袖はみんな総理大臣を狙っていたから、総裁選が一番の政治的な戦いの場だったし、難しいときでした。

○紅谷 ロッキード事件を契機に自民党を出されましたが、戻られたらリクルート問題。戻ったはいいけれども、やはり昔のロッキードの頃と重なるものがあつたと思えますが。

○河野 同じようでしたね。リクルート事件は、僕らの同僚も随分傷ついて、一番代表的なのは藤波さんですよ。

自民党の中で、将来を嘱望されたと思うようなのはほとんどリクルートが押さえていたわけで、ある意味じゃ、僕は離党していなかったから、あの事件にひっかかっていないという感じがあつたぐらいでしたね。

議員では藤波さんと公明党の池田克也さんの二人が起訴されたけど、秘書絡みでは多くの議員の名前が出て、絡んでいたことだけは間違いないから、みんな嫌な思い出だつたんだよね。

リクルートだけじゃなくて、別の事件もあつて、あのころはバブルで、やたらに、それまでと一桁二桁違うような金が動き回っていましたね。

少し時系列がはつきりしないけど、北海道にホワイトドームを作るとかという話で、阿部文男という人がひっかかった事件がありました。彼は宏池会だったけど誰も面倒を見る人がいなくて、秘書が僕に助けを求めてきて困ったことがありました。

○紅谷 共和事件で、平成四年でしたから同じ時期ですね。十年に一度は大きな疑獄事件が出てくると言われていましたが、それ以降はありません。ですから、ちょうど先生が自民党に戻られ永年表彰を受けられた頃は、昭和六十二年の売上税、六十三年の消費税、平成元年のリクルート、そして平成三、四年にPKOがあり、国会は徹夜国会の連続で、与野党の対決が最も激しい時期でした。

### 《PKOと日本の国際貢献の在り方》

○紅谷 PKOと日本の国際貢献の在り方については、PKO法案が、宮沢内閣の平成四年六月に成立しました。このときは加藤官房長官ですが、実際に派遣されるようになったのは河野官房長官になつてからです。

PKOについては、海部内閣の頃からの流れがありました。平成二年の湾岸危機を発端とする湾岸戦争に、米国を主力とする多国籍軍を支援するため、平成三年度予算を内閣修正し九十億ドルを支出するという、政府にとつては非常に大きな決断がありました。ところが、資金は出したけれども国際的な評価は余り得られなかった。

つまり、物的支援やODA、それから開発途上国の支援とかでお金は出すけれども、それが国際貢献としては通用しないような時代になつてきたと言われました。

それを受けて、海部内閣でPKO法案を出しましたが継続になり、宮沢内閣が引き継いだという流れでした。ねじれ国会の中、宮沢内閣では公明、民社の協力を得て、参議院で修正の上で衆議院で可決

して成立させたという大変な国会でした。

当時、先生は外交調査会長でしたけれども、PKO法案を、どうみていらしたのでしょうか。

**○河野** 少し戻ると、竹下政権がリクルートで倒れて宇野内閣になったけど二か月余りで辞め、それで海部内閣になる。人材が全くなくて、まさかと思うような若いところまで探しまくって海部総理になるんです。あのときの自民党は、金丸さんの一強支配で竹下さんなどが心配しましたが、殆ど独断で海部さんになるんです。

海部内閣でPKO法案が出されるけど、衆議院で継続扱いになって、海部内閣は総辞職して宮沢内閣になりました。そこでは、加藤さんが官房長官になって答弁を非常にうまくやられた。

当時の日本は、国連の分担金もアメリカに次いで二位になるし、ODAの拠出も世界で一番か二番になるところまでいって、金で国際貢献は済ませて、割と国内的にも理解されどんどん行っていたわけです。

ところが、湾岸戦争になって、金を出せばいいというものじゃない、日本は金を出すけれども汗をかかないなどと批判され、海部さんはびっくりして、しかし人を出すわけにいかないからやはりお金でやろうというので、国民一人頭幾らと税金を上げて拠出するわけです。それで予算を修正して、金は出すから海外派遣には行かないようにしようとしたけれども、党内的には、やはり出したいという意見も相当あったんです。僕がいた外交調査会でも、ODAの拠出はやるけれども、それだけでいいのかという議論もやはりぶつぶつとありました。

金を出せばいいというものではないけれども、人を出すわけにはいかないから抑えていたけれど、結局、アメリカのプレッシャーがあつて、PKOをやらざるを得なくなった。あの頃、PKOが国際的に流行りでした。しかし、PKOといっても元々PKOは何だと

いう話からするわけで、PKOは別に鉄砲を撃つわけじゃないとか、それは完全に内乱の双方の話がついてから間に入ってやるのだから大丈夫だと、しかも、あのときは、PKOではなくPKFでなきゃ駄目だとかというガリ国連事務総長の話があり、それを抑えながらPKOをやるわけです。

だから、党内的には、宮沢さんとか後藤田さんとかが自衛隊の海外派遣は絶対駄目だと言ったけれども、結局抑え切れなくなって、そのときには小沢さんたちが旗を振って国連軍が行くときには行ってもいいじゃないかみたいな説明もあつて、最後に納得したのは、どうせ国連軍なんてできっこないし、作ったからといって直ちに海外派遣ということにはならないから、というような説明を外務省がしたんじゃないかと思うけど、それで皆が自分の不安を抑え込んでPKOをやる。

それは、憲法違反にならないという話になったんですよね。

**○紅谷** そのために国内法の体制を整備しなくてはならないので、PKO法案を制定する必要があるということでした。

**○河野** 一方では、国連軍なんてできっこないから、そんなのやつてもしようがないよという話があつたり、いや、できるかもしれないから準備のためにやっておかなきゃいけないという全く仮説というか、もしそれができればそうなるよというような話でね。PKO法案を作ったからといって、直ちに日本が出ていくというようなことにはならないだろうと言って抑えていたんですね。

**○紅谷** PKOについては、宮沢総理と国連のガリ事務総長が、いろいろ話をされていたと思います。

**○河野** 宮沢内閣になってから、ガリ事務総長が海外に自衛隊を出してくれと言ってくる。宮沢さんは非常に丁寧に話をして、我々は国際貢献は喜んでやりますが、憲法上の制約があるから海外派遣はできないとはつきり言って、ガリも最後は分かりましたとなった。

一時は、憲法が邪魔でできないなら憲法を変えたらどうかみたいな発言がアメリカからあったりしたけれど、それは全部無視していました。

○紅谷 ガリ総長からは、P K Oの問題だけではなく、国連の分担金の問題や日本の常任理事国の問題とかを絡めていろいろ要求されたようですね。

○河野 それは宮沢・ガリ会談でかなり話をしました。僕は同席していたのですが、最初から最後まで英語の会談でした。宮沢総理は、すぐく丁寧に完璧に説得し切って、憲法の制約でできないものはないけれど、国際貢献は最大限やりますということまでは言いました。ガリも、分かったからP K Oだけはやってくれという話になったんです。

国連では今でも日本は敵国条項に入っているから、僕らも国連に敵国条項ぐらい外せと盛んに言ったけれども、それは出来ないんですよ。

○紅谷 P K O法案の国会審議は、海部内閣でP K O法案の前段の国際連合平和協力法案を出しましたが、衆議院で廃案となりました。その後、P K O法案が提出され、引き継いだ宮沢内閣で激しい国会論戦が行われました。

○河野 P K Oは、海部内閣のときには、党内的には宏池会系の人などは割と消極的だったんです。表立って言ったわけじゃないけど消極論があつて、海部さんに引つ張っていく力も余りなかったから結局できなかった。宮沢内閣になって、海外派遣はやらなければいけません。国際貢献はやるということで腹を決めて踏み切ったから、宏池会もその気になり加藤紘一君が張り切った。それで、参議院もうまくいったんじゃないかな。

○紅谷 国会での経過としては、平成三年秋の臨時会で衆議院では可決しましたが参議院で継続となり、翌年の常会で参議院で修正し

衆議院で可決成立しました。野党は絶対反対でしたから牛歩で抵抗し、参議院本会議は五日間、衆議院本会議では三泊四日でした。さらに、法案を絶対阻止するというので、社会党と進民連の百四十人ほどが議員辞職願を出して、櫻内議長預かりになりました。

○河野 激しかったよね。自民党は、通すために国対委員長を増岡さんから竹下派の梶山静六さんに替えたりした。

委員会では、委員長が委員長室に入ったところで開会宣言をして、大混乱の中で採決したよね。

○紅谷 委員長は、今の林芳正外務大臣のお父さんの林義郎さんで、委員長席に座れなくて、第一委員長室の端に追いやられ、そこで開会を宣告し、採決しました。

○河野 あの頃、国際貢献をやらなきゃいかぬというのは固まっていたけれど、何をやるかというのが議論だった。

武村君は、国際貢献といったって鉄砲を担いでいくことが国際貢献じゃなくて、経済的なものもあればいろいろあるものがあると、しきりに言っていましたね。

○紅谷 P K O法案成立後に内閣改造があつて、先生が官房長官に就任され、実際にP K Oの派遣になっていきます。平成五年に、カシミアへの派遣になります。そこで、文民警察官の高田さんが亡くなり、その前にP K O要員ではないのですが、国連ボランティアの中田さんが亡くなったという事件がありました。

○河野 官房長官でありながら、国連ボランティアというのは全く視野に入っていなかったんです。突然、国連ボランティアの日本人が殺されたというのでびっくりして、そんな事もあったのかみないな。それは、うかつといえどそうなんだけれども、驚いた。

亡くなった中田さんという人は立派な青年で、学生時代から国際貢献をやると言っていた。遺骨を引き取りに行ったお父さんが、彼は国際貢献をするのが自分の人生の目的だと言っていたから、そこ



で死んだから本望のはずだと言われるんですよ。

僕は、相当何か言われるのではないかと思っていたから、本当に驚いたよね。遺骨を抱いて帰ってきて、どこの記者会見でもすぐ立派な発言をされるんです。

○紅谷 その際に、PKOの派遣である自衛隊員や文民警察官は、原則安全なところに行くけれども、国連ボランティアの人たちは危険なところに行くんじゃないかという批判的な意見があったと思います。

○河野 国連ボランティアで行くと、日本人もどこの国の人も全部一緒に扱うわけだから、カンボジアの国内どこへでも派遣されていく。自衛隊は安全なところに行かないのが原則だと言っていたから、僕はそれはとても困ったんですよ。

というのは、カンボジアへ出すのは、アジアのこういう紛争に日本は貢献していないから、ここは進んで貢献するということで納得した。それからもう一つは、国連の事務次長の明石康さんがカンボジアの国連代表だから、明石を支えなきゃいけないと同時に、明石が日本側の言うことを大体聞いてくれるよという話で、自衛隊を出すに当たっても、余り衝突しないようなところにしろとか、いろいろなことを言うんだ。明石さんも困って、日本人だけ特別扱いするわけにいかないけど、私も日本人ですからみたいなのを言っていたんだよね。

明石さんは一番上にいたけれども、人の配置や何かを実際に担当していたのはみんな外国人だったから、全然そんな話は通用しなかった。それでも、結局自衛隊はとて安定した地域に行ったんですよ。自衛隊は自分で行って陣地を造って、井戸を掘ったり風呂まで設営したり、自分で御飯を炊いて食べるわけだから、完全な自己完結型だったんです。一方警察は、警察庁が各県の県警に連絡をして優秀な人材を公募しろといって各県から集めて、七、八十人行った

んですかね。

高田さんは岡山県警でした。最初に僕らが聞いていたのは、カンボジアでは交通指導員若しくはカンボジア警察を指導するのが主たる仕事ということだったけど、行ってみたら全然そうじゃなくて、四、五人がチームで日本人は一人で他は外国人、それがカンボジア全土に散ったんです。

ひと頃はうまくいっていると思っていたけど、後で聞いてみたら、全然連絡も取れなくて、食うにも困った時期もあったというんだ。

警察は、食えなくなったり、海外でそういう仕事をするという訓練を受けていないから、言葉は通じないし、一時は本当にかわいそうに痩せ細ったらしいんです。

連絡が取れずそういう状況が分からないというので、通信機器を一人ずつに持たせたりした。そのうちに、周りで銃声が聞こえたとか、何か変なのがうるうるしていて危ないとかと言っているうちに高田さんがやられたんですよ。

プノンペンと話をしてもさっぱりがちが明かないので、宮沢総理に、これは何とかしなきゃ駄目だと言ったら、総理は誰かをやりましょうと。それなら私が担当だから行きますと言ったら怒られた。君は本部長代理だからじっとしていて、誰か派遣してくださいと言われ、警察担当の村田敬次郎国家公安委員長にお願いしたら、二つ返事で私が行きますと言って、現地へ行くんです。行ってみると、現地は意思の疎通がないから相当ひどかったようで、村田さんは随分苦労されたらしい。

プノンペンへ全員呼び戻して話をしようと言ったら、交通手段や警護の問題があるから戻ってこれず、なんとか連絡だけはできるようにしたけど、みんな大変だと泣き言を言う、だんだんそういう現地の話が家族に伝わってくるようになって、亡くなった高田さんは岡山県警だから、橋本龍太郎君が僕のところへ来て、河野さん、警

察官は現地で大変だ、よほどしつかり手当てしないとえらいことになるよと言ってきました。

○紅谷 四月に中田さん、五月には高田さんが亡くなり続きましたので、PKOは安全なのか、このまま継続するのかというような話にはなかったのでしょうか。

○河野 ゴールデンウィークで大臣がみんな外遊して、宮沢総理もオーストラリアかどこかへ行って連休の途中に帰ってきた。僕が羽田へ迎えに行ったら、君も休暇を取れと言われるので、僕は軽井沢へ行ったんです。

ところが、行った翌日に、カンボジアの様子がおかしいから東京に戻ってくれと言われたけど、汽車はいっぱいで車は大渋滞。結局、SPと二人で汽車で立ったまま帰って来ました。

官邸に行ったらマスコミに囲まれ、こんなに死んだのだからカンボジアから引き揚げろというんです。二、三人死んだんじゃないかというのが第一報だったんですよ。三人も死んだら、帰らざるを得ないかもしれないと思いつながら官邸に入ったら、死んだのは一人で他にけがをした二人は国境からタイ側へ逃げ込んで、タイの病院にいたんです。そんなことで情報はカンボジアだけじゃ分からなかったけど、森山眞弓文部大臣が外遊でタイにいて、病院へ行ってくられて、本人たちはショックを受けていたけど、落ち着いてきて元気だから大丈夫だと言ってきた。

総理に報告したところ、亡くなった方には気の毒だけれども、一週間後に選挙だから、ここまで来たらやり遂げるまで引き揚げはしない、このままいくという決意でした。

もう一つ心配なのは、日本から出している選挙監視団がパニックを起こす可能性があるから、それを落ち着かせなきゃだめだ。

投票所は大体はお寺で、寝泊まりする場所がないんですよ。そこで野宿して監視するというんです。周りにポル・ポト派がいて、選

挙は絶対やらせないとか投票所を爆破するとかいう話が伝わってきて、これは大変だ。

監視員が四十人も行っているのをどうするんだというので、こっちは大変な騒ぎになったんです。憲法違反になるかもしれないけれども、自衛隊がいるんだから監視員の護衛をさせる、鉄砲を持って全部回りに行けとか、自民党の部会はいよいよ言うわけです。

だけれども、そんなことは憲法上できないから、宮沢さんの決裁で、自衛隊は輸送はできるといふふうになっているので、輸送だと称して投票所の周りを空のトラックをぐるぐる走り回らせる事にしたんです。それで、撃ってきたらどうするかとか、撃たれたらどうするかとか、想定問答を随分やりましたが、全部杞憂に終わって選挙は大成功で終わるんです。

だから、投票日にカンボジアの選挙が始まりましたとテレビに映って、着飾った人が行列して投票所に向かっていますという画面が出たときは、みんな涙が出ましたね。

○紅谷 最初のPKOの派遣で死者が出たわけですが、PKO五原則がありながらも、結局、現地に行ってみないと、どういう状況なのかよく分からないというのが実態だったのですか。

○河野 そうでした。野党は、もう五原則が崩れている、崩れたら引き返すと言っていたじゃないかと言っけれど、実際は、さっきの話のように各国の四、五人がチームになっているのに、ここで日本人だけ帰すなんというのはできないだろうと言いたいけど、そうは言えないから、五原則が崩れている、崩れていないという水かけ論ですよ。

その途中でまた困ったのは、そういう議論をしている途中に、自民党外交部会でモザンビークにもPKOを派遣しろという話になるんです。

外務政務次官の柿沢弘治君がモザンビークまで行って見えてきて、

五原則は完全に満たしているから当然行くべきだと言いに来たので、僕は絶対駄目だと。薄氷を踏む思いでカンボジアのPKOをやって、国民もどうなるかと見ている途中なのに、あっちもこっちもというわけにはいかなから駄目だと言ったけど、自民党からは出さないのは何でだと相当言われて、最後は、河野が官房長官をやっているから駄目なんだと、外務省はさんざん言われた。

宮沢さんも初めは絶対やめようと言っていたのに、途中で出したらしいんじゃないかと言って結局出すんだけど、出すときには完全にモザンビークはある意味で勝負がついて、もう何もないというときまで待つて出しましたね。

○紅谷 モザンビークの後も次々にPKOで派遣され、当時は相当な議論がありました。それから三十年ほど経過して、今は自衛隊の海外派遣という議論は、国会ですっかりなくなってしまうように思いますが、いかがですか。

○河野 今は海賊の見張りでジブチなんかに行っていますよね。あんなのは終わったらさっさと帰したらいいと思うし、なるべくあっちにはいない方がいいと思う。ゴラン高原や南スーダン、大分出ていたんですね。安保条約もそうだし、こんな議論をやっていた頃は、もっと社会党がしっかりしていて、毎国会相当議論があったんだけど、最近はどう全然なくなってしまうたね。

議論をしないと、緊張感もなくなるし何でもいいみたいになつては良くないと思いますね。

○紅谷 国会で議論するというのは国民に対する問題提起でもあるわけですから、それがなくなつたと思われる現状はいかがでしょう。

○河野 それは、議論の結果、かなり難しい話になつちゃう、例えば安保条約だって、どこまでが限界かという議論になつたり、議論のための議論みたいなことになることもあるんだけれども、それで

も、ある程度投げかけるといふようなことが大事だと思うんですね。そういう意味では、あの頃はすごく緊張感がありましたよ。

官房長官で国会では繰り返し返し答弁していたけれども、相当苦労しました。

#### 《内閣官房長官として》

○紅谷 宮沢内閣は平成三年十一月から、解散した平成五年八月まで、平成四年十二月に内閣改造があり、そこから河野官房長官として宮沢総理を支えていかれます。

八か月の在任期間でしたけれども、随分大変な時期でした。お話ししていただいたPKOの問題、平成三年に消費税の引き上げがあり、佐川問題、極め付きが政治改革の問題で、官房長官として難問が山積する中で宮沢総理を支えていくのは本当に大変だったと思います。

しかし、リクルート事件の余波などもあり、宮沢内閣の支持率はどんどん下がっていったという状況でした。

○河野 支持率が一番高いときで四七%でした。海部内閣から宮沢内閣になって、PKOなんかやっている間に、自民党は政治資金のスキヤンダルが次から次へと出てきて、極め付きは宮沢内閣の予算が上がったその日に金丸逮捕ですからね。

そんなことがあって、宮沢さんに対する金丸さんのプレッシャーはなくなつたけれども、党内がばらばらになつて一致して何かやるという結束力が全くなつていた。宮沢内閣で僕が官房長官になつたのも、金丸、竹下の呪縛がなくなつたからだろうけれど、それまでは河野入閣は絶対駄目と言われていた。幸か不幸か、金丸さんの失脚で宮沢さんが何でもできるようになった。

僕は、官房長官で一番びっくりしたのは、宮沢さんから、河野さ

ん、官房長官をお願いしますよと組閣前日に言われて、いよいよ組閣を始めるから来てくださいと言われて行ったんです。組閣本部には宮沢さんが座り、三役の梶山さん、三塚さん、佐藤孝行さんがいて、その横に僕が座った。

そうしたら、そこへ渡辺ミッチーが何で俺が組閣本部に入らないんだと怒鳴り込んで来るんですよ。それはミッチーがその改造前までは副総理だから、それで座り込んでんじやうんだ。

駄目だと言うわけにもいかない中、宮沢さんが組閣名簿を配ったんです。組閣本部で名前を入れていくと思っていたら、全部名前が入っている紙を配ったんですよ。

するとミッチーが、運輸と郵政は歴代俺のところを出しているのに、今回出さないなら俺はもう入閣しないからと、凄い剣幕で怒った。梶山幹事長は、人事権は総理にあるんだからと言ってミッチーのフォロウをしないし、佐藤さんも三塚さんも一言も言わなかった。宮沢さんはしばらく黙っていたけれど、ミッチーが言うだけ言って終わりになったら、まあこれをお願いします、いいですねと。そして、すぐこっちを見て、官房長官は発表に行ってくださいと。それで、そのまま発表だった。

ミッチーがいろいろ言った中で、船田さんは竹下派の順番じゃないのに受けるのかとか言ったら、宮沢総理は、受けますから大丈夫と言った。つまり、事ほどさように、竹下派の力が落ちていたんだね。もちろん加藤官房長官が相当やっさに違いないと思うけれど、その時にちよつとびっくりしましたね。本当に、党内的には経世世の力が落ちてきたと感じた場面でした。

竹下派の分裂直前という時期で、竹下派は小淵さんだけで、梶山さんなんかは全然そうじゃないわけ。この頃、小淵さんは何かで外れていて、この後に僕が自民党総裁になったときに、副総裁を小淵さんにして引つ張り上げるんだけど、それまで彼は全く無役だった

んです。

○紅谷 宮沢内閣の支持率の話がありました。支持率が二〇%を割り込んで総理の顔が見えないという話があつて、河野官房長官の提案で「総理と語る」という対談を企画されます。

○河野 それが大失敗。僕は田原総一郎さんを対談相手にするつもりはなかったんですよ。「総理と語る」という番組を作るのがいいというのは、僕らが官房長官室で相談して、やろうと持って持った。いったら、宮沢さんは、ああ、いいなど。

あれは、アメリカ大統領のタウンミーティングという企画があつて、大統領が暖炉の脇で一人でいろいろなことを言うんだけど、宮沢さん一人ではとてもしゃべらないだろうというので、誰か対談の相手がいて引き出さないと駄目だから対談形式にすることになった。まさかその相手が田原総一郎とは思わなかったんだよね。この人は何を言うか分からない人だから、危ないなという気はしたんだけど、案の定やられた。

○紅谷 それが政治改革という話に繋がっていくわけですね。

○河野 宮沢さんはそんなに変なことを言っているわけじゃないんですよ。だって、政治改革をやりますかと言われたら、総理大臣だからそれはやりますと言うに決まっている。それで、本当にやるのか、私は断じてやるんですよと言ったんだ。

僕は、政治改革について何度も宮沢さんに、どうしますかと言ったら、宮沢さんはやらなければいけません。政治不信を解消するためには、スキャンダルを起こした人間は、二度と政治には関わり合えないような厳罰を科すことが必要だ。それはイギリスに腐敗防止法があるから、あれでいいんじゃないかと思うと何回も僕には言っていたんですよ。それがだんだん意図的に小選挙区制へ引つ張り込まれて、どんどん選挙制度の改革こそ政治改革で、中選挙区制が駄目なんだ、小選挙区制じゃなきゃ駄目だとなってしまつたわけ

す。

あのときは、かなり意図的に、決められない政治、スピードがない政治は駄目だ。つまり一か所に権力を集中して、どんどん進めていく政治でなきゃ駄目だ、そこへ持っていったわけです。

僕は、それは極端なことを言う、ある意味で独裁の道じゃないか、確かにくだくだ牛歩戦術ばかりやっているのも駄目だけど、だからといって一発でばっばつと決めるといのはいかがなものかと思っていた。

○紅谷 当時は、野党との対立よりも、むしろ自民党内の対立、それは改革派と守旧派という色分けがされ、右か左か、マルカバツかの二者択一の政治という様相でした。

○河野 郵政民営化が典型的な例で、党内で絶対賛成と絶対反対がいたり、それ以外でも、いろいろな法案に対して賛成も反対もいて典型的な例は、四人区とか五人区という中選挙区制では、自民党の公認候補のうち二人が賛成で一人は反対。その三人目の候補は反対と言わないと当選しないわけですからそうなるんですよ。三人目がまた賛成と言ったんじや、絶対当選しないわけだから。

そうすると、政党政治なんだから党としての意思をはっきりさせるためには一人に絞れと言う。確かに決まる政治ではあるけれども、今日のような多様性が求められている時代に、一つしか主張がないというのでいいのかなという気はしましたね。

○紅谷 これは政治改革のところでお話ししていただきますけれども、小選挙区制が本当に日本の風土に合っているのか、一人だけ選ぶ、マルカバツだけでいいのかという意見は随分ありました。

○河野 今度のアメリカの大統領選挙みたいなもので、五十一対四十九でバイデンが勝ったけれど、あれだけ票を取られるとトランプの存在というのは絶対否定できない。五十一対四十九という場合に、四十九で落ちた人はどうするんだ、つまり、死に票になっちゃうわ

けど。複数区にすれば、それが二人になったり三人になったりして拾い上げられるけれども、四九%の死に票をどうするんだという話で、比例区でそれは救えるとか、いろいろなことを言ったけど、今は小選挙区での落選者が比例で復活してくるとかという話になって、余り死に票を生かすということになっていないんだよね。

○紅谷 最初の小選挙区制の選挙からもう四半世紀たちますけれども、二大政党制を目指してという目的が、現状がどうかというと、今も公明党もそれなりの数、共産党も一定数あり、維新が新たに出てきました。当初言っていたようにはなっていないと思いますが、如何ですか。

○河野 全然なっていないね。小選挙区にすれば金がかからなくなつて金のスキャンダルがなくなるだろうとか言うけど、結局金は同じぐらいかかっているんだよね。

官房長官としては、宮沢さんが護憲派で改憲に非常に慎重だということがあつて、僕の信条と元々合っているものだから、とてもやりやすかつたですね。最近の官房長官を見ていると、全然自分の意に沿わないことを一生懸命いんだと言わなきゃならない官房長官が大勢いる中で、僕は、宮沢さんが思っていることは大体自分の主張と合っていたからね。

○紅谷 当時の閣僚には、後藤田先生が法務大臣でいらつしやいましたので、護憲トリオという印象でした。

○河野 最初は、渡辺外務大臣が改憲論を盛んにぶつ。党は三塚さんが政調会長で改憲論を盛んにぶつので困ったんです。でも、途中から渡辺さんが体調を悪くして副総理・外務大臣を辞めたから、宮沢総理がアメリカへ行く前に、僕は宮沢総理に、宮沢内閣が不安定で話し相手としていかがなものかとアメリカが思うようでは困るので、安定感のある体制をつくった方がいい。そのためには、経世会とも話ができる後藤田さんを副総理にしておいた方がいいのではな

いかと話したんです。

宮沢総理は反対するかと思ったら、それは後藤田君が受けてくれるかなと言うので、私が使に行きますからといって後藤田さんのところに行きました。後藤田さんは、また俺かいと言うので、何とか頼みますよとお願いすると、じゃ、やろうと引き受けてくれた。宮沢、後藤田という取り合わせは、最初は余り合わないかなと思っただけでも、すごく合ったんですよ。

### 《宮沢内閣と政治改革》

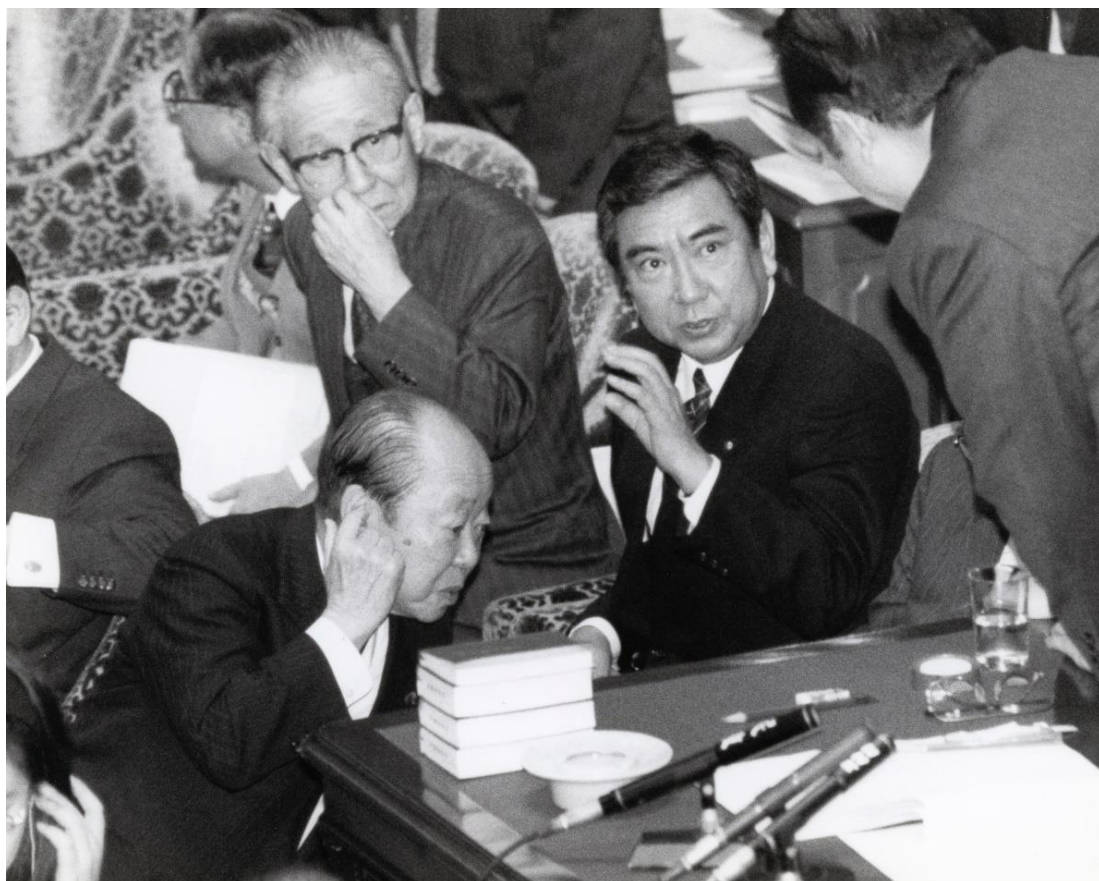
○紅谷 政治改革の問題は、宮沢内閣になって出てきたわけではなく、海部内閣のときに政治改革法案が出されて廃案になり。海部内閣は総辞職して宮沢内閣に引き継がれたという経過です。

従って、宮沢内閣も政治改革の実現を最重要課題とせざるを得ない状況でしたが、この頃の与野党は、まだ中選挙区制が本音と言われ、選挙制度改革に関する動きはまだ鈍かったというのが実情ではなかったかと思えます。

ただ、そういう中で、金丸前副総裁が闇献金事件等で議員辞職して逮捕され、世論の政治に対する見方が非常に厳しい状況だったと思います。宮沢総理は、政治改革についてどうお考えだったのでしょうか。

○河野 宮沢総理は、初めは政治改革イコール選挙制度の改革とは思っていませんでした。確かに政治腐敗があって、世論の政治に対する信頼感が下がったということをとて心配して、何とか政治の信用を取り戻さなくてはならないということについては非常に真剣だった。

どうすれば信頼が回復できるかについて、宮沢さんは、世論の動きとか世論の批判、政治不信というものの高まりとか与野党の駆け



引き、党内的にも守旧派と改革派の対立というのが非常に厳しくて、腐敗防止法ということで収まらないということになって、腐敗防止法を具体的に公に言うことは余りなかったんです。

私は、宮沢内閣の成立を待望して、何とかして宮沢政権をつくろうと思つて努力をしてみました。宇野内閣が失敗して、海部内閣がうまくいかず、宮沢政権は久々に本格政権の誕生だと言われて期待がありました。

ただ、その本格政権と言われた宮沢さんの本来の得意技は国際関係とか経済財政問題で、政治改革とか党改革というのは、いわば一番不得手だったんですね。不得手だけど避けるわけにはいかず、取り組まなきゃならないという状況で苦心したんです。

思えば、野党は政治改革と言うけど、それが選挙制度の改革にすり替えられた頃から、例えば、社会党内は小選挙区は絶対嫌だという声が非常に強かったし、小選挙区になると不利だから実は相当腰が引けていたと思うけど、時の勢いで止めたというわけにはいかな

いものだから、結局、勢いそのままに進んでしまった。その頃は、野党よりも、むしろ民間政治臨調がメディアとくっついて、どんどんと進めたんですね。世論調査をやると政治改革だということになるから、野党も及び腰ながら乗らなきゃいけない。

そして自党内は、守旧派とレッテルを貼られた人と改革派とに分かれて対立が始まったんです。最初は改革派の勢いがいいけど、宮沢政権とすると、本当にどっちにも行けないという進退窮まったような感じになった。それを外から見ていると、どっちに向かっているのか分からぬという状況ですよ。それで、その総裁を補佐すべき党三役が梶山、佐藤、三塚で、三塚さんは政治改革積極論でしたが、梶山、佐藤というのは、態度不明なんです。梶山さんは、本心は無理じゃないかと思つていたようです。宮沢さんのところに来れば、やりましようとはいうものの、できっこないよという感じで、

だから野党と話はするけれども、進めるといふ感じじゃないんです。そうになると、世論からの政治不信、その政治不信を解消しようとする政治の姿勢に対する批判がさらに高まって、支持率がどんどん下がるわけです。

僕は心配して、何とか支持率の低下を食い止めたい、それから政治改革を何か考えなきゃいけないということで「総理と語る」という企画をすることになったんです。

そして、政治改革を本当にやるのかとそこで言われ、やるんです、必ずやりますと、そこは力を込めて総理は言った。総理が必ずやると言つた以上は、この国会でできないと嘘をついたことになる、という話になってしまったんです。

会期末になって、会期延長をしてやる以外にないんだけど、国会対策のパイプは機能しないんですね。結局、やると言ったのにやらなかったじゃないか、だから嘘をついたじゃないかという批判をさ

んざん被つてしまったんです。  
**○紅谷** あの頃は、自民主党の中にも政治改革に熱心で純粋に今の選挙制度じゃ駄目だから変えなくちゃいけないという人もいましたが、本当は、旧経世会の羽田さんと小沢さんのグループと、小沢さんと梶山さんのグループの対立で、そういう中で政治改革が俎上に上げられたという指摘があつたかと思ひます。

**○河野** そうでした。  
羽田・小沢組対小沢・橋本、まあ、橋本君は余り旗幟鮮明じゃなかったけど。小沢、梶山さんたちは現状維持というか、そんなに急に小選挙区なんてできないという感じですよ。

**○紅谷** 梶山さんは、PKOのときに、増岡さんと国対委員長を交代しましたが、政治改革については自分は反対だという条件付で就任したと聞いています。

**○河野** そうなんですか、それは聞いていなかったですね。

内閣の中だって必ずしも一色じゃなくいろいろな議論があつて、例えば、あのときは小泉さんが郵政大臣で入っていたし、船田経済企画庁長官と中島衛科学技術庁長官のように内閣不信任に賛成した閣僚も入っていた。

党内では、後藤田さんは積極的な推進派で、森喜朗さんと小泉さんは小選挙区は嫌な方でした。だから、閣内も一色じゃないし、自民党は真つ二つというほどではないけど、どうも賛成も反対も両方あるなということは分かった。

社会党に至っては小選挙区は絶対駄目という感じで、公明党も小選挙区になればもう選挙はできないよという感じですよ。

そういう中で、民間政治臨調はやれやれと言う、メディアはやらなきゃ駄目だと言ひ、もう進退窮まったような感じでしたね。

○紅谷 自民党は、予算が成立した後、党議決定していた単純小選挙区制法案を出し、社会党、公明党で小選挙区比例代表併用制法案を出しましたが、成立するとはお互い思っていなかったのでしょうか。

○河野 世論の高まりで、党の姿勢として何かしなきゃいけないけど、最後は相打ちで両方潰そうという思いもあつたんですよ。

あの頃は、政治家は実際の議論というのを余りやっていなかったように僕は思うんですよ。ただ、国会の中では、政治改革特別委員会の田邊國男委員長の下で、委員会としてはとても真面目に審議をしていて、田邊さんからは、こういう議論をしていると盛んに僕らは聞かされました。

そういう動きもあつたけど、結局駄目なんですよ。それで、宮沢さんは何回も梶山さんと呼んで、最後は自宅に呼んで二人で大酒飲んでふらふらに酔っ払うまで話し合つたけど、梶山さんの腹は最後まで分らなかったんです。そういうことがあつたけど、結局、国会の会期がなくなつて時間切れになつてしまつた。

○紅谷 宮沢総理としては、会期延長してでも何とかやりたいという意向だったようですが、与党の方針が決まらなかったのですか。

○河野 結局、どの案を議論して進めたわけでも採決したわけでもなくて、別のところで、やるやらない、言つた言わないで潰されちゃうわけですよ。

○紅谷 そういう中で会期末を迎え、内閣不信任決議案が提出されました。

○河野 それが、力が入っちゃつたんだよね。しかも、あのときは、小沢さんも羽田さんも改革をやると言い、それに乗せられて海部さんも張り切つて、やると言つた。海部さんのパフォーマンスの陰で、実際は小沢・羽田、小淵・梶山闘争という平成研の分裂騒ぎなんだけれども、表向きは、海部さんが推進派を率いて進めていったというような感じになつたんです。

○紅谷 内閣不信任案が提出されて、官邸としては、自民党からどの程度の人が賛成に回るのかと票読みもされたのでしょうか、何か対抗策は考えられたのでしょうか。

○河野 小沢・羽田グループが賛成に回り離党もするだろうとみんな思つていて、それを食い止めようというので、宮沢さんは羽田さんに外務大臣を要請するんです。羽田さんは結構乗り気になつていたけど、帰つたら小沢さんに怒鳴られて、断りに来たんですよ。

それは、なぜそんなことをしたかという、船田君と中島君が大臣の辞意を表明したのだから、彼らが引いちゃうことが分かつたわけです。それで、何とかそれを止めなきゃいけないと言つていたら、そこは宮沢さんの独自の判断で、羽田君を呼んで外務大臣をやらないかと言つて詰めた。結局、羽田君が断るに及んで、ああ、これは駄目だな。

しかし、実際何人が賛成に回るのかというのが分からない。二十人離党するんじゃないか、三十人離党するんじゃないかと言つて



いるうちに、さきがけグループも離党するという話になった。そこで後藤田さんが、離党するとしても、まだ自民党員なんだから不信任案には反対して、否決した後で離党するならすばいじやないかと言って、さきがけグループは反対したけれど、予測を超えて小沢グループの賛成者が多かった。

○紅谷 票読みはなかなか難しかったと思うのですが、梶山幹事長は不信任案が可決されるとは思っていませんでしたよね。

○河野 梶山さんは絶対否決できると思っていたと思うよ。だけれども、宮沢総理の出身派閥の宏池会は全く国会対策が弱いから、どうなっているのか分からなかったんですよ。

宮沢さんは、河野に官房長官をやらせるけれど、与党対策は副長官に近藤元次君をつけて、近ちゃんにやってもらおうと言ってくれ、僕もしましたけれども、結局、宏池会で分かっているのは近藤君と加藤君だったんだよね。

○紅谷 内閣不信任案が可決したのは六月十八日ですが、その少し前に議連の議会制度協議会があり、座長は与謝野議連委員長でした。与謝野さんと梶山幹事長は一体と言われていました。

その議会制度協議会が終わった後に、与謝野さんが残っていたので、不信任案がどうなるのかという話をしたところ、与謝野さんは梶山さんと話しているけど、不信任案が通ることはないから君たちは心配する必要はないよと言われたんです。ですから、自民党執行部は不信任案が通ることはないと思っていたのだと思いますね。

○河野 その頃に、僕は櫻内議長を訪ねて、このままじゃもう駄目です、宮沢の食言になってしまいうから、本当に政治改革をやらせてほしいから、会期の延長をお願いしますと話をしたら、会期延長はできないが、私がいなくなれば本会議ができなくなる。それでいいだろう、それしか方法はないからと言われるんです。私は独断で来たので総理と相談しますから、ちよつと待ってくださいと議長公邸

を出た。

それはまずいなと思いつつも総理に話したら、そんなばかなことをしちや駄目だ、すぐ断つてこいと言われ、櫻内議長に断りに行きました。

不信任案採決当日の午前中に、宮沢総理が櫻内議長のところへ行くんですよ。宮沢さんは、そういうやり方でなくて会期を延長する方法は他にないかと言うけれど、櫻内さんは、いろいろ考えた挙げ句、俺がいなくなるしかないと言われるので、結局お断りし不信任案に突っ込んだんです。

宮沢という人は、ちよつと強情な人で、ある意味じゃ偏屈みたいなところがある人だったけれど、僕に言わせれば、あの人は政治家の中では一番恥を知っている人です。恥ずかしいことだけは絶対嫌なんです。その人が、嘘つきと言われるのが一番こたえたんだね。不信任案の趣旨弁明も賛成討論も、嘘つきだの連発ですよ。国民に重大な嘘をついているとか、言ったのをやらないのは嘘というんだと何回も言われて、宮沢さんを横で見ていると、本当にカリカリしているんです。それでも否決されればそれで済むと思ったけれども、僕は途中からもう駄目だと思ったね。結構大差だったよね。

○紅谷 賛成二百五十五、反対二百二十でした。内閣不信任案が可決されて、解散か総辞職かについて議論があったようですが、どういう話だったのでしょうか。

○河野 不信任案が可決されると解散か総辞職かで、普通なら総辞職を取る。そうすれば政権党は代わらないからね。しかし、渡辺さんが来て、総辞職、総辞職と、総辞職すればミッチーに行くものだから。それを後藤田さんが、解散だ、絶対これは解散だ。

僕も、ちよつとどきつとしたんです。ええっ、何で解散ですかと言ったら、当たり前じゃないか、一週間後には東京サミットで総理が議長をやるんだ、総辞職したらサミットをどうするんだと。解散

すればこのままいくんだ、宮沢はサミットをやる責任があるんだと言いつつ切った。それで解散したんです。

悪いことに都議会議員選挙まで重なって、都議選をやって、総選挙をやって、片っ方で東京サミットをやつてと、大変な場面になった。

ところが、衆議院選挙も始まって、三日間のサミットが終わって、これから本格的に選挙に取り組もうという日に後藤田さんが倒れるんです。

後藤田さんが倒れていなければ、後藤田さんを中心にして連立構想とかできたと思うんです。つまり、後藤田さんが武村さんに声をかけるとか、あるいは宮沢さんが細川さんに声をかけるとかして、十人か二十人集めれば過半数になったわけです。

後藤田さんが倒れて宮沢さんもショックで、党を代表して連立構想をするという司令塔がいなくなつたんですよ。

梶山さんは辞表を出す、三役がみんな辞表を出して、ついでに三役が辞表を出して総裁だけ残るはずはないとか余計なことを言うんです。そこで、本当に党としての司令塔はなくなつた。あんなに運が悪いというのも珍しいと思う。それで、あれよあれよという間に、みすみす細川政権になつてしまつた。

### 《河野談話》

○紅谷 いわゆる河野談話についてですが、総選挙を前にして残されたのが慰安婦問題でした。この問題は宮沢内閣の前の海部内閣のときから、さらには戦後問題としてずっとあつた問題でした。

○河野 日韓基本条約を作ったときに、気がついていいる人は気がついていたらけれども、それを抑え込んできたわけだからね。とても皮肉なことで、日本が韓国に経済援助をする、民主主義を持つこと

を教えようとする。するとみんなが発言するようになって、その結果、慰安婦についてどんどん発言するようになって、日本は何だという話になるわけです。

○紅谷 お話のように、昭和四十年の国交正常化と請求権協定で終わったと思つていたら、平成になってから、韓国側は経済成長もある程度遂げて、対等に話すようになってきてから急に出てきたという印象です。

○河野 あの基本条約を決めた頃は、まだまだそんな発言をする状況じゃなかつたけれど、事実はあつたわけです。事実はあつたけれども、その前に食わなきゃいけない、生きなきゃならぬということがあるから、そのことで精一杯で、そのために日韓の政治は動いた。それが、食べられるようになって動けるようになったら、本来の痛みはやはり痛いということになってきたわけです。

○紅谷 二国間の協定は、約束事でしょうけれども、やはり立場上、強い立場と弱い立場がありますので、後になって問題が出てくるのは、日米間でもあつたことだと思います。

○河野 もちろん外務委員会なんかでは、慰安婦問題を社会党の女性議員が質問し、韓国へ行つて慰安婦だった人なんかと話をして、実はこういうことがあるじゃないか、どうするんだという話は議論になつていたんです。議論になつていたけれども、そのときは、もう日韓協定で終わつていますというので門前払いみたいな形になつていたけれども、個人の痛みは、やはり痛いものは痛いで残つていたわけだからね。

宮沢内閣で九十二年一月に宮沢さんが訪韓するのですが、そのときに相当厳しく言われて、帰つてよく調査して返事をしましょうと言つてくる。そこから加藤官房長官が資料集めを一生懸命やるけれども、日本側に資料はないんですよ。しかし、事実があつたということとは明々白々で、それは、例えばオランダ人の慰安婦というのが

あつて、オランダ政府が強制連行を認定していて、裁判で有罪判決を受けたりしたんです。日本だって、その後の裁判では、みんな事実関係は明らかになっちゃうわけだから。

○紅谷 宮沢総理も、軍としての関与は認め、韓国での国会演説でもお詫びをされました。

そこで、更に真相究明を約束するという事で当たられたのが、加藤官房長官から引き継がれた河野官房長官になります。

○河野 各省にまたがっているから官房長官がやれということ、加藤さんが前半をやり、後半は僕がやることになったんです。

河野談話というのは、九十二年一月の宮沢訪韓がきっかけではあるけれど、韓国に向けてだけ出されたものではなくて、太平洋戦争当時に日本軍が関わった、フィリピン、台湾、インドネシアとかにも慰安婦はいたわけで、その人たちに対して、あるいはその国々に対して向けた談話なんです。

きっかけは韓国だったし、韓国が一番批判が強かったので韓国に向けて言ったフレーズがあるけど、あれは慰安婦問題全体に対する談話で、それを韓国向けだけと誤解している人が多いんです。

そして、その談話を発表した後の記者会見のやり取りの中で、強制連行はあったということでもいいんですけどという質問に対して、そうですね、それで結構ですと私が言ったことを、一部の人たちが今もって、そんな事実もないのに強制連行を河野が認めてけしからぬと言っているんだ。

しかし、オランダの植民地だったインドネシアにいたオランダ人女性を、日本軍が強制的に引っ張ってきて慰安婦にしたというのは、オランダ政府が認めているからね。

それから、これは議論が分かれるところだけでも、日本政府の人が韓国に行って、当時、慰安婦だった人たちに聞き取り調査をして、これを一部の人たちは、でたらめだとかうそ八百だとか言っ

ているけど、もう四十年以上たつて記憶が曖昧な部分はあるけど、発言の内容は心証として明らかに強制的にさせられてというふうには宮沢総理も思われて、そういう意味で強制があったということ結構ですとなった。

ただ、具体的に連れてこいとか引っ張ってこいという軍の資料は残っていないけど、軍がそんな公式文書を残すわけがないよね。当時の内務省の事務官だった奥野誠亮さんが、終戦の日に軍の資料をいっぱい燃やして処分したとインタビューでも言っているとおりですよ。

○紅谷 日本と韓国の間で国交正常化や請求権協定がある中で、韓国は政権が替わるたびに、慰安婦問題は別だ、徴用工の問題は別だよという主張は、日本政府としては困るのですけれども、ただ、一貫して、河野談話については、歴代の内閣は踏襲しているわけですから、それは紛れもない歴史的な事実として、誰も否定できないわけですよね。

○河野 一旦は否定しかけた安倍総理も、アメリカまで行って河野談話のとおりですと言っているんです。

もう一つ、河野談話で微妙だと思ふポイントは、あれは官房長官談話であつて内閣の意思ではないということを使う人がいるけれども、確かに村山談話と違って閣議決定をしてないんです。しかし、官房長官が公式の記者会見で公式に発言していたら、内閣一体の原則じゃないが、それは内閣の意思として官房長官が言っているということになるでしょう。

○紅谷 宮沢総理も了承された上で発言されているわけですよね。

○河野 そうです。それを、あれは知らないなんて内閣が言ったら逆に大変なことになるよね。

村山談話は、河野談話を見ていたから、慎重を期して閣議に諮っ

たんです。

慰安婦問題は、韓国側の政権交代や徴用工問題も相俟って複雑になっていくけど、韓国の新政権誕生で、新たな日韓関係の改善、解決を望むところです。

### 《河野総裁誕生》

○紅谷 平成五年の常会で、自民党内の分裂により宮沢内閣不信任決議案が可決され、衆議院は解散、総選挙になります。

六月十八日に解散し、選挙は七月十八日ですが、その間にG7東京サミットが開催されました。自民党は分裂の上に、サミットが開催される中での選挙でしたが、どういう選挙戦だったのでしょうか。

○河野 宮沢総理は、東京サミットの準備もあつたけど、それよりも嘘つきだ何だとさんざん言われて信頼度が下がってしまったって、選挙応援ができないんです。特にほぼ同時にあつた都議選の応援要請はほとんどないんです。それで、僕と森山眞弓文部大臣に応援要請が偏つたんです。

選挙の出陣式は、野党は数寄屋橋や新宿でやっているのに、自民党は党本部の前で形だけやって終わりでした。僕は官房長官としてサミットの記者会見もやらなきゃいけない、選挙の応援要請もあるというのでとても大変でした。

サミットは迎賓館でやって、そこから選挙応援で八王子など都内を回って、戻ってきて記者会見というようなことを繰り返していました。僕らが本格的に選挙に集中できるのは、サミットの宮中晩さん会が終わって各国首脳を見送ってからです。

総理は応援に行くことはできないので、そうなるかと頼りは後藤田副総理だと僕は思っていたんです。サミットが終わって、後藤田さんと二人で外国の皆さんをお見送りし、後藤田さんから、明日か

らしつかりやろうと言われて別れたんです。それでホテルへ帰ってシャワーを浴びていると電話がかかってきて、後藤田さんが倒れて日赤病院に入ったというので、これは大変だと思ってタクシーに乗って病院まで飛んでいったんです。

後藤田さんは心臓が悪くて倒れたんです。行った時は落ち着いていたけど、医者からは余りしゃべったりしてはいけないと言われて病室へ入ったら、河野さん、お渡しするものがあると言うんです。

渡されたのは辞表で、総理の補佐もできずに申し訳ないと書かれていた。これは受け取るわけにはいかないのでお返ししますと言ったら、いや、持っていけど、多少の押し問答をしていたら医者が飛んできて、心臓が悪くて寝ている人と押し問答なんかしちや駄目だと怒られ、一応受け取って帰ってきました。結局、宮沢総理には渡しませんでした。

選挙は一生懸命やりましたが、その選挙が勝ったか負けたかというの、なかなか微妙でした。

○紅谷 選挙前に、自民党三役で票読みをされたと思いますが、どういう読みだったのでしょうか。

○河野 それがよく分からなかったんです。というのは、経世会が分裂して閣僚を含めて何人ぐらい出ていくのかが分からなかったんです。

それからもう一つは、不信任案には反対票を投じたけれど、武村さんたちのさきがけが離党して、その時点で過半数を割ったのだから選挙は大変なのに、党内は幹事長が全然司令塔の役にならなくて選挙らしい選挙ができないんですよ。

あの時は五十人ぐらいが離党して、選挙では、自民党議員の数と選挙後の当選者の数では一人増えたんです。だから、議員数としては一人増えたけれども、過半数割れをしまいました。

○紅谷 選挙結果は、追加公認を入れて二百二十八人になりました

が、選挙前が二百二十七人、離党者を除いた数ですので、一人増えたのでしようが、それをどう評価するのかわですね。

○河野 僕は、選挙としては一人でも増えたんだから負けではなかったと思うけど、選挙前の政権を担当していたときの勢力から見れば、過半数を割ったわけです。負けとなれば、総理・総裁は責任を取って辞めるということでしょうが、宮沢さんと僕の二人だけの話では、宮沢さんは非常に意欲があつて、なぜ意欲があつたかという、自民党は二百二十八だけれども第一党で、第二党の社会党は七十人余りしかないから、第二党の三倍あるわけです。過半数はないけれど圧倒的に多いから、責任もあるしやらなきゃいけない、宮沢さんはそう言ったんです。

僕は、それは当然そうだけど、その場合にはどこかと連立を組まなきゃいけない。それは、細川さんは宮沢さんと懇意だったし、武村さんも宮沢さんとの関係は悪いわけじゃないから、そういう連立を組むことを考えなきゃいけないのだけれど、党の責任者、自民党のトップがいらないんです。

宮沢さんは、僕にはそうささやいて決意を披瀝していたけれど、一方で梶山幹事長は、大敗北で幹事長を辞めると記者会見で言うんです。そうすると、総務会長も政調会長も幹事長が辞めるんだから我々も辞めると言つて、三役が辞めることになった。僕は、三役は辞めても仕方がないから新三役を誰か探そうと思つたら、梶山さんが、我々が辞めるということは総裁も辞めるのは当然だと言っちゃうわけです。そうなると、もう流れができて総裁が頑張ると言うわけにはいなくなつてしまつたんです。

本来なら、幹事長は、責任は選挙を指揮した私にあるから我々は辞める、後は新しい人が総裁を支えてやってくれとか言つてくれれば、少数与党でも連立を組めば政権は継続できたかもしれないけど、そこでもう完全に総裁辞任の流れができて、それを聞いた宮沢さん

は、やはり辞めましようといつて辞任表明するんです。

後藤田さんが倒れていなければ、選挙でも相当な役割を果たさされたらうし、それができなくても元気でおられれば、宮沢さんに代わつて連立を組もうと言つて細川さんと話をするとか、武村さんと話をするということはあつたと思うんですよ。しかし、そういうこともできずに、何らなす術もなく野党に下ることになつてしまつたんです。

○紅谷 選挙後は、七党一派の方も必ずしも話が進んでいたわけではありませんが、自民党と連立を組む可能性もあると考えていたわけですね。

○河野 それは、七党一派が、少数党の日本新党の細川さんを引っ張り出して総理候補にしたんだから、そこはやはり小沢さんの目のつけどころはずごいし、腕力もすごいですよ。そんなのはみんなが納得するはずがないと思つていたし、さればといつて社会党が首班候補でまともなとも思えなかつたから、僕はまともないだろうと思つていました。

○紅谷 宮沢総理が敗北を認められて、自民党の中では次の総裁を誰にするかという話になり、後藤田先生の名前が挙がつていたようですが。

○河野 専らそうでした。特にそれを言ったのは三塚政調会長で、河野さん、後は後藤田しかない、後藤田はあなたを一番信用しているから、あなたが口説かなきゃ駄目だと何度も言われました。

僕は、後藤田さんは体調が悪くてとてもそんな状態ではないから、そんな話にはならないと言つても、それでも行ってくれというので行きまじしたけど、奥さんから玄関で、とてもそんな話を聞けるような状態じゃないといつて断られました。

それで、総裁選は渡辺美智雄さんと橋本龍太郎さんの一騎打ちになろうとしていて、まあ、いいんじゃないかと僕は思つていたんで

す。

僕は、官房長官として最後の仕事の慰安婦問題の調査報告のまとめを終え、夜遅くなつて都内のレストランで夕飯を食べていたら、粕谷さんと麻生さん、堀内さんが入ってきて、こんなところで飯を食べている場合じゃない、あなたが総裁選に出ると言うんですよ。

昨日までは、官房長官の出処進退は総理と一緒にと言っていたのに、何で出ると言うんだと言ったら、渡辺と橋本では自民党は沈没するから、ここはあなたが出る以外にないと、それが総裁選の告示前日の夜の十二時ですからね。

それで、橋本君に電話をして、悪いけど俺が出ることになったと言ったら、あきれて物が言えないと言っていたけど、結局降りて推薦人になつてくれたんです。

橋本君は同じ歳だったけど、僕より一期上でした。彼は経世会の人とは余り付き合わなくて、僕なんかと一杯飲もうかとか言っていたことがあつて、割と親しかったんです。

総裁選は、渡辺さんと僕の選挙になつて、僕が勝つたけど、投票中も勝つか負けるか全く分からない状況でした。

○紅谷 結果は二百八対百五十九の大差での勝利となりましたが、勝因は何だったのでしょうか。

○河野 よく分からなかったんですね。

あのときは、地方票が三票だったかな、地方は各県連に一票だから二票だけ割り振って、各県連の幹事長が来ていたんです。県連によつては、勝つた方に入れるという事で予備選をやつたりするし、そうでないところは白紙で幹事長が任されて出てきたところもあるから、誰に入れるかよく分からなかったんですね。

渡辺さんは、宮沢内閣で外務大臣でしたが、体調が悪くて途中で辞めるんです。渡辺さんにとってはそういう体調不安はすごくマイナス材料でしたね。七十歳くらいだったけど、病気を治して総裁選

に出てきたんだからすごい気力だよ。渡辺さんは、負けた後、相手が橋本だと思つていたら違うのが出てきたので、自分の戦略を間違えたと言つていましたね。

○紅谷 自民党の総裁選は七月三十日でしたが、七党一派は、前日の二十九日に政権樹立構想を合意していました。そういう中での河野総裁誕生となりました。

○河野 みんな戦意喪失していたよね。それから人事だけど、これが一番嫌な仕事でしたね。

河野が当選したのは派閥選挙をやらなかったからだみたいな話が前段にあつたものだから、これで派閥人事をやつたら駄目だと言われたけど、実際はそうもいかないんだよ。

橋本さんは、当然自分が幹事長だと言つているというので、若干借り気分があるし能力はある人だから、どうするかと思つていたら、松野頼三さんが現れて、自民党は野党になつて連立側と戦わなきゃいかぬ。何で戦うかといえれば政策で戦う以外に道はないから、今回の人事は、幹事長ではなく政調会長が一番重要な人事だと言ってます。

そう言われると橋本さんが適任だと思つて、橋本さんに政調会長をやつてくれと言つたら、何で政調会長なんだと、ぶつぶつ言つていた。龍ちゃん、俺は三田だ、慶応の俺が何で稲門の手伝いをして、龍ちゃん、俺は三田だ、慶応の俺が何で稲門の手伝いをして、龍ちゃん、あなたの面倒を見るのかと言つていた。龍ちゃん、そのうち俺があなたの面倒を見ることがあるから頼むよと言つて、橋本政調会長が決まつたんです。だから、幹事長より先に政調会長が決まっていたんですよ。

ところが、幹事長がいらないんです。僕は、幹事長は塩川正十郎さんにやつてもらおうと思つていたら、こんな状況では嫌だと言つて受けなかつたんです。ほんと困つていたら、森君が電話をかけて

きて、何か手伝うことはないかと言われて、じゃ、幹事長をやってくれるかと言ったら、喜んでやると言うんですよ。喜んでやるけれども、うちには三塚がいるから、あなたが三塚の了解を取らないと受けられないと言うんだ。

そこで、福田赳夫さんに清和会から幹事長を取りますからと頼んだけど、調整は君の仕事だと言われたので、しようがないから三塚さんと話をしましたよ。悪いけれども、自民党の危機的状況の中で、派閥の長が党役員になるのは駄目だから、今回は勘弁してくれと言ったら、これも怒ったね。俺は、総裁選の最中に粕谷と相沢が来て、人事は言うとおりのから河野の応援を頼むと言ってきたから、派閥をまとめて応援したんじゃないか、それなのに話が違うじゃないかと言われた。

相当粘って話をしたら、最後に、森でやったらいいじゃないかと言った。全然納得していなかったけど、やっと森幹事長が決まった。あとは総務会長です。誰にするかというのでみんなと相談したら、これは渡辺派から取らないと、徹底的に渡辺派を敵に回して党運営ができなくなると言われ、これもまた、渡辺さんのところへ頭を下げに行きました。最初は随分どぎつく、考えが違うから協力できないとかさんざん言われたけれど、最後は木部君が君のことを一番よく分かっているはずだからと言ってくれたんです。若干押しつけられたかもしれないという気はしたんですがね。

○紅谷 木部佳昭さんは、先生と当選初期にサイパンと一緒にいられた、一郎先生の秘書でしたよね。

○河野 そうです。木部さんという人は、父の最後の秘書で一番実直でした。私の父は秘書は全部議員にしていたんですよ。砂田重民、宇野宗佑、蔵内修治、みんなそうです。

木部さんは、その人達よりもずっと秘書歴は長く、父が追放解除になつてからの最初の秘書です。ところが、木部さんは石橋湛山さ

んと同じ選挙区で、石橋さんは鳩山派と一緒にやっていたから、父は、木部を出したら石橋は落ちるだろうからと出さなかったんです。ただ、最後の選挙の時に、石橋さんが総理大臣になったから、木部に次の選挙をやつたらいいと言って出たんです。そうしたら案の定、木部さんが当選して石橋さんは落ちたんです。木部さんはそういう人でした。

こうして、木部さんが総務会長で三役が決まったんです。

○紅谷 三役が決まって、総選挙後の国会に臨みますが、最初の攻防は議長選挙でした。比較第一党から議長という自民党と、選挙をして多数を得た者という連立側との対立でした。

○河野 誰が議長かという、非自民連合が土井たか子さんだと言う。こちら側の主張は、議長は第一党から出すということが慣例で決まっているじゃないかと言うけれど、多数決だからどうにもならない。議長選挙は、負けることが分かっている候補だからなり手がないんですよ。しかし立てないわけにはいかないので、奥野誠亮さんに、負けるけれども、第一党の議長候補だから一番立派な人を出さなきゃならないので、お名前をお借りしたいとお願いしに行ったら、奥野さんは大変名譽なことですと言ってくれたんです。それで、議長候補は奥野誠亮さんになりました。

次に、副議長をどうするか。若手などはこっちは議長と言っているんだから副議長候補を出さないと強硬で、私は、何にもないよりはあった方がいいから副議長を取ろうと言っても勝手にしろと誰もやらない。そこで、土井さんとの関係を考えたら、副議長は鯨岡兵輔さんがいいと思ってお願ひしたんです。案の定、二人の息はぴつたりでした。

○紅谷 議長、副議長選出の院の構成が終わり、いよいよ新政権との対決を迎えますが、その最初の場が本会議の代表質問で河野総裁の出番でした。

○河野 細川さんは、世論調査で八割近い支持率だったから、変に悪口を言う世論からたたかれてしまうような状況でした。

だから、最初の代表質問は、細川さんを評価して小沢さんを評価しない、小沢路線は徹底的に批判するけれども、細川さんは評価するという難しい代表質問をやったんです。しかし、自民党からは評判が悪くて、代表質問をすると、連立与党から拍手があつて、自民党は怒って野次るんだから。

それで、やはり国会闘争をちゃんとやらなきゃいけないということで、予算委員会の理事に野中さん、深谷さんという戦闘的な人を並べたんです。とにかく、京都で蜷川知事と戦い、東京で美濃部知事と戦った人を予算委員会の理事にしたんです。だから、この人達は細川総理に対しては厳しかったですよ。

○紅谷 自民党には、まだ離党予備的な人が多くいたので、場合によっては党が再分裂するかもしれない、そういう不安を抱えながらの党運営ではなかったかと思えます。

河野総裁就任後に自民党を離党した議員が二十五人いました。

○河野 そうなんです。特に、河野でまとまるというのは難しく、もともと右寄りの人、党内的には、渡辺さんの方が自民党はまとまっていたかもしれないね。大変でしたよ。森幹事長が、毎日離党届が出てくると言っていましたね。

○紅谷 自民党は、改革派と守旧派と言われる対立が続く中での党運営で、連立与党とも対峙していかなくてはいけないわけですから、非常に大変で心労が重なる時期でしたが、体調はいかがだったのですか。

○河野 すごく悪かったですね。その頃の血液検査の数値はびつくりするような値で、倦怠感がひどかったんです。総裁の頃から相当体調が悪くて、その後、政権復帰して副総理、外務大臣になるんですが、外務大臣を辞めて、ほとんどその足でそのまま手術だったか

ら、その頃は、肝臓はもう末期症状でした。

### 《政治改革関連法案成立の経緯》

○紅谷 平成五年の総選挙後の七党一会派の連立政権は、社会党から自民党を出た人まで非常に幅広い人たちが構成されていましたが、連立政権の合意事項といっても具体的な項目は余りなく、政治改革を行うということが唯一の具体的な目標という状況でした。

○河野 政治改革を行うというのはみんな賛成だったけれども、どうやって行うのかとなると、全然自身は詰まっていなかったんです。僕もすごく辛くて、最後は本当に雪隠詰めに遭ったようだったけど、細川さんは社会党を抱えていたからもつと辛かったと思いますね。

社会党の村山さんと連立を組んでからいろいろ話をしましたが、社会党は小選挙区制を導入したらそこで終わりになるから、徹底的に嫌だったわけです。実現したら自分達はもう生き延びられないから、命懸けで反対している人がいたと言っんです。

○紅谷 そうでありながら、選挙後には、連立側の案にも河野総裁の下での自民党案にも、中選挙区制の案というのは全く出てきません。

○河野 この頃は、スキャンダルに次ぐスキャンダルだから、中選挙区制なんて言うものなら袋だたきに遭う。それからもう一つは、裏にいた民間政治臨調の案が小選挙区制だったから、中選挙区制というのはどこからも出てこないんです。ただ、自民党の守旧派と言われた人達は、中選挙区のままでもいいという主張です。それから、麻生さんなんかの主張は、定数三人の百選挙区と比例代表、これはやや改良型ですよ。

今になってみると、やはり中選挙区制の多様性を考えると、自民党の中でも都市型の人であれば農村型の人もあるし、環境重視型と



経済優先型がいるから、一つの選挙区に二人出ても、どっちかを有権者に選んでもらえばいいんですよ。

○紅谷 選択の多様性という観点からは中選挙区制がそうだと思いますが、今の選挙制度は小選挙区比例代表並立制で、小選挙区と比例代表という異なる制度を一緒にして多様性を求めた妥協だったというのでしょうか。

○河野 それは無理なんですね。小選挙区で落ちた人が比例で救われるという仕組みは最も無理ですよ。だから、やるならば小選挙区は小選挙区、比例は比例で、候補者は完全に別でないと本当はダメですよ。

○紅谷 政権交代後の平成五年秋の臨時国会に、細川内閣は小選挙区比例代表並立制の案を提出しました。自民党もその後に出し、同じ制度なのですが、定数や定数配分の違いでしたが、なかなか修正協議が折り合いませんでした。

○河野 選挙改革と言いながら、定数を四百七十一から五百にするのは焼け太りで、議員の数が三十人も増えるのはおかしい。だから、我々自民党執行部は四百七十一だと言っていたけど、腹の中では増えた方がいいと思っている議員がいっぱいいて、最後は五百になっちゃうんです。

○紅谷 二つの案の大きな違いは、小選挙区と比例代表の定数配分。自民党は小選挙区三百で比例は少なくないのでしようが、連立側は社会党の事情があるので、小選挙区二百五十比例二百五十としていましたが、もう少し比例を増やしたかったのが実情だったと思います。

結局、衆議院ではなかなか調整がつかず、衆議院の採決直前に、最初の細川・河野会談が行われました。

○河野 細川さんは割と固くて、僕が何を言っても駄目ですと。まとまらないなら、明日の本会議で決めますという話だったんです。

会談に行く前に、自民党の政治改革本部長だった後藤田さんから、河野さん、大体まとまるから行ってみてくれと言われていたのに、全然まとまらなかったんですよ。

○紅谷 後藤田先生は、六分四分ぐらいで、衆議院の段階で修正がまとまるんじゃないかと話されていたようですが、決裂でした。

このときも、民間政治臨調から相当圧力がかかっていたと言われていました。

○河野 すごいプレッシャーがかかって、ひどかったんですよ。

財界四団体が自民党に陳情に来るというから、てっきり景気対策だと思っていたら、政治改革をちゃんとやれと言ってきたんです。それで森幹事長はかっとなって、大きなお世話だ、政治改革は政治家がやるから、そんなことをあなた方に言われる覚えはない、それよりあなた方は景気対策が大事ではないのかと、そんなことがありましたね。

○紅谷 民間政治臨調は住友の亀井正夫さんが会長で、政治家、学者、連合も入っていました。

○河野 議員は当選一回とか二回とかの割と言うことを聞く人達を集めたんですよ。

本当かどうか分からないけど、民間政治臨調の裏は読売新聞で、小林与三次さんが相当シナリオを書いて、舞台回しをやったと専ら言われていましたね。

○紅谷 小林さんは選挙制度審議会の会長でしたね。

○河野 そうです。小林さんというのは昔から小選挙区論者だったようです。小選挙区制になれば、結局、憲法改正をしやすくすることに繋がるんだと。

そこまで言うのと勘ぐり過ぎだったかも分からないけど、そういうシナリオだというふうには僕らは途中では聞いていたんです。

○紅谷 細川・河野会談は物別れとなり、連立側が修正案を出して

きまりましたが、それは細川・河野会談で合意されるかもしれないという案だったと言われていました。

定数五百は政府案と同じですが、小選挙区を二百七十とし、比例の数は自民党に歩み寄った修正案でした。採決では自民党から十三人の造反が出て、内閣提出の法案が修正されて参議院に送られました。

○河野 小選挙区と比例のバランスを変えてきたんですね。採決では、西岡君の他、民間政治臨調と関わっていたような人たちが賛成に回ったんです。

○紅谷 参議院の審査に入っていくのですが、参議院自民党には執行部に批判的な人たちが多くいました。非常に強硬だったのは山本富雄さん、平井卓志さん、村上正邦さんの三人で、総裁といえども、なかなか口出しすることは難しい存在と言われていました。

また、社会党は連立政権に加わっていないながら、参議院社会党では法案に対して反対の意見が強かったので、参議院で法案がどうなるのか分からないという状況でした。

衆議院では連立側に押し切られました。参議院の審議では否決されるといふ見込みはあったのでしようか。

○河野 一回目のトップ会談では、今も話があったように、細川さんは非常に固かったんです。僕は、後藤田さんから言われていて、どこかで合意ができるんじゃないかと思っていたけれども、細川さんは自説にこだわって、どこも譲れないと言って妥協できなかったんです。

今にして思うと、やはり社会党がとても難しく、表向きは政治改革だと言っていたけど、小選挙区制にすると激減することははっきりしているの、実際は小選挙区制に反対なんです。それで、小選挙区で減る分は比例で取る以外にないから、比例の数をできるだけ増やさないと社会党は納得しない。連立側で合意するためには、

比例を増やすことが一番の解決策で、恐らく細川さんの気持ちはそれだったと思うんですが、連立を主導していた小沢・市川ラインがこの案で絶対譲る必要はないといって頑張ったものだから、細川さんは非常にかたくなになっていたんです。

僕の記憶では、自民党がこだわったのは議員総数、つまり議席を増やすべきでないと言っていた。政治改革に事寄せて議席を増やすのではなく、むしろ議席は減らす方向に行くべきなのに、比例の数が増えるし、小選挙区もそんなに減らなくて、余り議席を増やすべきでないというのが自民党の主張だったと思うんです。

○紅谷 自民党の主張は、公選法本則の定数四百七十一に戻すということだったと思います。

○河野 そうです。定数を絶対増やさないとというのが基本でした。それは、改革派と称する人たちも守旧派と言われる人たちも、定数を増やさないぐらいしか党内のコンセンサスがなかったんです。

それでトップ会談をやるけれども、細川さんは全く譲らず妥協の余地なしというので、本当に短い時間で終わって帰ってきたら、改革派が合意できなかったことに不満で、何で妥協しなかったんだ、たとえゼロ回答でも妥協すべきだったと言うんです。後藤田さんもおかしいな、どうして駄目だったのかなとぶつぶつ言っていたけれど、とにかく駄目で、参議院に行った。

参議院は、今言われるように、山本さんや村上さんが、こんなじゃ駄目だ、俺たちは参議院の社会党とは話ができているから絶対潰すと言って物すごく怒っていたんです。

そのときの参議院会長の斎藤十朗さんは割と穏健派で、内閣と話をして何とか妥協案を見つけたかと思っていると言うけれど、村上さんたちはとにかく潰すという一点張りでした。

そして、衆議院でも石破さんや西岡さんなど十数人が賛成に回って、党は一枚岩でなくなってしまうのですが、それを参議院の人は

非常に怒って、衆議院はだらしがないから参議院はびしっといくと  
言っていたんです。

参議院本会議での採決が、ちょうど自民党の党大会の日になって、  
高輪プリンスホテルで党大会をやっているけど、参議院議員は本会  
議に行っているんです。

党大会で総裁挨拶といったって、事態がどう進むか分からないか  
ら、壇の下で参議院の様子を聞きながらいたけど、結局分からぬま  
ま登壇したんです。それで、今参議院がやっているから結果を待つ  
んだ、しかし、いずれにしても、最後まで党の主張をするみたいな  
話をしたと思いますね。

○紅谷 参議院本会議の採決は、臨時会を延長した一月二十一日で、  
結果は十二票差で否決されました。社会党から十七名の造反、自民  
党からは五人が賛成でした。

その際、河野総裁は二桁の差は軽くないと発言されたとのことで  
すが、この発言が両院協議会の協議に慎重なんじゃないか、という  
話がありました。随分昔の話になりますが、如何だったのでしょうか。

○河野 その結果にはちよつと驚きましたよ。絶対に否決するとは  
言っていたけど、それでもぎりぎりじゃないか、衆議院では自民党  
が崩れたから、本当に否決できるのかなと思っていたんです。だか  
ら党大会の最中、森幹事長も横にいて気掛かりだったけれど、十二  
票差で否決という連絡で、そんなに勝ったのかとちよつとびっくり  
したんです。

政府案が衆議院で可決された後、参議院で否決されれば両院協議  
会になる。そこで妥協案を探すという建前でやっていたので、僕が  
両院協議会での協議に慎重ということはありません。

否決すると参議院はすごく強気で、参議院で潰したんだからこれ  
はもう廃案で、両院協議会なんかやる必要はないと言っていたんで

す。連立側は、衆議院は通っているから、参議院で否決されても憲  
法のルールに従って両院協議会をやって、それでも駄目なら衆議院  
で再議決をするつもりでいるわけです。ただ、社会党が崩れたから、  
ちよつと心配はあったわけです。だから、両院協議会の様子はどう  
かというのをとても心配していたんです。

それから、これは裏話になってしまふけど、衆議院で押し切られ  
たのを参議院で潰すわけです。僕は、参議院から、潰してや  
ったんだからとすごいプレッシャーをかけられて、両院協議会が終  
わった後、参議院自民党に総裁が呼び出されて、自民党は党三役と  
いう呼び方で、幹事長、政調会長、総務会長だけでも、それを四  
役にして参議院会長を入れるというんです。そのときの参議院会長  
は斎藤十朗さんで、この人は割と穏健派だったので、僕はいんじ  
やないかと言って、三役を四役に変えたんです。

ところが、その後に村上体制になったんです。僕は辞めた後、だか  
らどうだったか知らないけど、大変だったろうな。

○紅谷 衆議院は可決、参議院で否決という結果になりましたので、  
憲法の規定に基づいて、衆議院は両院協議会を求める手続に進んで  
両院協議会が開かれます。衆議院側の協議委員長は公明党の市川  
雄一さんでした。

院の意思を構成した会派ですから、衆議院は連立側の十名、参議  
院は自民党だけではなく、共産党と二院クラブも入った十名です。  
初会の議長はくじ引きで決めるのですが、両院協議会での思惑があ  
って、初会に議長を取る是非は内々に随分議論されました。

私は衆議院側の事務方に入っていましたので、今だから話します  
が、両院協議会での合意は考えられませんでした。次の策としてはど  
うやって打ち切るか、何が何でも一日目に打ち切るわけにはいきま  
せんから、できれば二日目に議長を取る方がいいという話をしてい  
ました。

○河野 ああ、そうか、議長は一日で更代するわけだね。

一日目が参議院だと二日目は衆議院になって、議長を取ると一票減って採決では十対九で勝てないから、議長が両院協議会で打ち切るしかないから、参議院側はそうさせないためにどうするかを考えるわけだ。市川さんだから相当強引に打ち切るだろうというのですごく警戒していたんです。

○紅谷 両院協議会是非公開なので、中の様子は外から分かりませんが、強引だったのは参議院の自民党で、協議の段取りに入ろうとしても、村上さんが議事進行だと言って全く進めさせてくれず、これには衆議院側の方は対抗というか喧嘩できる人がいなかったものですから、非常に大変な運営でした。

○河野 僕は、土井議長のところへ押しかけて、両院協議会は終わったと言ってくるかもしれないけれど、もっとやるように言ってくださいとお願ひし、土井さんは絶対反対だったから、わかったと言っていましたよ。

○紅谷 両院協議会では外の状況が全く分かりませんし、土井議長の動きも必ずしも分かっているわけで、外からも、両院協議会の状況をいろいろ聞いて来たりするんですが、話すわけにもいかず困りましたね。

議員も中の様子を外に伝えたくて、メモを書いて外に渡してくれと言う人もいました。ですから、外は中のことを、中は外のことを非常に気にしていたのがよく分かりましたね。

○河野 心配していたんだよね。

だけれども、やはりこうして考えてみると、両院協議会という制度は、あれしかないのだろうけど、あのやり方で修正が合意したというケースはほとんどないわけでしょう。

○紅谷 後世になれば、この政治改革法案が合意した事例ということになっているのでしようが、実際上は考えづらいですね。

衆参の意思の違いを調整する制度ではありますが、そこですぐ結論を得られるくらいならば、衆議院や参議院の審査の段階で話しがあつて修正されるだろうと思います。

○河野 あの場で修正案ができるとは思えないよね。ただ、やはり両院の意見の違いをどこかで調整して結論を出さなくてはいけないのは分かるけれどもね。

○紅谷 学者等には、両院協議会の改善策として、衆議院は連立与党だけ、参議院は自民党だけではまとまるわけがないから、衆議院からも参議院からもバランスよく言いますけれども、それでは各院での議論と全く同じことになりますから、まとまることはありません。

○河野 やはり党議拘束がきちつとあるから、それが崩れたからそうなったんだけど、つくづく両院協議会という制度をどうしたらいいのかということを考えましたね。

どうすればいいんだろう、もっと公開した方がいいのかな。公開すればなおさら駄目か。

○紅谷 公開すると、それぞれの党の主張に沿った意見しか言わなくなりやすから、対立するばかりですね。

○河野 難しいよね。とにかくそういう難しさが残りましたよ。

○紅谷 両院協議会の中では、実は乱闘寸前の場面もありましたが、市川議長が、成案がまとまらなと宣告して一応終了しました。

一方で、土井議長は細川さんと河野さんと呼んで話合ひをしていたということでしたが、どういう話だったのでしょうか。

○河野 土井さんは、衆参で意見が違ったんだから、ここでまとめなくていいんじゃないか、もうこの国会はこれで終わりにして、よく考えて次の国会で議論してはどうか、と言っていた。土井さんの本心です。

○紅谷 両院議長の下に協議機関を作つて協議をしようという話が

あつたようですが、連立政権側からすると、先送りは潰れるに等しいことだったかと思えます。

○河野 絶対先送りしたくないわけですよ。

土井さんは、僕にも細川さんにも当然だけど同じことを言ったんでしよう。だけれども、細川さんは絶対嫌だったんですよ。細川さんは、議長がそこまで言うのは少し言い過ぎじゃないかとしきりに言っていましたね。

その少し前から、最後はトップ会談でやる以外に方法はないと僕は思っていたし、連立側もそう思っていたんでしよう。それで、例の民間政治臨調がトップ会談をやるべきだと言い出して、細川さんの方はそれに乗って、やりましょうということになった。こっちはずっと留保していたけど、僕は、機が熟して最後の最後でなければまともまらない。更に落とすところのイメージができないと、トップ会談に臨んでも答えは出てこないだろうと。それから、党の一任を得なきや交渉に臨めないで、最後は、自民党の三役の腹も大体そういうことで固まったので、トップ会談に臨むことにしたんです。

○紅谷 自民党は非常に難しい局面だったと思いますね。両院協議会で成案を得られなかったので、次の段階は、廃案にしなければ衆議院での再議決となるのですが、そうすると、自民党では更なる離反者が出るおそれが懸念されました。

○河野 そうなったら自民党は改革派が黙っていないわけですよ。改革派は賛成することを公言していたから、守旧派は孤立するだけだから、衆議院で再議決をやりたくなかったんです。

○紅谷 ですから自民党としては、参議院で否決され、両院協議会でも成案が得られなかったにも拘わらず、苦しい局面だったわけですよ。

○河野 そういう状況だったから、トップ会談で決める以外に方法はないということで、トップ会談をやるということになったんです。

す。

自民党の中は、三塚政治改革本部長が小選挙区でやろうじやないかという方で、三塚派の中は割れていたけど、僕は賛成せざるを得ないと言いつつ、森幹事長もやる以外にないという感じでした。木部総務会長が渡辺派だからすごく立場が難しく、元々余り口数の多い人じゃなかったけれども、物を全然言わなかったんです。

木部さんは総務会長で、総務会が一任しないと総裁一任にならないわけですよ。総務会はどうなるかみんな不安だったけど、トップ会談に行く以上は、党の意思を決めていかなきゃいけないから、総務会にかけたんですよ。

案の定、物すごい勢いで賛否両論があつて、ひとしきり議論をしたところで、木部さんが実に鮮やかに、これだけの意見を総裁は聞かれたんだから、後は一任する以外にないんじゃないか、一任でと言つて、そこで一任になったんです。それはすごく鮮やかなまとめ方でした。一任になったのはトップ会談の本当に十数分前で、とにかく終わってすぐ行くようでした。

だけれども、一任だったからすごく気は楽だったんです。最初の会談のときも一応一任ではあつたけど、それぞれが自分の方になると言つていて、二回目の一任は、さすがに改革派も守旧派も両方くたびれて、とにかく任せるよという感じの一任になったから、それで行こうというので行つたんです。

○紅谷 トップ会談は院内の常任委員長室で開かれましたが、誰が入っていて、どういう話だったのでしょうか。

○河野 細川、河野に、小沢、森が陪席して四人、後ろに鈴木恒夫さんと成田総理秘書官がいたのかな。だから、六人入っていたと思うんです。

会談が始まったけど、森さんも小沢さんもほとんど発言しないから、僕と細川さんとのやり取りだったけど、細川さんは、何を言っ

ても分かりましたで、結局、今度は丸々自民党案になったんです。僕は途中で、言ったとおり向こうが呑めば合意しないわけにはいかないと思いました。あれれっと思うぐらいに細川さんの方は全部丸呑み。一回目のときには小沢さんが絶対駄目と言ったのを、二回目するときには小沢さんのかんぬきが外れたんでしようかね、もういよと言ってそのままいったんです。

それで、僕にしてみれば一番の問題は企業献金の廃止で、社会党は企業献金の廃止だけは絶対譲らないと言って強かったから、細川さんもその場では、企業献金の廃止は当然だと言う。ただ、それについて自民党は、今は何億と企業献金をもらっていて、来年からいきなり廃止というわけにはいかないので、激変緩和のための時間が欲しいと提案し、五年後に見直しという条件で企業献金を廃止することで合意できたんです。

細川さんが、土井議長に報告に行こうというので二人で行って、小沢、森は残って、こういうふうにしようというのを更にやっただです。

僕らが合意した案を持っていったら、土井議長はひどくびっくりして不機嫌で、何これと言うけど、合意されたものを駄目と言うわけにはいかなから、怪訝な表情でした。

○紅谷 合意内容は、細川総理が自民党案をほとんど丸呑みにし、小選挙区は定数三百、ブロックも自民党案に近く、最後はあっけなく合意されたような印象でした。

○河野 だから、僕は、つかえるところはほとんどなかったんですよ。

ただ、定数の五百だけは、議員定数を増やすのはいけないと言っていたけど、何でだったかいいということになった。

○紅谷 小選挙区を増やして比例を減らすというのは、社会党や公明党の主張があったので、そうはいかなかったのでしょうか。



○河野 そうでしょうね。それで土井さんは国会の場で何も議論しないのかと言ったけど、もう会期が終わっちゃうわけだからね。

最後のところはちよつとびつくりするような駆け込みですよ。

○紅谷 会期末でしたから、両院協議会を再開させて、合意できた成案を衆参の本会議にかけましたが、会期終了日の一月二十九日でした。

細川総理は、もし合意しなければ、解散を考えていたのではないかとこの話もありました。

○河野 あったかもしれないね。いや、細川さんはそう思っていないけども、小沢さんはきつとそう思っていただろうね。

解散になれば、自民党は完全に二つに割れたでしょうね。とにかく改革派は、どれだけ妥協してもいいからまとめろというわけで、恐らく、あそこで細川さんが突っ張ってトップ会談がまとまらなければ分裂だったでしょうね。

○紅谷 トップ会談での合意事項ですが、定数配分とブロック制に加え、もう一つの大きな柱は企業献金についてでした。

○河野 トップ会談で決めたのは、小選挙区制でいくよ、それから企業献金はやめるよという、この二つが政治改革の車の両輪だと思は思っていたんです。ほかの慶弔電報を打ちやいけないとかいうのは全く技術論ですよ。それで、時間が経過して今考えてみると、小選挙区制は良くも悪くも制度としてできて動いているけれど、企業献金の方は全く動かなかった。だから、今は両輪が片っ方しか回っていないという感じですよ。

○紅谷 政治改革は、元々はリクルート事件を発端とした政治と金の問題についてで、必ずしも選挙制度が主眼ではなかったと思います。

○河野 そうですね。政治資金にまつわるスキャンダルが元で政治不信になって、それを解消するために政治改革をやると思ったんです。

よ。

中選挙区は同じ党での争いだから金がかかる選挙になるといのが前面に出て、それで小選挙区の方が注目を浴びて小選挙区制についての合意になったけど、報道では、小選挙区になっても広島では現に一億五千万円も選挙資金で送ったりしているというからね。小選挙区になったら金がかからないとは言いがたいんですよ。そこは僕らも反省しなきゃいけない。本当に金がかからないのかどうなのかというのを、もつときちゃんと議論して詰めなきゃいけなかった。

僕は、あのときに、幾ら制度をつくっても集めるのは集めるから、政治家一人が、年間に集めていい額の上限を決めると言っていたんです。一千万とか二千万とかじゃできないと言うなら、極端なことを言えば一億でもいいと。一億は多過ぎるから、五千万までなら集めてもいいけれども、それ以上は絶対集めちゃ駄目とした方がはつきりしていいんじゃないと言っていたけど、後藤田さんにそれは絶対駄目だと言われて、僕はその上限案を途中で降りたんです。

集め方を規制するというけど、集め方は絶対潜っちゃうんだよね。

○紅谷 この改正では、政党助成の制度を新しく導入して、国民一人コーヒー一杯分二百五十円ということで、総額が当時は三百億円余りでしたが、公費として政党に分配されることになりました。

一方で、企業献金については、すぐにゼロにするわけにいかないの、五年後に廃止しようということで、取りあえずの間は、資金管理団体をつだけ認めましょう、その代わり政党助成については、五年後に見直ししようというのが附則にありました。しかし、政党助成の見直しはされず、片や政党に対する企業献金はそのまま残っているわけですから、それは二重取りじゃないかという意見があります。

○河野 それは、企業献金を廃止するから、一方で公費助成をするというトレードオフの関係なのに、終わってみたら、こっちは取っ

てあつちはそのままといい、今は当時の考えとは全然違う状況になつていますよ。

あの頃の細かいことを思い出してみると、政党助成をするにあたり幾らぐらいが適当か、結果、三百億ぐらいということになつたけれど、あの根拠は、国民にコーヒ一杯だけ我慢してもらおうというのが事の起り、あの一番初めは、田川誠一さんがやったコーヒ一杯運動なんです。田川さんは個人の政治資金を、支持者にコーヒ一杯我慢して私に下さいという運動をやつて、それが下地にあつて、新自由クラブは一人二百五十円、コーヒ一杯の政治献金と言つていたんです。

それが耳に残つて出てきたんです。それは、田川さんが言つた後に武村さんも言い、それで何となく国民にコーヒ一杯、三百億と言われたんです。だから、あの三百億円というのは、本当は一億国民みんなから取るという話ではなくて、個人献金だったんです。

一方、企業献金の廃止は、個人献金に振り替へろという話はなかなか難しいだろうから、企業献金を止めて公費助成にしようということでした。だから、公費助成が実現したら企業献金は本当は廃止しなきゃ絶対におかしいんですよ。

しかも、激変緩和のため五年後に見直すと法律の附則に書いたのにスルーした。見向きもしないでスルーしてもう二十五年たつたんだからね。

政治改革の議論が起つたときは、経団連も、傘下の会員に企業献金は慎もうと言つていたのに、最近の経団連は、自民党に献金してくださいと進んで言うようになってるからね。

この頃は、企業献金が多いから税制を始めとしていろいろな政策がゆがんでる、庶民から企業の方へ政策のウェイトがかかつて、企業献金が政策のゆがみを引き起こしているから、それを止めると

いうことだつたのに、それが今またああいうふうになつてるといふのは、本当におかしいと思つてますね。

○紅谷 確かに、政治献金については透明性とか量の問題もありますが、なかなかその議論が進んでいませんし、特に昨今、政治家個人への寄附は禁じていても、政党から政党の支部等への寄附が認められてるのは如何かと言われている。

○河野 あれもおかしいよね。あの抜け穴ぐらいはせめて潰さないよね。

新聞社も、政治改革十年とか二十五年とかという特集を組むと選挙区の話しかしないんだよね。僕に言わせれば、両輪なんだから両方の話をして、記事を作つてほしいと思つてね。

これも言つておいた方がいいから敢えて言うけれど、政治改革の議論が起きたときに、時の内閣総理大臣宮沢喜一さんは、腐敗防止法を作ろうと。つまり、金の問題なんだから腐敗防止法を作ろうと言つたのを、あの頃はそんな腐敗防止じゃなくて選挙制度だということにどこかで変わってしまったんだね。僕に言わせれば、あれはどうも民間政治臨調で誰かが誘導したとしか思えないんだ。

○紅谷 大きな事件でも起こらない限り、政治資金の問題に手をつけることがないのは残念ですが、ここは原点に立ち戻る必要があるのじゃないかな。

○河野 そうですね。確かに昔は何億というスキャンダルがあちこちにあつたのが、最近は何百万とか何千万とか、ちよつと一桁小さくなつたということはあるかもしれないけれども、それで良くなつたかどうかというのはちよつとね。それがまた、見えてるところはそうだけれども、見えないところであるとすれば困りますよね。



## 《政治改革法案の評価》

○紅谷 お話のような経過を辿って政治改革法案は成立し、小選挙区比例代表並立制での選挙へと移行していきました。河野先生も何度か小選挙区制での選挙を経験されて、感想や振り返って今だから言えることもあるのではないかと思います。

そこでお聞きしたいのは、トップ会談でのお二人ですが、細川さんは必ずしも小選挙区制論者ではなく、自分は穏健な多党制で中選挙区連記制を想定していたけれども、小選挙区制になったという話をしておられましたし、河野先生も必ずしも小選挙区制が良いというわけではなかったと思います。

○河野 そうそう。僕は、最後までどっちがいいとか何がいいとか言わなかったけれど、終わってから本心はというから、本心は小選挙区制ではなく定数三人の百選挙区がいいと言ったんです。それは麻生さんあたりがしきりに言っていて、誰も支持する人がいなかったけど、僕はいいなと思っていた。細川さんも小選挙区制がいいとは思っていなかった。

○紅谷 お二人がいいと思っていなかったのに小選挙区制になったのですね。

○河野 終わってから、まずかったかなという話をしたけれど、細川さんは、まあまあじゃないですかと言っていたね。

彼にしてみれば、ほっとしたわけでしょう。まとめなかったらあそこで内閣は終わっていたでしょうから、何としてもまとめたいというので、べた降りすればまとまるということでした。

○紅谷 細川さんは、次の常会で議員辞職され、その後は口を閉ざされたままで真意を話されていません。

○河野 細川さんはどこでも説明していないんじゃないかな。僕は、あの後に加藤紘一さんがやっていた中選挙区制議員連盟に

呼ばれて、あれは失敗だったから、もう一回みんなで考えてみてくださいという話をしたんです。

○紅谷 そこには私も御一緒したのですが、加藤さんや共産党の穀田さんの呼びかけで、各党が参加していましたね。

○河野 そう、各党全ていましたよ。だけれども、結局あれで終わりだったよね。

○紅谷 今年になって、新聞社の「平成の時代を振り返る」という特集の中で、政治改革の合意の当事者である河野先生と細川先生が約四半世紀経って、細川先生は、自分は中選挙区の連記制が本当は本心だった、河野先生は、定数三で全国百選挙区が良かったんじゃないのかと述べられていました。

それでは何で小選挙区制に決まったのかという経緯と、当時は小選挙区制になれば政治が浄化されるのではないか、もっと変わるのではないかという期待があったということでしたが、実際に選挙をされた経験も踏まえて、お話しただければと思います。

○河野 振り返ってみると、いろいろ問題があったんです。今の話のように、細川さんも私も考えていることと出した結論は全く違っていました。それじゃ、なぜそのとき言わなかったんだと言われるだろうけど、少なくとも私がいた環境は、党の総裁が小選挙区じゃなくて中選挙区でいいんじゃないかなんて、一言でも言ったりそぶりをしたら党は全くバラバラになって、例えば総裁一任ということにはならなくなってしまおうという状況。

だから、あのときは最後まで口をつぐんで、何を考えているか分からぬ、あいつはばかじゃないかと言われるほど何も言わなかったから、最後は総裁一任になって、党首会談に行けたと思うんです。あれが、私が中選挙区制がなくなってちよっとでも言っていたら、改革派と言われる小選挙区推進グループは、党を出ていったかもしれないという状況で、自分が何を考えているかを表に出すことができない

かったことが一つ。

もう一つは、とにかく党が割れるんじゃないかと思っていきました。守旧派と言われる人たちと改革派と言われる人たちとは物すごい勢いで激突しているんです。しかも、その激突がどっちかが圧倒的に多ければ問題ないんだろうけれども、大体似たような勢力で割れると真つ二つになるんじゃないか、過激なのは改革派の方で、改革に躊躇するならすぐ出ていくみたいな話だったんですよ。この話の裏には他党からの働きかけがあつて、かなりあからさまに自民党を割つてしまえと考えていた節があつた。だから、党の執行部は党を割らない、割っちゃいけないということが頭の大半を占めていて、小選挙区が良いか中選挙区が良いかということは口に出せないし、どっちが良いという研究すら余りできないという状況だった。あの頃の私のメモを見ても、小選挙区になれば何がプラスかマイナスかというメモはあるけど、そんなに深く書き込んでいないんですよ。

ですから、通り一遍で小選挙区にすれば金がかからなくなるとか、党の意思決定がはつきりとできる、それは選挙にあたって中選挙区だと賛成の人も反対の人も公認されているから、党はどっちなんだという問題がある。一方で自民党という党はいろいろな意見があつた方がいいんだという守旧派の主張もあつたりして、どうすればいいかということまで深く考えていないんです。

それから、本当に中選挙区は金がかかつて小選挙区では金がかからないのかと言われても、評論家や学者はそう言うけれども根拠がなくて分からない。今にして思えば、本当はそんなところはもつと整理しておかなきゃいけなかったのが、党を割らないために、まああというのが精一杯だったんです。

細川さんについては全く推測でしかないけど、私よりもつと辛い立場で、何しろ日本新党という政党は四十議席ぐらいしかないのに、首班指名で推されたわけだから、抛り所がないんです。小沢さんは、

小選挙区でどうしてもいくんだと言っているから、背中にピストルを突きつけられて、違うことを言ったらドーンと撃つぞと言われて、一方、最大政党の社会党は、小選挙区に反対だというから、これは本当に辛かったと思うんです。

だから、細川さんにしてみれば全く形勢が悪くなって、自民党案を丸呑みでもいいからまとめるというのが、保身とは言わないけれども、ダメージが少なかつたんじゃないかと思うんですよ。

○紅谷 確かに、最後の合意は、前年十一月のトップ会談で蹴った内容でしたから、細川さんが完全に丸呑みしたと思われるものでした。

○河野 一回目の党首会談のときには全然受け付けなかつた案を、二回目は、ほとんどそれで結構ですとなつたんです。だから、細川さんは、どんな案であれまとめなきゃいかぬという立場にいたと思ふんです。それは、僕もややそれに近い立場で、あそこでまとめられなかつたら政府案になる可能性もあるから、僕もまとめなきゃいけないという立場です。

だから、何を考えていたかといえば、どうすればまとまるかということになって、二人とも自分が考えていた案とは違う結果になつたわけです。

しかし、二人とも、自分の考えていた案は個人的に考えていただけでどこでも審議していたものではなくて、終わつてからの愚痴話というか昔話としては言うけれども、全く現実的な話ではなかつたと思うんです。

○紅谷 小選挙区制での選挙は、平成八年が最初でもう八回の選挙を行つています。

○河野 小選挙区になれば死に票が多くて、本当に世論の大多数を代表するのかどうか。だから、比例代表を組み合わせて拾おうとしたけれど、その比例代表は、やってみたら小選挙区で落選した人を

救うような機能を果たし、少数意見を汲み上げるといふことにはほとんどなっていないと思うんです。

ですから、私はやはり失敗だったと思っっているんです。

○紅谷 そこら辺りの懸念というのは、選挙制度の議論の中で、小選挙区と中選挙区のメリットとデメリットを比較して、ある程度の議論はされていたと思います。

○河野 そうですね。あのときは田邊國男さんが政治改革特別委員長で、委員会では真面目な議論がされていたんです。しかし、実際は全く違うテーブルで話が進み、それから、民間政治臨調は全くの独自案を出して、国会での真摯な議論が余り評価されなかったというのがとても残念でした。

○紅谷 当時の議論では、そもそも日本に二大政党制、白黒をはつきりさせて、グレーの部分がないというのが日本の風土に合うのかどうかとか、死に票の問題もありましたし、小選挙区は本当にお金がかからないのかとか、随分いろいろな意見がありました。それで、二、三回選挙をやってみて駄目だったら変えればいいじゃないか、当時、小選挙区制に積極的だった議員もそう言っていました。

○河野 そうでした。ところが、それを二、三回やったときには、その制度で当選してきた人がマジョリティーになっているかもしれないから、もう戻れないですよ。

○紅谷 調べてみましたら、今の現職議員で中選挙区制での選挙を経験しているのは七十三名、約十六パーセントです。

政権交代があった平成五年の選挙が最後の中選挙区制での選挙で、岸田総理や安倍元総理が当選した選挙、当選九回以上の議員です。

○河野 だから、中選挙区制議連へ行ったときに思ったのは、小選挙区制は失敗だったと言ったけれども、元に戻せという気持ちはないから、元に戻せというのではなくて、このままでもいいとは思わないから、更に改良された別の案に移行してもらえないかとい

う気持ちでした。

○紅谷 実際に先生も小選挙区で四回の選挙を経験されて、中選挙区時代との違いをどう感じられたのでしょうか。

○河野 僕は新自由クラブ時代があったから、とてもやりにくかったんです。つまり、中選挙区で三人でやっていたのを、小選挙区にその三人を割り振って、新たに保守の固まりを作らなくてはいけないけど、僕は新自由クラブで自民党と敵対していたから、選挙区で自民党公認になっても絶対の一つにならないんですよ。場合によっては、あいつらとは嫌だから向こうに行くとか、選挙には関わりたくないとかとなって、オール保守というのはできないんです。

具体的に言うと、隣の選挙区で僕を応援していた河野後援会が、違う候補者と一緒になってどうなっているかというところ、河野後援会の幹部連中が向こうの選対へ行っていて、組織の中で下の方へは行きたくないわけですよ。ところが、向こうはそんな偉そうなことを言っているのは要らないとなって、なかなか融合しないんですね。何年かたてば一つになったと思うけど、二度目、三度目なんかはますます悪くなりましたね。

それから、小選挙区の候補者になれば絶対当選するから、候補者になることが非常に難しくなる。難しくなるというよりは、候補者を選ぶということが最大の問題になる。

イギリスに行くのと、予備選挙みたいなのをやって当選した人が候補者になる。イギリスの場合には、候補者を選ぶということがとても重要で、よさそうな人を党本部がストックしておくようです。

ところが、日本の場合には、その地域で候補者を選ぶとしてもなかなか見つからないし、選ぶといたって誰が選ぶのか、論文を書いたって、それを読んで誰が判定するのか。

しかし、そういうことをやらないと、小選挙区というの中選挙区よりもはるかに現職優先で、活性化が非常に難しくなるという問

題もあるんじゃないかと思うんです。

それで、候補者選定が非常に難しいから、だんだん執行部に権力が集中して、何とかチルドレンみたいなのがその都度出てくるのも、マイナスの要素に働いたかもしれないですね。

○紅谷 自民党という政党には、非常に幅広い意見、右から左までの様々な意見があつて、それを聞いていれば政策の是非が分かると言われているんですが、小選挙区になって、党の方針に反するような意見はなかなか言えなくなつてきているのに比例して、人の幅も狭まつてきたのではないかと言われていますが、如何でしょうか。

○河野 余りなじまない話かもしれないけれど、かつての東京二区というのは、菊池義郎さんから宇都宮徳馬さんまで、要は極右と極左と言われた人がいたんです。それでもやはり二人とも自民党の公認候補で当選して来るんです。あの選挙区の比較的リベラルな人は宇都宮さんを応援するし、非常に保守な人は菊池さんを応援する。両方出てくるけどどっちも自民党だということ、自民党は非常に安定した幅広い支持があつたんです。それが一人になって、保守の方が五一%あれば全部保守で、四九%のリベラルは完全に排除されるから、それは党から出ていくというか別の党を支持しなきゃならなくなる。

そうなると、以前から自民党がやっている、業界団体をつつにすることは、政策も非常に一方的になりますよね。

○紅谷 私が、現場の委員会にいた頃は、自民党の理事が四人から五人いて、自民党の中のシステムとして、それぞれの派閥から理事を出してましたから、時々意見が違ふことがあつてどっちなんだと思つたことがありましたが、今は全くそんなことはないでしょうね。

○河野 あの頃は、初めは意見が全然違ふけど、総務会は最後は全会一致でなきやいけないという、相当議論をして撫でたり賺した

りして、金平糖みたいな法案をパチンコ玉ぐらい丸くして、それでもどうしても駄目なら、悪いけれども欠席してくれと言って全会一致をつくる。反対だけれども、全会一致が党の伝統だから欠席して文句は言わないという、暗黙のルールがずっとあつたんですね。

ところが、それがだんだんなくなって、多数が全て正義だということになつてきたんですね。

○紅谷 国会審議活性化の議論の中で自民党の意見の一つとして、最終的な意思表示をする場合は本会議だから、委員会までは党議拘束はせずそれぞれが意見を述べて、本会議は自民党として一致した表決の態度をとる、というのも国会審議活性化の方法じゃないかという意見がありました。

○河野 採決は、委員会では数えるけど、本会議では数えないからね。それは何かといえば、何党は賛成で、何党は反対だということ

が分かつているから、数える必要がないわけですよ。それから、比例代表で党が選ばれて、党の名簿で上位が当選するから、こういう言い方は本当はよくないかもしれないけれど、自分が選ばれたのではなく自分が属する党が多数を占めて、その多数の意見を自分が言っているみたいなどころがあるから、特に比例で選ばれた人が党の主張と違う主張をするというのは理屈が合わないですよ。この頃は、そういうことがあつても多少は認められるみたいだけでもね。

だから、比例で当選した人は、離党してどこかへ行くなんていうのは本当はおかしいので、次の名簿の人が上がってくるべきですよ。○紅谷 比例の人は、他の政党に移ることはできませんから無所属になつていくのですが、筋論からいうと、議員を辞めるべきでしょうね。

○河野 本当はそうですね。辞めて次の順番の人が繰り上がる。比例代表というのはそういうものだと思います。

だから、選挙というのは本当に難しく、一票の重さは平等でないといけないということになると、それは全国区の選挙をやる以外にないですよ。県単位でやったってブロック単位でやったって、一票の重みは相当違いますからね。ところが、全国区でやれと言われると、これはこれでまた知名度の高い人がいいとか、全国的な組織を持っている人でなければできないとか、それから金がかかり過ぎるとかといういろいろな問題がある。

それからもう一つ、細川さんも言っているけど、やはり選挙制度を見直すときには衆議院と参議院の両方を見ないと、一方だけ変えても駄目なんですよ。だから、あの時は参議院はあれでいいという前提で衆議院を変えたけれども、実は、一票の格差ということから考えると、参議院の方に物すごく問題があったのに余り議論されなかったですね。

何度も言うけど、宮沢さんの本心は腐敗防止法でした。とにかく政治資金のスキヤンダルを撲滅する、腐敗を撲滅することが大事だという議論をしないまま細川内閣になって、中選挙区か小選挙区かみたいな議論で、小選挙区だということになった。

自民党が抱えていた問題もあるし、細川さん側も抱えていた問題がいろいろあって、生煮えというか本当に完全に議論し切った結論じゃなかったですよ。

○紅谷 四半世紀経って、小選挙区制で八回の選挙をやって、当時は、小選挙区制に変えれば二大政党制になって政権交代が可能になると言い、実際に政権交代はありましたが、今ののように、野党第一党が分裂して百人もいないような状況。それに加えて、それ以外の政党、公明党や共産党は、ずっと残っています。政策論争が起きて、政権交代が実現したのかについては、著名な学者が全く間違いだっただと言っています。

今の政治状況から、選挙制度を変えるといえるのは難しいですが、

今できることは何なのか、お話のように、比例の重複立候補の問題や、政治資金の問題とか、議論すべきことがあるのでしょね。

○河野 最近の広島の記事もそうだし、議員の政治資金にまつわるスキヤンダルを考えると、政党交付金として公費助成されているのだから、もっと深刻に考えないとだめですよ。税金が使われているのに麻痺状態というか、本当に困った状態だと思いますね。

それと、腐敗防止とか政治に対する信頼を回復し維持するというのは、本当に無限の改革をやっていく気がないとできないけれど、さればといって、落ち着かない制度でも困るんですよ。

総裁になる前でしたが、二大政党というのはうまくいくかという議論を随分やりましたよ。野党の人たちに言ったのは、二大政党にして政権を取ろうと思ったら、できるだけ主張が寄っていかないと、国民は全然違っている船には乗り換えられないので、近くなければ駄目だと。

ところが、近いなら変わっても仕方ないじゃないかという議論も一方にはあって、そういう議論を延々していくと、やはり二大政党というのはいまうまくいかないかもしれないと言ったりしたことがあります。

いずれにせよ、二つの政治勢力、替われという勢力と従来の勢力とが、民意をもう少し幅広く反映するということが必要なんじゃないですかね。

○紅谷 早晚、次の総選挙があるのは任期から確定していますから、そういう原点に立ち返って、選挙制度なり政治資金の問題を、もう少し議論してほしいなという思いは、当時の議論を知っている一人としては期待したいところです。

○河野 本当にそうですよ。ほとんどその当時を知らない人ばかりで、そんな議論があったのかみたいな話で、本当に情けないけれどもね。

広島的事件が起こったら、こんな事なら公費助成を受けるべきでないとか、もう止めようという反省の弁が少しは出てきてほしい。

だって、自分が納めた税金は自民党に行つてほしくない、社会党のために税金を納めているんじゃないという人もいっぱいいるわけだから、もらっている政党の方はそのくらいのことは感じてもらわないとね。

政治改革は大失敗なんと言っちゃいけないけれども、本当にもう少し時間をかけて真剣に議論をしてほしかったということですね。

○紅谷 しかし、衆議院の講堂に並んだお二人の写真が、政治改革の証として新聞の一面を飾っていますのでね。本当に寒い冬の夜でした。

○河野 つらい話だな。雪が降つてね。私は、あんなところに講堂があるのを知らなかったよ。

## 《自社と連立政権の樹立》

○紅谷 細川内閣は平成五年八月に連立政権としてスタートし、政治改革法案を成立させましたが、細川総理の佐川急便からの借入問題で自民党から厳しい追及、突然の国民福祉税の表明、更には社会党はじめ連立内での不協和音が起きて、翌年四月には退陣を表明し、羽田内閣が成立しました。

連立内閣では、社会党との関係がぎくしゃくして、新生党、改革、民社党で、社会党抜きで改新という会派を結成して対立し、羽田内閣は発足したものの、社会党は閣僚を送らず連立から離脱してしまいました。

羽田政権は少数与党になり、予算は通しましたが、その後、羽田内閣不信任決議案が出されました。自社で可決必至という状況になり、羽田総理がどうするのか、場合によっては解散もあり得るとい

う話もありましたが、その時点で、選挙の新たな区割りが出来ていませんでしたから、そこで解散すると中選挙区での選挙ということになるということも起因していたと言われ、結局は総辞職しました。そこで、自社連立へと進んでいくのですが、そこら辺りの経緯をお聞かせください。

○河野 とにかく政局が不安定でした。

連立内閣は、細川、小沢、武村という連携が全然うまくいかないんです。本来はその三人が固まればしっかりしていたはずなんですけど、細川さんと武村さんは途中から全然駄目で、小沢、武村というのは全く駄目。それから、細川、小沢は、小沢さんが言うことを聞かせているというだけで、お互いの共通認識というのは全然ないよ

うで、ぐらぐらですよ。そういう中で小沢一郎さんと公明党の市川雄一さんのいわゆる一・ラインという非常に強硬な路線が顕在化してきて、何を考えているかというところ、社会党を外さないと安全保障政策がうまくいかないうから、社会党を外そうと言って、民社党をたきつけ大内啓伍さんがそれに乗っかって、改新という会派を作つて社会党を外すわけです。

社会党は連立内で最大会派でしたが、小沢さんは、社会党を外しても自民党から相当数が取れると考えていたんです。

それは自民党にとって対岸の火事じゃなくて、こっちに火の手が回っていることだから、自民党の総務会なんかは全然議論が落ち着かないんですよ。例えば、内閣不信任案を出せば潰れるのは分かっているけれども、不信任案を出すべきでないという議論が結構あったんです。僕は総務会で出せと主張したけれども、駄目だというんですよ。社会党はまだ向こう側にいるのだから、自民党が不信任案を出しても通らないと言いつつ、出して通らなかつたら総裁が腹を切るのかみたいな話が毎日のようにあったんです。

僕は、羽田内閣は全然駄目だと最初から思っていたけれど、なかなか潰せないでいたんです。

ただ僕らは、社会党もそうだけれども、予算を通すまでは羽田内閣でいこうと思っていました。連立内閣が作った予算だから社会党は賛成せざるを得ないけど、予算の賛成と不信任案の賛成とは必ずしもイコールではないと言っていたんです。

だんだん潰れることがはつきりしてきて、潰れたときに総辞職して、直ちに首班指名をどうするかとなり、解散すれば選挙かもしれないということ、僕はどっちでもいいと思っていましたが、党内にはそうでない人もたくさんいて、荷物をまとめて向こう側に乗り換えるか、いつ乗り換えるかと考えていた人たちは困っていたんです。

結局、羽田さんは予算が通ったら総辞職すると言っています。羽田さんと社会党の話し合いでは、総辞職するけど、首班指名のときにはもう一度羽田が出て支持するのでどうだという話もあったんです。しかし、社会党の中で、そんなばかなことはできないから、必ずしも羽田じゃないよという話になったんです。

その辺りから、自社さ、さは全然最初は頭になかったけど、自社連立でいこうと僕らは考えて進めることになったんです。芥川龍之介の「藪の中」じゃないけれども、俺がこうやった、俺がああやったと言っているけど、みんな違って、誰が進めたのかよく分からないんですよ。

それで誰を担ぐかとなって、自民党だけでは十何票足りないから、自分が出て勝てないことは分かっていたけど、僕がそれを言う前に、加藤紘一君が村山富市さんでいいんじゃないかと言いはじめたんです。加藤君はその頃、自治労と一生懸命話をしていたらしいけど、やはり僕に対して多少意識があつて、河野を担ぐよりは、社会党でもいいんだという気持ちがあつたんじゃないかと思えますね。僕は、自民党内からそういう声が出るかなとちよつと思っていたので、村

山でいいんじゃないかと話をして、村山さんでいこうということになつていったんです。

みんなそれぞれ、野中さんは野中さんで、亀井さんは亀井さんで、それから村上さんは村上さんで、自分のパイプで社会党と話していたけど、まとまった話は余りなかったんです。そもそも村山さんという人はとても真面目な人で、そういう話には一切乗らない人でした。

それで、村山さんがボタンを押さない限りどうにもならないと思つて、僕は何もしなかったけれど、森さんが飛んで歩いて、とにかく自社で手を組まない和不信任案も通らないし政権も戻らないから手を握る。社会党と組むには村山を担ぐ以外にないと、自民党の中には社会党と組むのは絶対駄目だという議員もいっぱいいたのを、何とかなだめたんです。

一般の人は、社会党は相当閣僚ポストを渡せばこつちに乗るだろうから、自社政権でいこうと思つていたんです。それでも、まさか村山さんが首班とは思つていなかったんです。

しかし、いろいろ考えてみて、村山政権でいこうと言えば恐らく社会党はまとまるだろう。自民党はとにかく与党に戻りたいから、総理大臣になるよりもまず与党になる方がハッピーなわけです。だから、僕らは、別に総理大臣じゃなくても与党になればいいことにしようじゃないかと結論づけたんです。

○紅谷 自民党が政権への回帰志向が強かったのは傍から見ても分かりましたが、それでは、自社政権の推進というのは、誰かが中心になつて進めたということではなくて、いろいろな人が社会党にアプローチした結果ということですか。

○河野 そうです。いろいろな人がやっていたんです。不思議なのは、自民党とさきがけでも過半数にはぎりぎりなつたはずなんだけけど、自民党を批判して出て行ったさきがけは全然ターゲットじゃない

かつたんです。最後は連立で一緒になったけど、考えてみれば、さきがけと組むのが一番よかったのかもしれないですよ。

後藤田さんが元気でいれば、きっと細川さんか武村さんと呼んで一緒にやろうじゃないかと言ったと思うんですよ。後藤田さんが言えれば、どちらかは分かりましたと言ったかもしれない。

○紅谷 自民党が社会党と連立を組むに当たっては、長年の対立があり、政策面での一致についてはどう考えていたのでしょうか。

○河野 僕はそれは全然心配してなくて、社会党は既に小沢さん達と組んで政権を作ったのだから、我々の政権に入れないはずはないと思っていました。だって、少なくとも我々よりはずっと右の連中と組んでいるんだから組めないはずはない。だから、僕は政策的には全然心配していません。もちろん、具体的には安保条約をどうするかとか、憲法をどうするかとかという問題はあるけれど、それは乗り越えられるだろうと思っていました。それで、党首会談の前に政策協定をチェックしたら、社会党とさきがけの政策協定があつて、それを参考に龍ちゃんが呑めるような案を作らせたんです。

橋本君は、社会党との連立には積極的ではなかったから、初めは全然見もしなかったけど、訳を話すと、そうかと言って封筒を取り上げて、テーブルには着けるなと言ったんです。それでトップ会談の準備に入ったんです。

○紅谷 社会党の中には、久保書記長や山花さんなど、連立に残るべきという人たちもいました。

○河野 久保さんたちは、連立政権で大事にされていたというか、話の輪の中に入れてもらっていた人達ですよ。

一方で、官房長官をやった野坂さんは、連立が改新という会派を作って社会党を外したから、自民党と組んでもいいんじゃないかと思っていたんですよ。だから、森さんは社会党と手がかりがなかつ

たのを、小里、野坂の国対委員長同士のチャンネルを使って、党首会談をやる以外にないと野坂さんに言う。野坂さんは久保さんを飛ばして、村山さんへ一直線に行っていたんです。

とにかく久保書記長は、うんと言わないんですよ。そして、村山さんという人は物すごく真面目な人だから、連立の一翼を担っている以上は無責任なこととはできないから、向こうとの話が終わったらこっちへ来ますと言うんですよ。

もう時間がなくて最後の場面は、森さんが小里国対委員長を使って、幹事長・書記長会談をセットして、森さんが久保さんに党首会談を提案するんだけど、その前に僕のところへ来て、河野さん、村山さんを担ぐのでもいいかと言うから、それでいいよと言って、それから村山擁立が本格的になっていくんです。

久保書記長は、村山擁立の提案を持ち帰って、後からトップ会談をやりましょうという話になったんです。

○紅谷 村山さんを担いで自社で一緒にやっていくという話は、当然ながら極秘裏に進められていました。私は、当時は議運にいましたが、与党側の筆頭が森井忠良さんという人で山花さんの側近、二番手は山下八洲夫さんという村山さんの側近でした。それが、ある会議から、突然、筆頭はこれから山下がやりますからという話で、それは自社で組むということだったので、事務局は理由が分からず、驚くだけでした。

河野・村山会談は、首班指名前日の夜に院内の常任委員長室で開かれますが、この段階で、さきがけは入っていませんが、そこはどのような交渉経過だったのでしょうか。

○河野 これは、もう言ってもいいだろう。

首班指名の本会議の二日か三日前に、高輪プリンスホテルで、河野、村山、武村の極秘のトップ会談をしたんです。マスコミは何となく匂って張り込んでいたから大変だったんです。運転手さんに飛



ばしてもらって、各社の車を全部巻いたんだよね。あれは衆議院の運転手さんで上手な運転だった。目をつぶっておいてくださいよと言われたなあ。

結局、そこでは決まらなかったんです。一つの構想としてこういう構想があると言ったけど、武村さんは終始批判的だった。それはそうだよ、彼は自民党を離党した直後だからね。

しかし、武村、田中秀征と村山、野坂というのはべったりだったんです。

○紅谷 いやいよ河野・村山のトップ会談に進んでいくのですが、河野先生は村山先生とは、それまでに接点はあったのですか。

○河野 全然ないんですよ。僕はほとんど知らなかったですね。だから、連立で組もうかと言いだした頃から村山という人をちよつと研究しましたけど、真面目な人でしたね。僕は、社会党にあんな真面目で全然はつたりがない人がいるというのに驚いたほどでした。

○紅谷 首班指名の本会議前日に、河野・村山会談で自社さ政権で村山さんを総理にという話をされますが、そこでのお二人の話を聞かせていただけますか。

○河野 本場に最後の段階、もう時計を見ながらでしたよ。

そこには、村山さんと野坂さんがいて、僕が村山さんに総理をやってくれと言ったら、村山さんは、いや、河野さんがやるべきじゃないか、あなたは第一党なんだから、あなたがやりなさいと。いや、私がやっても十票か二十票足りないから駄目なんだ。社会党は私を担いでも入れないだろうけど、あなたが立てば自民党はみんなあなたに入れる。何で、あなただと社会党が崩れ、私だと自民党は崩れないのかと言うから、自民党は何が何でも与党になりたいから自民党は絶対入れるけれども、社会党は私が立ったって私には入れないから、勝つためにはあなたが立つ以外にないんだという話を小一時間したのかな。そこでは、社会党と連立側との最終協議が翌日だったから、

村山さんは党に持ち帰ってから返事をするということだったので終わったんです。

○紅谷 いやいよ首班指名当日になりますが、本会議前の両院議員総会では村山擁立には反発があったようですが。

○河野 村山擁立論は、何で社会党なんだと全然雰囲気は良くないんです。両院議員総会の最中に、中曽根さんが、離党して連立側に行った海部さん支持という記者会見するというメモが来ましたよ。僕はここまで来たらしようがないと腹をくくっていたけど、その時に佐藤孝行さんが中曽根は間違っている駄目だと言って、とてもきつかったんです。正直言うところの頃は、もう中曽根と違って、別に議員の一人だという程度で、大魔神とは誰も思っていないで

ました。逆に、中曽根さんが海部支持となったので、社会党は急にまとまったと言っていましたね。

両院議員総会では、平井卓志会長が、結論が出ないなら打ち切る以外にないけれど、そうなる为本会議はめちやくちやになると思っていたら、衛藤晟一君が出てきて、自分は村山さんと同じ選挙区で敵対候補だが、その僕も政権復帰のために村山さんに一票入れると言って、もうなるようにしかならないと思った修羅場でした。

本会議が始まる前に、院内の幹事長会議室に村山さんが来てくれたので、村山首班を確認したんです。

その直前だったか、海部さんが離党して首班指名に出るという話で、僕と森君と橋本君がいるところへ来ましたよ。

○紅谷 いやいよ首班指名の本会議に入っていくのですが、自民党の中でも、海部さんに投票した人、棄権した人、河野洋平と書いた人もいて、結果は村山二四一、海部二二〇で過半数に達しなかったんで、決選投票になりました。

一回目に自民党で海部と書いた人が二十六人いましたが、二回目では十九人になりました。

○河野 どうしても村山と書けない人がいたんだよね。中曽根さんもそうだったのかな。

○紅谷 中曽根さんは、一回目の投票のときは本会議に入るのを中曽根派の人に止められて投票できませんでしたが、決選投票では海部さんに入れました。

三十分間の休憩の後の決選投票では、村山二六一、海部二一四で、村山さんが内閣総理大臣に指名されました。決まった直後に、森幹事長側近の中村正三郎さんが、社会党の野坂国対委員長に駆け寄った光景が印象的でした。

○河野 村山さんが決選投票で首班として指名された後、自民党は院内の議員総会の部屋で待機して、そこへ村山さんが就任挨拶に来られた。村山さんは、この部屋に入ったのは初めてだけれども心配はしていない、誠意は必ず通じると言うと言って、短いけれどもとてもいい挨拶をして帰っていかれました。

### 《自社と政権の歩みと政権移譲の打診》

○紅谷 村山総理が誕生し、自社と政権での組閣になりますが、大蔵や外務の主要閣僚の分担、さらには自民党の派閥からの推薦等の問題もあつたかと思いますが、自社と連立政権での組閣の経緯や方針についてお聞かせください。

○河野 その前段としてつけ加えたいのは、僕が自民党の総裁になって、細川内閣に対して本会議で代表質問をしたんですね。その中に憲法問題も多少入れて質問して、それが社会党からは拍手が上がって、自民党の中からはすぐ野次が飛んで、どっちの代表だみたいな話があつて、そのときに、自分の主張というのは、自民党の総

意では必ずしもないということも分かっていたけれども、改めてそこで知らされたという感じがありました。

そういう前段があつたから、村山さんを説得するときにも、社会党側はやや安心していた部分があつたと思うんですね。いろいろな人が村山さんを口説いたけれども、最終的に村山さんが引き受けてくれたのは、村山さんや野坂さんの周辺に、河野という人間のリベラルさに対する許容というか安心感があつたんじゃないかという自負があるし、他の人だったら村山さんは受けていないと思います。

我々が、村山さんが首班指名されて良かったと言っていたら、村山さんが会いたいから来てくださいという連絡があつて、行ったら武村さんも呼ばれていて、村山さんから、両党に支えられて首班指名を受けたので二人には責任を持ってもらおう。ついては、大蔵大臣か外務大臣かを二人で相談して受けてくださいと言われたんです。

僕は明日返事をしますからと言って、宮沢さんのところへ行つて大蔵か外務かどっちを取りましようかね、僕は自民党にとっては大蔵大臣が重要だと言ったら、宮沢さんは、絶対外務大臣をやってくださいと言われるんです。ただでさえ社会党首班ということでアメリカがすごく心配して、これは大変だということになっているから、自民党の総裁が外務大臣になって、外交政策、日米関係は揺るがない、外交政策は不変だということをちゃんと知らないと言われないと日米関係がおかしくなります。アメリカとの協調が大切ですから、絶対外務大臣を取らなくては駄目ですと言われたんです。

次の日の朝一番で村山さんのところへ行つて、外務大臣をやりますと言ったら、武村さんも外務大臣と言ったけど、私がやると言ったら、じゃ大蔵大臣という話で、村山さんにしてみれば、そこで柱二本が決まり、官房長官は社会党が取るとですね。

実は、その前の晩に、石原官房副長官から電話があつて、村山さんに続けてやってくれと頼まれて、固辞したけれども、とにかく政

治改革ができ上がるまでやってくれと言われて引き受けましたが、官邸に自民党が一人もいません。総理が社会党で、五十嵐官房長官が社会党、園田官房副長官がさきがけで、自民党は誰もいないので宮内庁との連絡や関係がうまくいくのか心配でしたが、村山さんの言うとおりにするしかなく、自民党は官邸なしでしょうがないという事になったんです。

そこから先は、森幹事長とか、社会党は久保書記長、さきがけは田中秀征さんだったか、幹事長クラスが集まって組閣の相談をしたんです。それで、議員の数と比例して大臣は、自民党が十三人になった。誰にしようかというので、それは、派閥に割り振ったわけではないけれど、緊急事態でやむを得ない従来の自民党の手法でやりましたよ、特別な人事は田中真紀子さんだけです。

森さんだったか、女性を入れた方がいいだろうと言うから、話題性はあるから田中真紀子がいんじゃないか、初めて当選していきなりだけど、彼女なら何とかやるだろうと思って呼んだら、やりましょうと初めは二つ返事で引き受けたけれど、帰って考えたら環境庁なんか嫌だ、科技庁ならいいみたいなことを言っていて、そこで替えたんですよ。

○紅谷 いよいよ村山自社さ政権がスタートし、閣僚の顔ぶれを見ると、野中さん、亀井さん、与謝野さんという、主要ポストは自社さ政権を考慮した人たちが就いたように見えます。

その後は、すぐにサミットを控えています。村山総理は、最初の出番がいきなりサミットというのは、非常に不安だったのではなかったでしょうか。

○河野 本当に緊張していたんですよ。

僕もそうだったけど、認証式が終わって役所へ戻ると、すぐサミット用の資料がどんと来るんです。僕の資料は外務省関係だけだけど、総理のところには各省が資料を持ってきて、村山さんはすぐサ

ミットの勉強を始めたんです。

僕は、サミットは首脳会議だから、外務大臣はついていくだけだと思っていたら、おせっかいな秘書官がいて、総理は大変だから勉強会に行つて一緒に聞いたらどうですかと言いに来たけど、人の分まで聞いていられないと言つて行かなかった。ところが、それが後になって大失敗だったんです。

そうしたら、秘書官が村山さんは本当に真面目にやるけれども、日に日に萎えてきていて大変だと言うんです。それで、サミット経験者の話を村山さんに聞かせた方がいいと思つて、宮沢さんに頼んだら、私が話をしましょうと言つてくれて、官邸に来てもらいました。それで総理と二人になったら、宮沢さんは、総理は英語の心配はまるで要りません、コールだったか誰だかも英語が全然できませんから、英語なんか話す必要はまるでないんです。それから、話題はいろいろあるけれども、サミットは勝った負けたという場じゃなく自分の経験談みたいなものを話す場ですから、アメリカとヨーロッパの人が、アジアの問題、例えば中国とか韓国、北朝鮮の話なんかは、みんな喜んで聞きますから、そういう話をして、ほかの話のときには別に聞いていなくてもいいし、誰だったか自分に関係のない話のときにはずっと絵葉書を書いていますから、それで大丈夫ですからと言うんです。村山さんは、ああ、そんなもんかね、ほうほうほうと言つて。それで少し気が楽になったんですよ。それ以来村山さんは元気になったという話でした。

それで、組閣から五日目か六日目にもう飛行機に乗って行くので、こっちも何だかよく分からないままついでに行つたんです。

○紅谷 六月二十九日が首班指名で、三十日に組閣、ナポリ・サミットは七月八日からですから、準備期間は余りなく、慌ただしい出発だったようですね。

○河野 一週間なかったですよ。しかも外務省が心配して、他の国

はどこも来ていないのに、初めてだから早く行った方がいいとか言っ  
て一番先にナポリへ行ったんです。先に行っても相手がいないから  
カプリ島で休養していたけど、村山さんは行かないで一生懸命勉  
強していた。

そうして、いよいよ明日から始まるというときに事件が起こるん  
です。

まず、首脳のデイナーパーティーのときに、村山さんが下痢をし  
て途中で病院へ行った。それを僕は初めは知らなくて、報告を受  
け、これはえらいことになったから病院へ行こうと言ったら、そん  
なことをしたら大騒ぎになるから、今夜は知らぬ顔していてくださ  
いと言うので、園田官房副長官だけが病院へ行って、ほかは誰も行  
かなかった。

それで、病院の園田君から電話がかかってきて、もう落ち着いて  
大丈夫で、本人は帰ると言っているけれども、イタリアの医者が、  
明日までいてくれと言うので帰れないけど、元氣だから大丈夫です  
と。だけど翌日からサミットが始まるのに大丈夫なのかと言ったら、  
大丈夫だと言うので、じゃ、まあいいやと言って部屋に帰ったら、  
今度は電話でたたき起こされて、北朝鮮の金日成が死んだというん  
です。

北朝鮮で暴動が起こるかもしれないとか、難民が韓国へ入ったら  
韓国が大騒ぎになってえらいことになるか言うけど、どうしよう  
もなく、とりあえず韓国の外務大臣に我々はあなたの側にいるとい  
う電話をかけて、何事もないと言うので電話を切って、寝ようと思  
ったらまた起こされて、村山さんが明日のサミットの会議に出られ  
ないと言っていると言います。

それで、これは大変だ、誰が代わりに出るんだと言ったら、外相  
が出ると言います。総理の勉強会をサボったから何をやるか分か  
っていないけど、もう明け方三時か四時ぐらいだから、なるように

しかならないと思っ  
て寝ちゃったんだ。

次の日は朝から会場へ行くんだけど、到着する順番が私が一番早  
いんです。というのは、新顔ほど早く呼ばれるから、日本の総理が  
一番在任期間が短いので一番最初。しかも代理だから会議場へ一  
先に行ったんだ。カメラマンがいっぱいいるけど、僕が行ったって  
違うのが来ているから、名簿なんか見たってわからないですよ。

入口では、イタリアのベルルスコーニ首相が待っていて、僕が入  
っていても全然知らないから、日本から来たと言ったら、驚いた  
顔をして村山はどうした、元氣かと言うから、病院にいますですが  
元氣になりますからと言ったら、それは良かったとか言っているけ  
ど、向こうはイタリア語で何を言っているか分からないんだ。

サミットの会場は、会議室へ入ると真ん中に丸テーブルがあつて、  
シエルパが一人入るだけで誰も入れないんです。あのときは外務審  
議官の林君がシエルパだったけど、私も大臣になったばかりで余り  
知らないし、林君は部屋の一番隅っこに座っているから全然連絡な  
んかできないんだ。

会議は、冒頭から株価が高過ぎやしないかとか、とにかく昨日、  
今日の話ばかりで、全然分からないんです。この株価を安定させる  
ためにどうするかとか結構みんな自由にしゃべって、それで、クリ  
ントンが何とか会議をつくるかと言い出して、私は取りあえず反対  
だと言った。敏感な株価のことだから、いきなり会議をつくろうな  
んて言うと、それが元になって株価がまた上下する可能性があるか  
ら慎重にやるべきではないか、これはまず大蔵大臣会議にでも一遍  
降ろしたらどうだと言うと、ベルルスコーニがそうだと  
言うので、それはそうなんです。私の発言はその一度だけでした。

そんな話を昼までやって、昼食会は首脳だけだということで私は入  
らず、外務大臣会議が別の会場で行っているの、そこを抜けて外  
務大臣会議に出たんです。そうしないと外務大臣の顔合わせが全然

できないからね。それで終わってまた午後の首脳会議に戻ってきたんです。

○紅谷 今のサミットは首脳と各大臣の会議は時期と場所を替えて行っていますが、この当時は一同が集まっていたのですね。

○河野 そうなんだ、同じ場所だった。

あのときは、武村さんと橋本さんと僕の三人が行ったんです。外務、大蔵、通産と行ったんだけど、各国は外務、大蔵しか来ていなくて、そもそも通産は呼ばれていなかったんです。橋本君がどうしても行くというので行っただけ席がないんです。橋本君が怒って、外務省の準備が悪い、こんなことなら帰ると言うので、外務省は大騒ぎしていましたよ。

話が前後するけれども、サミットが始まる前に、村山さんとクリントン大統領の日米首脳会談をしたんです。

それで、もし村山さんが硬くなつてうまくいかなかったらもう終わりだということで、武村さんと橋本さんと僕がホテルまで付いて行くけど部屋には入れないから、まず村山さんが一人で三十分だけやるというんです。うまくいけばいいがと思っていたら、三十分が、四十分たつても五十分たつても全然出てこないんですよ。それで、何かとんでもないことになったんじゃないかと言っていたら、村山さんがここにこしながら出てきたので、どうでしたと言ったら、面白かったよと言うんだ。

それで、帰りの車に村山さんと乗って聞いたら、なかなか話のよく分かる若い人だ。若いといったって、二、三十歳違う子供みたいなもんだけど、なかなかいい、面白い若い衆だと。生い立ちから何かをずっと説明して、漁師の出だと言ったら、向こうもどうとかと言って、何かすごく気が合ったと言うので、ああ、よかったよかったですというのが前段にあったんだ。だけれど、その日の晩飯で村山さんは倒れちゃうんだ。

翌日の首脳会議が終わって夕食会なんだけど、村山さんは夕食会も出てこないんです。それで僕はまた夕食会に呼ばれて行きました。次の日から村山さんは出てきたので、それから後はずっと外務大臣会合に出ていたんです。

○築山〔衆議院事務局〕 首脳会議では、サミットにロシアを呼ぼうという提案に反対されたようですが。

○河野 そうです。

ロシアが、核兵器を使わなくするよう処理する金を出してくれと言っていて、それを相談するのにロシアも呼ぼう、そして仲間に入れようという提案で、僕は一人で反対した。

日ロ関係には領土問題という難しい問題があつて、そう簡単に賛成するわけにはいかない。大体、お金を幾ら出してやるかという話に、本人が来て一緒に話をするのはおかしんじゃないか、金を出す相談は私らだけですればいいんじゃないのかと言ったら、コールが、ドイツは物すごくお金を貸し込んでいるものだから、エリツィン是非常に大事な仲間だから彼らを入れて相談をする必要があると。それで、そうだと行って、みんな賛成なんだよ。

ここでは、僕が晩飯会に中国を呼べばいいのと言ったのが話題になって、ロシアを呼ぶくらいなら中国を呼んだらどうだと言ったら、メージャーが、中国が来たがっていないよと言って、話は終わりになっちゃった。

ロシアを呼ぶことについては僕が孤立していたけど、フランスのシラク大統領だけが、日本の言うのは一理あるんじゃないかと助け船を出してくれました。それ以来、シラクとすごく仲よくなったんです。一週間目でそんな大きな会議に出たので、逆に一週間で各国首脳と全部会えたから、それから先は楽でした。

帰ってきて一月たないうちに、今度は日韓首脳会談をやったんです。村山さんが、俺は韓国って行ったことないから一緒に行つて

くれと言うんだ。あの頃の社会党は韓国とは駄目で、行ったことないからと言うけど、僕も行ったことなかったんだ。

僕は金大中さんと仲がよくて、金大中さんが死刑判決を受けて、やっと思赦になったところだったから、そんな国は行かなかったんだ。自民党で韓国へ行かない数少ない議員の一人だったけど、村山さんと二人で韓国へ行きましたよ。

行ったら、先方は金泳三大統領で、会談はすぐ良かったんです。あの頃は、河野談話の後で、韓国と日本との関係はよくなりつつあって、割とうまくいきました。

○紅谷 村山政権発足後の外交の話がありましたが、ナポリ・サミットから帰って一週間後ぐらいから、臨時国会が始まりました。村山内閣の実質的なスタートで、所信表明演説になります。

自社さ政権のスタートに際しては、署名もない口頭での政権合意でしたが、新政権への代表質問ですので、自衛隊や安保条約の問題が論戦となることが予想されました。村山総理の所信表明に際しては、自社さで事前に話をされたのでしょうか。

○河野 それは、ないんです。

村山総理は、サミット前の日米首脳会談で、日米安保条約は堅持しますと言ったんです。五十嵐官房長官はびくりして、総理との打合せでは、日米安保条約はギリギリ維持するところまで言うといっていたのに、会談では堅持すると言って、もう一歩進んだんです。

社会党はびくりして、僕らも、いいのかと村山さんに聞いたら、わしが総理になったからしょうがないと言うんだよね。もうそのときは、安保条約、それから日の丸・君が代は現状を認めるということで、腹をくくっていたと言っていたよ。

だから、所信表明でも日米安保体制堅持と言いましたよね。

○紅谷 そうでした。ただ、村山さんの回顧録では、本当は維持だ

つたけれども堅持と言ったから、そこからもう変えられなくなったと述べておられました。

○河野 社会党内の、五十嵐官房長官との打合せでは維持だったらしい。

日米安保体制は堅持しつつと言いつつ、自衛隊はあくまで専守防衛、必要最小限の防衛力ですね。

自民党と社会党との政策合意は、社会党とさきがけの合意事項というのが元々あって、それを土台にしたものでした。

○紅谷 それは具体的というより、主要項目を簡条書にしたようなものでしたから、村山さんは、具体的な項目についての合意事項は、後から共有するんだという言い方をされていたようです。

○河野 今にして思うと、あそこで村山さんに総理大臣を引き受けてくれと言って詰めた話合いをしたけど、村山さんは、それを引き受けるときには、相当な変更を自分の責任でやらなきゃいけないという覚悟があつて、相当考えられたんだろうね。ただ単に嫌だと言っていたわけじゃないんだよね。

○築山〔衆議院事務局〕 社会党の党是に関わる政策ですからね。

○河野 結果、これがきっかけになって社会党は潰れちゃうわけだから、悪いことをしたよ。

どこかの時点で、さっき言った三党の摺り合わせが必要ということと、週に一度、三党首会談というのをやることにしたんです。

閣内では、玉沢防衛庁長官が、最初の閣議で立ち上がって防衛問題について意見を述べたいと言うから、僕は、玉沢さん、我々は村山内閣の一員だから村山内閣の方針に従って仕事をするので、いきなり立ち上がってそんなことを言うのはやめなさいと言って止めたことがあります。それ以来、もう彼は何も言わなくなりました。

○紅谷 お話があったように、日米安保の問題、自衛隊の問題、国旗・国歌の問題と、村山さんは総理になった以上は避けて通るわけ

にはいきませんでした。そうすると、世間的には社会党の譲歩ばかりじゃないかという印象が強かったと思います。

村山総理の発言に、本会議場で自民党から拍手が起りましたけれども、お聞きになっていて、どう感じていらしたでしょうか。

○河野 まあ、しようがないと思っただね。

それは、言ってみれば、社会党は名を取って、自民党は実を取ったという感じですね。自民党は総理大臣を譲るという最大の譲歩をしたわけだから、政策的なことについてはやはり自民党の主張をできるだけ入れないと国会が動かない、自民党内で駄目だと言ったら動かないわけですからね。それはもう村山さんはよくわかっていました。

○紅谷 しかし、政権を組んでいた社会党の中での評価は分かれていました。

○河野 社会党は、村山・野坂ラインと、久保・山花ラインとで分かれていて、久保さんは村山首相指名の直前まで、従来の小沢さん達との連立政権でいくんだと言っていたんです。だから、僕らは羽田政権の方がこっちより政策的にもっと右だから、羽田さんと組んで僕らと組めないはずはないと思っていました。

自民党は、総理を譲っただけでなく、原爆被爆者援護法、それから五十年決議等、いろいろなことでも相当譲歩したんですよ。

○紅谷 政権前半は、所信表明での発言や、消費税の3%から5%への引上げ、年金の支給開始年齢の引上げとか、社会党にとっては非常に厳しい政策判断をせざるを得なかったと思うのですが、その後は、今お話があった戦後五十年決議や村山談話になっていきます。

○河野 非自民の連立から社会党が出てくるタイミングにも、社会党は物すごくつらい思いをして出てくるんですね。つまり、小沢、市川ラインというのは猛烈に右に振られていたから、社会党の主張がみんな拒否されて、久保さんが一緒にやろうと言うと、安保、防衛なん

かどんどんハードルが上がって、社会党が呑みにくいような話ばかりして、それで出てきたんですね。

○紅谷 平成七年に入ると、政治日程に加えて、阪神・淡路大震災やオウム真理教によるサリン事件が起きました。

阪神・淡路大震災の一月十七日というのは、社会党の中で、山花グループが新民主連合を立ち上げる当日で、事務局は新会派の届けを出すという事前連絡を受けていましたが、あれで社会党の分裂がなくなりました。

○河野 そうでした。あの年は次から次へと大きな事件が起こったひどい一年だったね。

村山総理と一緒に訪米して帰ってくるときに、山花さんが新党を作って社会党は割れるという話をしていたんですよ。だから、全く内憂外患だったよね。

三月のサリン事件の日は、山本富雄さんの葬儀に行くというときに、霞が関を車で通ったら何か騒いでいるけど、何だか分からずに通り過ぎて草津へ着いたら、大変な事件だと知らされたんです。

○紅谷 サリン事件では、私は院内から第二別館の方を見たら救急車が止まっているんです。

それは地下鉄から人を救護していたのですけれども、しばらくの間は何だか分かりませんでした。

○河野 阪神・淡路大震災の日は議員宿舎にいて、明け方に必ず衆議院の公報が配られるんですよ。コツコツと歩いてきて、郵便受けにガシヤンと入るのでいつも目が覚めていたんだよね。その日もコツコツ、ガシヤンと来て、テレビをつけたら何か大変だ、何にも見えない、どうしたんだろうと。阪神高速がぐにゃつと曲がって道路が落ちていて、しばらく何だか分からなかった。

女房の実家が神戸なものだから、家は相当やられていたし、電話は通じなかったのかな。

○紅谷 ちょうど国会審議が始まる前でしたが、震災があったので予算も早く早くということ、四十年ぶりに二月中に上がって、国会の方はすんなりと終わりましたが、内閣は震災対応で大変でした。

○河野 地震が起こった日は閣議の日だったんです。宿舎には全然報告が入ってこなくて、とにかく官邸へ行ったら、橋本さん、野中さん、亀井さんなどは、ああなると張り切るんだよね。橋本君が大きな声でライフラインは俺が引き受けたとか言ってる、みんなそれぞれ各所を回って行けとか言っていましたよ。

僕は外務大臣で各国からの支援要請を受けていて、覚えているのは、スイスから世界的に有名な災害救助犬の部隊を是非使ってくれという話があったけど、農水省が動物防疫のルールで入れないと言っただね。話し合ってる、外務省が付いて現地に行ってもらいましたよ。

○紅谷 震災の影響で国会は与野党の対立もなく進んでいきましたが、会期末になって、いわゆる戦後五十年決議がありました。

野党第一党の新進党が欠席、共産党は反対。自民党の中にも反対、社会党の中にも欠席者が出ました。さきがけは、武村さんが欠席でした。

○河野 これは失敗だったね。与党で調整していたけれど、謝罪の言葉がないとかいってなかなかまとまらず、根回し不足もあったし中途半端だったね。

国会がそうだったので、村山さんが、官邸はきちっとしたものをかさなきやいけないということで村山談話になったんです。

○紅谷 国会決議は、三党の幹事長クラスで協議してもまとまっていなかったのですが、会期末だったので見切り発車になったということのようで、その反省から村山談話に繋がっていきます。

村山談話は、河野談話のところでお話がありましたけれども、河野談話が後からいろいろと言われたので、閣議決定をしました。

○河野 そうです。あれも途中で「の」を入れて村山の談話にしるという話が自民党の方から来たりして、これはいけないというので、ちゃんと閣議で決めなきゃ駄目だということになったんです。

実は、閣議もリスクはあったんですよ。村山さんは自分で随分電話して話をし、橋本君は初めは駄目だと言っていたけれども、村山さんからちゃんと話が行っていたんですよ。よくやりましたよ。

○紅谷 このような経過を辿り、自社さ政権は一年が経過しました。自民党は野党転落から再び与党に復帰しましたが、自民党は変わっていたのでしょうか。

○河野 自民党は十一か月の野党暮らしをしたわけで、その間の自民党はやはり相当悲惨だったんだね。だから、何としても与党に戻りたいという気持ちが強かった。

だから、首班指名選挙では、村山さんを担がなかったら、とにかく与党になりたいわけだから、もしかしたら羽田さんを担いじゃう可能性だってあったわけですよ。だけれども、自民党が分裂して来るなら歓迎するけれども、党全体で来たら第一党になっちゃうから分かれて出てこいと言っただね。

自民党を抜けて向こうに行こうみたいな動きもあって、あの頃は危ない毎日でしたよ。朝起きたら、今日は何人くらい離党届を持ってくるかなんて思っていました。

○紅谷 あの頃、自民党の議員が言っていたのは、野党というのはこんなに寂しいものなのか、今までは予算編成になれば人のごった返していたのに、全然人が訪ねてこない。何かしたくても何もできないから、早く与党に戻りたい、盛んにそう言っていました。

自社さ政権発足から一年後に参議院選挙があり、自民党は三十八人から四十六人に増えますが、社会党は惨敗で四十一人から十六人、新進党は逆に十九人から四十人になって、比例では第一党が新進党という結果でした。



この選挙をどう評価されたのでしょうか。

○河野 あの参議院選挙は、幾つか大事な点があったんです。

一つは、与党として勝つか負けるか。つまり、自民党だけじゃなくて、自民、社会、さきがけの与党でどのくらい取るかということが非常に重要で、自民党だけ勝っても社会党やさきがけが負けては駄目だから、選挙協力をやるかという話も一時あったけど、参議院で選挙協力はできないんですよ。自民党は全選挙区に候補者がいますから、社会党を推薦すると全面的に応援するところまでいなくて、こつちがちよつと遠慮するかという程度で、気持ちにはあつたけれども実際はできない。

選挙協力をやるうというのは、村山、河野、橋本とか森の周辺ではあつたけれども、現場では選挙協力なんてとてもできないという状況で、実態としてはできなかった。世間の評価として与党として勝つかどうか、その心は、社会党がひどく負けるんじゃないかという心配があつて、結果社会党は惨敗だった。

それから、自民党は議席数で増えたけれども、比例の票数で新進党に負けたことが大きなダメージだったんです。それまでも自民党の得票数はずつと減ってきていたんですが、それが決定的になったからね。

○紅谷 そういう選挙の結果を受けて、選挙当日の夜に、村山総理が河野さんと武村さんを公邸に呼ばれました。そこで村山総理が辞意を表明されたのですが、どういう話だったのでしょうか。

○河野 村山総理は、こういう選挙結果になって自分は辞めたいので、あのときは明確に、後は河野さんにやってもらいたいと言ったんです。

僕は、まあそう言わずにもう少しやってくださいと言ったけれども、村山さんは、いや、もうできないから後は頼むよと繰り返し言っただけです。

それならば分かりました、引き受けましょうと言つたら、武村さんが、さきがけは村山を担ぐことで一致してきているので、自民党を担ぐことについては合意できていないから改めて相談してみる、ここですぐに了承はできないと言つた。

それじゃ、それぞれ持ち帰って、相談してまた集まろうと僕が言つたら、五十嵐官房長官が、それは駄目だ。この部屋の外はマスクミがいつばいで、一遍持ち帰りだと言つた途端に、村山内閣おしまいと大見出しで書かれるから、ここを出るときには決めて出てもらわないと、決めずに出てもらつては困りますと。

隣の部屋に森さんが控えていて、村山総理が辞めると言っているけど、引き受けるかどうかと言つたら、いや、それは引き受けない方がいい、ここは村山統投がいいと森さんは言うので、じゃ、そうしよう。僕もそんなに、何が何でもやりたいという思いじゃなかったから、幹事長がそう言うならそうしようと言つて、すぐその場で折り返したんです。

森君は、そこで小淵副総裁と相談していたんだろうし、小淵さんは、恐らく竹下派と相談していたと思う。

その伏線は、選挙中の最後の頃に秋田に行つたとき、野呂田芳成さんが、今日は一日お供しますと言つて一緒に車に乗っていたら、途中で橋本君を幹事長にしたらどうでしょうかと言うから、それは小淵さんが副総裁になつているから、一つの派閥から副総裁と幹事長と二人出るのはいくら何でも駄目だ、橋本君を幹事長にするなら、小淵さんを外したらどうだ、私はどつちでもいいけど、どつちか一人と言つたんです。それがとても気に入らなかつたらしくて、経世会は河野を担がない、倒して自分たちで取る以外にないと決めたんだらうね。経世会は、かつて金丸副総裁、小沢幹事長という時期があつたじゃないか、なぜだめなんだということのようなんだよね。そんなことがあつて、参議院選挙が終わつた後に、村山から河野

へのボタンタッチはそこで止められたわけです。

○紅谷 その場面というのが、河野先生がご自身で回想され、自分が総理に一番近かった瞬間じゃなかったかというふうに述懐されていますが、やはりそう思われたときだったのでしょか。

○河野 ええ、そのときはそう読んでいましたね。

だけれども、隣の部屋へ行ったら、すぐ駄目だと言われたんで、その瞬間は一瞬だったな。

でも、おかげで八十まで生きたよね。あのとき総理になっていたらもう死んでいるよ。だから、人間万事塞翁が馬ですよ。

○紅谷 本当に、平成七年という年は、政治的にも大変な年でしたし、奥様を亡くされた年でもありました。

○河野 本当にいろいろな意味で、体力、気力とも無くして、私はならず、橋本君が総理になったものだから、気の毒なことに橋本君が先に死んじゃったんだ。かわいそうに。でも、なったから嬉しかったかもしれないけれども。

○紅谷 その後、八月には村山改造内閣が発足し、九月には自民党の総裁選挙を控えていました。

自民党は参議院選挙で議席を増やし、河野先生は総裁選挙に出ることになりますが、そこで対抗馬として橋本さんが出てきました。

○河野 これは私ごとになるんですけども、七月二十三日が参議院選挙投票日で、女房が選挙の最中の七月十三日に死んだんです。それから、選挙が始まる前に、僕自身の毎月受けている病院の検査数値が物すごく悪くて、病院に入ってくださいと言われた体調、女房が死んだという状況、それから選挙がうまくいかなかったということがあって非常に厭戦気分、もう政治闘争しようという気分には余りならず、相当な精神的ダメージは受けていたんです。

そうして、総裁選になるといふときに、橋本君が出ると言い出したんです。僕は橋本君と悪い仲ではなかったから、二人で会ってよ

く話をしたんですよ。龍ちゃん、俺ら二人が喧嘩すると党は大変だよ、俺らの次の世代は、加藤君とか小泉さん、山崎さんだけど、まだとても任せられるほどじゃない。それが分かっている俺とあなたが喧嘩したんじゃ党も上手にやれないから、やらせてくれるなら俺はやりたい、どうなんだと言ったら、いや、俺も本当は出たいとは思っていないけど出ざるを得ないんだ。絶対後ろに下がれないから、悪いけれども戦わざるを得ないと言うから、そうか、それじゃ分かったと。

これで喧嘩するならもうできないと、そのとき僕は何となく思っただけです。

それから一か月ぐらいの間は、橋本派が旗揚げをしたとか何をしたらとか言っているのを聞きながら、僕は外務大臣だったから、ずっと海外ばかりで総裁として党内をまとめる仕事なんかできないんだ。僕の周辺の人たちからは、外務大臣を辞めて総裁選の準備をしないとこのままじゃ選挙にならないから、辞表を出してくれと言われましたよ。だけど、国の外交を預かっている以上、自分の都合を理由に辞めるといふわけにはいかないと言っていたんです。彼らは、それじゃ本当にやられ放題だと言うので、僕は二年間総裁をやった間に村山政権をつくって、自民党の政権復帰を果たし、それから政治改革にも決着をつけた。その評価が駄目で替えた方がいい、あるいは、もっといい候補者がいると言うなら、もう止めた方がいいと考えたんです。

僕が、もつとテンションが上がっていて好戦的な心境になっていれば、もちろんやっただと思えますけど、さっき話したような前段があつて、個人的にも非常にテンションが下がっているときだったということもありませぬ。

さらに公的なことを言えば、初めての小選挙区制の選挙があるのだから、これは政対政の選挙になるわけだから、党内が対立してい

たら選挙にならないわけです。二つに分かれての論争、それはタカとハトの戦争です。例えば、龍ちゃんたちは改憲と言うし、こっちは護憲と言うし、相当本質的な意見の対立で戦うわけです。

それで勝ち負けがついて、一方は勝った方の軍門に下って一本になるんだけど、選挙の一月前に論争したんじゃない、その後どうにもならないだろうという気持ちもあって、評価されずに対立候補が出て、しかも、マスコミは粗方が橋本の方が勝つと見ている、党内の評価が向こうの方が高いというなら、これは戦わない方がいいなと。もちろんそれは相当な心の葛藤はあったけれども、最後に、オーストラリアで日豪定期閣僚会議が終わった晩にホテルで一人で考えて、これは止めようと思って、オーストラリアから宮沢さんに電話をかけて、こういうことで僕は止めようと思います。宮沢さんは、あなたがそうお考えならそれがいいでしょうと言うし、後藤田さんとは相談しようと思ったけどできなくて、それで東京に帰ってきて、僕の準備を一生懸命やってくれていた人達に集まってもらって、次は止めようと思うと言ったんです。

○紅谷 河野総裁を推していたのは大勇会のメンバーだけではなく、宏池会でも田沢吉郎さんや柳沢伯夫さんが推していたように、河野総裁に大きな問題がなければ、宏池会も、それから、幹事長が三塚さんですから、清和会だって総裁を推すのが当然だと思うのですが、宏池会なり清和会はどうだったのでしょうか。

○河野 そこはいろいろあって、三塚さんを幹事長にしたことに問題があったんですよ。

僕が官房長官を辞めて、これで野に下ってしばらく蟄居しようと言っているときに、何が何でも出ると言って僕を引きずり出した四人がむちやくちや走ってくれた。僕を担いでくれた人が三塚さんに、河野さんを応援してくれたら幹事長にすると口約束をしていたんだと思うんです。それは口約束だから証拠は何もないんだけど。

どこかでこの口約束は果たしておかないと、嘘をついたことになると思われるのが嫌で、そのためには森君を幹事長から外さなきゃいけないわけです。そこで、村山さんに談判して改造をやるうとだけでも、村山さんは改憲は嫌なんです。そこは僕が駄目だったんだけど、村山さんに無理やり改造してもらって、野中さんと亀井さんを外したんです。

それで、三塚幹事長は実現したけれども、野中、亀井という腕っ節の強そうなのがみんな反河野に回った。そういう下地があって、総裁選はもう出ないということになったわけです。

○紅谷 河野先生が総裁選出馬を断念される一方、総裁選が橋本さん一人だけではというので、清和会から小泉純一郎さんが手を挙げました。

○河野 清和会というところは不思議なんだよね。

何だか知らないけれども、総裁選はお祭りだから、わいわいやった方がいいと言っています。

清和会では、小泉なら先々邪魔にならないみたいなき分です。それが、橋本君がちよっとびっくりするぐらい小泉が票を取るんです。それが後々、小泉総理に繋がるのだから、分らないものだよ。

○紅谷 河野先生は総裁選を断念されましたが、村山内閣で引き続き外相として残られます。

○河野 僕は辞表を出したけれども、村山さんから、それはこれだから、外務大臣は続投してくれと言われて残ったんです。

だから、あそこで僕が絶対辞めると言えば、橋本君は外務大臣志向だったから、橋本外務大臣だったかもしれないね。僕が辞めなかったのは、気になっていた沖縄少女暴行事件があつて、モンデー駐日大使と話をして、この問題はちよっと大変だから、これはやら

なきやいけないかなと思っただからです。

○紅谷 総裁選挙が終わって、橋本総裁誕生が平成七年九月です。それから三か月後の平成八年一月に、村山総理は突然辞意を表明されました。

ですから、常会の前に首班指名をするために、急遽臨時会を召集して総理指名を行い、橋本総理が誕生します。政権の枠組みは次の選挙まで続きますが、河野先生が辞め、村山総理が辞められたので、自社さ政権は実質もう終わったというのが正直な感想でした。

○河野 それにしても、村山という人は立派な人だったね。それは日本の国にとつてすごく運が良かったんじゃないかな。とても正直でまともな人が、戦後五十年という節目のときに総理大臣になっていて村山談話を出して、あれは日本の国にとつては良かったことだと思えますね。

自民党総理は随分いたけれども、やはり大平とか宮沢という人は立派だと思いましたが、村山さんは見識もあり、それに次ぐ人だと僕は思いますね。

もう今は九十七、八ぐらいの高齢だけのお元気なようで、一遍会いたいと思っっているんだけどね。

### 《小選挙区比例代表並立制で初の総選挙》

○紅谷 平成六年一月に細川・河野トップ会談があり、政治改革関連法が成立しましたが、新たな選挙区の区割りについては、選挙区画定審議会の答申を待って十一月に法案が成立し決定しました。

小選挙区制での初めての選挙は平成八年十月でしたから、小選挙区制法案が通ってから二年以上が経過していました。

河野先生の選挙区は、旧神奈川県五区の平塚、小田原、内陸部の秦野、伊勢原、厚木までの非常に広い選挙区でしたけれども、ここが

神奈川県十五、十六、十七の選挙区に分かれました。自民党は河野先生と亀井先生が現職で、内陸部の十六区は亀井先生の地盤でしたが、河野先生は、住んでいた平塚の十五区なのか、出身地小田原の十七区なのかで、随分迷われたのではないのでしょうか。

○河野 それはもう本当に迷ったんです。私の家、河野家は昔から小田原なんです。私の父が選挙に出るときは、小田原には鈴木英雄さんという政友会の大物議員がいて、小田原からはとても出られないというので、平塚に自宅を移すんですよ。

それが、戦争になって平塚は空襲で危ないので小田原へ戻ったんです。だから、僕は小学校、中学校は小田原なんです。

父が死んで後を継ぐということで平塚を拠点としていたけど、小学校、中学校の同級生はみんな小田原にいて、平塚には幼馴染みがないんです。それでも父の支持者が多かったから、小選挙区になるまでに選挙を九回やっています。後援会は若い者も増えてきて、老壮青、みんな平塚を中心でした。

そこで、十五区の平塚でやるか十七区の小田原でやるか、本当に悩んだけど、僕もそう先は長くないし、やはり実家と菩提寺もある小田原にと、さんざん悩んで決めたわけです。だから平塚の後援者からは俺らが育ててやったんじゃないかと怒られました。その上、僕の後を県会議員にやらせようとしていたら、急に太郎が出るというのでびっくりして。全然そんな話はなかったんだけど、太郎は平塚で生まれて育ったから、前からおやじがいなくなったら、小学校、中学校の仲間とここでやるんだと言って、彼は頑張っていたらしいんです。

小田原では、小学校、中学校の同級生がいてやはりありがたいもので、今でも小学校からの付き合いの仲間がいて頼りになるんですけど、悩んだのは、僕は平塚で九回選挙をやったといっ

も、自分でまともに選挙をやったのは三回くらいしかないんですよ。四回目には新自由クラブだったから、全国遊説ばかりで地元の選挙区にはあまり行けないで、女房が全部身代わりをやっていたんです。

そうになると、婦人会の仲間が幼稚園とか小学校のママ友なんですよ。だから、候補者の顔なんか見ないで女房の繋がりです。やるから、女房は絶対平塚でやりなさいと、小田原に行くんなら勝手に行きなさいと言っていたんだ。今では女房も死んでしまっただけで縁遠くなっちゃいました。

○紅谷 自分の選挙区が分かれるというのがありますが、亀井先生の支援者には自分に自分の方で選挙をやってもらうかというのは、大変なように思えるのですが、如何でしたか。

○河野 それがとても難しかった。

東京で机の上で論じていたところは、これまでライバルだった人たちと一緒にやってもうまくいく計算だった。それは足し算引き算ではそうなんです。でも、選挙区の隣接しているところは、ライバルの亀井さんの色が非常に濃いところなんです。

小選挙区になって自民党は私一人だから、自民党を支持する人はみんな私を応援してくださいとお願ひするんだけど、昨日まで競い合っていたから、なかなか一つにならないんですよ。組織はむしろ時限爆弾を抱えているみたいで、とてもやりにくかった。

○紅谷 最初の選挙では、対立候補は新進党の候補者だけではなく、もう一人保守系の候補者が出ています。

○河野 全く自民党系で、僕より保守的な人ですよ。政治のことはよく知っていた人だけど、政党単位で戦うというのに無所属でやるわけだから、ちよつと無理でした。

だけれども、このときは、ライバルの票は僕の票に乘らなくて、四五%しか取れていないんですよ。本来、小選挙区というのは五%以上取らないと勝ちじゃないだろうけれども。その後からは五

十%以上取っているんだけどね。

○紅谷 河野太郎さんも前評判は高かったんですけども、三六%しか取れず苦戦でした。

○河野 初めてだったし、相手の池田東一郎という人は新進党で、民主党からも旧社会党の富塚さんがいましたしね。

前評判は、おやじは危ないけれども太郎は大丈夫だと言われていて、新聞社は当確が出たらみんな向こうに行きますと言っていた。だから、富塚さんが野党統一候補になっていたら負けているんですよ。そんなことを言えば、僕だって五割取っていなかったから、野党が統一候補になれば負けるわけだ。

○鈴木〔衆議院事務局〕 河野先生は、世襲に関して否定的なお考えをお持ちでしたが、太郎先生が県連の会議で候補者に選出されたからは積極的に応援されたと聞いていますが、太郎先生の出馬に当たったの葛藤でしたり、また逆に、継いでほしいというようなお考えはありましたか。

○河野 僕は、今でも世襲は余り賛成じゃないんです。賛成じゃないけれども絶対駄目というわけにもいかない、それは政治に関わりたいたいという人の権利です。僕は父親として、丸々地盤を引き継いで楽をしてやるような世襲はやらない方がいいと、今でも思っています。思っていますけど、誰でも彼でも世襲だからおかしいよと言うほどの気持ちはないんです。

僕は、息子だけじゃなく秘書もそうだけれど、大学を出ていきなり代議士の事務所に入ってやるのは賛成ではないんです。社会人を二年でも三年でも経験して、それから政治をやってみたいと思ったらいらっしゃいというのが僕の主張なんです。

学校を出ていきなり親の事務所に入って政治をやるといのは、ちよつと社会を知らない、本当に分かっていないんじゃないかという気がするものだから。

だから、僕は世襲がいいとは思わないけれども、そういうちゃんとしたルートを踏んで、社会人としてもちゃんと勉強して、社会的にも一定の基礎をもつてからやるなら、それはいいと思うんです。

### 《内閣の変遷と小渕総理の逝去》

○紅谷 村山総理の辞任後、後継の橋本総理は平成八年一月に総理に就任しましたが、平成十年七月の参議院選挙で、当初の予想に反して惨敗して退陣し、小渕総理が就任されます。

○河野 橋本さんは、選挙の開票を見て畜生とか何とかいろいろ言っていたけれども、終わったら綺麗に引きましたね。

参議院選挙は政権選択の選挙じゃないから関係ないと言って居座った人もいるけど、橋本君は、そこはともきっぱり、同志の議員の方に申し訳ない、自分が責任を取りますと言って引いたんです。それで小渕さんになるんだね。

小渕さんは、僕は同じ年で同じ早稲田大学。小渕さんの方が僕より一期早く代議士になって、しかも自民党の佐藤派という本流を歩いて順調に出世して、とても早く総理大臣候補になるんです。僕は一期遅れて、しかも離党して野党暮らしをしていたから、あまり接点がなかったんですよ。

ないんだけど、新自由クラブで連立を組んでいたときに、中曽根さんからヨーロッパに外遊するから与党の一員として一緒に行かないかと誘われたんです。そのときのお供の団長が小渕さんで、その旅行中に小渕さんから、ちょっと二人で一杯飲もうやと言われ、旅先のホテルでいろいろ話をしたんです。そのときに小渕さんは、そのうち我々の時代が来るから、そのときは一緒にやろうみたいなことを言っていました。

しかし、最初の小渕総裁ができたときの総裁選で、僕は小渕さん

ではなく梶山さんを応援しました。

それで、二回目のときに、小渕さんを担げと言ってくる人がいたから担いだだけでしたが、外務大臣をやらないう話がありました。

○紅谷 このときは、自社さ政権は終わっていて、自民党単独から自公政権になっての外務大臣という時期ですね。

○河野 そうでした。

就任してすぐに済州島で日韓閣僚会議があつて、小渕総理と一緒に行ききました。それから、半年後に病気だということで驚きました。

○紅谷 小渕内閣で外務大臣として入閣されたのが平成十一年十月で、小渕総理は、予算が成立した直後の平成十二年四月二日に脳梗塞で入院されました。

○河野 初めは箝口令がしかれていて全く分からなかったけど、麻生さんが、どうも官邸の動きがおかしいと言ってきた。その後、脳梗塞で入院と公表され、青木官房長官の臨時代理も発表された。

五人組と言われ、どうしてあれが五人だったのか、本当なら党三役でなきゃいけないんだけど、池田行彦総務会長が呼ばれていないんだよね。

○紅谷 河野総裁のときに党四役にしたので、村上参議院議員会長は入っていて、池田総務会長だけが入っていないんですね。

○河野 僕は栃木県にいて、小渕総理が倒れたと麻生君から電話があつて、すぐ東京へ帰れと言ってますよ。それは大変だと帰ってきたけれども、どこへ行つていいか分からないんですよ。

○紅谷 麻生さんが帰ってきた方がいいというのは、場合によっては河野先生が後継と考えてのことだったのでしようか。

○河野 それも彼は考えたと思いますよ。

○築山〔衆議院事務局〕 沖縄サミットを控えていたので、外務大臣としてそのままやるのもあり得るんじゃないかという話でしたよ

ね。

○紅谷 そういえば、竹下総理が辞めた後に宇野外務大臣が総理になったのも、サミットを控えていたという理由でした。

○河野 そうでした。

しかし、結局は五人の会談で、村上さんが森君でどうだったって言って。あとは青木さん、野中さん、亀井さんですから。

○紅谷 それで、結局森総理になりましたけれども、いろいろ発言や事故もあって、一年余りの短命で終わりました。

### 《河野外交》

○紅谷 河野先生は、外務大臣を、村山内閣、小渕内閣、森内閣で合わせて三年余り歴任されています。当時は冷戦が終わって東西対立がなくなった時期で、日米基軸は変わらないけれども、日中や日韓関係は今に比べたら随分良かったと思います。

ただ、日本としては、日米基軸だけではなくて、新しく台頭してきたEUとの関係、あるいは中国との関係はどうするかとか、新たな視点を持ってその三年余りの間務められたのかと思いますけれども、外務大臣時代を振り返ってお話を聞かせていただきたいと思えます。

○河野 外交政策に関わったのは、宮沢内閣の官房長官の時からなんです。官房長官という仕事は割合と外交関係、つまり、官房長官が記者会見で発表する事柄の中では外交にすることが非常に多いものですから、官房長官時代から外務省の事務当局とのやり取りが相当ありました。

渡辺美智雄外務大臣が体調を悪くして入院し、官房長官時代に外務大臣臨時代理をすることもあって、その頃から外交問題についての関わりが多かったんです。

それから、カンボジアのPKOに日本が関わったときには、PKOの本部長は総理大臣ですが、総理から国会答弁は副本部長である官房長官がやってくれたいと言われて、国会答弁をやりました。

外務省は国際貢献を非常に重視していたので、カンボジアが少しうまくいき始めたら、今度はモザンビークへ出したいと言いつつ僕はちよつと慎重論だったから、外務省とは相当ぶつかった経験もあるんです。

村山内閣になって、宮沢さんからアドバイスがあつて外務大臣をやり、一週間後にはナポリでのサミットに行くことになったんです。あれは官房長官時代にやっていたいかなかったら本当に全く外交は白紙で行くことになったけれども、幾らかやっていたものだから、何となく調子は分かっていたんです。

外務大臣をやりましたが、私のかねてからの主張は、一つは軍縮。これは、どうしても日本は軍縮を主張していかなければいけない。軍縮と裏腹で護憲というか、現行憲法において軍縮というのが一つの柱。もう一つの柱はアジア重視。アジアにもう少しフォーカスを当てた外交をやらなきゃならないという、この二つを非常に強く思っていました。

アジア重視というのも、軍縮、護憲と大体方向性は一緒なわけですが。中国に対しても韓国に対しても、あるいは東南アジアに対して、アジアを重視しますという福田ドクトリンと同じ姿勢を示すと同時に、これは改憲論ではなくて護憲を主張しながら軍縮を主張して、つまり、戦争の被害を受けたアジアの国は、日本の軍勢力が増えることにはまだ危機感があり、それに対して軍縮と護憲を主張したことが、信用を得られやすかったと思う。

これは、宮沢内閣当時の外交政策の一つの柱でした。その時は、カウンターパートとして、韓国では金大中さんがいたし、中国では唐家璇さんを始めとして割と旧知の人たちがいた。ASEANは初

めはそんなに知っている人がいたわけじゃないけれど、ASEANができて上がって一番やる気満々のときだったから年中会議をやっていた。その会議には北朝鮮もアメリカもオプザーバーで入ってくるし、最初のASEANの会議なんかは、テーブルに座るとアメリカとベトナムが隣同士に座っているんですよ。これは同じテーブルに着くだけでも画期的なのに、それが隣同士で話をする。北朝鮮も参加していて、僕は、北朝鮮の外務大臣とは、割合とちゃんと話をしました。テーブルにつけばそういうことになる。

韓国の金大中さんと僕との繋がりには、宇都宮徳馬さんが、金大中は将来韓国をしょって立つすばらしい政治家だから、君、よく付き合えと言われたのが始まりでした。

○紅谷 金大中拉致事件の際に、宇都宮さんが随分動いていたという話でした。

○河野 そんなことがあったから、金大中さんも命を助けられたみたいな気持ちも多少あったんだと思うんです。

金大中さんは光州事件の後、死刑判決が恩赦で自由の身になって、しばらくアメリカへ行っただけです。

それが、次の次の大統領選挙に突如として出てきて、あれよあれよという間に有力候補になったと思ったら当選するわけで、僕もびっくりしましたよ。

その頃僕は無役だったのに、金大中さんは個人的な手紙をよこして、就任式に参加してもらいたい。できれば就任式の後に、二人で飯でも食おうじゃないかと言うんですよ。びっくりしたけれども、とにかく行ってみようと思って行ったら、何か特別席みたいなところへ連れていかれて就任式に出て、大統領だから就任式の後いろいろな仕事があると思うけど、二人で飯を食べようと言うんです。こうやって君と食事できるのが一番嬉しいと言って、とてもいい関係でした。

そんなことがあつてから、今度は僕が外務大臣になるわけですよ。それで金大中さんも、私が大統領をやつて君が外務大臣をやつて、本当に二人で今までの友情を両国関係に生かさなきゃ駄目だと言つて、それで随分深い付き合いをしました。だから、恐らくあの頃の日韓関係というのは特別良くて、文化の開放をして日本の映画も韓国で見られるようにし、音楽も聴けるようにした、そういう時代です。

中国は、唐家璇という割と深く長い付き合いだった人が外務大臣になつて、随分頻繁に行き来をして、彼が日本へ来たときは一緒に箱根の温泉に入ろうといつて、二人きりで入るような仲。だから、本当に人間的な、相つきつい冗談も平気で言い合えるような仲でした。だから、日中関係でいろいろな事件があつても、唐家璇に直接会つて話をするとう理解が得られやすくなる。そういう国と国との間も非常にいい関係ができましたね。

そんなことで、アジア重視の外交が非常に進んで、そうしているうちにEUとの関係をもう少し考えなきゃいけないと思ひ始めたんです。

EUができた頃は、日本へ代表を送ってくるけれども、日本の外務省は一国を代表するのだから大使として認めないんです。顕著なのは、信任状を一切奉呈させない。天皇陛下はもちろん、総理大臣も駄目。外務大臣も受け取らないと言うから、せめて外務大臣ぐらいは受け取つたらどうなんだと言つたんです。EUの代表を外交的に代表として認めてほしいというのを、僕らがサポートしてだんだんできるようになつて、そんなことから、EUの歴代の大使が僕のところへ挨拶に来たり遊びに来たりするような仲になりましたね。

僕は、日・EU関係をもう少し進めようと、フランスのパリで、きつかけになるスピーチをしたんです。「日・EU協力の十年」と



いう、今年から十年間の間に日・EU関係をより深くしたいという演説をして、それをEU側はとも喜んで、日本側も、僕は外務大臣を辞めた後ですけれども、その演説をきっかけにして日・EU協力の十年というのが始まって進んだんです。フランスからレジオン・ドヌール勲章をもらったのは、そういうことからなんです。

それから、その次に日本が取り組まなきゃならないのはイスラムとの関係じゃないかと考えたんです。

イスラム教の人は世界に十億億といえるのに、これに対する日本の態度は腰が定まっていけないんです。だから、イスラムとどう取り組むかということをしつかりやっていかないと駄目だと思って、外務省の中にイスラム研究会というのをつくって、外務大臣はもちろん参加し、局長、審議官クラスで勉強したいのは集まれど、月一回のペースで東大の先生なんかに来てもらって、イスラムについて話をしてもらった。それで、イスラムに日本はどういう姿勢で取り組むかということを考えて、スピーチ原稿を作ってカタルへ行ったんです。

それは、ちょうど国連が文明の調和と対話というのをやろうと言い出した時でした。僕はカタルの演説で、日本とイスラムとの間で文明間対話をやろうという提案をして、それから毎年、両方の学者が集まって対話をする。それは割と上手くいって、十年近く続いたんじゃないかな。

このように、アジアをやり、ヨーロッパをやり、イスラムをやつて、本来ならアメリカをやらなきゃいけないんだけど、アメリカとは例の沖繩の少女暴行事件があつて、沖繩基地問題が中心になりました。

それで、つくづく思ったのは、確かに日本外交の基軸は日米で、これを一番大事にしていかなきゃいけない。中国もあるしアジアもあるけれども、やはり基軸は日米です。ただ僕の感じでは、日米間

が基軸と言い、日本側は軸の棒の端をずっと持っているけれども、アメリカはしょっちゅう変わるんですよ。ランプと思うと、今度バイデンですごく変わるのに、日本はとにかく大事な基軸だと言っているけれども、その軸の端だけ持っていればいいというものでもないと思いましたね。

○紅谷 さらに、河野大臣の非常に強い思い入れから外務省の尻を叩かれたのが、国連改革であり、核廃絶の決議案の提出だったと思います。

○河野 軍縮とか核廃絶というのは、僕の政治家としての一つの目標だったから、何とかそれをやりたいと思って、自分でやること何かと思っていたんです。核保有国のリーダーが広島を直接見てくれることが一番いいと思ったけど、なかなか来ないんですよ。それならこちらから持っていく以外にないと思って、一議員として、広島から被爆直後のフィルムを借りてモスクワで映写会をやつて、被爆直後の広島の記事映画をモスクワ市民に見せたことがあるんです。ワシントンDCでもやりました。

国内では広島で軍縮大会に出席したり、いろいろやってみたけど、個人では所詮限界があるなとつくづく思いましたね。

外務大臣になって、国連で核廃絶の決議を出そうと言っても、外務省は全然乗ってこないんだ。よくよく聞いたら、日本は国連で決議というものを一遍も出したことがないと言うんですよ。弱小国でも決議案をいっぱい出してきているから、これを出そうと言ったら、日本は核の傘に入っており、国連ではアメリカ、フランスなんかの仲間になっていくから、核廃絶で核保有国を非難することはできないという。それでもどうしてもやるとさんざん言つて、ようやく究極的核廃絶の決議案を出すことになったんです。

決議文を作るのはなかなか難しかったけれども、そのときの事務局はすごく能力のある人たちで、立派な文書を作つて出して、大

差で決議が通るんです。

それ以来三十年近く毎年同じ決議案を出して通っていて、通る毎に外務省が喜んで報告に来るから、こんな同じものを三十年もやるということは核軍縮が全然進んでないということじゃないか、やるならもう一歩も二歩も前進したものをなさなきゃ駄目だよと、この頃は言うんだけれどもね。それでも、国連で究極的核廃絶という決議が通るといことは、本当に画期的だったんです。

それからもう一つは、これは全然方法が違うんだけど、非核地帯というのをつくるということ。それは中南米やニュージールランドの方で非核地帯をつくったりしている。この非核地帯をたくさんつくって、その非核地帯が地球儀を全部覆ってしまえば核廃絶になるんじゃないかと思って、それを称賛して、もつとやった方がいいと言っているんです。日本は提案しているけれどもできない。つまり、北東アジア非核地帯というのをつくろうじゃないかというところ、中国と北朝鮮が核を持っているから非核地帯にならない。でも、持っている使わないという意味で非核地帯をつくれないうのは中国で提案したこともあるんだけど、なかなか進まないんだよね。これも僕の外交政策の主張の一つなんですよ。

随分やったつもりだけど、考えてみればそんなことしかしていません。

○紅谷 三年余りの外務大臣の間は、国会で外務委員会等へ出席されて説明し答弁されていましたが、国会というのはどういう存在で、どのような印象をお持ちだったのでしょうか。

○河野 国会は、外交を進める上で非常に重要なんです。

例えば、国会の与野党の力関係を考えながらでなければ交渉はできません。向こうから何か言われても、いや、国会で反対されますから呑んで帰るわけにいきませんか、国会を口実に使うこともあります。とにかく国会というのは大事な存在です。

だから外交交渉のときには、憲法上の制約とか、国会の決議があるからと言って交渉を頑張ることもありました。

また、国会は民意の集まる場所ですから、その国会に説明して理解を得るだけの説得力が必要で、外国もそれは分かるわけです。だから、国会は外交上は裏ではとても尊重されているけれども、一方で、実際の外務委員会は、条約を成立させなくてはいけないから条約の審査を優先して、本当の外交問題、外交政策についてフリートーキングすらあまりできない。もつと意見を交換するような外務委員会であってほしいと思うけれども、そういうのは余りなかったんです。

○森元〔衆議院事務局〕 河野太郎先生が外務大臣になられた際には、外務大臣の経験として何かお話しされたこととかはあったのでしょうか。

○河野 彼はアメリカに四、五年留学していたんです。ジョージタウン大学では、その後国務長官をやったオルブライトさんのゼミです。そのせいか、彼はとても固いんですよ。外交ってそんなに固くはできません。僕が彼にいつも言うのは、外交というのは百点を取ろうと思っても百点は取れないものだよと。

外交で大事なことは、お互いが最後は合意しなければならぬから、双方が合意しなければ外交交渉というのには上がらないわけです。幾ら論破されても論破しても、俺が百点で相手が零点になったら相手は絶対手を握らないから合意はできないわけです。まあ早い話が、お互い六十点ずつで我慢すると、相手も本当は四十点なんだけれども何か六十点取ったような気分です、いいよ、じゃと言って手を握って初めて外交というのは合意ができるんですよ。決定的に何か物的証拠があったりなんかする時には違うけれど、普通の外交交渉というのは、お互いが六十点で満足すると言って手を握らないと駄目なんです。

ただ難しいのは、国へ帰って、百点を求めている人に六十点で合意したと説明することなんです。そこが若い人には理解が難しい。長くやっていると、ここは譲って、別のところで譲ってもらおうという場合もあるんです。人間関係も重要です。僕が外務大臣を三内閣でやった間に、アメリカの國務長官は、クリストファーとオルブライトとパウエルと三人替わった。

### 《宏池会の退会と大勇会の結成》

○紅谷 河野先生は、自民党に戻られて、宮沢先生の勧めで宏池会に入会されました。いろいろな反対があり、皆さんから歓迎されたというわけではなかったようですが、宏池会に入られる。

宏池会は、加藤紘一先生が中心に進んできていたという経過がありました。村山総理退陣後の総裁選では、加藤先生が橋本さんを推して、河野先生は結局は出られなかった。また、小淵さんと梶山さんが総裁選で争ったときは、梶山さんを推す河野先生と小淵さんを推す加藤先生で、宏池会の中でも対応が分かれたことがありました。その後、大勇会を結成されますが、そこら辺りの経緯をお聞かせいただきたいと思います。

○河野 僕は、初めて議員になったときは中曽根派です。中曽根派というのは、中曽根さんの思想信条からいってタカ派です。だから、僕は中曽根派にいたけど思想信条は全く合わない。

いつも、中曽根さんが左に行けと言うと僕は右に行っちゃおうし、右と言うと左に行っちゃって、全く中曽根さんとは合わない。

それで、十年後に自民党に戻ってきたときに、声をかけてくれたのが宮沢さんだったわけです。ただ宏池会に入っても、やはり加藤紘一君が宏池会のプリンス。後継者は加藤紘一君とほぼ決まっていたから、僕は入ったけれども別に加藤君とは競うなんていうつもり

は全然なくて、次は加藤君でいいな思っていた。

僕は宮沢さんに恩返ししなくちゃいけないから、宮沢さんを支えようと思っていたけど、多分加藤君はすごく意識していたと思うんだ。

そうしているうちにリクルート事件が起きて、宮沢さんと加藤君が引つ掛かるんです。そうなると二人は同志の選挙の応援に行けなくて、宏池会の応援依頼が僕に集まったんです。

その中で、僕の応援をひどく多としてくれた人が、粕谷さんとか相沢英之さんとか堀内さんとかで、選挙後に十数人のグループができました。それが大勇会の始まりです。

そうしたら、宏池会で派の中に派をつくる奴がいると言って批判されたんです。僕は別にそんなことはやっていませんよと言ったけれど、そういうのは派として好ましくないと言うわけです。僕は応援に呼ばれて行ったけど、呼んだ人たちも、河野さんにお世話になった、迷惑をかけちゃいけないと言って、それならもったときちつとやらなきやいけないみたいになっていったんです。

そのとき加藤君は幹事長で、例えば初当選した松本純君を呼んで、おまえ、どっちに入るんだみたいなことを聞くわけで、自然に色分けができていった。

そんなことがあって、僕は宏池会から離れたんだけど、それで加藤君たちが蠢動して、宮沢さんのところへ行って、加藤君にそろそろ譲られたらどうですかと談判し、宮沢さんが、じゃ、もういいですよと言って、宏池会は加藤派になった。でも、僕は加藤派に入ったつもりはないので、別にしようとなつたんです。

宏池会には十年余りいたけど、特に後半は官房長官をやり総裁、政権復帰して副総理・外務大臣ですと派閥を離脱していたから、選挙の応援には行ったけど、宏池会の中での活動はあまりしていないんですよ。

## 《生体肝移植》

○紅谷 生体肝移植についてですが、三十歳で衆議院議員に当選されて、もう三十代の頃から肝臓に異変があつて、それから三十年近く患い、最後は遺書まで書かれたと述懐されておりました。移植手術が終わってから、自分はロスタイムで生きていますとおっしゃっていますけれども、肝臓移植が平成十四年四月でしたので、もう二十年が経過しようとしています。

その二十年の間に議長もされておりますが、率直にこの二十年をどう感じていらっしゃるのでしょうか。

○河野 手術をしたときは六十五歳でした。そのときは、父が死んだのが六十七歳だったので、あと二年ぐらい、つまり、父の年を超えたいものだとの意味もなくちよつと思つていたんです。

手術の例はアメリカでは多かつたけれど、六十五という年齢での手術は極めて少ない。その歳になると、それだけの手間暇とコストをかけても人間の寿命があるから、手術が成功しても、あとどのぐらい生きるかそんなに永く生きられるか分からない。そうするとコストパフォーマンスが悪いわけですよ。

日本で生体肝移植をしているのは大体が子供なんです。六十五での生体肝移植の前例はなかなかないというのも、僕は全然知らなかつたんですよ。

手術は大変な手術で、僕は十五、六時間、ドナーになつた太郎も、十時間かかつたんです。太郎にリスクはないとはいつても、やはり腹を切つて内臓を出すわけだから、もちろんゼロではないんです。

そういう相当なリスクを負つてやるわけだから、僕が思つていた二年くらいは生きたいというのじゃ全然割が合わないわけで、本当はもう少し長くなくちゃいけないんだらうけど、二十年とは思つていなかったし、手術した医者もそうは思つていなかったかもしれない。

僕の場合は非常にうまくいった例の一つだけ、もつと若くて生体肝移植を行つてオリンピックの選手になつた人もいますよ。

だから、治ると完璧に治つちやうみたいなんです。年齢がいつてからの手術は少なかつたけど、太郎がすごく熱心で、僕は止めよう、もういいと言つたけど、彼が何が何でもやると言うのでやつて、正直、こんなにうまくいくとは思つていなかったから驚いているんです。

僕は、手術するまでは生きる意欲は減退していたけど、太郎の奥さんから、七年できなかった子供ができるという話を聞かされて、それがすごく生きがいになつて、孫の顔を見なきやいかぬという意識にすごく励まされた。その年の暮れに生まれたんだけど、それがもう大学生だからね。

二十年の間には議長もやらせてもらった。あの手術が終わつたときには、もう選挙はできないだろうと思つていたら、たまたま解散まで結構時間があつたものだから、かなり健康体に戻つていたんだね。それで地元の人なんかと相談したら是非やりなさいと言つたのでやつて、それから議長をやらせてもらいましたよ。

○紅谷 手術されて一年半後に議長に就任されて、それからほぼ六年間の在職、平成二十一年の解散で引退されてから十二年が経過して、今も元気でいらつしやいますからね。

○河野 今は楽をさせてもらつていて何か何とか生きていくけど、手術が終わつた後は、感染症の危険がすごくあると随分脅かされてね。何しろ、食べ物も生ものは駄目、あれもこれも駄目で全然食べられなかつたからね。

まあ、そのとおoryやつたわけじゃなくて、時には一杯飲んだりしていたけどね。

○紅谷 最初に肝臓の異変に気づかれて、肝移植されるまでの三十

年間には、いろいろな症状なり経過があったと思いますけれども、どうだったのでしょうか。

○河野 ひどかったんですよ。随分悪い状態が何回もありました。

三十歳で選挙に当選して、十年間は自民党にいて普通にやっていたら当選できたけれども、その間に少しずつ悪くなっていったようです。ちよつと頑張るとすごく疲労感があったけど、僕は人に言わない性格だから黙っていたけど、それが新自由クラブを作った直後にすごく出たんですよ。

自民党の若手のときに、子供がしょっちゅう風邪を引いたりして小児科の医者家が家に来ていて、僕がくたびれたと言うと、その医者が僕を診てくれていたんですよ。

ある時に、僕の調子がおかしいと思ったらしく、血液を採って検査したら異常な数値が出たので、気をつけた方がいいですよと言われたけれども、その時は何だかよく分からなかったんですよ。

その時は治療を全然せずについて、離党するということに、女房が心配したんで血液検査をしたら、ものすごく悪いと言うんですね。とは言ったって、飛び出した後だから、もう行くところまで行く以外にないので、四十から五十までの十年間は、新自由クラブで朝から晩まで全国を回って歩いていたら、どんどん悪くなった。新幹線の中でも毛布をかぶって横になって寝たまま移動するとか、すごい熱を出すとか吐き気が来るとか、そういうことがしょっちゅうあったんですよ。

だからといって入院はできないし、もつと頑張るんだと言って、それで最後はもう動けなくなって何度か入院しました。そのときに明らかに肝臓が悪いのは分かっていたけど、まだC型肝炎という言葉もなく、医者は非A非B型の肝炎だと。何のことだかよく分からなかったのがやがて病名がついて、それでC型肝炎と診断されたんですよ。

しかし、そのときには治療法はなく進行を遅らせるだけだったので、強力ミノファアゲンというのを点滴で入れるんです。点滴に一時以上かかるんだけど、忙しくてその一時間が待たなくて、注射で入れてくださいと先生に言ったら、そんな事は無理です、と言われたのを何とか頼んで、太い注射器でそのまま血管に入れたら、心臓がどきどきと鳴るんだね。それでも、そのまま飛んでいって電車に乗ったり役所へ行ったり、そんな無茶をしていましたよ。

○紅谷 その時点で、慢性肝炎に移行しているという診断がされていたのですか。

○河野 ええ、そうです。

このままいけば確実に肝硬変になり、肝硬変になったら大部分は肝臓がんになって恐らく回復不能ですから、そこで終わりですという話だったんですよ。

それで唯一の治療法はインターフェロンだけでも、これは効く人と効かない人があって、病気は治ったけれども二階から飛び降りるとか相当強い副作用があると言われて、僕はそういうのは嫌だから断ったんですよ。

そうしたら、外務大臣を辞めて肩書が何も無い時期に、こういふときだからアメリカへ行ったら治療しろと友人に言われて、躊躇してたけどどうしても行けと言われて連れていかれたんですよ。

メイヨー・クリニックというアメリカで屈指の病院へ行って診てもらったら、やはり同じことを言われたんですよ。C型肝炎で肝硬変が進んでいて、しっかり診たいから肝臓に針を刺して細胞を取って検査すると言われ、嫌だと言ったけど検査だけはして、こんなところにいるら殺されると思ったから、もう一日待てば結果が出るのに、帰りますと言って帰ってきちゃったんだ。

日本へ着いたら、すぐ報告書が届いて、結局、もう駄目ですという報告書なんです。それでもインターフェロンはやる価値がある

と言われたからやっただけ全然効かなくて、私としては、もうこれ以上人に迷惑をかけたくないから、治療を全部断ろうと思っただけなんです。

そう思っているときに、娘がアメリカの雑誌を見て、移植という手があるからやろうと言うんです。でも、ドナーがいなくてできないだろうと言ったら、私が提供すると言うんです。しかし、これから嫁に行こうという娘の腹を切って、親が生きて娘は傷だらけというわけにはいかないから、おまえのはもらわぬと言って娘と喧嘩になったけど、どうしてもやると言うんです。

そうしたら医者が間に入って、やはり女性の肝臓は小さいから移植には向かないと娘をなだめているところへ太郎が来て、俺のがいんじゃないかと言いだしたんです。我が家はすごく古典的な家だから、長男がいつも一番偉いんです。それで、俺は長男だから後の責任は全部俺が取ると言うんです。それでまた太郎と僕が喧嘩になって、僕は要らないと言うし、太郎はどうしてもやると言って大分やり合ったけれども、最後は私が根負けしてやることになったんです。

どこでやるかという話になって、僕は順天堂病院に入院していたけれど、順天堂は当時はそういう設備はないし人材もないからできないということ、調べてくれたら東大か京大か信州大の三つどれかがいいでしょうとなって、実施症例が一番多かった信州大にしました。

翌日には、信州大学病院から先生が飛んできて、実に詳細な説明をしてくれて、てっきりその人が執刀するのかと思ったら、別の人が手術してくれたんです。

入院したときにはもうほとんど声が出ない状態で、その一か月ぐらい前まで外務大臣をやっていて、本会議の答弁で一生懸命大きい声を出すけどかすれてしまい、これは駄目だなあと自分でも思っ

ていました。それが、手術をして、集中治療室で二日か三日は全然意識がなくて、目が覚めたところへ先生が来て、河野さん御気分はいかがですかと聞くので、気分はいいですと言ったら、それがすごくいい声でね。声が出たとびっくりして、周りの人もみんなびっくりしてね。声が出るというのはうれしいものだと思っただね。病院からいろいろの人に電話をかけたなら、みんなびっくりしていた。

○紅谷 少し戻りますが、三十代半ばぐらいからいろいろな症状が出たにもかかわらず、仕事を優先して放っておいたとか、奥様が亡くなられたときも参議院選の最中だったのでそのまま遊説を続けられたとか、議員には滅私奉公的なところが多分にあるかと思えますけれども、そこまでして、自分の体や家族よりも政治活動を優先されたのでしょうか。

○河野 今考えると、やはり女房にはかわいそうなことをしたと思っ

ています。自分が総裁で村山政権を支えて、あそこで負けると村山政権も潰れるかもしれないというときだから、やらざるを得ないというか、支えるしかないという感じになっていたんです。薄情な奴だとか、女房が死んだのに通夜にも出ないのかと随分後で言われて、そうだったなあと思うけれども、しょうがなかったんだ。

自分の体も、もうちょっと早くから治療するかもっと大事にすればよかったですけど、新自由クラブの新党運動を始めたなら、もう何か一人でしょっているみたいな気分、手を放すと仲間がみんな倒れちゃうような気がしていたから、とにかく時間があれば全国各地へ応援に行っていましたね。

とにかく仲間を大事にしようと思えば、そのためには敵を倒さないといけないから、僕には必要以上にすぐ敵をつくったんです。僕は自民党の中で一番敵が多かったかもしれないね。それは、ハト派は主張が割と少数派だったから、向こう側から見れば変なことばか

り言っていると思われるので、選挙では自民党批判をする以外には生き残れないわけだからね。

そんなことをしていたから、自分の体をいたわるといふことは思いませんでした。

○紅谷 奥様がお亡くなりになったのが、自民党総裁で副総理兼外務大臣だった平成七年の参議院選挙の最中で、太郎さん始めお子さん達も、そのときには何も奥様のためにできなかったと述べられていました。

○河野 あつという間だったんです。

女房は癌だったんです。五年前に癌の手術をして、もう完全に取れましたからこれで五年間気をつけてください、五年間再発しなければ大丈夫ですと言われて、ちょうど五年目に死んだんです。五年経って良かったと言っていた、その年の夏ですよ。

僕は外務大臣で、ヨーロッパへ行くことになったんです。その頃は、村山総理が奥さんを連れていかないのに、お供が連れていくわけにはいかないので僕もずっと一人だったけれど、外相として女房と一緒にいる事もあるので、今度と一緒に行くと言って準備をしていたんです。訪問先にハンガリーが入っていて、もう来週には出発だと言っているときに、何か背中が痛いと言いだしたけど、それでも行くつもりでいたんです。

いとこに医者がいて、診てあげると触ってくれて、ちよつと心配だからちゃんと診てもらった方がいいよと言われて、それでも半信半疑で病院に行ったら、すぐ入院してくれと言われて大騒ぎだったんです。

癌だと分かって、どういう治療をするかというのを考え、女房はしばらくは高輪の議員宿舎で寝ていたんですが、全く内緒で、宿舎のすぐそばにマンションを借りて、女房だけそこに移して、僕はそこを行ったり来たりしていたんです。

そうしているうちにだんだん悪くなって動けなくなって病院に入ったんです。

○紅谷 議長時代に御一緒に高輪宿舎に行ったときに、高輪は女房が病氣だった時に、新聞記者に分からないように近くにマンションを借りて、そこを行ったり来たりして、娘がいろいろ面倒を見てくれたんだよとおっしゃっていました。

○河野 そうでした。そのときは最悪の頃ですよ。

○紅谷 話を戻しまして、手術をされた平成十四年というのは、手術は成功する、ご次男は結婚される、お孫さんも生まれるで、非常にいい年でした。

○河野 あつ、それはそう、本当にそうだね。

次男の結婚は、急がないとおやじが死んじゃうからと急いで結婚して、僕は披露宴に出たけれども意識朦朧としていて何をしゃべったか全然覚えていないし、最後までいられなくて、その翌日に入院して手術したんです。

確かに、次男は嫁をもらうし、長男には子供が生まれるし、今考えばすごくいい年ですよ。本人も助かるわけだから、それ以上いいことはないよね。

○岡山〔衆議院事務局〕 先ほど少しお話がありました、手術のすぐ後は選挙はできないという体調だったようですが、後藤田元副総理のお見舞いがあった、それ以後、どういうふうな政治活動に取り組みうと気持ちが変わっていったのかをお聞かせいただければと思います。

○河野 退院するまでは選挙のことはほとんど考えていなかったね。ただ、孫ができた聞いて、やはり顔を見たいと思ひ、明らかに心境の変化がありましたね。それまでは運命なんだから逆らうつもりはない。もうこれで死んでも何の不満もないという気分でしたが、子供ができたと言われたら、自分の命はお返ししますから孫はちや

んと生まれてくださいと本気で神様に祈ったね。その頃は遺書を書いたり、いろいろなことをしました。

それで手術が終わって、回復して声も出るようになって電話をかけられるようになったら、太郎が、俺が肝臓を提供したのは何も年寄りに政治をやってほしいと思ってるやっただんじやない、孫の世話でもしてほしいと思ってるやっただんじやないことを何かに書くんだよね。それで、このやろうと思ってる、くちばしの黄色いやつに後を任せるわけにいくかとか言っていたけれども、まだ本気でやろうと思っただけでもないんだ。

信州大学病院がある松本は、どこからも不便だし、見舞いは極力断っていたせいもあって、ほとんど見舞い客はなかったんです。

それでも高倉健という人が気をつかってくれて、実は高倉健さんと僕は床屋が一緒だったんです。高倉健さんが床屋のマスターに、はさみを持って高倉健さんの手紙を届けによこして、それで頭を刈ってくれたんだ。それはすごうれしかったね。

一番の見舞い客は、ある日後藤田事務所から、先生が見舞いに行きましたと電話がかかってきて、ああ、大変だと言っている暇もなく、病室に御夫婦でどうだとうってこられた。

後藤田さんの見舞いは本当にインパクトがあったね。現下の政治情勢はこういう状況で心配だと言われて、しばらくは俺が頑張るけれども、俺はそんなに長くはないから後は君に頼まなければいけない。二〇一〇年頃が一番心配だから、そのときには君が頑張らなくちゃいけないみたいな話をされて帰っていかれた。それはやはり僕にはすごく利いて、期待というか、託されているという思いがあって、次の選挙も可能ならばやろうという気になったんですよ。

それでも、退院して時間がなかったら出られなかっただろうけど、一年半あったから、結構回復したんだね。

○紅谷 臓器移植法が一九九七年に施行されましたが、脳死の認定

が非常に厳しいので脳死での移植は進まず、生体移植が進んでいきましたが、手術の後には随分いろいろな講演をされたのでしょうか。

○河野 はい、行きました。

臓器移植というのはみんな嫌がるんだね。臓器移植を受けた人も言わないし、それから社会も、例えば臓器移植を受けたというだけで貸家に入るのをはねられたりね。それから、肝臓移植という絶対茶碗を共有しないとか、一種の差別があったりする。それで、患者の会からお医者さんの会からも、経験者として講演してくれと言われるんです。僕は出したことじゃないと思っただけで、臓器移植を受けたと言って講演に出られる人はいないんだと言ってます。

そう言えば、入院して手術をするときに、公表するかしないかで少し親子で意見が合わなかったんです。僕は公表すると病院がプレッシャーもかかるし、取材が押しかけて迷惑をかけるから、終わってから発表しようと言ってくれど、太郎は手術をすることでちゃんと公表しろと言ってます。何しろドナーが言うからこっちは弱くて、くれる人の言うとおりにしようとなった。

太郎は、総務政務官をしていて辞表を一応出したけれども、片山大臣に止められて休暇ということになったんです。

○築山〔衆議院事務局〕 そうやって公表して、当日、カメラマンが病院に来たようですが。

○河野 来たんですよ。あの頃パラッチとかいうのが流行していて、病院の中の廊下にもいるとあって、病室から手術室まで行くのに違う通路を通って行ったんです。こっちは、もうその頃は上を向いて担架に乗せられていたから何だか分からなかったけれどね。

○築山〔衆議院事務局〕 太郎さんはしきりと、美談にはしてほしくないと言われていたようですが。

○河野 彼はしきりにそう言っていました。絶対嫌だと。やはり相当迷惑した人がいるんだよ。手紙が随分来て、父親から、



息子が肝臓をくれないから太郎さんから説得してほしいとかいうのも大分あったようだね。

僕が移植手術を受けた間に、移植手術が何件かあったけれども、それはみんな子供でした。お母さんが子供に肝臓を上げるというのが多かったですね。

○紅谷 調べてみましたら、先生が移植手術を受けた平成十四年に、生体肝移植はもう数千の事例があったのですが、高齢での生体肝移植というのは本当に事例が少なく、太郎さんも、後から調べてみたら手術前の認識と違うことが随分あったと話されていたようです。

○河野 太郎の妻は、子供ができたのに夫がリスクのある手術を受けるというので、すごく動揺したと思うんだよね。だけれども、止めてほしいとは言えないから、どうしていいか分からなかったみたいだね。

それで、太郎は嫁さんを説得するのに、科学的にちゃんと説明ができればいいと言って、アメリカの資料なんかをこっそり集めて、とにかくドナーが死ぬ心配はない、死んだ例はないということをお文のようにずっと唱え続けたけれど、後で聞いたら本当は死んだ人もいたというんだ。ただ、絶対そういうことはないと思っていたんですよ。

### 《第七十一代衆議院議長》

○紅谷 肝臓の移植手術が終わって、御自分では政治活動はちよつと厳しいのではないか、次の選挙に出ることは難しいのではないかと思われていたというお話でした。

平成十四年四月に手術して六月に退院され、その後、解散が一年半ぐらいなかったというのもあったのでしょうか、選挙に出ようという決断をされるまでの経過をお聞きしたいと思います。

○河野 手術をする前は、大体寿命が尽きて余命半年くらいかなと思っていたから、自分でも覚悟を決めていたんです。

だから、手術のときは、政界に復帰するどころか生き延びるかどうかだけです。手術も大変な手術で、退院まで二か月ほどかかりました。

退院したときは、これではしばらく生き延びられるなという思いだけでした。

退院から二、三か月は感染症が危ないから、道を歩いていても工事現場や家を壊している現場が一番危ないと言われたり、あれは食べちゃいけない何しちやいけないと、とにかく生きるだけで精一杯でした。

でも、それから段々回復して、十月、十一月ぐらいには議員仲間の会にも出るようになっていたんです。出たからといっても、それだけのことでした。

そうしているうちに解散になったものだから、選挙に出るか出ないかを真剣に考え、この一年半で体力は相当戻ってきていたし、やれないことはないなと思っていたら、みんながやったらどうだと言ってくれて、それじゃ、やってみるかとなったのが六十六歳のときです。

なかなか大変な選挙だったけれども、何とか当選したんです。

○紅谷 手術から選挙に出られるまでの間は小泉内閣でした。その間に、国会ではイラク派遣法が審議され、自衛隊の海外派遣が争点でしたから、小泉総理は慎重を期されたのか、総理・総裁経験者を呼んで意見を聞くという場面がありました。それが手術をされた翌年の春でした。

○河野 そんなこともあって、自分は政治の世界にいるんだという自覚が出ましたね。

イラク問題を前に、アメリカのイラク攻撃に日本がどういう態度

を取るかということ、小泉さんが呼んだんです。

それともう一つ、小泉さんは、平壤に行ったりして北に対する関心度がすごく高かったんです。

それで、中曽根、宮沢、橋本、森、僕の五人が呼ばれて、少し慎重に身内の意見を聞こうということでした。

そこでは、橋本さんも森さんも、今後北朝鮮の危険があるからアメリカとはできるだけ仲よくしておいた方がいい、アメリカがイラクへ行くと言うなら賛成しておいた方がいい。そうしないと北から何かがあったときに本当にアメリカが守ってくれるかどうかみたいなことを言っていました。

それで、僕は、それはおかしんじゃないかと思って、余りアメリカのイラク侵攻を支持するとは言うべきではないという意見を言ったけど、例によって少数意見でした。中曽根、森、橋本の三人は、積極的にアメリカを支持しろと言う。宮沢さんはそこは少し違っていました。

小泉さんは、意見を聞くだけ聞きましたが、もうアメリカを支持してイラクに自衛隊を出すことに決めていましたね。

そういうことがありました。

○紅谷 平成十五年十月十日に解散になり、十一月中旬の選挙でしたが、その頃はもう随分元気になられ、地元の人にも元気な姿を見せられたのですね。

○河野 そうでした。

それでも、地元からは、調子がいいからといって余り無理しちゃいけないとか、よそへ応援に歩いたりなんかはできるだけするなど大分言われ、分かったと言って極力減らしてはいたけど、何か所かには応援に行きました。それでも自分の選挙を一生懸命やって当選したんです。

○紅谷 当選されて直ぐに議長就任の打診があったようですが、ど

ういう経緯だったのでしうか。

○河野 当選年次と年齢から名前が挙がっていたのは、中山太郎さん、武藤嘉文さん、僕の三人で、中山さんは、参議院から回ってきたから衆議院の当選年次は少ないけれども、政治家としてのキャリアが長いのと年齢が一番上。武藤さんは、僕と当選同期でずっと一緒にやってきたけど、彼の方が少し年上だった。

だから、僕は武藤さんが議長になるだろうと思っていたら、突然森喜朗さんがやって来て、河野さん、あなたが議長をやって下さい。イラク問題やら何やらいろいろ問題が多いし、野党が今度の選挙で大分勢いづいているから、野党とちゃんと話ができないと駄目だから、あなたがやるべきだと。ただ、イラク問題にあなたは余り賛成ではないようだけど、イラク関係の案件が出たときに余り持論、自説にこだわらないでくれという話をしながら、大部分の人はもう河野議長でいこうと思っているから、あなたはそのとき断らないでくれと言われたんです。

実は、伊藤宗一郎さんが議長になったときに、橋本総裁、加藤幹事長が僕を棚上げにしようと思ってお議長就任の打診があって、僕はそれを断っていたんです。一度断っているから、森さんは声がかかったらまた断るなど飛んできたんだ。僕はまだ打診もないのに、断る、断るなど言ってもしようがないと言っているうちに、そういうことになったんです。

○紅谷 自民党は選挙で圧勝していましたから、各派協議会では、議長は自民党からということ、全く異論がなかったわけで、自民党内の人事という言い方をしているのかどうかは分かりませんが、当然小泉総裁が了承されて、森さんが動かされたということなのでしょうね。

○河野 僕は、総理が内閣の人事をやり、自民党内の人事は総裁としてやるのは分かるけれども、立法府の議長の人事まで総理・総裁

がいいとか悪いとかと言うのはおかしいんじゃないかと思っ  
ていたけど、まあ、一連の与党の人事みたいなものですよ  
ね。

○紅谷 選挙では、与党で過半数を超える圧倒的な多数を取  
つていますが、民主党も百八十議席でしたので、やはり、議  
長選挙では、野党も納得できる全会一致になるような人とい  
うのは、森先生が言われるとおりだと思います。

○河野 そう思っていたかもしれないね。なるべく全会一致  
がいいから、森さんがきつと走り回ったんだろうね。

○築山〔衆議院事務局〕 正式な就任の打診というのはどこ  
かから来たのですか。森先生を介しただけで終わっている  
のですか。

○河野 全然なかったね。

あとは本会議直前の代議士会で、議長選挙があります、  
我が党は河野さんを推挙しますと幹事長が言って、おお、そ  
ういうものかなと思いましたが。

○紅谷 二回目の議長るときは、選挙の翌日でしたが、小  
泉総理から、次も議長をやってほしいと電話があったと言  
っておられましたね。

○河野 二回目は異例だね。誰かに替わってもおかしくな  
ったですよ。

○紅谷 過去に議長への就任を断られたということですが、  
今回は躊躇されながらも受けられました。河野先生がお考え  
だった議長像、議長の方というのはどういうものだったの  
でしょうか。

○河野 議長という職は、個人の主義主張を表現できな  
いというか、中立を保ってはいけなくてはいけません。そ  
れがちよっと僕には辛かったですよ。

どんどん右派が強くなってくる中で、これ以上強くな  
ったときには自民党の中で相当闘わなきゃいけないと思  
っていたから、議長になつて一切発言も行動もできない  
ということになると、もう座して

右派の蹂躪を見るしかないというのは嫌だと思つたし、  
そんな時は身を挺して止めなきゃいけない場面が来る  
だろうから、議長席にいたのではそういうことができ  
ないから議長はやりませんと言つて、一回目の打診の  
ときに断つたんです。

二回目の打診のときにも、さらに状況は悪くなつて  
いたから、こういうときに受けて議長席に座つていて  
いいのかなと思いましたが、それで、ちよつと迷つて  
宮沢さんに相談したんです。

一回目の打診のときにも宮沢さんに話をしたら、お断  
りになった方がいいでしょうという話でした。そのとき  
は率直に、議長をやつたら総理はできないよ、あなた  
は総理を目指しているのだから議長をやらない方が  
いいという、あの人は直接は言わなかったけれど、  
そういうニュアンスでした。僕は右と闘うためにと思  
つたので、一回目は断つたんです。

二回目の打診のときには、それは是非お受けなさいと  
宮沢さんから言われて、議長は国会議員にとつて一番  
名誉なことだから断るのをおかしい。受けて議長とし  
て職責を全うすることを考えられたらいいと言われ  
ました。

それで腹が固まつて、受けますという返事をしたん  
です。

○紅谷 そこでリセットされて、これから議長になつて  
何かをやるうという思いを持たれたのでしょうか。

○河野 それはあつたんですよ。

やはり議会の中が荒れていたし、それと何よりも、  
小泉総理の靖国神社参拝が続いて日中関係がとて  
も悪くなっていましたから、議長になつて割と早い  
時期に訪中したんです。

○紅谷 十一月に就任されて、翌年九月の訪中でした。  
アメリカでのG8議長会議に行った直後に、中国に  
行って日中議員交流をスタートさせて、日中間の関  
係改善を進められました。

叔父の河野謙三参議院議長を間近で見ましたが、議  
長就

任に当たって、参考にしようと思われたことはあったのでしょうか。

○河野 謙三と僕とは議長になる経過が大分違って、謙三の方は非常に異例な形ですから、同じようにとはいかないのは分かっています。

謙三議長は、議長は真つすぐ正面を向いていなければならないというものじゃない、七、三に構えろ、野党七に与党三、七分、三分の構え。いつも七、三に構えるのが正しいという話をよくしていました。だから、そういうのは頭にありましたね。

それと同じ趣旨だけど、やはり何といっても、民主主義というのは多数決が基本だから、それだけに少数意見の尊重が大事だと。少数意見を尊重した上で多数決で決めるべきで、いきなり多数決では民主主義ならぬのだというのは、謙三議長がしょっちゅう言っていたことでした。

謙三議長からは、しばしばそうした注意を断片的に聞いていました。例えば、打撃の極意は球をできるだけ引きつけてから打て、球を打ちに行ったら絶対駄目だと言っていました。

つまり、議長は調整を上手にやるためには、余り早くから出ないで、言葉は悪いけれども、もう困り果ててへとへとになってから出ていった方ができるんだとも言っていました。

○紅谷 お話のように、河野謙三議長は、議会というのは多数決だけれども、なるべく少数意見を尊重しなくてはいけない。少数意見の尊重とは何かといったら、できるだけ野党の意見を取り入れることだとおっしゃっていました。自民党内では、河野議長も簡単には本会議のベルを押してくれないのではないかと、河野議長はどう考えているのかと疑心暗鬼で、数の多い自民党を抑えるには非常に効果的だったと思います。

○河野 だから、おそらく僕が議長になって審議時間は長くなったでしょうね。



ただ、僕がとても気になったのは、しようがないけれども、何時間審議をやったからといって審議を時間で測ることでした。それは本当はやはり中身で測って、二十時間やっただけで同じ答弁しかなかったので何時間やっただけで、たとえ三時間でも、それによって新しい提案や考え方が出てくれば、その方が価値があるんだけれども中身は評価できないからね。だから、どうしたって評価するには、何時間やっただけで済ませよう。議論をどれだけ尽くしたかとならないと駄目だと思っただけでもね。

○紅谷 私が議長秘書の時に、自民党の国対委員長筋から、委員会では与党だけが質疑を終えた状況なんだけど、これで採決したら河野議長はベルを押してくれるかと聞いてこられるものだから、野党が一切質疑していないのに採決したのでは、議長がベルを押すことは絶対ありませんよと押し返したことがありました。

○河野 それはそうですね。  
僕が議長で、大島さんが自民の国対委員長だったのが物すごく助かりましたね。大島国対委員長と公明党は漆原国対委員長、二人が与党にいて、野党には共産党の穀田国対委員長がいて、他の野党がボイコットしても共産党だけは出てくれるとかということがありましたね。だから与党単独というのはあの頃はなかったと思うんです。  
○小田〔衆議院事務局〕 副議長との関係についてですが、議長在任中、一期目は中野寛成先生、二期目は横路孝弘先生が副議長を務められました。河野先生は、円滑な国会運営は副議長との信頼関係が欠かせず、人材には恵まれたとおっしゃっていた記事を読ませていただいたのですが、副議長との関係をお聞かせください。  
○河野 中野さんは、弁も立つし人間関係も広い人でした。それほど昔から知っている人ではなかったけれど、副議長になられてから、いろいろな話をしてくれて、野党の立場をよく理解できました。横路さんとは、僕が当選したときは、まだお父さんが予算委員会

で質疑していました。それでもとても長い付き合いで、社会党の中で抜けた存在である一方、多少、煙たい存在でもありました。弁護士なので、いわゆるたたき上げの組合出身の議員とはちよつと違っていましたね。理論派でもよく勉強する人だったものだから、僕は若い議員の頃から横路さんのことはよく知っていたんです。

その頃の僕は、社会党系といえれば横路さんとか、ちよつと後だけでも江田五月さんとかと仲がよかつたから、横路さんが副議長の時とは助かりました。ただ、彼は、僕がいろいろ注文を出して、民主党内をもう少し何とかしてほしいと言っても、民主党の中はちよつと難しかつたみたいですね。でも、民主党から出てきた副議長だから、この人とかちゃんと話をしなければ駄目だと思つたから、できるだけ同席してもらいながらやりましたね。

お二人には、僕がいろいろとお願いすることが多かつたので、ご迷惑をおかけしたと思います。

### 《米国下院及び中国全人代との議会間交流》

○紅谷 河野議長が就任されて最初に取り組まれたのが、米国下院と中国全人代との議会間交流でした。

衆議院は、両国とは議員派遣等での個別交流はありましたが、議会の正式な交流はありませんでした。

そういう中で、河野議長は、アメリカと中国との議会間交流を提案され進められましたが、この二国間との議会間交流を始めようと思われた切っ掛けは何だったのでしょうか。

○河野 アメリカと二国間の議員交流をやるべきだと思つたのは、沖縄問題なんです。

僕は外務大臣でしたけれども、沖縄問題はうまくいかないんです。それは何故かというと、政府間は話ができるけれど、沖縄の現地の

状況がどれほどアメリカに伝わっているかがとても不安でした。だから、こんなことを言っただけとはいかないのだからうけれど、外務省は、アメリカから言われれば、それでいきましようと言うけど、沖縄の現地はそう簡単じゃなかったんですよね。

だから、約束はしても実態はなかなか進まない。今やっている工事も進まないし、いろいろな方針がなかなか進まない。するとアメリカはいらいらして何だ何だと言いつつ、アメリカがいらいらすると、今度は上から沖縄に圧力がかかる。そうすると余計反発が出る。

2プラス2なんかでも、沖縄の実態を考えれば無理だと思うけれど、政府間では話がどんどん進むんですよ。アメリカがどれだけ現状を知っているか、それを僕はとても心配していました。ところが僕らよりもっと早くから心配していたのが、アメリカ上院議員のダニエル・イノウエさんです。

彼は、僕が行くよりも多いぐらい沖縄に行つて、沖縄の現状をかなりつぶさに見て、政府間の交渉と現状がはるかに違うということを知っていた。だから、彼はアメリカの沖縄政策はうまくいかない、沖縄に基地をどんどん造つて固めていこうとしているけど、それは駄目ではないかと言っていたんです。

僕は、それをダニエル・イノウエさんからも聞いていたし、それから、これは政府間でどんどん進むけれども、実際に進めるには議会同士が話をして、日本の議員は沖縄の実情をできるだけ吸い上げて、アメリカは防衛関係だとか政府の考え方をできるだけ持つて議会間で議論をすれば、沖縄問題のかけ違っているものが合うんじゃないかと思っただけなんです。

だから、日米の議員間交流、議員間の議論というのがすごく重要で、これをちゃんとやらない限りは沖縄はうまくいかないよ、僕は外務大臣当時から思っていたし、議長になつてからは、一番これが大事だと思っていました。

○紅谷 日中よりも日米の議会間交流の方を、むしろ先に必要性を感じられていたのですね。

○河野 そう思っていました。

だから、日米をどうしてもやりたいと思っただけで、なかなかうまくいかないんですよ。

ダニエル・イノウエさんは一生懸命だけど、彼は上院議員だから、カウンタートパートは公式に言えば日本では参議院で、彼はよく分かっている、沖縄選出の衆議院議員が一番実情をよく知っているから、参議院ではなく衆議院とやらなきゃ駄目だと言うけど、そうすると、たすきがけみたいになるんだよね。アメリカの上院と日本の下院の衆議院とが議員交流をやるといふ感じですよ。

ダニエル・イノウエはとても心配して、衆議院はしよつちゅう解散して落ち着かない、それはアメリカの下院も任期は二年で選挙ばかりやっている。もうちよつと中期の話し合いをじっくりやるならば、構造的には参議院だけれども、沖縄の現状をどれだけ吸い上げて知っているかというのは不安だったようなんです。

沖縄問題をやるには絶対こういうのが必要だと僕は随分言い、ダニエル・イノウエさんも、政府同士が机の上で議論していても駄目だ、現場は全然違うということを彼は分かっていましたからね。

だから、本当に重要だと思っただけでも、今言った理由もあって、日米の議員交流というのは進まないんです。

○紅谷 河野議長がハスタート下院議長と合意した、衆議院と下院との議会交流は実現しなかったのですが、ダニエル・イノウエと、衆参の議員との交流が公式になつて、二、三回はやっているといます。

○河野 それは、やらないよりはるかにいいので大事だと思うけど、僕が当初考えていたような、沖縄問題であるとか辺野古問題であるとかというテーマを決めて、専門家同士がきちんと議論できる場だ

とよかったんだけどね。

アメリカは、ダニエル・イノウエさんと、テッド・ステイーブンスさんが一生懸命でしたが、ダニエル・イノウエという人は、ちょっと前までは反目的で手に負えなかったと言う人もいました。物すごく日本に厳しくて、外務省なんかは逃げて歩いた。しかし、最近物は物すごく親目的になって、僕は家族ぐるみの付き合いなんです。

彼はアメリカの日系米人ですから、戦時中は収容所生活をして、収容所の中から米軍に志願して戦争に行っただんです。日本と戦うかもしれないところを志願し、イタリア戦線で右腕を失くして片手でした。

僕は彼としょっちゅう食事をして遊んでいたけど、昔は気難しくて日本がやることに一々反対して、すごくきつかったです。しかし、最後は日本にいろいろなアドバイスしてくれましたね。

ダニエル・イノウエは九十近くで亡くなったけど、随分励まされたり手伝ってもらって、僕らも日米議員交流の土台を作ったつもりです。だけれども、日米交流というのは、日中もそうだけど、プロトコルの、外交的な、やあ、こんにちはこのいう議員交流をやってみようがないんで、もっと具体的な仕事をやらなきゃ駄目だと思うんですが、それがなかなかできないんだよね。

○紅谷 ダニエル・イノウエさんとの関係で、衆参の日米議員交流は何回か行われましたが、河野議長とハスタート議長とで合意された衆議院と下院との議会間交流は、具体論は進まないまま終わってしまいました。

○河野 ハスタートさんは、議長会議の前に朝食をとりながら話をしたら、彼はそうだと聞いたけど、彼がそんなに日本を重視しているわけでもないし、日米関係をやるうという気持ちが強くあったわけじゃないから、終わってしまったんだよね。

それと、アメリカの下院議員で日本に来たことのある議員が今は

極端になくなっているでしょう。当時、中国へ行くのは増えたけど、日本へ来るのはほとんどいなくなっただんじやないのかなあ。

○紅谷 下院は議員の任期が二年で、そのたびに人が入れ替わりますからね。当時調べましたら、下院議員の訪日は一年間に数人しかいませんでした。

○河野 そうだろうなあ。  
ペロシ議長にも、下院議員は全然来ないと言ったんですよ。だから、彼らが興味を持つ、意味のあるテーマの催物をやらなきゃ来ないよね。

○紅谷 日米議員交流は、ハスタート議長と合意され、ペロシ議長に交替して再確認しましたが、旗振り役がいなかったので進みませんでした。

○河野 そうだろうね、いなかったね。特に下院は、言われるように二年に一回選挙をやっているから来られないよね。

それから、ハワイとカリフォルニアにもっと日系人の議員がいてほしいですね。やはり上院議員で、日米問題を本気でやろうという人がいないと駄目ですよ。それが、ダニエル・イノウエが死んでふつり切れて、もう上院には日系人がいないだろうなあ。下院には何人かいるかもしれないね。

少なくとも僕の日米関係は、知っているアメリカ人がほとんど亡くなって切れてしまった。ジョージ・アラタニ、クリストファー元国務長官、モンデール元大使も死んでしまった。

日米関係はそういうことです。

○紅谷 日中議員交流についての経緯をお聞かせください。

○河野 日中議員交流は、やはり小泉問題でひっかかっていたから、何とかしなきゃいけないと思っただんです。それで僕は、北京へ行ってもいいよと打診したら、中国側から、議長を訪中を歓迎しますと公式に招待が来て、それで行ったんです。中国側も、小泉問題でこ

じれていたから、何とかそれを変えたいと思っていただけ、総理の問題だから転換するきっかけがなくて、それで相当無理をして、突っかかっているのを変えるのに誰かいいのはいないかというので、議長ということになった。

だから、僕が行ったら中国側は歓迎しましたね。

○紅谷 あれは本当に驚きました。胡锦涛主席はじめ、多くの要人との会談が、これでもかという程組まれていました。

○河野 僕もあんな記憶は他にないほどで、国家主席と会い、全人代議長に会い、曾慶紅副主席にも会ったね。あんなに中国の要人がみんな出てきたのは後にも先にもない大変な歓迎でした。

中国は、あれで日中関係がにらみ合って硬直しているのを変えようとしたんだけど、議長で変えるというのは相当無理だね。しかし、中国側はあれで日中関係を少し動かそうと思ってやって、あれから多少動き出したんですね。

それで、そのときに日中議員交流をやりうと話したんだけど、向こうは三千人も議員がいる中で十人派遣するというけど、どういふ人が来るか分からないし、日本側は総理が向こうを向いているから中国には余り食欲が湧いていなくて、結局、日本側は議運が中心になって受けたんですね。

議長のイニシアティブで議員交流をやりうとすると、どうしても議運になるのだからけど、本来は外務委員会がやればもうちよつと内容のある議員交流になったかもしれないけれどもね。

○紅谷 最初は議運でよかったですよすが、ずっと議運でやっている、メンバーが頻繁に替わりますから、それがどうなのかというのではありません。

○河野 常に替わるから難しいよね。日本は本当に選びようがないんだよね。日本は、中国との関係がいいぞと言うとみんな中国の方を向くし、駄目だとみんな嫌だとなって、良いときも悪いときも





つと淡々と中国問題をやりまますという人が出てこないからね。

小泉さんは毎年靖国に行き、今年はと思っていると必ず行っちゃうんだ。だから、中国問題がうまくいかなくて頭を抱えていた時、小泉内閣の福田官房長官が、靖国のほかにもう一つお参りする場所を造ろうと言つて、官房長官が諮問委員会をつくつて答申も出したけれども、これもどこかの引き出しに入つたきり出てこない。

○紅谷 中国との議会間交流は続いてはいますが、いろいろな理由で途切れ途切れになって、最近、非常に短期間で、会議はしていますが、密な会議ができるような状況にはないようです。

○小田〔衆議院事務局〕 河野先生は、議長としても外務大臣としても、様々な外交を進められました。先生個人の信頼関係や人脈によつて前進しているとも言われていますが、議員同士の信頼関係というのは、国の外交にどのような影響を及ぼすとお考えかお聞かせ願いたいと思います。

○河野 やはり、国と国との関係も結局は信頼関係なんです。信頼関係がなかったら、何をやってもうまくいかないと思いますね。

信頼関係というのは、一朝一夕にできるものではなくて、やはりある程度の時間がかかつて、それから、いろいろな仕事をしながら、それが一貫してできるかできないかということで信用というのができてきますよね。

僕は、議長になつてから何をやったということは余りないと思うけど、議長になる前に相当長い時間をかけて中国問題をやってきた。しかも、やってきた長い間が日中関係が冷めた時期で、そこでずつと辛抱してやってきたから、中国側からは信用されていると自分でも思いますね。

だから、最初のころは中国へ行って誰に会いたいと言つても返事もなかったけれど、今は、会いたいと言つと、あるレベルの人とは話ができますね。例えば王毅外務大臣とは、行つたら朝御飯を食べ

ようやと言つて一緒に食べるしね。

よく言われるように、冗談を言い合っているうちに、真面目には言いくいけれど、冗談の中で本当のことを言うというようなことがある。だから冗談の言い合える仲、喧嘩ができる仲、そういうことが大事なんです。

中国との付き合い方では、本気で喧嘩をしない、喧嘩をすると仲よくなるからと先輩からよく言われましたよ。本気でいろいろなことを言い合うことが大事だと思いますね。

○紅谷 人と人との関係が国と国との関係に繋がっていく、ただ、人がいなくなつたら国との関係もなくなるといふのは困つたもので、誰かが繋いでいかなければいけないのでしようが。

○河野 今はごく少なくなっているね。薄くなっているよね。アメリカとだつて、安倍晋太郎さんは、シュルツというアメリカの国務長官ととても仲がよかった。シュルツという人はまた、国務省だけじゃなくいろいろなところに、共和党、民主党を超えて、とても信頼されていた人だったからね。だから、シュルツと仲がいいということはとても大事なことでしたね。

○岡山〔衆議院事務局〕 日米も日中も日本にとって最も重要な関係で、それは議会間交流でも同じだと思うのですけれども、河野先生の御経験は大変参考になると思われまますので、両国の政治家との交流を通じて、日本の国会議員との共通点、また、相違点をお感じになつたことはあるのか、また、両国の政治家との交流を一層深めていくために、後進の日本の国会議員に、米国や中国の政治家との交流についてどのようなことを期待されるか、お教えいただければと思います。

○河野 私は、基本的に、国会議員の交流は非常に重要だと思つています。

行政府の交流、行政府は仕事で議論するけれど、国民が望んでい

るかどうか、サポートするかどうか、賛成の場合もあるし反対の場合もあるかもしれない。二国間の交流というのはそういうのをちゃんと分かって進めない、行政府だけで進めていくというのはなかなか難しいところがある。外交は政府の専権事項で確かに政府がやるけれど、国民を代表する国会がそれを理解し、サポートする体制がないと事態はなかなか進まないですね。

いつも言うことだけれども、外交というのはワンサイドゲームというのはいずれ得ない。外交が成り立つのは、両者がこれだということと言つて手を握らなきゃ成り立たない。それは、一方が百点で片っ方が零点だったら手なんか握らない。手を握ろうと思つたら、お互いに自分自身がこれで六十点あるかなと思ひ、相手も六十点かなと思ひながら手を握つたところで外交は成立するんです。

六十点あるかないかを決めるのは、本来は国民が決める。つまり、国民を代表する国会が決めるわけで、だから条約の批准というのは国会で行われるので、一事が万事そういうことなんです。

だから、一番の例は、繰り返しになるけど沖縄問題がある。二国間では外務省と国務省では合意する、防衛省と国防省では合意する。基地を造る、移転すると、どんどん進んで行くけれど、国民はそれを必ずしも了承していない。国民全体はある程度了承していても、その当事者の沖縄県民は理解しないわけで、その理解がないところへ役所同士が合意して仕事をすすめようとすると、三年計画が、五年たつても十年たつてもでき上がらないという状況になる。

アメリカの国務省なり国防省は、なぜできないのか、どうして駄目なのか。政府は、これしか方法はない、これをやりますと言っているけれども、進まない理由が実はその県の事情があるわけで、それをアメリカ側が知っていれば、アメリカ政府は、国務省なり国防省に、もうちょっと考えたらどうだと言う可能性はあるけれども、それが今のところない。

だから、議員交流というのは、それが目的ではもちろんないけど、そういうときにも、現場同士の声を聞くということは意味があるんです。国会が予算を決め行政を監督していくわけだから、その国会が相手方の都合も理解していなければできないわけで、そういうことをする必要はある。

議員交流というのは一時はやりで、やたらに議員交流といつて、日米も、日中も、日英も、日仏もみなやろうと言っている。公式にはまず日米と日中だけ本格的に取り組めばいいんじゃないかと僕は思ったものだから、この二つは議長としてもやってみようという気になった。だけれども、今言うように、なかなかうまくいきませんでした。

それは、まだ下地が十分にできていないし、本格的に基礎をつくってからやらないとうまくいかない。先方にも問題はもちろんあるけれど、双方の興味、関心のずれ違いみたいなものもあってなかなかうまくいかない。やはりもう少し下地を作る必要があったんじゃないかと思ひますね。

○岡山〔衆議院事務局〕 私、国際部におりまして、大島議長の米国訪問に同行させていただいたんですけれども、そのときにペロシ議長にお会いして、私がオバマを広島に連れてきたのよとおっしゃっていました。

○河野 そうでしょう。オバマ大統領のプラハ演説は、ペロシ議長が広島でいろいろ言つたせりふとほとんど同じなもの。

○紅谷 河野議長時代に議会交流が始まりましたが、当時の胡錦濤時代と、今の習近平中国を比べると、中国は非常に力も増して日本との関係も随分変わって、日本に期待するところが余りないのかなとも思えるくらいですが、そういう中で、これからの議会交流はどう進めていくべきでしょうか。

○河野 確かに、中国は、あの頃に比べると国力が物すごくついた

から、大分状況は違いますよね。違うけれども、やはりアジアの隣国同士だから、議員交流ぐらいはなおさらしっかりやらなきゃいけないと思いますね。

元々、日中というのは、国交がない期間が相当長くて、その間の外交は議員交流でやっていたんです。それは特定の少数の人たちによる議員交流だったけれども細かい系が繋がっていた。それが、国交が正常化されてパイプも太くなって、オーソリティーを持って交流がうんと太くなった。

一番びつくりするのは、日中間の大変な数の姉妹都市提携ができて、人的交流を熱心にやっているところもあって、中国はその姉妹都市をとっても重要視しているんです。そういうことの一つで一番太いパイプが国会議員同士の交流ですよ。

だから、本当は、問題があったときに止めちや駄目なんだよね。問題があったときこそ、そこで真意を確かめ合うという議員交流というのが必要だと思いますね。

僕は議員交流の傍らで、中国共産党の中央党校、中国共産党の幹部候補生の学校と日本との交流をやったんです。

あの中央党校の生徒、卒業生というのは必ず幹部になるという路線だから、日本を理解して日本に友人や知人を持つというところはよく日本にとって大事なことです。中国のこれからの心臓部を担う人達だから、当時、曾慶紅さんが中央党校の責任者だったから、話をして中まで入れるようにしたんだけど、それが切れちゃったんだよね。曾慶紅さんとは、どんなことがあっても切らずまいと言っていたけど、やはり双方の熱意の問題で、熱意が少し冷めたということもあって切れてしまう。

中国側はとても大事にして、優秀な中央党校の生徒を毎年日本に五十人送ってきた。それに対して、日本側から行く五十人は、余り希望者がいないものだから募集の幅を広げ、そうするとレベルが下が

って、これはまずいなと思っているうちに切れちゃって、それがもう復活しないんだよね。

僕はもう一回復活させようと思つて大分やったけれども、中国側は何かぐずぐず言っていて、最後は習近平が国賓で来たときにでも話をしましよみたいたいところまで行っていったんだけど、習近平の訪日がなくなったら、この復活もほとんどないだろうね。これはとても残念ですね。

議長としては、この議会交流はとても大事だと思うし、外務大臣としてやった中央党校との交流も、とても大事だと思つていたんです。

いずれにしても、日中関係の人的交流はとても大事で、中国から日本への観光客は、一時、九百六十万、もうちよつとで一千万人まで上がったけれども、今はコロナのせいであぐんと落ちています。中国からは約一千万人の観光客が来るのに、日本から中国に行く人は三百万人ぐらいしかいないんです。人口比でいけばそんなものだという人もいるけど、大勢行けば行くほど、その国に対する理解度が深まることは間違いないので、本当のものを目で見て、向こうの人と話し合うことで随分違ふと思うんだけど、それが今切れてしまっているのはとても残念です。

○紅谷 日本に来る外国人観光客三千万人のうちの一千万人、三分の一が中国人というのはすごい数ですよ。

○河野 そうです。京都の観光地などは、ちよつと多過ぎて困ったなという感じだったけれど、最近行くと、やはり中国から来てほしいようですね。

中国の観光客が支えていたものは相当あるんだよね、お土産を買ったり旅館に泊まったりね。以前は、たくさん来ていると、もういいよみたいな話になるけれども、いざ止まってみると、やはりあそこが来てくれないと駄目だと言っています。

国会の議員交流も含めて、中国との関係がそういう状況なのは懸念され残念に思います。

### 《自衛隊のイラク派遣に係る国会承認》

○紅谷 河野先生が議長に就任されてから、自衛隊のイラク派遣に係る国会承認が提出されました。内容は派遣するための手順で、派遣そのものは、イラク人道復興支援特別措置法が解散前に成立していました。

このイラク派遣は、自衛隊の海外派遣を、今までの災害派遣や湾岸戦争の後に掃海艇を出していたのとは違い、戦闘のおそれがある地域への派遣で、少し意味合いが違う派遣だったかと思います。

解散前に成立しましたが、衆議院での採決では、古賀誠さんや野中広務さんは欠席され、野党は出席し、これだけの法案にも拘わらず記名ではなく起立採決でした。

河野議長も賛成されたと思いますが、この法案に対する思いをお聞かせください。

○河野 海外派遣というのは、これは行くこれは行かないというのは実際はなかなか難しいんです。

明らかに戦闘に参加するとか、そこまでいなくても後方支援をするとか、あるいは、明らかに戦闘地域に行くことはしないということは、審議の過程で随分議論したわけです。小泉総理の、我々が行くところは戦闘地域じゃないとか、ちよつと訳の分からぬ答弁があったけれども、相当議論をして、それで最後は採決をするということになったんですね。

その前に、小泉さんが総理・総裁経験者を呼んでアメリカのイラク攻撃について意見を聞きたいと言い、アメリカが攻撃するのに賛成するかしないかというのが議題でした。そのときは既に話

したので省略しますが、そういうプロセスがあったものだから、僕は国会の審議での賛否は、党議拘束もあるし賛成したんです。

そういうことがあって議長になるので、森さんから、イラクのことだけは頼みますよとわざわざ念押しがあったんです。僕も分かったような、分からないようなだったけど、議長としては、きちんと審議をして決まれば、よほどのことがない限りベルを押しすかないと思っていたので、ベルを押ししたら何かみんな安心したらしい。

○紅谷 イラクの承認案件というのは、議長に就任された翌年の最初の通常会冒頭で、イラク派遣の予算が入った補正予算と一括的な扱いで、与野党が初めて対決する、河野議長の出番となった案件でした。

○河野 そうでした。

それで、僕はベルを押ししたけれども、ドビルパンというフランスの外務大臣が、核兵器がイラクにあるかどうかと調査すべきだと言って国連で頑張るんです。その後、ドビルパン大臣が日本へ来たので話をしたんだけど、話をしてみても、こういうときは日本ももつと頑張るべきだったなと後で思ったんです。

だけれども、やはり手続に瑕疵がなければ、議長はベルを押しさざるを得ないですね。

○紅谷 イラク特別委員会では、小泉総理が答弁を撤回する、防衛庁長官も随分答弁を変更したりしましたが、野党が抵抗する中で採決されました。野党は採決は無効だと主張し、民主党の野田佳彦国対委員長が議長のところに来られ、議長はすんなりベルを押しすというわけにはいきませんでした。現場の委員長から経過を聞き、議運でも本会議の開会を決めたので、議長だけがノーと言うわけにいかない状況でした。

○河野 そうでしたね。個人的には慎重だったけれど、国会審議でもつと何か真相を知る

手がかりでも見つければともかく、それが欲しかったけれど何もなかったからね。

僕は、自民党の中川秀直国対委員長と民主党の野田国対委員長を呼んで、中川さんには何とか譲歩できないのかという話をして、中川さんは予算委員会で補充質疑をするという譲歩案を提示したけど、当時の民主党は、菅代表、岡田幹事長で、野田さんは理解を示したけど、自分には権限が与えられていないからと、合意できなかった。

補充質疑というのは自民党にしてみれば譲歩なんだろうけど、本会議との間に行うならまだしも結論が出た後の質疑だから、岡田君は堅い人だから了解はできなかったと思うよ。

○紅谷 河野先生は、議長就任に当たって、与党だけの採決は極力避けたいという思いがあったと思います。ですから、いきなり全野党欠席での本会議のベルを押すに当たっては、非常に躊躇されただろうと思います。

○河野 それはすごく躊躇しましたね。何とか野党も入ってほしいと思った。

○紅谷 最終的に、本会議は、当日はらずらして翌日の零時半に開きました。野党は最終提案を持ち帰ったまま返事はなく、本会議は欠席でした。

これは、その後もそういう傾向がありましたけれども、数では絶対になわなので、河野議長に助けを求めただけ求めて、叶わなければ、国会の中ではなくて外で街頭演説をして反対をアピールする姿勢が顕著でした。

○河野 そうそう、いつもそうだったね。議長に呼ばれて議長室で協議しているのに、幹部は外で自分たちは反対したんだという演説をしていたよね。

昔の社会党の国会対策というのはいろいろなテクニクがあった、いろいろなことをやったけど、そういうものがなくなっちゃったね。

いい悪いは別として、けんかをするふりをしながらでも、最後まで話合いは続けていたから、自民党も社会党が粘っていると付き合っていたんですよ。だけれども、僕が議長の時自民党もそういう態度じゃなくなっていましたね。やはり、竹下さんなんか国会対策に関わっていた頃は、社会党とは随分いろいろと知恵を出し合っていて、最後は思い切って社会党の要求を取り入れたりしていたからね。

○紅谷 その当時は与党が十のうち十を取るのではなく、二とか三ぐらいの糊代があったと思います。

○河野 そうです。

○吉野〔衆議院事務局〕 本会議での承認案の採決で、自民党の中で、亀井静香先生が欠席され、加藤紘一先生や古賀誠先生が退席されました。反対のような意見表明をされ、造反と言われている行動についてどのように感じられたのか、それから、野党が欠席をすることについて、御感想をお聞かせいただければと思います。

○河野 自民党の中にいろいろな意見があったということは、ある意味で救いでもあったんです。できれば亀井さんたちが、自民党の中で例えば総務会とか政務調査会とかでもっと正面切って党内で論争してほしかったと思いますね。そういうことがなくて、最後のところで欠席や退席というのは、結果を動かすことにはならないわけで、ちよつと残念ではありました。でも、何にもなく総員賛成ということではなくて、多数の中にも様々な意見があるということが見えたのはむしろ救いの一つですよ。

それから、野党が欠席をするというのは、これをやったら国会としては成り立たなくなるから、やはり最後まで議論をして、粛々と反対するというのが正しい姿勢なんだと思いますね。

抵抗する方法は、長い演説をして時間を引き延ばすとか、最後は牛歩戦術なんというのがあったり、いろいろな方法はあるけれども、欠席というのは、抵抗手段としては職場放棄だから、上等なもので

はないですよ。

○紅谷 野党の抵抗の手段という話がありましたけれども、実は、自民党は野党の欠席を批判してきていましたが、自民党が最初に野党になった河野総裁時代も、随分欠席がありました。

ですから、やはり野党になったら自民党も欠席するんだなど、ちよつと驚いたのですけれども、完全には否定できないのかなと思いましたが。

○河野 言われるとおり、野党の立場というのは本当に難しく、僕はいまだに納得していないのだけど、野党は提案型の野党でなくや駄目だ、反対のための反対ばかりする野党は駄目で、提案しなきゃ駄目だと言うけれども、本当はそんなことはできないよね。

○紅谷 そうですね。議論する土俵に上っていくわけですからね。

○河野 そう。だから、僕は野党暮らしが長かったからだけど、野党というのは、とにかく批判して徹底的に批判して、悪いところをほじくり出すというのが野党の一つの仕事で、それ以上に幾ら提案したって絶対に数で負けちゃうんだから。

○紅谷 提案し議論するのはいいのですが、それは結論を出さなくてはいけません。同じ土俵に上って議論していると、採決に応じないわけにいきませんから、野党としては本当にそれでいいんですかということですね。

○河野 そうです。それはできないから、僕は、野党時代は、とにかく反対しろ、反対して潰すのが仕事だと。出てきたものを全部潰し続けなきゃ自分の出番なんか絶対来ないんだから、提案して、それで向こうに呑まれたら自分の出番は全然なくなってしまうと思いましたが。

だから、野党の立場というのはなかなか難しい。きれいごとで野党の立場なんて説明しようと思ってもできないですよ。

### 《国会議員の互助年金に関する調査会》

○紅谷 平成十六年の通常会で年金改革法案が提出され、年金の議論が行われました。この過程で、国会議員の国民年金未納の事例が出てきて、議員だけでなく閣僚にまで広がって、福田官房長官が辞任し、追及していた民主党の菅代表の未納も発覚して代表を辞めるという事態になりました。

与野党を問わず国会議員が国民年金を納めていないということで、議員年金に対する批判が高まり、また、他の年金に比べると支給額が高かったため、批判的になりました。

○河野 僕が感じたのは二つあって、一つは、やはり議員の特権というものに対する批判があった。それは、議員が納めている額に比して国庫負担率が物すごく高いものだから、それは議員の特権じゃないかという批判が相当強かったということ。

もう一つは、民主党の若手議員が、もうべきではないということを盛んに言い出したんだよね。それで、それがまた世論にも多少火をつけて、止めたらいよいよみたいな話になってきた。

ただ、若い議員は、もうの止めたらいよいよと言うけど、党の年配の議員は冗談じゃないとすごく怒っていたよね。年配の議員の中には、辞めたら職はないし一切の収入がなくなるので、額は別として年金をもらわないとやっていけないと言う。それはそのとおりで、年金を止めるというのはいかにも若手議員のスタンドプレーじゃないかと思つて、特権的なことはやるべきではないけれど、収めるところに収めないとまずいなと思つていたんです。

それから、議員の身分はとても不安定で、一回で落選する人もいれば三十年もやっている人もいて、どこが平均値か分からないところがあつてなかなか難しいなど。余り削減すると裁判を起こされると負けるという話もあつて、減らせばいいという無責任な言い方は

できないけど、何か結論を出さなきゃいけないだろうと僕は思っていたんです。

なかなか難しいのは、衆議院と参議院との違いで、参議院は六年の任期だから十二年、二十四年と行くけど、衆議院の方は、二年半か三年ぐらいで解散するから、安定した額というのは分からないわけです。

これは、現職の議員もそうだけど、辞めた議員で既に年金をもらっている人が相当数いて、そこにどこまで切り込むかというのがとても難しい問題だったんですね。

これを、衆議院、参議院それぞれでやるのは大変だから、国会として一体でやった方がいいんじゃないかと思って、衆参両院議長が相談をして議員年金問題に取り組もうということで、議長同士で話し合いをしたんです。それで、両院議長の下に専門家の調査会を作ったけれど、両院が一つの調査会を作るとするのは初めてのことでした。

○紅谷 お話があったように、議員年金の国庫負担の割合は、創設当初は二〇%から三〇%で、その後も五〇%ぐらいでしたが、平成に入ってから一気に増えて、最終的には七〇%を超える国庫負担率でしたので、非常に高かったという状況でした。

○河野 それは明らかに議員の特権だという批判を浴びることになるけど、この頃はいろんな事が取り上げられて、特権だという国民からの批判と、議員のポピュリズム的傾向も相俟って、それは、国会議員に対する国民の尊敬信頼が徐々になくなってきている、そういう時代背景があったんじゃないのかな。

○紅谷 議員年金の問題だけでなく、国会改革という名目でいろいろ議論されましたけれども、金目を削ることが国会の改革みたいな風潮で、議員宿舍の家賃が安いとか、議会雑費は不要だとか、速記者養成所が無駄だとか、そういう話を前面に出してきていたのが、

この時期でした。

○河野 議員特権の最たるものは、二つ目の給料と言われている文書通信交通滞在費なんだろうけど、それについては議員はみんな言わないんだよ。

最近、身を切る改革とか言っていて、そのためには議員の数を減らしてみたいなことを言っているけど、僕はこれは違うと思うけれども、そういう方向に行くんだね。

議員の特権問題というのは確かにやらなければならぬことだから、民主党の若い議員が、互助年金を止めると声高に言うものだから、先輩議員に言わせれば、俺らは二十年も三十年も納め続けてきて今更止めると言われても困る。大して納めていないのが止めると自分だけいい格好されちゃ困るから、何とかしなきゃ駄目だよ。そのようなこともあったんですよ。

それで、調査会を作った、そこに委ねようということにしたんです。

○紅谷 国会議員に年金は必要ないとか、国会議員の特権というのはなくした方がいいという意見もあって、各党の国対委員長が議長の方で何とか取り扱っていたんだけどという申し入れがあり、河野議長と参議院の倉田議長との間で、両院議長の下に第三者機関を設置しようということで「国会議員の互助年金に関する調査会」が設置されました。

メンバーの人選については、元人事院総裁の中島忠能さんを会長に選任されます。

○河野 内容からして人事院総裁が適当じゃないかと思ったから中島さんをお願いしたんだけど、すごく短期間で答申という相当無理な注文だったから、中島さんも、こんな短期間にこの問題をできませるかという話だったけれども、引き受けてくれて、それで何人か委員を探したんです。

○紅谷 一月に答申を出してもらいましたから、半年余りで十八回の会議をやっています。

先ほどお話がありましたように、議員のOBは年金をもらっていたので、議員の年金を遡及して減額すると、他の年金でもそれができると思われてしまうという問題がありました。

○河野 かつて農業者年金でそういうことがあったということで、裁判になったら勝てるかという話でしたね。

議員年金は、毎月歳費から十万ぐらいは差っ引いていたけど、ボーナスでは少なかったから、この調査会では、何とか国庫負担率が五〇%ぐらいになるように議員から徴収しなくちゃいけない。ですから、ボーナスのときもかなりの額を差し引くという内容にしたんですよね。

○紅谷 調査会の答申は、議員の納付額を今までも七十四%引上げて、百二十六万だったのを二百二十万にする。そして、給付は逆に三十%余り下げ、OBについては現行どおりという答申の内容でした。

答申を受けて、議会制度協議会で協議し、各党から異論はなく、淡々と手続きが進んでいくものと思われましたが、その後に状況が一変してしまいました。

○河野 自民党筆頭の鈴木恒夫君が官邸から呼び出されて、これは自民党の中川秀直政調会長とも打合せ済みで、議員年金の制度を廃止すると言われたと言っています。

衆参両院議長の下に置いた調査会の答申を、有無を言わず潰されたわけだから、議長としては本当にメンツがないわけですよ。

今にして思えば、あのとき議長がもっとごねればよかったかなと思うね。元々は各党の国対委員長からの申し入れを受けて出した答申なんだから、それを各党が受けけないというのならば、もう一度国対委員長を呼ぶべきだったよね。

○紅谷 自民党が、官邸の指示で、議員の特権を理由に廃止と言い出したので、他の党も答申でいいとは言えなくなっていて、結局は答申案は水泡に帰してしまいました。

官邸は議員年金そのものを廃止という意向でしたが、全て廃止というわけにいかないの、議員年金自体は平成十八年四月で全部廃止する。在職十年以上の議員については年金を支給し、現職は一五%、OBは一〇%カットするという内容で決着しました。

これで議員の年金は廃止になりましたが、本当に良かったのでしょうか。

○河野 少なくとも、史上初めて両院議長の下に調査会を作って、答申をもらって、それが官邸からの横やりで潰れたというのは、議長とすれば慙愧の至りで、あつてはならないことだという感想は残しておくべきだろうな。

あれから十五年ぐらいたって、当選五回、六回以下の議員は議員年金の存在自体を知らない人たちだけど、みんな議員の職責を果たすのに、何もなくてやっていけるのかなあ。

○紅谷 議員年金は、元々は国会法にあった退職金に代わる制度でした。議員には退職金がなく、それに代わるものとして議員年金という制度ができ上がったわけで、議員活動、政治活動をする上では、それなりの歳費やある程度の経済的な保障がないと、安心して議員活動ができないのではないのでしょうか。

○河野 答申案のどこかに、マックス・ウェーバーの「職業としての政治」というのを考えるとやはりこういうものはちゃんとおかないと駄目なのではないかと言っているよね。真つ当な議員のなり手がどんどんいなくなってしまうよね。

○紅谷 議員年金の廃止が決まってから幾らも経たない河野議長在任中に、議員年金の復活という話が出ていたのは、当時もお聞き及びだったかと思えます。



○河野 聞こえていました。今更何を言っているんだ。正直あきれたと同時に、自分がいる間は絶対許さぬという気持ちでした。余りにもひど過ぎたよね。

○岡山〔衆議院事務局〕 現在、国会で文書通信交通滞在費について議論が行われており、コロナ禍の中、政治不信を招かないためには、国民の理解を得られるような制度を目指した議論を行うことは重要だと思うんですけども、一方で、議員に対する経費そのものに問題があるんじゃないかというような議論は、互助年金改廃の際にもあったのではないかと思います。

議員の活動に対する適切な報酬の在り方について、先ほどもポピュリズムという言葉も出ましたけれども、いかに国民の理解を得るべきかについて、お考えをお聞かせいただければと思います。

○河野 それは大変難しい話だけれども、まず、最近の話を聞いていて、当選後一日勤めて文通費が百万円はひどいじゃないかという指摘は当然だけれども、文通費そのものがおかしいなら、領収書、支出明細もちゃんとつけろという話をしているようですが、僕に言わせれば、そんな話をするのなら、本来の報酬のほかに百万円を毎月もらっていて、それについては非課税だというこの仕組みの方が議員特権じゃないかと思わないのが不思議だと思います。確かに議員特権というのはあると思うけれども、それもこれも本質的に言えば、議員が期待される仕事をちゃんとやっているかどうかですよ。国民の議員に対する期待というものがあって、その期待に応えていけば、ある程度の特権は容認されるんです。また、そうされてきていたんですよ。ところが、余りにも期待を裏切って全然違うことが次々に起こると、やっぱり特権なんか絶対認めないという世論が出てくるんですね。今はそういう状況ですよ。

もちろん、今の問題については、しかるべく処理すべきだと思います。そういう議論をしながら、その一方で、議員が世論の期待に

応える議員活動ができていくかどうかということを反省して、その期待に応えるための制度を考えていかなければならないと思います。

### 《小泉総理への申入れ》

○紅谷 小泉総理は、平成十三年の自民党総裁選で、終戦記念日には必ず靖国に参拝すると公約されて当選し、総理在任中は時期は違いうにせよ毎年参拝されました。

小泉総理としては公約を履行しただけということかと思いますが、靖国参拝については長年の歴史があり、特に靖国参拝が問題になった中曾根総理以降は、後藤田官房長官の発言もあって自粛したという経緯がありました。

河野議長は、小泉総理の靖国参拝について懸念を抱かれて行動を起こされましたが、歴史的な経緯も含めてお話しいただければと思います。

○河野 後藤田官房長官が、靖国参拝についていろいろ調べて、中曾根総理は行くべきでないという結論を総理に直言し、総理も受け入れて、それ以来行かないということにした。以来、自民党の歴代総理・総裁は行かないこととしたわけです。

経緯はいろいろあって、日中国交正常化交渉のときに、日本と中国との関係は、戦争をした指導者が悪くて国民は悪いわけじゃないということになって、それで、その指導者が祭られている靖国神社に、総理大臣が参拝するのは理論的にも説明がつかないんじゃないかという話です。それで、もう行かないということから始まった。

小泉さんが自民党の総裁選に出てきたとき、僕は横で見ましたよ。総裁選の演説で、私は当選したら必ず靖国に行くと言ったら、隣に橋本龍太郎さんがいて二人でそれを聞いていた。橋本さんも立候補していて、次に彼が挨拶するんだけど、いっぺんに不機嫌にな

って、ばかなことを言うもんだ、もし彼が当選してそんなことをしたら国際的に大変なことになるから、絶対あんなことを言っちゃいけないと言っていました。橋本さんは遺族会の会長だったから靖国に行ってもおかしくないけれど、彼は絶対行かないと言っていた。そうしたら小泉君が行くと言うものだから、遺族会会長の橋本君は立場がないわけで、とても怒っていた。

小泉さんがそれを最初に言ったのは総裁選に出馬した時で、その時は橋本君が当選するんですが、その次のときにも言って当選し、それで選挙の公約だから行くというわけです。

小泉さんはいろいろな理屈を言いながら行っていたんです。自分は靖国で平和を祈っていると言うけれど、僕が一番気になったのは、外国の新聞、最初にニューヨーク・タイムズが書き、それからヨーロッパの新聞も、日本の戦前回帰の風潮が日本を覆っているというようなことを書き始めていたんです。

中国、韓国の新聞が書くなら分かるけど、欧米の新聞までそんなことを書くと、これは本当に国際的に日本が誤解されてしまう。僕はそれはまずい、これを止めなきゃいけないと思っただけです。

○紅谷 小泉総理は、平成十六年一月に靖国神社を三年連続で公式参拝しました。五月に来日した中国の呉儀副首相は、小泉総理との会談をキャンセルして、日中関係が懸念される事態となりました。

○河野 僕は宮沢さんのところへ行って今の事態を話したら、宮沢さんが、そうだね、余りいいことじゃないなという話になって、それじゃ私がやってみましょうと。議長という立場ではあつたけれども、歴代総理に一人ずつ随分丁寧に話したんです。中曽根さんの事務所へ行ったり、細川さん、羽田さんにも話をし、それから橋本さん、森さん、村山さん、みんなに話をした。

それで、個別に話をしたら一遍集まって話をした方がいいだろうとなつて、どこで集まるか、憲政記念館がいいかどがいいかとな

って、議長公邸に呼んだんだけれども、中曽根さんは、元総理を議長が公邸に呼びつけるなんていうのは失敬だ、行かないと怒った。

よく分からない話だと思つたけど、あなたがおかしいと言つたということは皆さんに私から御披露しますと言うと、それはもう全部おまえに任せると言うから、分かりましたと。それから、細川さんも行けないけれど、河野さんの言うとおりだと思つて任せますと。結局、来たのは宮沢、橋本、森、海部、村山の五人でした。

そこでの結論は、とにかく小泉さんには慎重にやってもらいたいと伝えることになつたんです。僕は本当は行くなと伝えたいと思つただけでも。

それで、その申し入れの場所やタイミングを考慮して、小泉さんが院内に入る時に院内総裁室で行うことにして、森さんに同行してもらつたことにしたんです。

小泉さんは、私の顔を見て、河野さん分かつてる分かつてる話に分かつていると言う。そうは言うけれど話を聞きなさいよと言つて話してきたけど、彼はそれでも靖国に参拝したんだよね。

○紅谷 議長の行動としては、いろいろ意見があるだろうというのにはあつたかと思ひますが、躊躇はなかつたのでしょうか。

○河野 それは多少考えました。しかし、議長として、国権の最高機関である立法院の長として、行政府のトップに対して注意をするということはあつてもいいんじゃないかと思ひましたね。

○紅谷 小泉総理の参拝については、自民党の中からもほとんど声が出ず、国会でも取り上げられることは余りなかつたという状況だったかと思ひます。

本当は国会の中で、外務委員会なり内閣委員会なりで、そういう議論がなくてはいけなかつたのでしようが余り議論されず、そういう中で議長が出られるというのは、まあ、形としてはあるんだろうなど。現場の委員会ですら議論がないから、議長として意見を

述べるというのがですね。

○河野 あれは僕だからやったので、ほかの議長ならやらなかっただろうね。

言った後に、当時の自民党幹事長代理だった安倍さんが記者会見で、衆議院議長がこんなことをして何だみたいなことを言うんですよ。それに対して後藤田さんが、何を言っているんだ、安倍幹事長代理の発言はおかしい、国権の最高機関の代表が大事なときに動くのは当然だと言ってくれたんです。

○紅谷 歴代総理がほぼ同調される形でこういう形になったわけですから、その後、自民党三役の与謝野政調会長や久間総務会長、古賀元幹事長も河野さんと同意見だと表明されました。最近、読売の渡邊恒雄主筆の特集がテレビであったのですが、渡邊さんも小泉さんの靖国参拝については猛烈に批判していました。

○河野 そうそう、渡邊さんは、靖国問題は僕と意見が近かったんだよね。

そういう多くの反対意見があったけれども、小泉という人はちょっと変わっていて靖国参拝は続くんですね。けれども、議長としては、それが限界でした。

### 《郵政民営化法案衆議院可決・参議院否決、郵政解散》

○紅谷 小泉内閣が政権の柱としていた郵政民営化法案は、衆議院で可決されましたが、参議院では否決され、それを理由に衆議院が解散されました。河野議長としてはじくじたる思いで解散詔書を読み上げられたのではないかと思います。

そもそも、小泉総理は、宮沢内閣の郵政大臣のときも同じような持論の発言があり、与野党含めて大臣はけしからぬということと委員会は止まって、河野官房長官が呼ばれたということがありました。

○河野 当時の通信委員会が、小泉大臣には出席を要求しないとなり、代わりに呼ばれて行きましたよ。委員会でお詫びすると同時に、何とか審議を進めてくださいというお願いをしました。

委員長は亀井久興さんで旧知の仲だったから、官房長官が現場の委員会に出るといふのは異例でしたが、自民党も含めて小泉大臣に総反発し、法案の審議を一切しないということでしたから、特に出席したということでした。

○紅谷 そういう経緯がありました。二〇〇三年の自民党総裁選では小泉さんは圧勝しました。

○河野 そうでした。

郵政民営化法は参議院で否決されて衆議院が解散されましたが、あのときの小泉さんというのは、何か付き物が付いたみたいな勢いでやったんですね。やってはいけないことを二度も三度も繰り返しやっていたわけです。例えば、自民党の総務会の全会一致を突っ切って多数決でいいと言ったとか、閥門があったものを全部突っ切ってやるんだから、まあ、信念というか執念というのか。

○紅谷 小泉総理がいろいろ突っ切っていくというのは、議員年金のときにも、小泉さんは何か取りつかれたように一気に進んでいったというお話がありました。

とはいえ、小泉さんは持論を述べた上で総裁選で圧勝して総理に就任し、郵政民営化法案を提出しました。当時、河野議長は、郵政民営化法案は与野党の中でも反対がありましたので、提出されたときはどう思っていましたか。

○河野 それは、相当無理な提案だから、行くところまで行って、一国会は審議未了で終わるんじゃないかと思っていました。

審議未了で終わるにしても、これにかける政治的なエネルギーをかけ過ぎていて、これをやるからほかは何もやらないのでは駄目じゃないかと思っていましたよ。

これは後の話になるけれども、議員年金の問題も、本当に後出しじゃんけんみたいなもので、でき上がったところに突然出て来て、がらつと変えちゃうんだから、とにかく無理を承知で突っ込んでいくから、みんな強引で無理な手法でできているわけです。さっき言った総務会もそうだし、法案に反対だからと委員を差し替えるとか、ちよつとあからさまで、これで党はもつのかなという気がしていました。

あのときは武部幹事長で、総裁の御一存で何でも総裁の言うとおりにやるから、党が内閣をチェックする、政治をチェックするという機能は全くなく、小泉さんのやることをサポートするのが自分の役目だと言ってやっているから、どうにも止まらないわけです。野党も全く非力ですからね。

だから、僕は一国会は審議未了だろうと思っていたけど、行くところまで行ってしまったので、本当にびっくりしましたね。

○紅谷 お話があった自民党の総務会では、数でいうと七対五の賛否で、あとは棄権でした。総務が三十人いて七人の賛成で決定するという結果でした。

○河野 それは、中曽根内閣のときと同じぐらいに国会軽視というか、党や国会よりも自分たちで選んだ専門家の方が権威があるから、党や国会が何と言おうが審議会がこう言っているんだからという感じで、軽視しているという状況でしたね。

○小田〔衆議院事務局〕 審議入り前から民主、社民両党の徹底抗戦を受けて混乱しました。

特別委員会設置の本会議前には、議場に入る河野議長を民主党の議員五十人ぐらいが取り囲んで抗議する場面があり、民主、社民両党は、全ての委員会の審議を拒否して、特別委員会の委員名簿の提出を拒否しました。

両党には、野党に配慮した議長采配を期待する思惑もあったよう

ですけれども、河野議長は、野党に対して名簿の提出を再三要請されました。野党の審議拒否戦術というのは時に批判を浴びると思えますが、郵政民営化法案の審議入り当時の心境をお聞かせいただければと思います。

○河野 この法案は相当無理な法案だと思っていました。無理な法案というのは、急に提案してもなかなか通らないだろうから、よほど丁寧にはやらないといけないという気持ちがあったんです。

しかし、総理の強い指示が出て自民党の執行部が押しまくるわけです。私は、これは最終的には進めざるを得ないけれども、野党が駄目だと言っている気持ちもよく分かるから、慎重にやらなくてはいけないと思っていました。

そう思っていたけれども、特別委員会の委員の名簿を民主と社民だけが出さないから委員会の構成もできないので、順を踏んで進めざるを得ないんじゃないかという話を最終的にはしましたね。

○紅谷 特別委員会は、自民、公明、共産で、委員長、理事を決め、提案理由も聞く、質疑も行うということで、どんどん進んでいきましたから、これ以上の混乱を避け、与党の先行を押しさえようという河野議長の説得で、最初の指名から一週間後に名簿を出してきて、再スタートしました。

○河野 小泉さんは、とにかく国民世論は自分についているという自負というか思いがあつて、国会の中を全部敵に回しても世論は味方だという、周りから見ているとちよつとおかしいんじゃないかというぐらい、確信犯というか自信満々でやっていたんですね。

○紅谷 あの頃、私はいろいろな行事に河野議長にお供し、小泉総理と一緒に場面が随分ありました。例えば駅に小泉総理が現れると、芸能人が来たかのように、きゃあという歓声に溢れていて、私は不思議な光景だなあと思っていました。

○河野 小泉さんはそれまで自民党の中ではずっと少数派で、多数

派だったことは余りないと思うんです。だから、自分の主張を世論にアピールしていたんだよね。

○紅谷 紆余曲折があった委員会での審議でしたが採決が行われ、いよいよ本会議となって、議長が開会のベルを押されたのですが、始まってからは討論があり、記名採決でしたから随分時間がありました。

そのときの本会議場の雰囲気、議長席からどのように見ていらしたのでしょうか。

○河野 もうそれは、一人一人の思いがみんなばらばらな感じで、執行部がまとめているという感じは全然ないんです。みんな自分の選挙があるから、当選できるかという心配の方が大きくて、法案がどうかということは関係ないような表情、雰囲気ですよ。

○紅谷 なかなか票読みがしづらい状況で本会議に入っていきましたから、議場の中では、当時の安倍幹事長代理が、一番前に座っている反対派議員を呼び出して、議場の後ろで説得していました。

○河野 そうそう。例えば城内君は議長席のすぐ前に座っていたのを連れていって、本会議場の後ろの壁のところにいるいろいろやっただれども、どうもうまくいかなかったようで、安倍さんは慚然として帰っていったよね。

○紅谷 採決の結果は、自民党からは造反や棄権が多数出たものの、五票差の僅差で可決しました。

ですから、可否同数になって議長決裁ということも考えられていました。事前には可能性の問題としてお話ししましたが、もし可否同数になった場合、賛成なのか反対なのか、どうお考えだったのでしょうか。

○河野 初めから言われていましたね。それまでも、可否同数の場合には議長の決裁は原則は否決だということで、それは、否決するだけのエネルギーが同数まで高まっているということは、仕切り直

しでいいんじゃないかという話がある、過去、そういうふうに言われてきていることは承知していました。

私も、これを見ていて、否決しようというエネルギーがこれだけ多いとなると、同数で可決と言ったらこれはもう責任は全て議長が背負うことになる、もちろんそれはそれでいいけれども、それでいいだろうかという気持ちがあつて、まあ、同数になってみなければ分からないけれども、やはり否決した方がいいだろうなという思いの方が、正直言ってあのときは強かったですね。

○紅谷 確かに、可否同数のときは、現状を変えることなく継続して議論していくんだ、そのためには否決というのが先例とかわれませんでした。当時唯一、議長決裁で可決したのが、参議院での河野謙三議長の政治資金規正法の例でした。

○河野 あの時は本当にみんなびっくりしたね。びっくりしたけれども、あのときの謙三議長の言い分は、選挙制度の改革と政治資金規正法とが二本一緒に出ている、片っ方を通した以上は片っ方も通さないと整合性が取れない。だから可とすると言ったということでした。

その時は、芦ノ湖に浮かぶ双胴船が頭に浮かんで、両輪が回らないと前へ進まないから、敢えて可と言ったんだと言っていました。

○紅谷 河野謙三先生は、随分後からですが、可否同数の場合は本来は否とするのが正しいと思うけれども、あの状況では、選挙法と政治資金規正法とが一体だったので可とするしかなかったと述べておられました。

可否同数については、河野議長時代には、臓器移植法でも可能性がありました。

○河野 そうでしたよね。あれは党議拘束を外していたから本当に事前に読めなかったよね。この臓器移植法は、A案、B案、C案、D案の四案あつたけれど

も、結果はA案が圧倒的に賛成が多かったから同数まで行かず済んだ。

しかも、あれは最初に可決したから、他の案は採決しなかったんだよね。

○紅谷 あれは採決順序をどうするかというのがあって、他の案を否定しないために、議長は可決するであろうA案をまず議題にし、結果が出たので、以後は一事不再議で他の案を議題にする必要がないという進め方をされたということでした。

○河野 そこは本当に書き残した方がいいところですね。

○亀屋〔衆議院事務局〕 採決に際しては、自民党内で反対や棄権をした議員がいらっしやいました。政治信条を貫けば、公認を得られない可能性もある中で、信念を貫いた行動を取った議員に対して、河野先生はどう思っていますか。

○河野 議員は政治信条を一人一人持っていますから、それを貫こうと努力するのは評価します。評価するけれども、基本的にはやはり政党人として党内でまず議論をして、賛否について十分な議論をする。そして、最終的に党議が決定をすれば、それに従うというのが党人としての生き方ですから、どうしてもそれに従えないなら離党する以外にないですね。

また、党の執行部も、所属の議員をそこまで追い詰めていいかということがありますね。ここまで行ったら、党としてもこういうふうにしてやろうという思いが執行部の中にないと、党としてうまくいかないし、若い党員が育たないと思います。

僕は党を離れた経験がありますけど、離れたら大変な不利益を被ることは分かっているんで、それを承知の上でどこまで頑張るのか。利益にぶら下がりながら、自分の嫌なところだけは嫌だと言って反対するのでは通らないと思います。

○紅谷 郵政民営化法案の採決は、衆議院では僅差でしたから、小

泉総理は、法案が参議院に送られた翌日には、参議院で否決された場合は直ちに衆議院を解散して、選挙を行って民意を問うと発言されました。

当時の新聞は、やはり参議院の自民党議員に対する脅しの発言だという記事があって、必ずしも真意が計り知れないところがありました。

○河野 そうなんだけれども、幾らそう言ったって、本来は参議院は解散があるわけじゃないから余り脅しにはならないんだ。

○紅谷 逆に反発も強かったようで、参議院の採決では、自民党から造反が随分出て、百人対百二十五の大差で否決という結果になりました。

○河野 小泉さんが何といつても、否決される可能性はかなりあって、どっちも確信が持てなかったんだよね。

小泉さんは、もしかしたら二、三票差で勝てるかもしれないというふうに思っていたし、参議院の村上さんたちは絶対に否決できると思っていた。

結局、社会党が崩れたんだけど、自民党からも反対が随分出たんですね。

○紅谷 解散当日は、参議院で郵政法案が否決された後、内閣は直ちに解散の手続きに進むのですが、反対する大臣がいたために、本会議は否決から七時間後でした。

本会議の開会宣告後、議長席後ろの扉が開いて、細田官房長官が解散詔書を持参し、河野議長は解散詔書を読み上げられるのですが、そのときはどういってお気持ちだったのでしょうか。

○河野 議長とすれば、本来こういうことを総理の思うままにさせてはいけないという気持ちはあったけれども、どうしようもないんだね。陛下の国事行為だから止めるわけにいかない。

僕の気持ちと同様に、万歳も気の抜けた万歳だったよね。

○紅谷 小泉総理は周りの反対を押し切って解散されましたが、それまでは、本当に解散するかどうかというのは、参議院で否決されても、まだ疑心暗鬼でした。

自民党では、衆議院解散が決まった後も、反対議員を公認するのか、その後任をどうするのか等で大混乱でした。議長としては、参議院で法案が否決されたから衆議院を解散するという小泉総理の判断は、当時、憲法上もおかしいという意見が随分ありましたが、どう思っていましたでしょうか。

○河野 それは全然筋が通らないと思いましたね。もちろん憲法上もおかしいと思っただし、政治的に見ても参議院で通らないのを衆議院で解散したって、衆議院で勝っても参議院は同じ状況なわけだから、それはおかしいなと思っていました。解散しなくても、衆議院から出直して話がつけば、次の国会で参議院は絶対通っただろうと思っただけでもね。

○紅谷 そもそも、参議院での否決を理由に衆議院を解散することができなのか。しかも、衆議院は法案を可決しているわけですから、内閣と衆議院の意思は一致しているわけですね。

○河野 それはあり得ないことで、だから学者にも随分批判的な意見がありましたよ。

参議院で否決されたから衆議院を解散するというのは、どう考えても理不尽でおかしいと思っていました。さらに、解散についての保利元議長の保利書簡があったし、解散は、民主主義において国民から選ばれた議員の任期を残して職を解くということで、そんなに簡単にしている事柄じゃない。

憲法上の問題は、確かに六十九条解散と七条解散の二つのケースがあるというけれど、六十九条は、内閣不信任案が可決した場合に、総理に解散か総辞職かの選択肢があつて、解散は総理大臣として最後のカードだから分かりますよ。

これだって本当は不信任案が可決されれば辞めるのが当たり前で、解散するというのはどうかなと思うけれども、もう一方の七条解散というのは何だと。よく分からないですよ。

つまり、七条解散というのは、保利さんも言っておられるように、例えば立法府と行政府が対立してにっちもさっちもいなくなつたときは七条解散ということがあるのだけれども、あのような自民党一強状況でそういうことはないわけですよ。

もう一つの場合は、何か新しい問題が出てきて国民に信を問うための解散というけれど、新たな政策があれば国会で議論することが最優先ですよ。

だから、小泉総理の解散は恣意的と言ってはちよつと言葉が過ぎるかもしれないけれど、自分の主張を通したいという解散でしかない。だからこれはおかしいと僕は思いましたね。しかし、それを止める方法がないのですよ。

世界各国の例を見ても、今はもう総理が解散権を持って解散するなんていうのは、日本が先進国では唯一の例外的な国と言っている。イギリスが解散権を制約する方向に進んでいて、今年になってEU離脱問題で国民の信を問えないということで、元に戻ったりはしているようだけど、日本はほとんどは七条解散ですよ。

○紅谷 今の政府見解は、六十九条解散以外にないのかについては、内閣の権能として解散権はあり、制約がないのかというと、制約がないという見解なんですよ。でも、濫用すべきではないと歴代の総理は言っている、という言い方です。

河野議長がおっしゃるように、郵政解散は、衆議院は郵政法案には賛成したのに、参議院が否決したから衆議院を解散するのか。それは衆議院議員の首を切るわけですから、それが許されるのか。選挙をやった後に、もう一度郵政法案を出して、参議院で否決されたら、また衆議院を解散するのかということにもなりかねません。

○河野 そうなんです。あれで問題が解決するんじゃないものね。だから、どう考えてもおかしいと思ったが止めるすべはないんだ。だから、行政府のトップに解散権を委ねていて、立法院が何にもそれに對して對抗措置がない。立法院だって何か對抗措置があってもよさそうなものだけれども、それはない。

宮沢元総理は、解散権というのは好き勝手に振り回しちゃいけない。あれは存在するけれども使わないことに意味がある権限で、めったなことに使っちゃいけないと言っておられましたね。

○紅谷 歴代の内閣は、解散権は制約的に行使していたと思うのですが、郵政解散以降のいわゆる「アベノミクス解散」は、消費税10%を予定どおり行うかどうかについて国民に信を問うという理由ですが、法案の附則に書いてある内容ですから、何で解散をする必要があるのか非常に疑問だと言われました。

その後の「国難突破解散」と言われるのも、理由が不明確と言われていました。

○河野 それはそのとおりだと思う。宮沢さんがいたら、絶対に解散権の濫用だと言ったと思う。本当におかしい。

国民が選んだ議員を総理が切るとするのは悪手ですね。本当に、好き勝手に振り回しちゃいけないと思います。

宮沢さんという人は、権力の濫用というのが一番良くない、権力者は本当に権力を使うことを恐れなさいかぬ、いつも権力者は薄氷を踏む思いでやりなさいと言っていました。この人が一番そういうのには慎重な人でした。それ以前の人も、言わないだけでみんなそういうふうには律していたんですよ。

乱暴だったのは、中曽根さんと小泉さん以後だね。小泉さん以後は、乱暴というより、党が権力者に唯々諾々だから、やりたいようにやっちゃう感じだよ。

以前は、前尾さんとか保利さんとか灘尾さんとか、後藤田さんな

んかもそうだけれども、おかしいと言う人がいたんだけど、最近はそのような人がいなくなったから、ちよつと危ないと感じますね。

○紅谷 郵政解散の選挙では、与党で全議員の三分の二以上の圧勝という結果でした。

次の国会でもう一度郵政法案が出されましたが、反対した人たちが、衆議院も参議院も含めて賛成に回り、結局は、解散も含めた小泉総理の論理が正しかったような結果になってしまいました。

ですから、解散が憲法上どうなのかという議論は、ほとんどされなくなりました。

○河野 選挙の結果が全てという話で、参議院議員の意思もそれによって変わったということになってしまったということでした。

○紅谷 河野先生が引退されてからですが、どこかの対談で、解散権が国会を揺さぶる武器になったとおっしゃっていました。

○河野 言いましたね。事実、野党が脅かされて揺さぶられるんだものね。

意図的に幹事長が物を言っていて、それなら解散もあるみたいなことを言うとき、引つ込んじやう、あれでは駄目ですよ。

僕は、野党時代に一番勢いのある頃は、選挙のたびに数は増えるものと思っていたから、自分たちの主張を大声で言えるのは選挙しかない、野党にとつて選挙ほどいいものはないなんて偉そうなことを言っていたんです。けれども、困ったことは、選挙のたびにお金がかかって、財政的に政党が立ち行かなくなっちゃうんだよ。

僕らのときは、十人ぐらいの政党が、二十五人候補者を立てないと政党要件がないと言われるので、無理して立てるわけです。かかしてもいいから立てると言われるけれど、供託金が三百万ずつ要るから、戻ってくればいいけど、僕らは半分ぐらいが没収されちゃうんだよ。

だから、途中からは、やはり選挙は怖かったですよ。選挙のたび



にぞつとした。だから、選挙というのは脅しの道具になるんですよ。新自由クラブは十年やったけれど、選挙を十回以上やったんですよ。衆議院をやり、参議院をやり、統一地方選挙をやりと、毎年やっていたから、僕はもう、東京にあった家も何も全部なくなりましたよ。

○紅谷 今お話がありましたけれども、先国会の内閣不信任決議案の提出に際し、与党の幹事長が、内閣不信任案の提出が解散の大義になるという発言をしたところ、それに対して、ある野党の幹事長が、選挙の準備ができていない中での提出には賛成しかねるといふ発言で、脅しが効いていると感じましたね。

○河野 幾らそういったって、筋が違うよね。野党の幹事長から、そんな発言があるというのは情けないかぎりだね。小泉郵政解散の影響がいまだにあるというのは残念ですね。

### 《クールビズの申合せ、議長の挨拶》

○紅谷 互助年金や郵政解散の他にも、議長時代の記憶として残っているのではないかと思われるのが、クールビズの申合せや戦後六十年決議、更には式典等での議長の挨拶ではないかと思えます。クールビズの申合せは、本会議場も含めて上着は要らないという話が議運で進んでいました。

○河野 議運が、本会議もクールビズでいいんじゃないかと言ってきたんですよ。僕が、本会議には絶対上着が要ると一人で頑張ったね。やはり国会の品位、まあ、上着を着ているのが品位かどうか分からないけれど、余りカジュアルな格好で本会議場に来られちゃ困ると思っただけです。

環境大臣だった小池百合子さんが、クールビズに協力してくれと言ってきたけど、国会のことは国会で決めると言っただけ断りました。

みんなクールビズでやりたきゃやったらいいけど、私が主宰する本会議だけはきちんと背広で出てきてもらいたい。これは国会の品位を維持するためにはどうしても必要なんだと。暑いとかなんんと言っていたけど、それは国会の空調の温度を何度にするかという議論であって必ずしも関係ないと言って断ったと思うな。競馬の馬主やラグビーの監督なんかでも上着を着ていますよ。フォーマルのときには上着が必要なんですよ。

○紅谷 議会は国の最終的な意思決定の場ですから、そこはフォーマルでというのは当然ですね。

○河野 僕もそう言って断ったんです。

国会の委員会でも、やたらに派手な上着、ハワイにでも行っているみたいな上着を着て、カラーのシャツを着て出席している人がいました。当選回数が多い人が綿パンを履いてきていたりしていたからね。

○紅谷 国会の衛視が、議員にそれはおかしいですよとはなかなか言えませんか。

○河野 それは言えないでしょう。そこは議運の理事あたりが綿パンはおかしいんじゃないかと言わなくちゃね。本当ならドレスコードというのがなきゃいけないと思うけれどもね。

○紅谷 国会法十九条に議長の職務権限が書かれていて、議院の秩序保持権、議事整理権、もう一つが、議院を代表する議院の代表権です。

議院を代表するというのは、議長としていろいろな行事に出たり挨拶をしたりすること、議院の代表であり、議長の権限に基づいていますから、議長の挨拶の内容も含めてそういうことです。

議長が挨拶する多くの行事があり、そこでの挨拶文は、基本的に事務局の方で案を用意して議長に手を入れていただくのですが、全国戦没者追悼式や沖繩の全戦没者追悼式での挨拶文については、元の原文が跡形もなくなっていて、むなしさを感じたという思い出が残

っています。

中でも、全国戦没者追悼式の挨拶で、河野議長は、海外での武力行使を自ら禁じた日本国憲法に象徴される新しいレジームを選択するという挨拶をされて、当時の安倍総理の戦後レジームからの脱却という、保守色の強い路線を牽制されたような挨拶をされました。

そこは、当然ながら議長のお考えがあつたことだつたと思いますが、如何だつたのでしょうか。

○河野 意図的でしたよ。二つあつて、一つは、今の憲法は変えた方がいいという安倍さんを始めとする人達の主張は、議長として絶対受け入れられない。今の国会は現行憲法に基づいて開かれていて、議会で、議長は護憲の姿勢をとることは当然でしょう。議長が、自ら憲法を変えた方がいいとは絶対言うべきでないという一貫した気持ちで私にはあつたので、安倍さんがそれらしいことを言えば言うほど、こつちはそうでないことを意図的に言ってきたという、それが一つです。

それから、もう一つは戦争ですね。

僕の政治家としての一貫した理念は、国が戦争をしないことが政治家の仕事だと思つているから、戦争の問題について議題になると、やはりそこだけはどうしても主張が跳ね上がるんです。戦争はすべきでないというのは憲法の理念に従つているわけで、それは議長としての務めじゃないかと僕は思つているんです。

憲法の理念を守る、あるいは生かすことは大事なことだと思つて、改憲に対する護憲論、右傾化に抵抗する主張というのは、やや意図的に言つたので、それは、国会を代表する意見としてどうかとなる問題があるかもしれないけれども、議会というのは、憲法の理念を生かすということが務めだという意味からいえば、外れてはいないと思つていたんです。

○紅谷 それは議会だけでなく、本来は内閣自体に憲法遵守義務

がありますからね。

○河野 いつも言うように政治力学というのがあつて、内閣が中心から離れて右へ右へと寄れば、もう片方は左へ左へと寄らないとバランスは取れないんですよ。権力が右へ寄つたときに、その権力を正すべき国会が生半可なことをしていたら、一緒になつて右へ曲がつていくわけで、権力が右に寄つたら、チェック機能は左へ寄つてバランスを取らなきゃいけない。これが真ん中に寄れば、こつちも真ん中に寄つたらいい。この政治力学上のバランスというのがあると僕は思つているんです。

だから、何となく、何となくというのは無責任な言い方だけれども、政権が右へ右へと向いていけば、やはり、それはどこかでそうでない力が働いてバランスを取らないと非常に危ないという気持ちがあつて、だから、総理と一緒にの沖繩の追悼式とか武道館の戦没者追悼式とかの挨拶が一番激しいよね。一人で行つているときにはそんなに強くは言つていないと思うけど、小泉さんとか安倍さんと一緒にのときには、ちよつと激しかったかも分からないね。

内閣と議会とのバランスがうまく取れていないというのは、議論がなく内閣の独壇場になるから、それがとても不安なんですよ。みんなで右へ行つたら、それはもうとんでもないことになりますよ。だから、誰かが反対のことを言つていないといけないから、激しく右へ寄れば、野党の論調は激しく左へ寄らざるを得ないんです。これが真ん中のことを言つていてくれれば、こつちも中道へ寄つていていいわけですよ。

○紅谷 その役割は、議会の中で野党なのか、あるいは自民党の中からののかですけれども、河野議長が危惧の念を抱かれての発言だつたわけですね。

小選挙区制の話と関係してきますが、小選挙区制になつてから特にそういう高い見地からの幅広い意見がなくなつてきたようにも感

じますが如何ですか。

○河野 小選挙区になったら、議席が一つしかないわけだから、二つというわけにはいかないから、一つに収れんしていつちやうわけですよね。だから、ほかの意見というのはみんな切り捨てられちゃう。それが小選挙区の最大の失敗ですよ。

○紅谷 議長が内閣と対峙するような挨拶をされても、自民党も含めて各党から議長の発言がおかしいという指摘は一切ありませんでした。

○河野 いや、腹の中では思っていたかも知れないな。

だけれども、議長の後半、衆議院事務局で作られた挨拶文というのは、僕が直さなくても、しばしばそのまま読んでいました。挨拶については、僕だけでなく天皇陛下の御挨拶も、結構、そうだと思うような挨拶が多かったですね。天皇陛下の御挨拶の中に、国際社会との関係とか、戦争に対する反省とか、そういう言葉がちりばめられるようになってきて、それはとても、今の上皇陛下の挨拶はよかったですって、僕は感に堪えていますね。

○紅谷 いわゆる戦後六十年決議に關してですが、平成十七年八月に「国連創設及びわが国の終戦・被爆六十周年に当たり、更なる国際平和の構築への貢献を誓約する決議」という本会議決議を行いました。いろいろなタイトルをくつつけたような決議ですけども、河野議長の意向が非常に強かった決議だと記憶しています。

○河野 かなり記憶が薄れているけど、平成十七年というのは、終戦から六十年、被爆から六十年の節目の年で、村山内閣のときの戦後五十年決議は、野党の新進党が欠席し、自民党からも随分欠席者が出て、共産党は反対するという、国会決議としては不規則な形で行われたし、参議院ではとうとうできなかつたんだよね。

○紅谷 鈴木恒夫さんが、河野議長の意を受けて野党と調整して、五十年決議を想起するという文言を入れた案文で決議が行われました。

○河野 今更ながら、何か長つたらしくてまとまりがないけど、そういう思いがあつての決議でした。

○紅谷 当時の新聞記事には、河野議長の指示があつたとか、希望でと書かれています。

議長の権限、在り方という観点からのエピソードでした。

### 《第七十二代衆議院議長》

○紅谷 小泉郵政解散による総選挙は、当初自民党が過半数割れをするのではないかと言われていましたが、与党で議席の三分の二以上を獲得し、圧勝という結果になりました。

河野先生も、今までの選挙の中で最高の得票数で予想をはるかに超えたと述べられていましたが、どんな選挙だったのでしょうか。

○河野 僕は与党でも野党でも選挙をやり、ずっと当選はしましたが、そんなに楽な選挙をやってきたわけではないんです。そんな中で、この選挙は議長で選挙だったから余裕をもって、後にも先にもこのときばかりは、十七万票近くの票を取った選挙でした。

この選挙は、小泉総理で郵政選挙と言われ圧勝しました。ところが、その小泉さんが自民党の党則によって一年で辞めるんです。国民の圧倒的な支持を得た人が党のルールで辞めてしまう。ちょっと不思議な気がしました。

小泉さんの後を引き継いだ安倍さんは、次の参議院選挙でぼろ負けするけれども、参院選は政権選択の選挙じゃないと言って辞めななんです。僕から見ると非常に対照的で不思議でした。

○紅谷 郵政選挙で得た与党の三分の二という数は、後に参議院選挙で衆参がねじれ状態となったので、衆議院で再議決可能な数となり、大きな意味を持つことになります。

○河野 だから、圧勝したときに、これで何でもできるのかと何となく不安でした。小泉さんが辞めて安倍さんが総理になったのですが、自分が選挙をやったわけではなく、国民の支持が確認されないままに総理になって、しかも圧倒的な議席だから、ちよつとわがままというか独り善がりの政治になっていくわけです。強行採決をやったりして政治手法が強引過ぎるというのが、次の参議院選挙でしつぺ返しを受けるわけです。

ねじれ国会への序章になったという感じです。

○紅谷 選挙後の特別会では、河野議長が七十二代議長として再選されました。選挙を跨いで議長に再選されたのは平成では初めてでした。

議長の候補者として、中山太郎さんや野田毅さんの名前も挙がっていましたけれども、河野議長再選の流れは速かったと思います。

○河野 党幹部は、最初が一年九か月ですから、ちよつと短かったと思っただけでしょうが、替わっても不思議じゃなかったんです。

不思議なのは、小泉劇場で圧勝して、憲法改正に進むいいお膳立てができたのに、僕を再選したことです。

そのときに、タカ派の人は何も考えていなかったと思うけど、僕が二期目の議長になり、しかも横路さんが副議長になる。だから、国会は改憲の勢力の方が圧倒的に強かったときに、議長、副議長が護憲派という、僕がいつも言う政治の力関係が平衡感覚で、一方に寄らないで、改憲の勢力が強くなると、何となく片っ方の護憲勢力が重くなつてバランスを取れるというような感じがありましたね。

○紅谷 最初の議長就任の際には、森元総理が、当時、河野先生は総理にならなかつた唯一の総裁だということで尽力されたようですが、七十二代議長ときは、私の記憶では、選挙翌日の昼に事務所に向つたら、さつき小泉さんから電話があつて、また議長をやつてほしいという連絡があつたという話でした。

○河野 そうだったかなあ。そうならば、政府の長が立法府の長の人事まで強い影響力を持つていたということが、とても不思議です。

○紅谷 そこは、議長を割り当てられる自民党内の人事ということなんだろうと思います。

解散前の小泉総理は、郵政法案に見られるようにトップダウン内閣で、しかも選挙で圧勝しました。そういう中で議長に就任されて、これから議会がどうなつていくのか、どうしていいかと思われたのでしょうか。

○河野 それはとても心配でしたね。

僕自身は、小泉総理は、議員年金のときに頭越しに立法府の議論に手をつ突つ込んできたし、何よりも解散権を行使したので、こんなことじゃいけないと思ひながら、本当に辛い思いで解散詔書を読みました。あの時は、議長でありながらも無力感を感じていました。

そういう気持ちを持ちながら再選され、一回目のときとは大分気分は違いました。その一方で、与党が三分の二以上の議席を取つていて、逆にこれからちよつとやそつとじゃ国会運営がうまくいかないのではないかという気持ちもあり、しつかりやらなくてはいけないという気持ちでした。

○紅谷 与党は圧倒的多数で、強行採決も辞さないという構えでした。一方の野党は、非常に数が少ないものですから無力感が目に見えて、余り抵抗らしい抵抗もできない状況の中、河野議長の存在が野党には頼みの綱であり、与党には高いハードルだったように見えました。

○河野 野党第一党の民主党が、選挙の敗北や年金未納問題なんかが出て、代表の責任論が出たりしてがたがたになりましたね。横路副議長だつて、野党の中で本当に総意で出てきた副議長候補ではなかつたかもしれないからね。

○紅谷 与党が圧倒的多数の状況で、小泉総理は、教育基本法や共謀罪の創設を内容とする組織犯罪処罰法等、野党の抵抗が強い法案を成立させようと最初は強引でしたが、河野議長がハードルになって、強行採決をしようにも簡単ではなかったというのが実際でした。

○河野 まあ、邪魔な存在だったかもしれないね。

教育基本法は、鈴木恒夫君が委員会の理事をしていて、僕は潰れるかとも思っていたけれども頑張ってまとめたんだと思うな。

だけれども、教育基本法を与党の強行採決でやるのはちよつとどうかなと思つたね。愛国心とかの内容だったからね。

○紅谷 教育基本法は、戦後六十年も経って時代に適応しないというのはあつたのですが、内容は愛国心だとか、家庭教育、親にも問題があるというものでした。

○河野 小泉さんは、郵政民営化法を成立させたけど、国に忠、親に孝の教育基本法は断念していたので、安倍内閣で採決したんだ。

○紅谷 小泉総理は郵政以外の法案は断念したり継続にして、柔軟な対応だったかと思ひます。

河野議長は、小泉総理に対して、与党の強行方針や答弁について注意的な発言をされました。

○河野 本会議で野党が再質問しても、小泉さんは前と同じという答弁で答えていかなかったから、答弁はもつと丁寧にするようにと注意したりしましたね。

僕が議長のとときの自民の国対委員長は、中川秀直、二階俊博、大島理森の三人で、中川さんと大島さんはしょっちゅう公邸に来ていたよね。二階さんは余り来なかった気がするな。

○紅谷 二階先生は、河野議長に呼ばれる前に手を打たれていましたね。

とにかく与党が強硬策を進めるに当たっては、河野議長が壁になつていたと思ひますね。

○河野 まあ、多少邪魔な方がよかつたのだろうね。

○紅谷 一方の野党は、数が非常に少ないものですから、現場での抵抗はあまりなく、議長に縋るといふ姿勢だったように見受けられました。

○河野 社会党がなくなつて、野党側に国会の業師みたいな人がほとんどいなくなつたんだね。だから、野党国対に手練手管というのあまりなかつたね。

僕に仲裁を頼んでおいて、国会の中での抵抗は限度があるということ、その時には街頭で演説をしているとか、国会の中じゃなく外でとなると、どうしようもないね。

○紅谷 小泉総理は一年で退陣して安倍総理に替わりますが、自民党は参議院選挙で大敗し、民主党が第一党になりました。

○河野 自民党立党以来の敗北だからね。

小泉さんは選挙で負けたわけではなく党則に則つて辞めるわけで、森さんは、後を誰にするかというので安倍さんか福田さんかと悩むんですよ。福田さんの方が年も上だし、政治的キャリアも長い。ただ、二人とも官房長官以外に大臣をやっていないんですよ。

安倍晋太郎さん、福田赳夫さんの両方にすごく義理があつて悩んだけど、福田さんがいち早く自分はやる気はないと言つたものだから、安倍さんになつたんです。

ただ、安倍さんは選挙で勝つたわけでもないし、党務、政務で十分なキャリアも無く、総理・総裁になつたわりには、相当無理を言つたんですね。だから周りが苦労したと思ひますね。

### 《後藤田正晴氏の逝去》

○佐々木〔衆議院事務局〕 議長在任中に、宮沢元総理とともに、

政治の師と言ってもいい存在だった後藤田正晴先生が亡くなられました。

政治の激動期にご一緒された後藤田先生との思い出は多いかと思えます。

○河野 後藤田さんは、僕は最初はタカ派の人だと思っていたら、中曽根内閣の官房長官として、連立の相手だけでも少数会派の科技庁長官の僕を、何回も官邸へ呼んで話を聞いてくれて、君が言っていることは分かるけれど今はそういう時期じゃないとか、今はそういうことを言っちゃいけないと説得してくれて、その時にこの人は立派な人だと思いました。

そういうことがあって、宮沢内閣で今度は僕が官房長官で、後藤田さんは法務大臣に選ばれた。それで、宮沢さんが訪米するときに、副総理の渡辺外務大臣が病気で倒れて武藤さんに替わる。それでアメリカ側の宮沢内閣の評価が、党内的に立場が弱い総理大臣だとなって評価が低くなると、それでは充分な話をしてくれないから、安定した内閣だということを示す必要があると考えたんです。それで、僕は宮沢さんに、内閣をきちつとして行かれた方がいいと思うので、例えば後藤田さんを副総理にしたらどうですか、渡辺副総理が辞めたから、後藤田副総理にして内閣をきちつと固め、党内的基盤が強くなったということにして行かれた方がいいと思うと話したんです。

宮沢さんは、ちょっと考えたけど、いいんじゃないかと思うけど後藤田さんが受けるかどうか、君が行ってこいと言われて、後藤田さんをお願いして引き受けてもらったんです。それが非常にうまくいって、党内や閣内でがたがたしたときに後藤田さんが抑えてくれたから、僕もすごく恩義を感じていました。

その後、後藤田さんは、僕が肝臓移植の手術をして松本の病院に入院していたときに見舞いに来てくれて、自分も頑張るけど後は頼

むぞと言われ、それが病氣療養中の僕のすごい支えになっていたんです。

僕が政治の世界へ入って、亡くなられてとても辛くショックを受けた一人は大平さんで、この人とは野党として闘っていたから敵の大將で亡くなった。その後では、後藤田さんと宮沢さん、それから田川さんと鯨岡さんでした。この五人の死は辛かった。その中でも、政治的には後藤田さんがきつかった。宮沢さんは引退されていたからね。後藤田さんは一応政界から引いておられたけれども、やはりいろいろ相談に乗ってくれていた時でした。

今の人たちは、辛いときに相談に乗ってくれる先輩がいないんじゃないかな。僕は、宮沢さんのところに行ったり後藤田さんのところに行ったりすると、いろいろなことを言ってくれたからありがたかった。

特に後藤田さんは、晩年はとにかく戦争反対で、すごく危機感を持っておられたからね。僕はもつとしっかり発言しろとか叱られたこともある。だから、亡くなられたのはショックが大きかったですね。

○紅谷 議長時代に後藤田先生、宮沢先生が亡くなり、少し前に鯨岡先生も亡くなりました。

○河野 みんな亡くなってしまうね。

### 《議長からの提案―公聴会の在り方等》

○紅谷 国会改革の一環で、長年の懸案だった公聴会の在り方が、河野議長の提案で与野党の歩み寄りが見られました。教育基本法の強行採決の後に開かれた議会制度協議会で、公聴会を採決の直前に行うのはいかなものかという問題提起をされました。

公聴会の開会については、昭和六十二年の予算委員会での売上税問題で、公聴会の開会が採決条件の争点になって大もめになり、それ以降は、与党は公聴会が終われば採決できる、野党は公聴会を阻止すれば採決できないという攻防が、二十年來続いてきました。

教育基本法審議の際も、採決当日の午前中に公聴会を開いて、午後には採決をしたということで、野党の国対委員長から河野議長に採決については広い意味で瑕疵があるという申し入れがありました。

○河野 僕は、公聴会が終わらなければ次へ進めない、終わりさえすれば次へ進めるとか、公聴会がそういう手続きに使われている。本来、公聴会というのは国民が直接的に議会の審議に参加するという大事な制度だから、きちっと意見を聞いた上で、議員が賛否の判断材料にしないではいけません。従って、公聴会を採決の当日に行うというのはいかなるものかと思うので、検討してくれと言ったんです。

○紅谷 それで与野党に共通の理解ができて、それからは、公聴会の開会が採決の日というようになるとはなくなり、改善されたと思います。

○河野 まあ、半歩というか、ちよつと進歩したということですね。  
○紅谷 それから、もう一つ、河野議長が就任のときからおっしゃっていたのは、国会というのは開かれた国会でなくてはいけません。これは、日本国民だけではなく、国際的にも開かれていなくてはいけないということで、河野議長の提案で、本会議場に通訳ブースが設置されました。

○河野 僕はイギリスの本会議を傍聴して、我々にも参考になる議論をしているのを聞いて、つくづくそう思ったんですよ。

それで、主としてASEANの人たちが日本の議会を傍聴したときに、日本の国会の議論がどういう内容かということを彼らに理解してほしいというのと、もう一つは、国会議員が、自分の主張は国

際的に通用する議論かどうかということを考えてほしい。つまり、国内だけで通用して、外国から見ればかばかしいというような議論をしていては駄目だと思っただけです。国会を開かれたものにするということとは、みんなが知ることと同時に、聞かれても恥ずかしくないような議論をしてほしいということの両方の意味があつたんです。基本は大使館側で通訳は連れてきて、総理の演説や安保法制の議論とかを、本会議を傍聴に来た国の人に直接聞いてもらうということでした。

それは、外国から見ても自国の政策に関わっていて、例えば思いやり予算の議論など日本の議論で関心のあるものがあれば、そういうときに聞きに来る、聞きたいと思うニーズはあると思うんですね。コロナ禍で、対面じゃなくてオンラインで議論したりしているけれども、やはりテレビで見ているのとその現場に行くのでは全然違いますからね。

○紅谷 今もブースは残っていますけれども、職員ですらあれが何なのか多分知らないと思います。

○河野 全く残念なことだ。  
国会図書館長だった長尾さんの研究がもつと進んで、自動翻訳機というのが完全なものになれば、別に通訳がいなくても自動翻訳機が取り付けられれば、もう一度きちんと宣伝して、大使館や外国人の傍聴ができるかもしれないね。

○紅谷 そのためには、実のある議論をしなくてはいけないということですね。

○河野 それが刺激になって、外国人が聞いても実のある議論をするようになるといいんだけどね。

思えば進むけれども、なかなか現実はその簡単にはいかないと思いますね。

## 《教育基本法案、衆議院本会議で与党単独採決》

○紅谷 平成十七年九月のいわゆる郵政選挙で与党は圧勝し、小泉総理は郵政民営化法案を成立させた後、安倍官房長官を後継に指名して辞任されます。選挙から一年後でした。

小泉政権では、与野党が対立していた教育基本法や防衛庁の省への昇格法案等は強行採決を避けて継続審議としたので、安倍政権での取扱いが注目されました。

教育基本法は衆議院本会議で与党単独採決になりましたが、河野議長はどういう思いで臨んでいらしたのでしょうか。

○河野 僕は、教育基本法には二つ思いがあるんです。

一つは、僕が議員になった最初は文教族だったから、教育基本法問題というのはその頃からずっと気になっていました。議長なので何も言っていないけれど、自分としては、教育基本法の議論についてはとても心配をしていたんです。

もう一つは、教育特委の関係者が時々僕のところへ来て、とにかく強硬論が多くて大変ですという話をしていたことです。

教育基本法についていえば、僕の一貫した思いは、政治が教育の中身について口を出すのは適当でないと思っていました。政治は、教育にふさわしい環境をつくるために予算をつけるとかということを行うべきで、そこで何を教えるかということについて言うべきでない。それは教育の専門家が考えることだと僕は思っていました。引つ掛かるのは、愛国心とか道徳心とか教育でも特に心の問題に関するものです。個人的にはとても心配をしながら見ていたけれども、議長がそれを言う立場ではないから言わなかっただけで、心配をしていたのは事実なんです。

結局、かなり自民党の影響力が強い教育基本法になり、野党は強

く抵抗しました。圧倒的に与党が多かったから、野党は小さければ小さいほど反対は過激になるんですよ。だから、うまく収まってくればいいなと心配をしていました。

僕の経験からいって、例の大学紛争を収めるときの大学紛争臨時措置法が相当荒っぽい運営で強行採決をして、参議院はろくに審議しないで通した。そのときに、僕は教育の基本を決める法律の審議が、こんなことでもいいのかなと思って見ていた経験があるものだから、この教育基本法は強行採決は嫌だなど思っていたけれど、野党は本会議を欠席してしまいましたね。

○紅谷 この法案は、自民党が選挙に勝って小泉政権は圧倒的多数でしたが、強硬姿勢を貫きませんでした。

それは、河野議長が、与野党の対立が激しかった組織犯罪処罰法の与野の強行方針に対して「国会の様子が国民の一大関心事になっていて、自分は今の事態を憂慮している」と発言され、そのせいもあってか、与野が非常に抑制的、慎重になって、対立法案は全て継続になりました。

河野議長の発言が与党にとっては高いハードルになっていたと思います。

○河野 自覚していなかったけど、実際はそうだったかもしれない。とにかく、与野党の差が余りに大きくて、野党の質疑時間が物すごく短いんですよ。特に少数野党の質疑時間が何分間じや本当に議論にならないと思っていました。

○紅谷 もう時効ですでお話しますと、当時の自民党国対は、二階国対委員長、坂本剛二国対代理でした。与野の強行方針はあるものの、河野議長がベルを押してくれるかどうか不安で、私はお二人とも委員長や理事で御一緒したのでよく呼ばれて、与野はこういう方針でいきたいとか、現場がこうしたいと言っているけれど、議長はベルを押してくれるかなと、私のところに探りを入れてこられ



るんです。

私は、法案の質疑で各党一巡もしていないのに議長がベルを押すことはありませんよと話したりしましたが、随分そういう相談を受けますね。

○河野 あれだけの議席差があれば、やろうと思えば何だってできたはずだけど、それがある程度収まってくれたというのは、二階国対委員長という強い政治力、指導力ある人が自制して現場を抑えていたからだろうね。

○紅谷 平成十八年九月に安倍内閣が発足した直後の臨時会で、教育基本法や防衛庁の省への昇格法は成立しますが、これは強行採決になりました。発足して数か月でしたが、早々に内閣不信任案が出されました。

翌年の平成十九年の常会は、七月には参議院選挙が決まっているので、野党としては当然ながら対決姿勢で臨み、それに対して与党は、強気一辺倒の国会運営で強行採決の連発でした。当時の新聞では、衆議院では強行採決が十四回あったと報じています。

一方の野党は、解任決議案や不信任決議案を八本出しました。与野党の泥仕合の中で、最後は河野議長不信任決議案まで出されてしまいました。

○河野 参議院は選挙を控えているから、強行採決というのは印象が悪くて選挙に影響するからと、参議院の自民党の方から、参議院は官邸の下請じゃない、という発言まであったほどでしたね。

委員会では審議をしている法案を、本会議で取り上げて中間報告という話が、官邸から聞こえてきたものだからそういう発言になったのだろうけれど、中間報告というのは乱暴だよな。

現場の委員会が進まないからだろうけど、野党が委員長で、それを取り上げたというのがほとんどで、涙の委員長報告とかがありましたよね。

大学紛争臨時措置法のときは、参議院へ持っていったのが会期末の二日前で、のっけに中間報告をやったのを見て、参議院は良識の府と言われる割には、結構強引な手法をとることがあると思つたね。

○紅谷 河野議長不信任決議案についてですが、厚生労働委員会で、委員長を羽交い締めにして委員長席から引き降り降ろした民主党の議員がいて、懲罰動議が出されました。懲罰委員長が民主党で、動議を与野党の話し合いがつかないという理由で扱わなかったら、与党が、委員長不信任動議を出して可決し、自民党の委員長代理を立てて懲罰動議を進めたということがありました。最終的には本会議で三十日の登院停止になるのですが、その過程で、河野議長が本会議のベルを押したのがけしからぬということで、民主党が河野議長の不信任決議案を出してきましたけれども、どう思われたでしょうか。

○河野 これは痛恨事だね。何で提出されたのか理由が全く理解できなかった。

僕はアンフェアなことをしたつもりは全くなかったし、第一、僕の気持ちは、全会一致で選ばれた議長が不信任を受けるようなことは絶対してはいかぬと思つていたから、それがいきなり不信任というので、何でこうなるのかと、とても残念な思いでした。

松野議運筆頭理事が議長不信任の趣旨弁明をやったけど、議長を不信任するというのは、腹が立ったから出しちゃうというのは、自制してほしかった。

○紅谷 議長の権威を逆におとしめるものでした。最後は議長不信任という不本意な形で常会が終わり、参議院選挙に突入していきましたが、年金の記録問題があつて、自民党は惨敗して過半数を割り、民主党が第一党になりました。

○河野 選挙に入る前には、自民党は絶対勝つと新聞は言っていたのが、途中からどうも旗色がおかしいとなつて、開けてみたら惨敗。青木参議院議員会長と中川幹事長だけが責任を取って辞めて、総

裁は辞めないという、あり得ない責任の取り方ですよ。

橋本総理時代に参議院選挙に負けて、あれだって政権選択の選挙じゃないと言えれば通ったろうけれども、橋本君はすっぱり辞めましたよね。

そういう前例があるから、本当は総理が辞めないのはおかしかつたけれども、そういう声も出ない党になっていました。

### 《国会図書館長の人事》

○紅谷 河野議長の在任中に国立国会図書館長の人事がありました。従前からの図書館長の人選は、衆議院と参議院で交互に推薦することになっていて、ちょうど衆議院で推薦する順番でした。

昭和二十三年に国立国会図書館ができて、初代の図書館長には国務大臣から金森徳次郎さんが就任されて、十年余り務められました。その後はずっと衆参の事務総長経験者が交互に就いてきましたので、誰もが衆議院の事務総長経験者が就任するものと思っていました。当時の駒崎事務総長が河野議長に相談に行きましたら、ちよつと考えさせてほしいという返答で、結局は外部からの登用で進められますが、そこはどういうお気持ちで、どういうふうに進められたのでしょうか。

○河野 図書館長の人選については、前にも言ったように僕の議員生活のスタートが文教族だったということがあって、図書館行政というのとはとても大事だと思っていたのですが、国会図書館というのは他の図書館と全く違います。

国会図書館が最高の権威を持って、人材も資料も集めて国会にサービスするというのが第一義的な仕事であることはもちろんですが、国会図書館というものは国の最高の図書館であって、日本全国の図

書館とネットで結んで、日本全体の図書館の頂点にあるものでなければおかしいと、ずっと思っていたんです。

それで、駒崎事務総長からは谷前事務総長を推薦すると言われたけれども、谷さんは事務総長として相当長く勤められているが、図書館長として特別の抱負でもあるのかと聞いたんです。そうでなければ、もっと図書館行政に経験のある人がいないかと事務総長に言ったら、いませんし、探しようがないと言われたんです。

○紅谷 駒崎さんを弁護する意味でも、国会図書館の役割を追加して申し上げますと、国立国会図書館は、河野先生が言われるように全国の図書館の中の最高位であり、中央図書館という役割が一つ。もう一つが、国会に附属して立法機関を補佐するという機能の二つの役割を持っています。衆参の事務総長が今まで就いていたのは、立法機関を補佐するという観点に重きを置いていたわけで、この部分は図書館が非常に弱い部分でしたから、それですつと上手くやってきたという経緯なんだと思います。

○河野 確かに、主眼を置いた観点が違うから、事務総長も探しようがないんだよね。そこで自分で探すことにしたんだけど、数日にわたって頭を抱えた。それで、思いつくまま十人くらい名前を書き出し、なんとか三人に絞って直接電話をかけたんです。学者や哲学者、その三人目が長尾真さんでした。

長尾さんは、国会図書館に非常に興味があるけれども、今は情報通信研究機構の理事長をしているから、できないと言ってます。

そこで、総務省所管の団体だったので菅大臣に電話したら、本人がやると言うなら結構だと言ってくれました。

それで長尾さんと会って、初めましてと言ったら、いや、去年の日本国際賞の表彰式でお会いしましたと言うから。ますますこの人しかないと思っただけです。

長尾さんは京都にお住まいで、家族や住居の問題があると聞かれ

たけど、どうしても言ったら、最後はお引き受けしますということになったんです。

○紅谷 長尾さんの人事は極秘裏に進めていましたので、私が京都のご自宅に何度か電話すると奥さんが出られて、宿舎のことなどを話すと、奥さんは必ずしも乗り気じゃなかったようでした。

○河野 確かにそうでした。しかし、長尾さんは全国図書館協会の会長をした経験があったし、何と言っても京都大学の総長だった人が図書館長になるというのは、国会図書館の権威を上げる意味でも相当意味があったと思うんです。

長尾さんは、電子図書館システムの研究者で、国際的にも通用する人でした。国際的なネットワークも彼が作ったし、それなりのことはやられたんじゃないですかね。

○紅谷 長尾さんの学者としての専門分野との関係もあったのでしようけれども、国会図書館と全国の図書館との連携の強化や海外の図書館との交流が盛んになって、非常に貢献されたと聞いています。一方で、やはり国会との関係がなかなか上手くいかなかった面はあったようです。

○河野 本人も苦手で全然やったことがないし、はじめは分からないと言っていましたよ。

○紅谷 当時、河野議長は、国会対応は長尾さんじゃなくて副館長以下がやればいいじゃないかとお話しされていましたが、図書館は国会との関係というのが一番弱くて苦手な部分でしたから、それをカバーしていたのが総経験者の図書館長でした。

自民党が野党になってからですが、図書館の予算を自民党が了承しないので、長尾さんはずっと廊下に立って野党理事を待っているんだと、おっしゃっていたのを思い出しますね。

○河野 長尾さんも、そういうのをやったことがないだろうからね。僕がきちっとフォローしなくちゃいけないかったんだらうけど。

そういう意味では長尾さんはご苦労されたんだらうけど、長尾さんのお人柄は、付き合ってみると非常にざっくばらんでいい人でした。それでいて、きちんとしているところはきちんとしていたからね。

○紅谷 長尾さんが退任された後は、図書館のOB、その後はお茶の水女子大学学長だった羽入佐和子さんが館長になり、今は図書館OBの吉永さんが館長です。私は、吉永館長とは旧知の仲なものですから、ざっくばらんに話を聞いたところ、長尾さんは、図書館行政に精通している上に、極めて常識的な人だったので、図書館にとっては大きなプラスになったと、率直な感想として話してくれました。

○河野 事務局には申し訳ない気持ちもあったけど、そう言ってもらえると判断に間違いは無かったと言ってもいいのだろうか。

○小田〔衆議院事務局〕 議会関係者以外から国立国会図書館長に起用したということで、図書館に対して当期待していた思いは達成されたのでしょうか。

○河野 国会図書館の成り立ちからも、仕事には国会に対するサービスがあるから、国会図書館長はなかなか大変な面があると思うんです。

だけれども、日本の図書館行政で図書館の経験者がトップに座るといえるのは、特に国際的なネットワークということになると適任者もいるだろうと思いますね。だから、そういう人には期待していると思うんです。

長尾さんは、電子化、データベース化して、何語でもアクセスできるということをすごい勢いでやった、ああいう画期的な国会図書館のアプローチの仕方というのは他の人にはなくて、恐らく何年か飛び越えてやったと思うんです。やはりそういうことをできる人がこれから先も出てこなくてはいけない。

そのためには、単に図書館のOBだけではなかなかできないかもしれないから、いろいろな分野の人を探すという努力も一方でしておくことが大事だと思いますね。

図書館は苦勞していると思うけれども、これからも新しい問題にどう対応するかを考えなきゃいけないから、どこにそのスキルを磨く場があるのか分からないけれども、ますますプロが必要になってくると思いますね。

一方で、国会図書館の国会に対するサービスも非常に重要な仕事であることは間違いないから、それをやはり大事にしていかななくてははいけませんね。

## 《相次ぐ総理大臣の交代》

○紅谷 河野先生は議長に再選されて、平成十七年九月から二十一年七月までの四年近くの間、議長を務められました。

この間に、相次いで総理大臣が交代し、四人が総理になりました。最初の小泉総理は、自民党総裁の任期ということで、ほぼ一年で交代されました。安倍総理に替わったのが平成十八年九月でしたが一年で辞任。福田総理は十九年九月から一年。麻生総理は九月から翌年八月の総選挙まで、めまぐるしく総理が替わった四年間でした。

○河野 小泉さんは、自民党総裁の任期を終えたということで退陣して、そこで自民党の総裁選が行われた。この総裁選は、森派には福田さんと安倍さんがいて、加えて麻生さん、谷垣さんがいたけれども、福田さんが争いは好まないということで引いて三人の争いになって、安倍さんが総裁になり安倍内閣の誕生となった。

一年後の参議院選挙では自民党が大敗し、参議院の第一党を民主党に明け渡すという結果になってしまった。国会はねじれ状態にな

ったけど、この参議院選挙の敗北については、総理の責任についての議論はあったけど、中川幹事長と参議院の青木議員会長の二人が辞めて、総理は続投を表明したんです。

○紅谷 参議院選挙後の九月に臨時国会が召集されましたが、大混乱になりました。

召集日に安倍総理が所信の演説を行い、代表質問は一日置いてでしたが、開会直前に大島国対委員長が議長室に飛び込んで、何を言っているのか分からないくらいの慌てよう、総理が辞めると言っているの、本会議を待つてほしいという話でした。

代表質問の本会議という場面で、非常に特異な出来事でしたけれども、当時は思い起こしていただきたいと思えます。

○河野 とにかく、郵政選挙で衆議院は圧倒的多数を持っていて、与党は、何でも自分の提案が通るといような感じで常会を終えて、参議院選挙になりました。

安倍さんは体調が余りよくないとは聞いていたけど、辞めるというのは全然想像もしなかった。国会を召集して、所信表明を終えて代表質問ということで、議運の委員会も終わって本会議のベルを押しただけのところへ、大島さんが入って来ましたよね。

最初は、ベルを押すのはちょっと待ってください、そして本会議の時間を少しずらしてくださいと言うんだよね。どうしてだと言ったら、なにか総理が辞めるとか言っているの、ちょっと待ってくださいと言いなから、あちこち電話をかけたりしてばたばたしていた。

本当に急なことだったから、とにかく何だかよく分からないので官邸へ電話をかけて、どうしたんだと言ったら、総理が辞意を漏らしているから今日の本会議は止めてくださいという話だった。

所信表明をやって、代表質問を受けなくて辞意を漏らすなんて、とんでもない話だと思いました。

所信表明のときには全く普通だったのに、何の予告もなくいきなり辞めるから、本会議はやらないでという話だからね。

とにかく、官邸のわがままというか、小泉さんの郵政解散にしてもこれにしても、全く自分の都合だけで何の事前の予告もなく事態が変わっていったって、正直、立法院は行政府に振り回されたという感じですよ。

だから、立法院の権威が全然ないんですね。それはやはり、立法院の議員にはもう少し自覚してもらわなければいけないし、議長としても何らかの発言とか所作があってもよかったのかもしれないけれども、理由が分からずに辞任すると言うんだからね。

○紅谷 安倍総理の辞任表明というのは、国会が召集されてすぐでしたから、次の総理が選ばれるまで二週間余りの空白ができて、国会は冒頭から何もできないという状況でした。

○河野 思い返すと、橋本内閣のときの参議院選挙でも負けて、責任をとって橋本総理は辞任されたんです。そして安倍内閣でも負けるわけですよ。自民党の政治の足場というのが相当ぐらぐらしていた。言い方を変えれば、政治というものが本当に信頼をされていない状況です。

僕は、議長としても議員としても最後の任期なんだけど、この約四年弱というのは、物すごく政治的な変動期でした。

非常に象徴的なのは、その任期中に後藤田さんが亡くなり、宮沢さんが亡くなり、いわゆる護憲保守の中核の人が次々と亡くなって、個人的に言うくと、私の精神的な支柱みたいなものがぼきぼきと折れ無くなっている時期です。

そういう時期に、総理大臣は次々替わる、閣僚も不祥事で次々と辞めるという全く政治的には安定感を欠いた状況なんです。その象徴が、やはり安倍さんの無責任な辞任という感じで受け取りました。それは確かに病気で、前から薬で抑えておられ過労が重なって急

になんたろうけど、やはり辞め方はよくない。びっくりする辞め方で、しかも辞任の理由も余りはつきりしない。

自民党は圧倒的多数で、政権が替わるといふことはしないにしても、抱えていた政治的な課題はどうするのか、安倍さんは所信表明で、戦後レジームからの脱却という大きな命題を出しておきながら、それをどうするのかということについては何もしないで辞めてしまう。

結果として福田さんが後継になられたけど、相当政治的な主張が違うものだから、安倍さんの提起した問題はほとんど引き継がれないですよ。参議院選で負けているという事もあって、引き継げないという事態ですよ。

安倍さんが辞められたときは既にねじれ国会でしたよ。

○紅谷 参議院選挙でねじれ国会になってはいましたが、まだ安倍総理の時点では政策的な対立の場面はなく、ねじれで苦悩されるのは福田総理からです。

○河野 そうなんだよね。だから福田さんが引き継いだ途端にねじれの問題が出てきて、七転八倒して大連立なんていう話になったんだよね。

小沢さんが民主党の代表で、小沢さんは政権担当の意欲を持って積極的にいるいろいろやるけれど、他の人達はむしろ引いていて、政権に入るよりは、ねじれを活かして自分たちの主張を通し、与党側の主張をブロックするという態度でしたよね。

○紅谷 安倍総理に戻りますけれども、当時の自民党の幹事長は麻生さんでした。

麻生幹事長は、所信演説があった日の役員会が終わった後に、総理から辞意を聞いたとおっしゃっていて、その理由は、安倍総理が、自分には求心力がないと言われたとの報道がありました。

○河野 それがちょっと問題になって、安倍さん周辺からは、麻生にはめられたといううわさが流れて、一時は、安倍、麻生は非常に

険悪になった状況があった。安倍さんは、後で絶対そんなことはなかったと否定されるんだけど、それもあってか、本来なら安倍さんが辞めたら幹事長が後継者になってもおかしくなかったけれども、麻生さんじゃなくて福田さんになるんですよ。

○紅谷 安倍総理の辞任は、自民と民主の国対委員長会談で協力を拒否されたので、辞めることを決意したということで、連立を組んでいた公明党の太田代表も全く知らなかったようです。

○河野 その後に辞任の会見をしているけど、それは辞めるといいう会見で、理由はそのときは余り言っていないけど、後から与謝野官房長官が、体調が悪いようだと行ったんじゃないですかね。本当に、全く突然で、数人の人しか知らなかった。

日頃からの情報交換や付き合いとか事前の根回しなどはよくないことだと言う人はいるけど、やはり円満に運営しようと思うと必要なことだと思いますね。

○紅谷 おっしゃるように、国会運営にあたっては、おのずと手順がありますので、順序立ててやらないとうまく進みませんから、経験を積んだ人の配置が求められると思います。

○河野 これまで多くの場合、田中派、経世会が中心になって国会運営を仕切っていたけど、そういう人、小沢さん達が野党へ出て行ったから、ぎくしゃくしたわけだね。

とにかく安倍さんの辞任には驚かされました。

○紅谷 自民党では、安倍総理辞任後に総裁選挙があって、福田総理になりますが、国会はこの間の二週間余りは開会中にもかかわらず、事実上の機能停止状態でした。議長としては、この状況をどうお感じになっていたのでしようか。

○河野 始まったばかりの国会が、自民党の都合で長期間開けないというのは、決して好ましいことではないですよ。

安倍さんの主張と福田さんの主張とは相当違うのですが、総理大

臣が替わったけど民意は聞いていない。

例えば、福田官房長官時代に、靖国神社に代わるべき施設を造つたらどうかと諮問して、有識者会議が答申を出したけれども、安倍副長官は徹底的に反対なんです。それで、最後は引き出しにしまつたまま今日まで目の目を見ていないんです。

福田さんは、恒久的に問題が処理できればいいという考えを持つておられた。それは福田さんのアジア外交、福田赳夫総理のときの福田ドクトリンというのはアジア外交の基礎ですから、それを継いでいる福田康夫官房長官の思いと、安倍副長官の思いとが全然違う。そんなに主張が違う人が、民意を問うこともなく自民党の都合で総裁選を行って総理が替わる。

ちよつと驚いたのは、安倍さんを総裁に支持した自民党の国会議員が、今度は平気で福田さんを支持する。どっちの主張を支持しているんだと言いたくなるような、百八十度とは言わないまでも、当面の問題で相当違った主張を平気で右から左に変わる。さらに、次は麻生だといってまた変わるわけだから、これでは本当に政権は理解されないかもしれませんね。

国民はただ見ているだけで、何にも自分たちの主張なんて反映されない、そういう立法府になっているんですね。そこが一番、議長として、こんな事でもいいのかなと思っていました。

○紅谷 河野先生は、安倍さんのことは余りよく知らないとおっしゃっていました。福田先生とは懇意で、議長時代にも議長室に訪ねて来られていましたね。

○河野 福田さんとは大学が同窓でした。一年以上で、全然会ったこともなかったけど、早稲田の四年間はほとんど重なっていたらしい。それと、福田赳夫という人も、福田外務大臣不信任案のときに僕は最後まで猛烈にやってえらい叱られたけれども、外務大臣を辞められた後は随分かわいがられたんですよ。

宮沢内閣の官房長官時代に、福田さんが総理を辞めてから、サミットのOBが集まって賢人会議みたいなものをやられた。福田さんはその世話役を担当され、とても熱心にやられたんです。

そのOBサミットが終わって帰ってくる、福田さんの自宅に僕は呼ばれて、国際情勢というか国際社会の流れはこういうふうに流れているように思えるとか、よく聞かされたものです。

そんなことがあって、福田さんとは割と近かったんです。清和会の中でも福田さんの流れというのはちよつと違いましたし、今でも随分違うね。

○紅谷 福田内閣に替わって、ねじれの苦労が始まります。

○河野 福田さんが一番苦勞されたけれど、参議院選挙で負けた直後に福田さんに替わってれば、恐らく、もうちよつと野党と話し合えるような政策を述べていたかもしれません。

それで、小沢一郎さんと大連立構想というのをやって、それがまとまりかけたら、小沢さんの方が党内がまとまらなかったということになるから、更にややこしくなるんですよ。

○紅谷 福田総理時代のねじれでは、ガソリン税やテロ対策補給支援活動特措法、それから同意人事がありました。

○河野 一番考えさせられたのは同意人事でした。

事柄とすれば、ガソリン税や補給支援の法律の方が大問題なんだけれど、同意人事というのは、政権として人選して、本人の承諾をもらって、国会にかけたら否決されるということだから、御本人には物すごく申し訳ないことです。それが二度三度と繰り返されるわけだから。

○紅谷 同意人事は、主要なポストについては、国会に本人が来て所信を述べて質疑を受けるという形に改められました。あのやり方については、当事者をお白州に出して、それで同意しませんでしたとなると、国会がその人の人格を否定したかのように受け取られ

ねませんから、やり方としていかがかという意見がありました。

○河野 全くそういう感じですよ。あのやり方は、アメリカなんかでも、例えば重要な国の大使を任命するときなんかも議会に呼んだりするけど、今言われるように、やはりそれはそれなりのちゃんとしたルールというか節度があつて、出てくる本人は自分の自説をきちんと主張できるし、それに対していろいろ反論があつて議論して、それが否決されたとしても、それは別にその人を否定したということではないということがちゃんと分かっていますけど、日本の場合はそうじゃないんだよね。

○紅谷 最初にノーと言われたのが、この前オリンピックの事務総長をされていた武藤さんで、次が田波さん、大蔵省の事務次官経験者は駄目というような主張が野党から出ていました。

法律案の場合であれば、両院の意思の違いを調整する制度がありますが、同意人事の場合は、かつては会計検査院長等の役職で衆議院の優越規定があつたのを削除したりして、両院が一致しない限りは選任できないというシステムにしてしまいました。

○河野 やり方は複数を提案してどっちかにするとか、いろいろあると思うんですよ。それを、あのやり方をやっているんじゃないともならない。

あの当時は本当に気が重かった。恐らく候補になった人も嫌だったと思いますよ。個人に対しても気の毒だし、ああいうやり方が果たしていいだろうかと誰しも思つたと思います。

○紅谷 そういうこともあつてか、先ほども話がありました、福田総理と民主党の小沢代表との大連立構想が出てきます。

○河野 かつては、大平さんのように政策連合とか部分連合とかいうか、問題ごとに協力しようというやり方があつたし、いろいろなやり方があつたけれど、福田さんはもうそんなことをやっている状況ではなくて、大連立でなきや政治が動かなくなるというので相

当思い詰めていた。あれが駄目だったことで福田政治は瓦解したわけですよ。

○紅谷 大平総理の時は、パーシャル連合と言われていたと思いますが、小選挙区制になって組む相手の政党がなくなりましたから、それができなくなっていました。

○河野 そうですよ。あの政治改革というのは、政治はもつと白黒はつきりさせろということで、日本流のグレイゾーンを持った政治というのには否定的だったのです。

それでも公明党や共産党という従来からの政党の存在感があるのは、やはりそういう政党がないと歯車というのはうまく回らないんですよ。

僕が議員をやっている時代に、政治はもつとスピード感がなきゃいけないとか、権力を集中させないと物事が進まないとかいう議論があつて、なぜか野党が黙っていたんですが、権力を集中してスピード感を持たせたら、独裁みたいなことになっていく可能性は多分にあると僕は思っていたけど、平気でそれが通っていたんだよね。さらに、小選挙区制で白黒はつきりさせろだからね。

○紅谷 福田総理は、ねじれ国会の中、ガソリン税やテロ対策特措法の懸案について、再議決や両院議長のアッセン等で何とか乗り切るのですが、参議院は野党が多数ですから、福田総理の問責決議案が可決されたりして、最後は、御自分でも非常に辛かったというような言い方をされていました。

そして、忘れもしない九月一日、広島でのG8議長サミット前夜祭の時に、福田総理の辞意が伝わってきました。お聞きになったときの感想をお聞かせください。

○河野 G8の議長が、あの福田がと言つてびっくりしていたよね。前の晩は総理官邸と一緒に食事をしたわけだからね。それはとても和やかに食事をして、広島ではいい会議をとか言つて別れて、それ

で次の日に、前夜祭のテーブルに着いたところへ森喜朗さんから電話で第一報があつて、福田さんが辞めるという記者会見すると。ええと言つて本当に驚いた記憶があります。なぜという感じで、理由がよく呑み込めなかったですね。

確かに、本当に気の毒なほど苦労していたからね。それでも、一人で苦労しているんじゃないかと、自民党みんな苦労しているんだからと思つたけれども、やはり抱え込んでいたんですね。

福田総理の会見では、安倍さんは健康問題で辞めたけれども、自分はこのからの政治を考えた上で決断したと言われてたけど、まあ、福田さんらしい精一杯の皮肉だね。

○紅谷 これで翌日の朝刊の一面から、広島でのG8議長会議開催が消えてしまいました。

○河野 完全になくなって、本当にあれは残念だったね。あそこまで随分みんなが苦労して、うまくいったと思つたんだけどまあ。○紅谷 当時は、安倍総理、福田総理と二代連続で政権の投げ出しというような言い方をされ、政治不信を助長するような辞め方が続きました。

○河野 そうですね。政権の投げ出しといえれば投げ出しだし、次の政権も民意を問わずに総理になるから、それがほぼ一年交替で総理が替わるし、閣僚も随分替わつたよね。

やはり総理のなり方がああいふ慌ただしいなり方、それから首班は総裁選で決まるから、選挙の論功行賞みたいなものも多少あったかもしれない。だから、やはり人選なんかでもちよつと違うと思うんですよ。

国民がつくっている政治基盤というものがもう本当に緩んで、政治に対する信頼が無くなるから、政治はぐちゃぐちゃだったんですよ。総理だけじゃなくて閣僚もそうだったからね。

日本がそんなことをしている間に世界は相当動いて、例えば、胡



錦濤が初めてアメリカのワシントンに公式訪問してブッシュ・胡錦濤会談。そうかと思うと、そのすぐ後で、北朝鮮の核実験がある。だから、日本がそんなことをやっている間の二〇〇八年前後というのは、世界は相当変革期というか変動期でしたね。

○森元〔衆議院事務局〕 その後の総裁選ですが、麻生さんが立候補されて、ほかに四人の候補者、与謝野さん、石原さん、小池さん、石破さんが立候補されましたが、この総裁選を、どう見ていらしたのでしょうか。

○河野 本命不在の総裁選、やや麻生有力ではあったけれども、みんながチャレンジしてもおかしくない総裁選ですよ。

何度も言うように、自民党の中の秩序というか党としての筋みたいなものが歪んで、著しく政治とか政権に対する信頼とか尊敬とかが、非常に重要なものだという認識がだんだん薄れてきていた。

これまでは、良い悪いは別として後継者がいつもいて、麻垣康三だとか、安竹宮とか、その前は三角大福中というふうに、党内でこの人たちが総裁になっていいと絞られて総裁選は争われていたけど、この頃から、次はこういう人がいいんじゃないかとは関係なく、私が一番いいんだと自分が思えば出るというふうになったんだね。

もちろん、それぞれの分野で正しい主張をしておられたし、それなりの政治的な実績もあったことは間違いないけど、全体をまとめてリーダーとしてふさわしいかどうかということになると、それはやはり個人個人の主張では駄目で、そこに選挙の意味があるわけですからね。だから、チャレンジされることはいいと思うけど、多くの人たちが認めるというのが大事だと思います。

○紅谷 四人の候補者では、麻生さんを除いては、派閥のリーダーではなかったこともあり、圧倒的な大差で麻生さんが総裁に選出されました。

○河野 派閥がだんだん自信を失ってきて、リーダーを出すという

ような集団でもないし、派閥のリーダー自身がトップを目指すという意思を持っていない。だから、もう誰でもいいみたいなことになってきたんでしょうね。

自民党の歴史は良くも悪くも派閥があつて、派閥がいいという時代もあるし駄目だと言っている時代もあるけど、派閥が重要で有効に働いている時代もある。一方で、弊害が出て自民党の人气が下がって派閥はやめようと言いつつ時期もある。最近では、派閥に群れようというのが増えてきているね。いいか悪いかはいろいろ議論があるけれど、それは時の流行みたいなものがあるね。

○紅谷 かつての派閥には政策を基本とした軸があつたと思いますが、今は派閥による主張の色分けができなくなつて、何を中心に集まっているのかわからないと言われていきます。

○河野 そうです。今はもう全然ないけれど、なかなか自民党の派閥というのはうまくできていましたよ。

自民党の政治というのは、一時は大蔵省が自民党政治をやっていたような時代もあつて、予算の配分権を持っていると一番強くて、とにかく予算が付くか付かないか、その前は、減税をしてもらえらるかどうかが、減税に対する陳情が非常に多かった時代もあるんです。それが選挙のプラスになつていた時代があつたからです。

そこで、今度は業界団体をまとめる。そして、それが自民党の政策に非常に影響を及ぼすなど、いろいろなやり方が繰り返されてきた。

○紅谷 麻生総理は平成二十年九月に総理に就任されますが、もうこの頃は、自民党内からも早期解散を望む声が強かったですし、野党は、速やかな解散・総選挙を要求していた時期でした。麻生総理は、十月には解散というシナリオで進んでいたようでしたが、その後すぐにリーマン・ショックがあつてタイミングを失くしたと言われました。

○河野 そうそう、選挙管理内閣じゃないかとまで言われたけど、それどころじゃなくなってしまつて、その後も年末年始の解散という話もあったけど、その頃はもう支持率がかなり落ちて解散ができないで、任期いっぱいになったよね。

やはり、これも安倍政権下の参議院選の大敗というのが利いていて、自民党は選挙に自信がないから、できればやりたくないという気分もあったんですよ。野党は、参議院で勝ったから本気で選挙をやれと言っていたけど、社会党はずっと落ち目だし、民主党の中も相当複雑だったと思うね。

麻生総理も、解散前に党役員を替えて選挙に臨もうとしたけど、それもできず、最後は麻生降ろしみたいな話まで出てきて、もうあの頃は自民党にまったく軸がなかったですね。

僕は解散になったらそこで辞めるつもりでしたが、結局は完全に追い込まれて解散せざるを得なくなつてしまつたから、選挙は最悪の状況でやつて、誰もが落ちると心配していました。

### 《ねじれ国会における国会運営の在り方》

○紅谷 四年間で四人の総理が替わるという異常な政治状況の中で、国会運営の舵取りを担われた河野議長のご苦労を、お聞きしたいと思います。

平成十九年の参議院選挙で、自民党は大敗して野党の民主党が第一党になり、衆参で多数党が異なるいわゆるねじれ国会となります。ねじれ国会というのは、このときが初めてではなく、最初のねじれ国会は、平成元年に土井たか子社会党委員長が、山が動いたと言われた参議院選挙で、自民党が過半数に届かず、そのときに朝日新聞が使った、ねじれ国会という用語が、その後一般的になりました。

海部内閣の時代で、消費税やリクルート問題があつて自民党が逆風の頃でしたが、消費税もリクルート問題も、いわゆるパーシタル連合、自公民路線で乗り切つたというのがこの平成元年の国会でした。

その次が、平成十年の橋本総理の下での参議院選挙で、橋本総理と山崎政調会長の減税発言の不一致で自民党が大敗して、参議院が少数になりました。橋本総理が辞めて小淵総理に替わり、金融国会と言われたときですが、野党の法案を丸呑みして乗り切りました。その後は、ねじれ解消のために、自自連立、さらには自自公連立になつていったというのが過去のねじれでした。

○河野 僕の経験からいうと、自民党はこれまでも非常に低空飛行をしていたんですよ。一番与野党が接近したのは大平内閣のときです。大平内閣でもぎりぎりのところまで行つたけれど、なんとか過半数は持つていました。

大平さんという人は非常に謙虚で低姿勢で、野党の言い分を取り入れながらやる。しかも、田中派が国会対策を担当していたから、そこは上手に乗り切つていったわけです。

あの頃から大平さんは、地方議会なんかはみんな連合政治になつているよ、もう日本の政治の流れはそっちに向かっていると盛んに言つて、それが新自由クラブに伝わって色々と話合いなどして、非常に接近したんです。大平さんは実に上手にやられて乗り切りました。

その次は中曽根内閣で、選挙では無所属を入れて辛うじて過半数。新自由クラブと連立を組むことで辛うじて助かるというような低空飛行です。

自民党は、その頃から国民の支持は下がり続けて、せいぜい四割ぐらいしかない。そういう低空飛行をしながらも、国会対策なんかで乗り切つたけれども、もうそれができなくなつて、こういう事態

になるんですね。

竹下内閣もリクルート事件で潰れたときに、竹下派には後継者が全くなくなつて、何とか後をやつてくれと頼んだのは伊東正義さんと坂田道太さんですが、この二人に断られた結果、宇野宗佑さんになるわけです。しかし、宇野内閣は二月余りで潰れて海部内閣になった。

もう自民党というのは、宇野さんに替わつた瞬間に、総理大臣候補として誰もが認めるような人はなくなつたんです。海部内閣も、実質は金丸さんの独裁で権力の二重構造になつていたので、海部さんには解散権も何もない。海部さん自身の人気はあつたけど、その直前の宇野内閣の時の参議院選挙に負けて、衆参がねじれになっていました。

それで、決定的なねじれ解消は保守連合じゃなくて、保守連合とどうか対立する相手との連立をどうするかということになつていました。

昭和四十年代の後半から、自民党政治というのは、社会党の主張を相当取り入れて続いていたんです。そこは、社会党も国会対策がきちつとしていたから、主張は主張として呑ませ、野党としての立場で歯止めをかけるということができていたけど、自民党もだんだんわがままになつて、社会党的な政策を、特に外交とかは完全に拒否してタカ派的な主張がどんどん入ってくるから、やはり限界に来ていたんでしょうね。

○紅谷 今のお話以外にも、政治改革法案の際も、衆参の意思の違いがあつて、その片方に河野先生がいらつしやいましたので、ねじれの場面に随分関わつてこられたと思います。河野議長時代のねじれは、どういうふうに臨んでいこうと思つていらしたのでしょうか。

○河野 あのとときは、参議院が江田議長になつて、江田さんとなら

話ができるんじゃないか、江田さんと話をして、衆議院で示される民意と参議院で示される民意がそんなに違うことはないよねと随分話をして、江田さんは非常に常識的な人でしたから分かつてくれたけど、なかなか民主党が強かつたね。

民主党は鳩山さんが幹事長で、衆議院ではおとなしいけれど、参議院へ行くと過激な発言をするものだから、なかなかうまくいかない。小沢さんが後ろにいて、山岡国対委員長がとにかく挑発的な発言をするから、自民党もそうそう下がつていられないということでした。

自民党は伊吹幹事長が非常に理論派で、はっきりとした理論を展開されるから、それはそれでなかなか妥協が難しく、大島国対委員長が一人で苦労していましたよね。

○紅谷 おつしやるとおり、衆参の議長が話し合われて、両院議長のあつせんという形になるのは、やはり一つは、江田さんが参議院議長で、河野議長とは昔から関係がよかつたということ。もう一つは、衆議院が横路副議長で非常に協力的でしたので、衆参のトップの関係が非常によかつたのが大きな利点だつたかと思ひます。

○河野 そうでした。  
横路さんは社会党出身だつたけど、北海道知事なんかをやられて、最後は落とすところを考えなきゃいけないと分かつていてくれたから話は分かつてくれたけど、それを民主党に呑ませるのは、なかなか簡単にいかないところがありましたね。

もちろん、自民党の中にも不満はあつただろうけど、それは大島さんが大体ならしてくれていましたね。

○紅谷 ねじれ国会を経験されて、衆議院と参議院の意思の違いを克服するにはどうすればいいと感じられたでしょうか。

○河野 予算や条約のような優越規定が、法律や同意人事で新たに制定することが見込まれない以上、話し合いをしていくしかない。今

回も参議院議長の江田さんとは、衆議院の意思も民意、参議院の意思も民意、そうは言っても民意は一つなんだから、我々もよく話し合おうということになったんです。

○紅谷 話合いというのは修正協議もそうですし、両院協議会もそういう場です。再議決というのは、話合いが決裂した時の最終手段ということですね。

### 《ガソリン国会における両院議長あっせん》

○紅谷 衆参のねじれ解消というのは、根本的な解決は選挙でしょうが、それまでの間の対応策としては、政策ごとの合意や連立を組むことで今までは乗り切ってきました。

今回のねじれについて、福田総理は、民主党との大連立を組むことで解決しようとしたが失敗で、いよいよ本格的なねじれ国会のスタートになります。

ガソリン国会と言われる平成二十年の常会前の秋の臨時国会では、いわゆるテロ対策特別措置法で、五十七年ぶりに参議院で否決した法律案の再議決が行われました。

再議決は、両院の意思が異なる中で法案を成立させるための方策ですが、対立の深まりに加えて、衆議院の議決から参議院の否決までに六十日間必要ですから、国会の会期の長期化が伴います。

ガソリン国会が始まる常会は一月十八日召集ですが、その前の臨時会は、テロ対策特措法が前年の十一月に衆議院で可決され、会期延長した翌年の一月十一日によく再可決して成立しました。

○河野 これは、国会法が改正されて、常会の召集が十二月から一月になったから可能になったんですね。

○紅谷 そうです。平成四年に十二月召集から一月召集に変わりました。

した。政治改革法の際は、成立が平成六年一月二十九日で、法案の継続を考慮した最大限の延長で、常会は一空けて一月三十一日の召集でした。

○河野 話に戻るけれども、ねじれ状態は安倍さんから福田さんに政権が渡ったその日からで、福田さんはそれで頭がいつぱいという感じだった。福田政権の発足は開会中だったから、大臣は問題のある人は替わったけれども、あとは安倍内閣から全部引き継いだんですね。

民主党はかさにかかってきているから、連立の話をしても対等の話にならないようでした。それがうまくいかなかった最大の理由だろうと思います。

○紅谷 福田総理は、臨時会を再議決等で乗り切り、常会は一月十八日に召集されました。民主党はこの国会をガソリン値下げ国会と命名して、与野党の対立が鮮明になりました。衆議院選挙から二年を経過していましたので、選挙を視野に入れた国会だったかと思えます。

○河野 小沢一郎さんは、ガソリンの値下げで勝負するというのが一番選挙で有利だということが分かっているから、ガソリン値下げ国会と命名して、ガソリンを値下げすることで国民にアピールしようという構想でした。一方、与党にしてみれば、ここで下げたら長期的な道路整備計画は全く白紙になるし、責任上、一旦値段が下がってもまた上げざるを得ないから、それで評判がすごく悪くなることは明らかなんだよね。

○紅谷 お話のとおり、ガソリンは一旦は値下がりますが、元に戻すのは間違いないわけで、国民生活が非常に混乱することが懸念されました。そういう状況の中、一月二十一日に、突然、自民党の伊吹幹事長と大島国対委員長が河野議長を議長公邸に訪ねて来られました。いわゆるつなぎ法案を出すという話で、三月三十一日で暫

定税率の期限が切れるので、つなぎ法案を出して一月中に通して、三月の年度末に再議決をして暫定税率を維持し、混乱を防ごうという内容でした。

まず、この話を聞かれたときの感想をお聞かせください。

○河野 これは印象的で、よく覚えていますよ。伊吹さんが与党幹事長としての責任を感じておられることはよく分かるけれど、つなぎ法案というのは与党に都合のいい法案ですから、このまま通るとは到底思えなかつたです。

確かに、ガソリンの値段が下がるというのはすごく耳触りがよく、与党の言う将来の計画、そして財源をどうするのかをよくよく考えれば簡単ではないというのは分かるけど、取りあえずガソリンが安くなるというので、支持は野党へ流れますよね。

与党の幹事長としては、そんなことになっては大変で、とんでもないことになるという責任感からだろうけれども、何とひとつ参議院選挙で大負けした後で、僕はこれは難しいと思って、現実問題としてそのとおりにいかどうか分からないから、大島国対委員長にそこは目くばせはしていたんですね。

○紅谷 法案は税率の期限を単純延長するという内容ですから、与党が力づくでいけば可能ですが、常会の入口で予算の審査に入る前ですから、大混乱が予想されました。

この話があつた後の河野議長の動きは本当に早く、その日のうちに江田参議院議長に話をされ、翌日に衆参の正副議長の会談が行われました。

○河野 僕は、これは大混乱になるだろうと思つたんです。ただ、人の配置がとてよくて、参議院は江田議長で、衆議院は横路副議長だったから、割と話ができる人でした。

ところが、二人とも野党の中での立場がなかなか難しく、かえつてあの人たちは板挟みになつて御苦労をかけるかも分からないと思

いましたね。

だけれども、江田さんはとても真面目に受け止めてくれて、よく分かりますと言つてくれたんです。

○紅谷 江田議長とは、ねじれ国会の運営の在り方ということで話されましたが、伊吹幹事長が来られたその日のうちにつなぎ法案の話をされることは、私は、この段階で与党の手の内を明かしているのか、フライングじゃないかなと思ひながらその場にいましたが、そこはやはり信頼関係だったのでしょうか。

○河野 そうです。

とにかくねじれ状態ですから、野党の理解を得られなかったら何もできないから、野党に内緒で物事を進めようたつて進まないし、ちゃんと話をして、江田さんぐらいがそうだなと言わないものだから、全然話にならないと思つたんです。江田さんは、事柄はよく分かるけど難しいという反応でした。

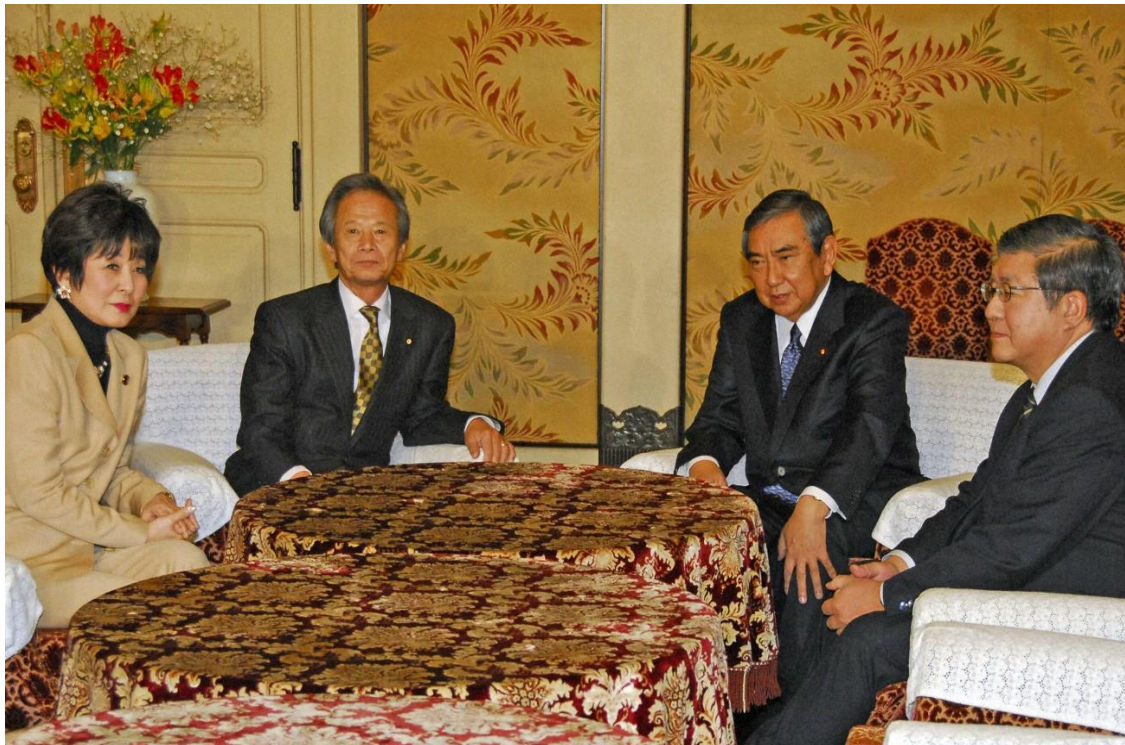
○紅谷 民主党は、小沢代表、鳩山幹事長という体制で、そこを説得できるかどうかでした。

○河野 それはなかなか難しいよね。代表と幹事長との間の意思疎通も簡単にいかないわけだからね。

民主党の中はネットワークがばらばらで、どこか話をすれば上手くいくのかよく分からなくて、鳩山幹事長が引き受けていっても駄目になるような党の組織だったから、なかなか難しかったですね。

とにかく、これは議長としてのあつせんというか調停になるだろうと最初から思つていたので、あらかじめいろいろな根回しというか、地均ししておく作業はしておかなければいけないと思つたから、事前にある程度話しておこうということだったんです。

○紅谷 そうしているうちに、与党は財務金融委員会と総務委員会をつなぎ法案を可決させます。ですから、ここで与党の強硬な方針が表に出てきて、いよいよ議長の出番となりますが、それは本会議



(提供:毎日新聞社)

が開かれるまでの間ですから、時間がありませんでした。

○河野 ここでにっちもさっちもいなくなつたので、いろいろ紆余曲折はあつたけれども、一月三十日に議長あつせんを出したんです。

あつせんは三項目あつて、一項目めは総予算と歳入法案については、公聴会とか参考人質疑を含む徹底した審議で、年度内に一定の結論を得るものとする、ということでした。

この一定の結論というフレーズがちよつと曖昧というか、野党側にしてみるとそれは別の解釈ができるから、もっと一定の結論というものの定義をはっきりさせておけばよかつたんだけれども、余りはっきりさせると合意ができないから曖昧な部分を残したんだ。

○紅谷 後から江田議長もおっしゃっています、一定の結論というのは、採決ということでしょうけれども、結論を得るではなく、結論を得るものとするという表現にしました。

二項目めは、合意されたものについては修正協議を行うということでしたが、結局何も行われませんでした。

三項目めは、つなぎ法案を取り下げるので、これは翌日の委員会で撤回されました。

あつせんは三項目でしたが、これ以外に、先ほどお話があつた「年度内に一定の結論を得るといふのは、衆参両院で総予算及び歳入法案の従来の審査の慣例に従う趣旨」という口頭発言があり、これも含めての合意でした。

ですから、これがよく理解されなかつたのでしようが、だからこそ議長あつせんになったのかと思います。

○河野 そうですよ。

後からこれが問題になってくるけれど、一応あつせんをしたから国会審議が回り始めたからね。

○紅谷 翌日から予算委員会の審査も始まっていきました。

与野党が議長あつせんを受け入れましたが、そのときは、うまくいったと思われたのか、この先まだ不安だと思われたのか、どういう心境だったのでしょうか。

○河野 とにかく、民主党の中がちゃんとまとまってくれればいいなという思いでした。それから、自民党の中ももう少し熱心に話合いに臨んでくれればいいなと思っていて、ちょっと不安は感じていました。感じていたけれども、とにかくあつせんでき意をしたから、これでいいのかと思っていたら、何かぐずぐず言い続けたんですね。

○紅谷 議長あつせんの合意事項である修正協議が、全く進まないうちに二月二十九日になりました。

議長あつせんにある「総予算については年度内に一定の結論を得るものとする」、それに加えて「衆参両院で総予算については従来の審査の慣例に従う」とありますが、それは、予算が年度内の三月三十一日までに成立するというところで、そのための衆議院議決のタイムリミットが二月二十九日でした。

ですから、与党からすると、議長あつせんを担保するには二月二十九日に採決するしかないということでした。共産党はそれを理解していて、総予算の本会議採決に出席しました。

○河野 民主党は、その本会議がけしからぬということで、参議院の予算委員会がずっと空転したんですね。

議長あつせんをちゃんと理解できていなかったんだよね。野党は反発して、議長あつせんはもう反故になったと主張して、江田君までもが、年度内の採決はもう確約できないと言いつつ出た。

彼の立場からいうと、ああ言わざるを得なかったのかもしれないけど、あれは両院議長のあつせんだからね。

○紅谷 予算の採決や修正の協議に応じないとか、議長あつせんを守らないような動きが随分出ました。江田議長の発言も含めて、ど

ういうふうに感じていらしたのでしょうか。

○河野 江田議長にはもうちょっと頑張ってほしいと思いましたが、彼を支えてくれる母体が民主党内にもう少しあると思っていたんだけど、やはり民主党の中がとて難しい状況で、小沢さんたちは自分の思惑で動くから、参議院の議運、国対は議長を支えていないねあの頃の民主党の国対委員長が発言は大変だった。

○紅谷 衆議院の民主党の国対委員長が、自分は参議院も含めた国対委員長だと言っていて、みんな啞然としていました。

○小田〔衆議院事務局〕 ねじれ国会の下でのあつせんは大変厳しい局面だったと思いますが、この中で特に譲れなかったことと、あるいは譲ったことなどがありましたらお聞かせ願いたいと思います。

○河野 国会というのは、本来、話合いで合意を求めて進んでいく、あくまで話し合っていくべきです。

何か言ってくるたびに、もう一回話し合え、さらに話し合えと何度も何度も私は言ったけれど、だんだんかたくなになって話合いができなくなりましたね。一番難しかったのはそこです。

衆議院では僕ができるけれども、院をまたいで参議院の話まで僕が口を出すわけにはいかないから、そこはなかなか難しかったですね。だから、江田さんがとても大変だったろうと思いますね。

○紅谷 常会の入口の段階での議長あつせんで、法案の中身について事細かく言うわけにはいきませんので、包括的に、しかし、この国会の先までを見据えてのあつせんでした。

出口であれば、議長が、こうしなさいと言って、議長裁定でよかったかもしれないが、入口でしたから、議長あつせんに至るまでに、与野党の幹事長、国対委員長とどれだけ話したか分かりませんでしたね。

○河野 お正月早々から始めて、ずっと三月までだから、幹事長同士、国対委員長同士、政調会長同士でも話し合えと随分言ったけど、

年度末になっても参議院は予算が採決されない、歳入法案については全く手つかずだった。

○紅谷 議長あつせんは、もうほとんど反故にされたというような状況の中で、福田総理は三月二十七日に道路特定財源を廃止して一般財源とすると表明されました。

○河野 福田さんは随分譲ったんだよね。道路特定財源は、田中角栄さんが作って、自民党がずっと延々と守ってきた制度だから、自民党の中は大ブーイングだったわけですよ。総理がこの発言をして、民主党は、ガソリンの暫定税率が撤廃されたわけじゃないと言って、態度が変わらなかつたんだよね。

○紅谷 年度末になって、議長がもう一度動かれることになります。今度は、日切れ法案の具体的な取扱いになるものですから、議長があつせんだの裁定だのというわけにもいきませんので、議長は間を取り持つような形で動かれることになります。

○河野 そうそう、与野党の幹事長や国対委員長で話をしなさいよという場を設けて、道路以外の税法については年度末に処理することになったよね。僕は前の国会で、野党から議長不信任案を出されたけれど、そういう議長が、一年もたたないうちに、あつせんをやるわけだよ。

○紅谷 河野議長が取り持った与野党合意は、道路特定財源に関するもの以外の国民生活に関係する年度末の処理案件でした。

○河野 これは、議長が場を作らないと、野党も賛成なのに通さないうのがたくさんあつたんですよ。だから、とにかく場を作って、整理をして、巻き込まれて潰されそうなものを全部通したということでした。

でも、ガソリンだけは駄目だった。

○紅谷 四月一日にガソリンの暫定税率が失効するというので、年度末から街中のガソリンスタンドは大混乱になりました。

○河野 一か所が下げると、そこへ全部殺到しちゃうからね。

しかも、下げるだけ下げても、五月一日にはまた値上げになるから、四月中のガソリンスタンドは大行列だったよね。

こういう混乱を避けたかったというのが、伊吹幹事長は与野の責任としてあつたし、それから、やはり田中角栄さんが道路特定財源の制度を、大蔵省を始め各省を相手に言わば一人で議員立法を作った制度化したわけだからね。

○紅谷 この議員立法の国会答弁は、田中先生が一手に引き受けて行っていたと聞いています。

○河野 一人で全部やつたんだ、すごいよね。

自民党の中ではその話がずっと伝わってきているから、幹事長は潰したら大変だと思つただろうね。

○紅谷 与野が予算と歳入法案を野党反対の中で採決したので、民主党が反発して議長あつせんを反故にする動きになりました。

○河野 最大の問題はここの判断で、その後の大混乱の本会議に繋がっていくわけですよ。

○紅谷 四月三十日に、歳入法案の地方税三法と国税二法を二月二十九日に衆議院で議決してから六十日が経過したので、衆議院がみなし否決をして再議決をするという本会議です。

それを阻止しようということで、民主党議員などが議場の周りに大挙して、河野議長の本会議場への入場を阻止しようとして大混乱になりました。

当時を振り返って、議長時代六年間の中でも忘れられない出来事だったと思いますけれども、感想をお聞かせください。

○河野 むちゃくちゃだったよね。

本会議場へは、いつもの議長応接室からは全く入れない。議長室の方からも出られない。議長次室の方は民主党の議員でいっぱいで大混乱していたので、全く身動きが取れなかった。



○紅谷 予想された事態ではあり、前日に、どうしたら本会議場に入れるかということいろいろ方策を練りましたが、議長の本会議場への入場ですから、奇策を取るわけにもいきませんでした。

○河野 そうでしたよね。屋根の上を跳んで歩くわけにもいかなかったけれど、院内というのは昔から構造は全然変わっていないし、ドアの場所だって昔のままですよ。

僕は先輩から話を聞いていたんですよ。昭和二十年代に、大蔵委員会を第十委員会ですっていただけ、おまえ、あそこはドアが一つしかないから、揉めたら絶対入れないし、出られないから、絶対使っちゃ駄目だと言われた。

○紅谷 当時は議事堂分館はなく、委員室は院内だけで。大蔵委員会が使っていたのは三階のエレベーター横の、今の第五委員室です。

○河野 僕も大蔵委員だったことがあるから、ああ、これだなと思えましたよ。後ろからしか出入りできないから、強行採決をやったら委員長が逃げ出すドアがない。

○紅谷 今でこそ、分館がありますが、院内の三階は全部委員室でした。政党が控室を欲しいと言うので今は政党の控室になっています。今の自民党や維新、共産党の控室、あそこも委員室でした。

○河野 今の人は知らないだろうけど、第一委員室からずっと横の委員会の部屋はドアで繋がっているんですよ。議長室もそうで、結局、事務総長室から議運委員長室へ抜けて出たんだったよね。

議運の委員長室から出て、そこも民主党の議員はいて、ちよつと顔を出したら、あつちだあつちだつて言われて、こりやいかぬと思つていたら、タックルしてきた議員がいて、その後、議運の筆頭だった川端さんに連れられてお詫びに来たよね。

○紅谷 大混乱の国会でしたが、ねじれの状況を何とか話合い、話し合いというのは議長があつてんで乗り越えようということで、一旦は合意しましたが、各党の思惑が前面に出てしまいました。



(提供：毎日新聞社)

○河野 とにかく、この国会が一番大変な国会でしたね。

伊吹さんと大島さんが来られた一月から、議長あつてんでなきや通らないと思つていたんだよね。

僕にしてみれば、さっき言ったように、やはりあの惨敗した参議院選挙がちゃんと総括されていないところが一番問題で、あ

れを総括して自民党が反省すべきところは反省し、野党も、そういうことならこうだということになっていけば、話合いも少しは違っていたと思うんです。ただ、今言われるように、衆議院選挙も近い状況で思惑が働いて、どうしようもなかったね。

○紅谷 その後の選挙では、ガソリンの暫定税率を下げるというのが民主党のマニフェストでした。

○河野 選挙で民主党が勝って政権交代し、暫定税率は撤廃したけど、本則で上げることにしたから、ガソリンの値段は全く下がることとはなく、恒久的に上がったままだったよね。だから、このときの民主党の対応が選挙向けだったと言われてもやむを得ないだろうね。僕が議長をやっている、この問題と、もう一つは議員年金、あれだって、小泉さんが口を挟まなければもつといい解決になっていたと思うから、この二つの問題が心残りですね。

### 《被爆地広島においてG8下院議長会議を開催》

○紅谷 G8下院議長会議は、平成十四年に始まり日本での開催は平成二十年と決定していました。

日本での会議をどうするかについては、国際部を中心にいろいろ案を出しましたが、それまでのアメリカやイギリスは、議長の出身地での開催でしたので、国際部は、議長の地元の小田原に近い横浜や、一番簡単なのは東京ですが、京都も腹案で河野議長に話したのですが、議長から出されたのは広島でした。

広島と決められたのは、いつなのか。また、広島開催の思いというか狙いがあったと思いますので、そこら辺をお聞かせください。

○河野 議長会議をどこでやりますか、どうしますかと言われるけれども、開催場所を決めるのは、必ずしもその時に僕が議長でいる

かどうか分からない段階で、決めていいのか若干躊躇したけれども、日本でサミットの年にやるわけだから、サミットの開催地とも関係してくる。

はじめは、東京か京都でどうかという話でしたが、東京や京都というのは開催地としては何の主張もない。やる以上は何か主張があった方がいいと思っただけで、それなら核廃絶、軍縮をテーマに広島でやろうという話をしました。

しかし、議長会議の過去の経緯を見ると、軍縮とか核廃絶とかという政策をテーマにはしていないんですね。なるべく当たり障りのないテーマ、日本の前のドイツは危機管理、危機のときに国会はどうするかとか、議会の役割の強化をどうするか、そういう何かぼわつとした大きなテーマで、余り具体的な、特に政策上のテーマというのは、これをやったらイギリスは絶対乗ってこないとか、どこが駄目だとかということ、それは非常に難しいかもしれないということでした。

○紅谷 イギリスは、具体的な政策テーマについては、議長自身の意見は述べないということでした。

○河野 イギリスは一切言わないという前提だったからね。

しかし、平和ということについてはみんな意見は当然あるわけで、それで、サミットが北海道で環境問題、今になってみれば大変大きなテーマだけれども、あの頃では随分地味ですよ。サミットが北海道で環境問題なら、議長会議は広島で平和、軍縮問題をやろうと考えたんです。

それは、元をただせば、私がそれまでの四十年の議員生活で、この問題が政治家としての最大のテーマでした。最後は日本の国会議員として、この問題でどうしてもやりたいのと、G8各国の議会トップを広島に是非招きたいという思いがあったものだから、これはチャンスだ、このチャンスを使わない手はないと思うようになって、

僕が決めてしまえば、僕が議長じゃなくても広島でやることになるのだと思って言ったんです。どうなるかわからない状況下で、とにかく事務局はすぐよくやってくれました。

○紅谷 河野議長の広島開催への各国の根回しは、前年のベルリンでの会議で、いろいろ経緯があつて一泊二日の強行日程で行きました。翌年の会議の根回しのために行かれたようなもので、テーマは平和と軍縮を一つのテーマにしますよ、場所は広島で、時期は九月初旬という提案をされて、皆さん異存はなかったのですが、いかにせん、米国のペロシ議長が、ちょうど大統領選挙と重なる時期でしたから、そこが非常に気がかりだったのではないかと思います。

○河野 広島で軍縮をテーマにして、アメリカが欠席だったら意味のないものになってしまふので、ペロシ議長だけは来てほしいと思つて随分この根回しを丁寧をやったんです。ドイツの議長からは、アメリカは必ずドタキャンがあるから最後まで念押しはやらなきゃ駄目だよと繰り返し言われて、直接間接にもペロシさんに話をして、彼女は必ず行くと言つていたけれど、広島での会議の前々日に大統領選挙の民主党大会があつて、その初日に彼女が演説するということになつて、駄目かなと思つて、あらためて大丈夫かと言つたら、大丈夫だと言つていた。

○紅谷 ペロシ議長は、民主党の大統領候補を宣言するのが私の役目だと言つていました。

○河野 あの時、ペロシ議長は私がヒラリー・クリントンと言いますればいいんだからと言つていたんですよ。ところが、大統領候補の指名選が始まってみたら、クリントンじゃなくてオバマになつたんです。

それでまた、オバマと言えばそれで済むから大丈夫と言つて、その後議員の葬式に行くことになつたんです。結局、専用機だからぎりぎり間に合つたんですね。

○紅谷 広島に決まつてからも、お話のようにペロシ議長の出席の問題と、国内的にはひよつとすると、解散があるのではないかと、う不安がずつとあつたと思います。

○河野 それはそのとおりで、もしかしたら駄目かもしれないと思ひながらやつていましたね。

だけれども、まさか会議の前日に福田総理が辞めると言うとは思わなかつた。福田総理がもう一日でも二日でも我慢してくれば広島大会はもつと成功だったんだけれどもね。

○紅谷 広島に来ていた新聞記者が、あつという間にいなくなつて、会議当日の朝刊の一面が全く変わつてしまいましたからね。

○河野 あれはちよつと残念だったけれども仕方がない。

前日の夕食会で、席に着いているところへ森喜朗さんから電話があつて、福田さんが辞めると言つていて、これから記者会見だと言われて驚いた。隣にペロシさんが座つていたから、電話を切つて福田が辞めると言つたら、あの福田と言うから、そう、あの福田と。何でと言うけど、もう説明のしようがないよね。

○紅谷 広島での開催が決まつてから、スケジュールを含め、河野議長ご自身が何度か広島に行かれて随分力を入られていました。会場やホテルの選定、歓迎行事、さらには政府専用機の使用についても手配されました。

○河野 広島からこれを是非と言われて、ちよつと詰め込み過ぎだったけど、地元の立場もあるからね。

政府専用機は、とにかくみんなが一緒に乗ることが大事だからと、大きい専用機に乗つて、どういう座り方をするかなんというのはいくら決めなかつたら、もう自然にばたばたと座つて、いい感じで座りましたよ。広島の飛行場からホテルまでも一緒にバスに乗つて、とてもいい雰囲気でしたね。

○紅谷 政府専用機は議長も使えることになつていますが、使

ったことがなかったものですから、私も同乗させてもらって、いい経験でした。

○河野 僕が福田さんに夕食会をお願いしたら、九月一日は防災の日で、どこかへ行っているからできないと最初は言っていたけど、途中から何とかするといい、考えてみればあの辺からちよつと怪しかったのかも分からないな。それで総理公邸の日本間で和食、いい感じだったんだよね。

翌日は、明治記念館でお昼を食べて、それから宮中へ行って陛下のお茶会をしていただいて、その後専用機で広島へ行ったから、相だな詰め込みでしたね。

○紅谷 会議当日の九月二日は、会議に先立って、原爆死没者慰霊碑で献花を行った後、平和記念資料館の視察を行いました。慰霊碑の献花では、G8議長が手を繋いで献花に向かうという感動的な出来事がありました、そのときの感想をお聞きしたいと思います。

○河野 こういうメンバーが広島に行ったということ、僕を除けばEUを入れ外国から八人が来たけれど、広島に来たことがあるのはイタリアの議長だけでした。それだけに関心も高かったし、見たり聞いたりして受けたショックが物すごく大きかったようでした。

僕は、かねてから、核軍縮とか核廃絶、非核運動をずっとやってきて、どうしても各国の指導者に広島、長崎に来て自分の目で見たいという気持ちで非常に強くあつて、来てくれないかと言ってきたけど、なかなか来ないんです。特にアメリカは全然来ないし、ロシアも来ない。

それで、途中からもうこれは駄目だと思つて、自分で広島の前爆直後のフィルムを持ってモスクワへ行ったり、ワシントンへ行つて、自分でその映画を見せることなんかをやつてきたものだから、各国の議長が初めて広島へ来られるというのは、僕にはとても印象深いんですね。

ちよつと戻りますけれども、僕がたまたま議長のとくに日本で行う順番が来て、日本のどこでやるかということになって、僕は最初から広島と思つていただけでも、それはやはり事務的には相当難しい。宿泊場所や警備とかロジの問題、東京と広島の間移動をどうするかという問題もあつて、事務方には相当不安もあつたと思うけれども、どうしても広島でやりたいと言いました。外国の賛同が得られるのか、とりわけアメリカが賛成するかどうかというのがあつて、相前から打診をして根回しをしていましたが、最後までアメリカが来るかどうかというのが僕自身もとても不安でした。

広島と言つて、大統領選挙の年という特別な事情があつたとしても、アメリカが来られなければ、やはり見る人はアメリカはポイントしたというふうに見るだろうから、そうすると、むしろやることかマイナスになるかもしれないということもあつて、そこは最後までとても不安だったんです。大統領選挙もあるし党大会もあつて大丈夫かと繰り返し確認して、絶対大丈夫だと言つたので、最後は、やろうという決断をしました。

平和記念公園の中を歩いて記念碑へ行くまでの間、歩きながら話をしたら、そこで改めて分かったのだけど、被爆した一九四五年八月に生まれていたのは、僕とペロシさん、イギリスのマーティン議長が一歳と言っていました。あとはまだ生まれていないんだよね。だから、彼らから見ると、僕らとはちよつと違う意味での関心があつたんですよね。

それで、そういう関心を持つていてみたいなことを言いながら碑の前まで行つて、花束をささげて黙祷を、それは全く自然発生的に黙祷する形になって、そうしたら、ペロシが手を握つて、見たら議長全員の手が繋がつて握られていて、それがすごく印象的でした。

黙祷を終えて資料館へ行く途中、誰だったか若い議長が、原爆はどこに落ちたんだ、穴が空いているのかという話になって、いや、



それは爆弾のように地面に落ちたんじゃなく、上空で光って、その光の熱と風のエネルギーの放出で、被弾した場所はどこだというのは違うんだと言っても、なかなか理解ができないみたいだね。そんな話をしながら資料館へ行って話を聞いたりして、ここで全部、彼らは合点がいったわけです。

資料館に着くまでには、両側に小学生がずらっと並んでいて、それぞれの国の旗を持って声をかけたりしたものだから、みんなとても印象が強かったようでした。

資料館へ入って見始めたら、もうびっくりしているわけ。被爆者の高橋昭博さんが待っていてくれて、被爆のときの自分の体験を話されて、それを聞いているとみんながだんだん無口になって、最後は全然しゃべらない。ペロシさんは一人で感嘆していたね。

それから、会議場へ行って会議を始めたんです。

○紅谷 私は、慰霊碑の献花で、みんなが手をつないで一礼する光景を見て、会議が始まる前でしたけれども、もうこの会議は成功だったと思いました。

○河野 それは本当にそうでしたね。

会議では、フランスのアコワイエ議長が基調演説を行い、なかなかいい演説でした。ペロシ議長は、サンフランシスコが選挙区で日系人からも相当支持をされているというようなことから、広島へ行くのを支持者はみんな喜んでいって、必ず広島に行きますよと言ってくれていたんです。

彼女は、民主党の中でオバマさんと非常に近かったようですね。だから、この会議でのペロシさんの発言というのは、その後のオバマさんのプラハ演説、このときのペロシさんのせりふとほとんど同じ言葉で演説をしました。あの演説はすごく画期的な演説だと思っただけで、あれはペロシさんが来たことと関係があると僕は思っています。

会議は、核兵器のない平和な世界を目指そうと言って始まったけれども、終わったときには、核兵器のない世界をつくらうというふうにせりふが変わって、やはり相当に認識を新たにされ決意をされたんだと思います。

○紅谷 会議のテーマは「平和と軍縮に向けた議会の役割」というオブラートに包んだようなテーマでしたが、実際は、核廃絶や平和軍縮について議論してもらおうというのが河野議長のご迷惑だっと思えますけれども、たまたまそのときにロシアのジョージア侵攻があつて、今のウクライナ侵攻と似たような様相でした。

○河野 そうそう、それで前の晩に、ドイツがどうしてもこの問題を取り上げるといふ話でした。ドイツがやると言ったら、フランスもそれは当然だと言ひ出して、そうなると思ふと議論がみんなそつちへいくと思つたので、僕は、ちよつと待つてくれよと言つたんです。

それで、ドイツには必ず発言を認めるけれど、二巡目の終わりにしてくれと言つて、なおかつロシアを呼んで、ドイツから発言があるけれどもどうだと言つたら、当然反論すると張り切っているんだ。ロシアは、この問題があるので、最初は副議長が来ると言っていたのが議長が来たんじゃないかと思ひました。ただ、これで会議の質が変わるといけないと思つて、この会議の本来の趣旨は核軍縮と平和の問題だからと念押ししたら、ドイツは、それはよく分かっていると云つてくれた。そういう前段が前の晩から当日の朝にかけてありましたね。

会議自体は、そこで何を議論してどういう結論を出すかというのは、元々この下院議長会議の性格じゃない、そういうことはむしろしないようにとみんな注意していたから、広島という場所で強い印象を受けて、平和とか軍縮への認識を持つてくれたらそれでいいわけですからね。

○紅谷 実際に、各国議長の演説の中で、広島での開催に感謝する

とか、原爆投下の悲劇と過ちがはつきり分かったという表明がありました。

○河野 そういう意味で、この第一セッションは成功だったと言つていいでしょうね。午後の第二セッションは「二院制議会における意思決定」について、それぞれの取組について話をしましたが、二院制については、いろいろな形があつて一概には言えない。しかし、ほとんどの国がねじれを経験して、しかも、そのねじれをそれなりに克服しているというか、それなりに対応してやってくるので、ねじれてしまったらおしまいみたいな、当時の日本のように、総理大臣を誰がやっても駄目という状況とは少し違つていましたね。福田総理の辞任表明があつたので、余計そう感じましたね。

二院制は、日本のように衆議院の優位性を持つている国もあれば、全然そういう優位性はないという国もある。それから、イギリスやカナダのように上院の選ばれ方が指名だったり、任期があつたりなかつたりといろいろで、なかなか二院制について外国から学ぼうと思つて知識は得たけれども、余り参考例はなかつたですね。

○紅谷 私が一番知識を得たのは、ロシアが帝政ロシアの時代から二院制だったということでした。

○河野 僕もあれには驚いた。二院制だったんだよね。

第二セッションは、そういうお互いの知識の交換ということでした。だから、第一セッションの平和と軍縮問題で強い印象をみんなそれぞれが持つてくれたということ、この議長会議はよかつたんじゃないかと思ひましたね。

○紅谷 先ほどの河野議長のお話の中でも、ペロシ議長が「私たちが目指すのは核のない世界です」という発言をされ、それが、後のオバマ大統領のプラハ演説と本当に同じような発言で繋がつていたので、G8議長会議の広島での開催というのが非常に大きな意味があつたと言つていいのだらうと思ひます。

二〇二三年にG7サミットを広島で開催しますが、これもアメリカの世論が一朝一夕に広島でいいですよというほど簡単ではなく、やはり積み重ねがあつて広島でいいとなつたのでしょうから、そういう意味でも、G8議長会議を広島で開催した意義というのは大きかつたと思いますね。

○河野 意味はあつたと思いますが、僕がとても残念なのは、あの後にオバマさんがプラハ演説を行つて、あの演説を聞いたときに、これはすごく画期的な演説だと僕は思つたけれども、すぐに知人から、この演説は絶対アメリカでは反発があつてすぐ潰されるよ、オバマさんはそれはね返すだけの力がないだろうから、理想を述べたけれども、それはあくまでも理想で、現実とは全然違うということ知らされる可能性があると僕は言われてね。

アメリカは、やはり右派も強い国で反発はすごいだろうから、それに対して、軍縮を主張する我々はどう対抗するかということを考えたら、オバマ演説を擁護するというか、オバマ演説を担いでもつと進めようとするれば、アメリカだけでは駄目なので、つまり、国際世論が守らないとこれは押し倒されるから、オバマ演説をみんなが国際的に称賛して、オバマ演説はやはりすばらしいという国際世論というものが盛り上がる必要があると思つたんです。

その国際世論が盛り上がるための火つけ役は、日本が直ちにオバマ演説を絶賛して、日本から盛り上がっていかないと駄目だ。それで僕は、オバマ演説を支持する決議を国会でやったらどうかと思つて話をしたけれども、やはり日本でも右寄りの人達が強くて、それはできなかったんですよ。

野党はこれが一番だと言つていたけれど、野党にも力がなかつたんだね。もちろん国会の状況もありましたけれどもね。

そうしているうちに、北朝鮮が核実験をやつて、決議は核実験反対の決議になつてしまふわけです。結局、オバマ演説支持という

のは、決議の最後の方にちよろつと書かれただけで、ほとんどない状況。したがって、もう国際世論も余り盛り上がりがないで、オバマ演説はそこまでになつちやうわけだよ。

オバマという人も、すい星のごとく出てきて、上院議員一期だけで大統領だから、やはり足場が余りなかつたんだろう。そういうしがらみがなかつたから、ああいう演説もできたのかも分からないね。○築山〔衆議院事務局〕 当時、確かに議長はかなり国会決議にこだわつておられました。

○河野 大分言つたけど駄目でした。それがとても心残りでした。オバマ演説までは僕が思っている以上にうまく進んだんですけれどもね。

○紅谷 とはいえ、河野議長だったから広島で会議が開催できたので、それは国会として外交上の成果を得ることができたということ。で、議会の代表である議長の画期的な行動だったと思います。

○河野 だから、もう少し余裕があれば、東京で他のG8の議長達が国会議員と接触する機会、僕が主催した明治記念館のときに、もっと国会議員を呼べばよかったかも分からないね、せめて議連の理事ぐらいはね。そうすれば、決議のときに幾らか違つたかも分からなかつたけど、そんな知恵は回らなかつたよ。

今にして思えば、あの昼食会にやはり議連のメンバーとか広島メンバーとか、思い切つて長崎ぐらゐまで声をかけるぐらゐにすれば良かったのだろうけど、その後、国会決議まで行くと、その頃は全然思つていないものね。

○紅谷 今にして思えばでしょうが、河野先生が引退されてしまつたから、国会決議までは難しかったでしょうね。

○河野 そうだよ。だから、もう駄目だったね。繋がりがなかつたよ。

議長を何年かやらせてもらった中で、これがやはり一番大きな出

来事でした。

このときに、衆議院の国際部が物すごく頑張ってくれたことに驚きましたよ。大抵みんな外務省がやっているのかと思ったら、そうじゃなくて国際部がやってくれていたんだよね。

○築山〔衆議院事務局〕 議長は気にされて外務省に手伝ってくれと官房長に言われたんですが、国際部が、頑張って自分たちでやりますと言いついてやりました。

○紅谷 G8議長会議は無事に終了し、政府専用機で東京に帰る人日本国内を回るといふ人、ペロシ議長は岩国基地から帰国しました。

○河野 ペロシさんが岩国へ行くと言つて、出発までホテルで二人でいろいろな話をして、そのときに、ハワイへ行かなきゃいけないという気持ちになったんです。ペロシさんが広島にわざわざ来て花を捧げてくれたから、やはり僕も真珠湾へ行って頭を下げなきゃいけないだろうと思つたんです。

○紅谷 河野議長が、その年の年末に、ハワイの真珠湾にあるアリゾナ記念館へ行かれたのは、ペロシさんへの返礼の意味合いだったのですね。

○河野 そういう気持ちもあつたんです。やはりアメリカから無理をして広島に来てくれたんですね。彼女は、後に僕が議員を辞めると言ったら、小田原のうちまでワシントンから電話をかけてきて、どうして辞めるんだと言われたこともありました。

真珠湾にあるアリゾナ記念館は、日本人の観光客はほとんど行かないですよ。行くのはちょっと大変で、海の上にあるから船でないと行けないんです。聞いてみたら、日本人がそこに行くのはアメリカ人にとって奇襲攻撃を受けたところに来るわけだから、結構微妙な感じらしいんだ。

私の父は随分昔に行ったという記録があつたけど、真珠湾で、船の手前でおじぎした程度かも分からない。僕が行つたときにはアリ

ゾナ記念館ができていたんです。アリゾナ記念館というのは「アリゾナ」という戦艦が沈んでいる上に浮いた記念館を造ったわけだね。

随分長く議長をやらせてもらったけれども、これも印象に残るものです。

### 《議長退任、政界引退》

○紅谷 河野先生の四十二年にわたる議員活動、議長として二十二年十九日の在職という非常に長い在任期間でしたが、平成二十一年七月に解散になり、引退されることになりました。

そこで、議長退任の話になりますが、選挙に出ない、議員生活を終えると決められたのは、いつ頃だったのでしょうか。

○河野 それはいろいろなことを考えて、大分前から、最初は六十五になったら辞めようとか七十になったら辞めようか思っていたけれども、なかなかそうはいきませんでした。

議長を長く務めました、議長がどういふものかというのを一番教わつたのは、坂田道太という人でした。

坂田さんは、衆議院議長を辞められた後に、竹下総理がリクルート事件で失脚して後任がいらないんですよ。誰かいないかと探して白羽の矢を立てられたのは伊東正義さんだけでも、伊東正義さんは自分の健康状態から駄目だといって頑として受けません。そうしたら、僕が橋本龍太郎さんに呼ばれて、竹下さんから坂田さんに総理を受けてもらえないか誰か打診しろと言われたと。それで、当時、おまえが一番坂田さんから信頼があるから行けと言われたけど、これは河野洋平が行つた方がいいと思うので行つてくれないうかと言うんですよ。



それで、僕は坂田さんのところへ行つて、何とか総理を引き受けていただけないかと言つておりますがどうでしょうかと言つたら、君ね、僕は議長をやつた人間だよ、議長をやつた人間が総理なんかできるわけがないだろう。立法院の長をやつたんだから、行政府の長なんかやらない、お門違いだ、議長はそんな軽いものじゃないと言つてえらく怒られたんです。何で自分が怒られるのかなと思ひながら帰つてきて、駄目だったと言つたら、こっちはこつちで、おまえの説得が下手だからと言われて、立つ瀬がないよね。

結局、会津つぽと肥後もつこすは両方とも頑固で駄目だと言う。伊東さんも坂田さんも駄目で宇野宗佑さんになつたんです。

それで、議長のところで言いたかつたのは、宮沢さんが言つていゝるんだけど、僕が議員を辞めるまでの四十二年余りの間、自民党はずつと支持率が落ちてゐるんですよ。僕が議員の間に自民党の支持率が上がったことは一遍もないんじゃないかな。

昭和四十二年に初当選したときも、黒い霧解散と言われた自民党逆風下で、過半数は取つたけれど総得票率は五〇%を切つたんですよ。それ以来、自民党は得票率五〇%を超えたことはなく、たしかずつと減り続けているんです。

僕は、それは解散権なんかも影響があるんじゃないかと思つていたんです。余りに恣意的に解散して勝つてゐるから、あれは自民党の本来の支持で勝つてゐるんじゃないかと、テクニクで勝つてゐるだけで、本当に信頼を得て勝つてゐるんじゃない。議席の上では勝つてゐるけど、支持率は基本的に減り続けているわけで、自民党にとつてはまずいなと思つていました。

さらに、辞めるころに心配だったのは、選挙の投票率の低迷です。一時的に上がることはあるけれど、やはりずつと下がつてゐるんですよ。もう今や五〇%すれすれで、だから民主主義の選挙で五〇%しか投票率がないというのに、それで多数決の原理を使うというのは

無理だと思ひましたね。投票率をどうやつて上げるかということをもつと真剣に考えないと駄目なのに、為政者は、選挙の時期とかタイミングとかテクニクで選挙を勝とうとしてゐる姿が、やはり本当じゃないというふうに思ひました。そんなことを考へて、これはもう駄目だなと思ひましたね。

○紅谷 選挙に出られても、河野先生のポリシーというか矜持を持つて議員活動ができないということでしょうか。

政界を引退された後は、日中七団体の日本国際貿易促進協会の会長をされ、また、早稲田の特命教授をされて学生に政治の講義をされたりしましたけれども、引退後は政治との関わりを、どう考へていらしたのでしょうか。

○河野 辞めるときに、これで政治と一切縁を切るとは思つていませんでした。何らかの形で政治意識というものを高揚する、高揚まではないけれども、若者の政治意識だけは維持していく仕事をやりたと思つていたから、たまたま早稲田からやらないかと言われたので、これは渡りに船と思つて七、八年やりましたね。もつとやつてくれと言ふから、もう八十になつたからと言つて、最後は随分強く断つて辞めたんですけど、学生諸君と一緒に時間は結構楽しくやりました。早稲田の総長からは、少し学生を挑発して政治論をやるようにしてもらいたい、それはなかなか学者じゃできない話だからと言われてやつたんです。

○紅谷 先生に触発されてかどうか分かりませんが、衆議院の事務局に、そのゼミ生が入局してゐますから、政治に関心を持つたということではないでしょうか。

○河野 講義をして毎回いろいろなことを言うのだけど、僕が、歴代内閣についての評価なんかをしようか、何内閣の評価から始めるかと言つたら、鳩山内閣と言ふんだよね。鳩山内閣と言われれば、僕は、鳩山一郎、日ソ交渉と思ふじゃない。それが学生の言つてい

るのは鳩山由紀夫内閣なんだよね。だから話が合わない事もあった。しばらく笑ったよ。そういうことがありましたね。

早稲田は留学生が結構多いものだから、中国人とか韓国人の学生も授業に来ていて、その都度はつと顔を上げて、おまえの話は違うじゃないかみたいな場面もありましたね。

○紅谷 国貿促は今でも会長をされていますが、中国という国状の表れかもしれませんが、その時々々の政治状況、日中関係によつて、出てくる要人のレベルが随分違うとか、如実に政治の現状が分かるというふうにおっしゃっていただけだと思いますが、どうなのでしょう。

○河野 国貿促というのは長い歴史があつて、戦後、日中関係を最初につないだのは経済、貿易なんです。国交もなければ何にもないところへ潜り込んで物を買ったり売ったりして、最初はそれこそ南京豆とか天津甘栗とかを買う。そんなちよつとしたものから始めたんです。大阪の商人がやったのが最初なんです。

まだ中国と国交正常化はしていない時から始まつて、はじめは経済界や役所のOBが会長をやつた後、石橋湛山さんが総理大臣をやつた後に国貿促の会長をやつた。そして、藤山愛一郎さん、櫻内義雄さん、橋本龍太郎さんがやり、僕なんです。

石橋さんや藤山さんがやっている頃は、国貿促を通さなければ中国貿易なんて全くなかつたんです。中国側は、アメリカと取引している三井、三菱のような商社とは取引しないんですよ。だから、みんなダメーをつくつて、中国貿易専門の子会社をつくつてやらせていました。

だから、その頃は、国貿促というのはその面では繁盛していたんですよ。それが国交が正常化して、もう誰でも中国と貿易ができるようになったら、三井も三菱も直接中国と貿易をするわけです。

今は、かつて国貿促を通して仕事をしていてお世話になったからという、昔のことを知っている律儀な人が、いまだに国貿促と付き

合つてくれているんです。それが結構いるんですよ。

だから、国貿促は僕が会長ですけども、副会長がすごいメンバーで、日立製作所、全日空、三菱UFJ銀行、三菱重工業、双日、森ビルもそうで、そういうところの前社長とか会長とかが副会長をやっているんです。その人達は昔のおつき合いがあるから、中国も律儀につき合うわけです。中国なんかは、今はもう国貿促なんかあまり関係ないけれど、昔井戸を掘った人だからやはり一番昔からやっているとだけで、国貿促が行きますというと、向こうはちやんと対応するんです。

毎年三月の全人代が終わると、直後に国貿促は訪中して、今年の全人代はこういう会議で、方針はこうですというのを一番先に国貿促に説明する。

本来からいえば、中国側は、商務部かなんかが出てきて説明すればいいんだけど、僕が行くものだから、中国共産党の政治局員が出てくる。李克強首相が出てくるときもあれば、汪洋政治協商会議主席だったり、ナンバースリーかフォーぐらいの人が出てきてくれる。

○紅谷 河野先生が会長を辞めるわけにはいきませぬね。

○河野 なかなか辞められないんだよ。

櫻内さんが九十歳ぐらいまでやつたんですよ。櫻内さんと呼ばれて、洋平君、俺も大分年を取つたから、後をやつてくれよと言われて、橋本龍太郎さんが総理を辞めた直後だから、やつたらどうと言つて橋本さんに替わつたけど、二年後に亡くなつて僕が引き受けなければ、後がないんだよ。

○當麻〔衆議院事務局〕 先生に続くような議員、ハト派の議員であるとか、一貫して護憲を主張されているような議員、あとは、中国に対しての見方にしても、親中派と言われる議員もいない今の状況を、どう見ていらっしゃるのでしょうか。

○河野 僕は、自分でも相当責任があると思っっているんです。人のことをいろいろ言うけれど、本来は、僕がもうちょっと後継者をちゃんとつくらなければいけなかったのに、後継者がいないんです。昔からどうもハト派と呼ばれる人は群れないんですよ。タカ派の人たちはすぐ青嵐会とか何とかと群れてやるけれども、ハト派はみんな一城のあるじみたいな顔をするからね。例えば宇都宮徳馬さんや古井喜実さんなどというのは、絶対一緒にやらないから集団が大きくなりません。

それでも、僕が議員生活をしている間は、藤山愛一郎先生が中国へ行って共同声明を出して帰ってきて、自民党の総務会で懲罰という話が出たら、藤山を守れというので自民党のハト派が一斉に集まったことがあるんです。そのときは三、四十人集まって、それだけ集まると相当気は強くなって、何言っっているんだとなるけれども、それが二人、三人になるとだんだん黙っちゃうんだ。

僕はいろいろやりましたけれども、例えば非核、核軍縮なんかを言っていると、本当に困るのは、おまえと共産党はどこが違うんだみたいなことをすぐ言われるし、中国問題を言っていると、社会党じゃないのかとか言われるしね。別に、自民党で非核を主張してなぜ悪いんだと僕は思っっていて、むしろ、自民党の中にそういうのがいるから、自民党は安心だし自民党の幅になるんだと思っっているんです。

日本と中国は、地理的にも経済的にも絶対に離れられないですよ。中国と離れたら生活ができなくなるから、何だかんだ言っただって、どこかでくっついていなきやならないんだけど、今のような状況だと、時の勢いで、中国のことをぼろくそに言っただけじゃ安心だみたいなことになるでしょう。

これは政界だけじゃなくて、国民性か何か知らないけれど、日本中が中国は嫌だと言うけれども、野菜だって豆腐だってみんな中国産のものを食べているのに、中国は嫌だと言うんだよね。もうちょ

っと冷静に考えてほしいと思っますね。

日本の文化の源は韓国、中国ですよ。大平正芳さんや宮沢喜一さんをすごいと思うのは、漢文や漢詩を教養として持っっていたんです。僕らからすると、ああいう教養があるのはすごいですよね。

だから、今の人達にはそういう教養が必要だと思っんですよ。もちろん、シェークスピアを読むことも必要だけれどもね。

○紅谷 二年余にわたるオーラルヒストリーのインタビューでしたが、もうこれがお伺いする最後の質問になるかと思っます。

今日（令和四年六月二十二日）は参議院選挙の公示日です。どのような構成になっていくのか、伝統ある政党の存続にも関わる選挙でもあります。今の政治をどう見ていらっしやるのか、望まれる政治の在り方はどういふものなのかをお聞きしたいと思います。

○河野 とても心配しているのは、日本の国力が相当落ちてきていて、それと共に、国際政治の中における発言力も落ちてきていると思っんです。僕らが現役だった頃は、今よりは充分発言力もあつたし、国の勢いもありました。

それを一番如実に示しているのは政府開発援助、ODAです。僕が外務大臣だった頃は世界第二位で、その数年前は世界第一位の時もあつた。圧倒的に日本からの開発途上国に対する援助は多かつた。だから、開発途上国の日本に対する信頼はすごくありました。それと同時に、国際的な援助について日本が肩代わりするから、アメリカはだんだんと日本に後を頼むよという感じですね。国連に対する拠出金なんかも日本は一気に増えましたね。だから、おのずから日本は国際的に評価が高かつたんです。

ところが、ODAはどんどん下がって、今はかつての額の半分くらい。だから、もう日本は頼られないんですよ。国によっては、日本より中国に頼った方がいいということになるし、段々日本という国の発言力は下がった。今は、国際的に見ても、日本の利用価値と

どうか、日本が果たす役割が少なくなっているから、影響力は非常に小さくなってしまっていると思います。

ODAが圧倒的だった頃は、やはりアジアから日本に対する期待もあったし、アジアを代表する国は日本だ、アジアの問題といえば日本だった。ところが、今はもう、アジアの問題といえば中国、あるいは日本より韓国ということになっていて、必ずしも日本はアジアを代表する国ではなくなっています。そういうところがとても残念ですね。

それは、国会でいろいろ議論をされるんだから僕らが今言うべきことではないけれど、防衛費をGDPの二倍で五兆円にするという議論をするなら、なぜ外交力を倍にする努力をしないのかと僕は思いますね。

国連の中でも、恐らく日本の発言力は形式的にはあるけれども、説得力を持たなくなってしまうているんじゃないかと心配です。

それから、国内的には民主主義というものが本場にきちんと機能しているかどうかということですね。国民と政府との関係でいえば、それはやはり選挙の投票率です。これがどんどん落ちてきて、今にも五割を切りそうな現状。もつと下がってしまうというようなことになると、もう民主主義は成り立ちません。

それは、国民と政治との関係もそうだし、それから、政治の中で与党と野党の関係で、僕は、野党というのは、一義的にはきちんと政権を批判するというのが一番の役割だと思いますね。政権を批判しない野党というのは野党じゃないですよ。

だから、対案を出せばいいと言うけれども、いい案はなかなか出ないですよ。それよりも現在の政治状況を見ると、野党は、基本的に政府を批判する、打倒する努力をして倒さなきゃ駄目だと思っ倒すことによって、民主主義は進んでいくし活力も出てくる。それから、国民の関心も高まる。

それから、政党が政党としての体を成さなくなっていると思うね。僕は、いまだに、連立政権というのは当然あっていいと思うんです。つまり、選挙で過半数を取る政党がなければ、合従連衡で連立政権を作って、ただ、選挙になったら一遍その連立政権はばらばらになるべきです。選挙のときにはそれぞれの党が独自に公約を出して、選挙が終わったら、どれとどれと一緒にやっつけていけばいいかというのを改めて話し合えばいい。ドイツなんかはそうですね。それを、選挙中もずっと連立している政党なんか選べないですね。

そうなる、自立した政党というのはなくなってしまうと思いますね。結果的に法案は一〇〇%成立します。

だから、野党には本当に野党魂というか、野党精神を発揮してもらいたいと願うばかりです。野党を応援する応援団は、昔のように総評があつて日教組なんかの組合とはいかないにしても、やはりそういう野党ぶりを示さないと支持は集まっていけないと思いますね。

野党が頑張らないと国会も国民も活性化しないからね。もちろん政府、与党はそれに対して横綱のように正々堂々と受けて立っていることが望まれる姿だと思いますね。

○紅谷 お話があつた野党の在り方、連立の在り方というのは、河野先生の自由クラブ時代の経験からで、国会という場合は、野党が質疑を通して、いかに政府と対峙するのか、審議が止まるぐらいの質疑をしないと新聞は書かないし、対案主義というのは、聞こえはいいけれども、要は同じ土俵に上って採決で否決されて終わりで成果はない、という長年の教訓かと思えます。

これが本当に最後になります。河野先生は議長に就任されるまで、委員会運営や国会対策については、あまり御経験がなかったものです。大臣を経験されて、外務省や官邸の役人との付き合いはあつたかと思えますけれども、衆議院事務局に対して、六年間の議長とし

ての職務を通してどういう印象を持たれたのか。さらに事務局に今後期待されることがありましたら、率直にお話ししていただき、我々衆議院事務局の道標とさせていただきますと思います。

○河野 本場に、僕は全く事務局を知らなかったんです。だから、議長室へ行ってみて、みんな何をしているのかなと本当は思っていたんだけど、後で分かってきたのは、やはり一つ会議をやるうと思つたら、資料と情報を集めて相当な根回しをしないと安心して会議はできないわけで、その裏方の努力というのはやはり大変なものだということを嫌というほど知らされました。

本会議を開くためにどのくらい努力しているかということは見聞きして分かってきたけれども、本会議だけじゃなくて各委員会でもそれぞれ大変な努力が要つて、しかも、立つてしゃべるのは議員だから、それを後ろから、ちゃんとしゃべってもらうだけの知識を与え、その指針を認識させる仕事に事務局は当たっている。議員というのは個性も強いし、それから自信過剰な人もたくさんいるから、事務局の苦労は多く、本当に大変な仕事をされていると思いましたがね。

それと、議長は、いろいろなセレモニーに行つて挨拶をするけれど、その挨拶の原稿も、ちゃんと、国の姿勢、国の対策というものを踏まえた上で、議長の個性とか議長の個人的な主張みたいなものがそこはかとなく入っていて、それはもうびっくりしましたよ、途中から、自分が言うのを先に書かれているなど思うこともありましたね。

それは、幾ら議長の好みの主張があったって、やはり今の流れと全然違うわけにはいかないし、それから、国の主張、方針というものもあるから、その幅の中でどれだけ議長の個人的な主張とか見解を述べるかという、その幅の中でぎりぎりのことをやってもらつて、途中から、本当に用意してもらつた原稿を読めばいいという感じで

したね。

○紅谷 今のお話は本当にありがたく、もったいないほどで、私は辞めたから言えるのですが、事務局も、全て議長や委員長に言われたから合わせるというのではなくて、事務局は事務局なりに議事運営に携わる立場の者としての考えがありますので、法規・先例に照らし、また与野党のそれぞれの方針、立場を考えるとこういう方向で進めた方がいいという方向性を持って、委員長や理事と向き合うわけです。

河野議長には、あまりその必要がありませんでしたけれども、今のお話は、我々の意図を見抜かれていたようで、今更ながら恐縮する限りです。

○河野 衆議院は、議長関係の日程は決まっているから、ちゃんと粛々とやってくれたから、物理的な間違いはほとんどゼロでしたね。それ以上に、事務局は国会運営の知識、知恵はもとより、与野党を問わず国会の生の情報や、こうなるんじゃないかという見識を持っていて、厚みが違うなというのはつくづく感じました。それはもつと議員のみならず記者も活用すればいいのにと思いましたね。

○紅谷 過分なお褒めのお言葉を賜りありがとうございます。河野議長のオーラルヒストリーを通して、議長のあり方に留まらず、国会としてのあり方まで振り返って考えることができましたように思います。多くの人に読んでもらつて、これからの議会政治の発展の一助にできれば幸いです。

○河野 議長に就任したのは六十六歳でしたが、今はもう八十五歳になり、記憶もやや曖昧で拙い話だったかもしれないけれども、これが議長として残る記憶の最後のものとして、集大成のつもりで話をさせてもらいました。

ありがとうございます。



## 正副議長経験者に対するオーラル・ヒストリー事業について

(令和元年五月二十七日部長会議了承)

### 一 意義

国権の最高機関たる国会を構成する衆議院の正副議長を務められた方々から、その正副議長在任中に経験されたことや個別の政治的決定の中で正副議長として果たされた役割、判断の経緯や御自身の思い等について率直に語って頂くとともに、人生全般を振り返って、記録に残されていない政治的プロセスの真相やその豊富な政治経験から得られた卓越した知見を披露して頂き、それを広く国民に公開するとともに、衆議院に永久に保存し、後世に伝えることは、我が国の議会制民主主義の発展にとって極めて有意義なことであることから、衆議院として、正副議長経験者に対するオーラル・ヒストリー事業を行うことにしたものである。

### 二 目的

正副議長在任期間中の政治経験を中心としつつも、生まれてからの人生全般を振り返って、自らの経験、認識、思い等について自由に述べて頂く一方で、正確な事実を踏まえた的確な質疑応答を通じて、自らは進んで明かしくい事実や思いも聞き出すことによって、正副議長の政治判断の背後にあった政治哲学の全体像を明確にするとともに、政治的事象の真相を明らかにすることで、今後の政治判断の際の参考となり、歴史的検証にも資するような記録を作成し、公開・保存することを目的とする。

### 三 インタビュー方法

当該正副議長経験者に秘書等として仕えた職員を中心に、複数の職員でチームを組み、そのうちの数名がインタビューを務め、多角的な観点から、質疑応答を行うようにする。事前に関係資料を十分に収集・整理し、年表を作成する等の準備を行い、簡単な質問票を事前に送付の上、インタビューを行う。

インタビューは、概ね、月一回約二時間とし、十二〜二十四回程度行うことを想定する。

なお、正副議長経験者へのインタビューは、原則として政界引退後に行うこととし、就任順にとらわれることなく、諸般の環境が整い次第、速やかに実施する。

### 四 記録の作成

インタビュー終了後、記録部の協力を得て速やかに第一次速記録を作成し、当該正副議長経験者に提供し、確認を仰ぐ。全てのインタビューが終了した後に、当該正副議長経験者の意向を踏まえて、その時点で依然として公開が不適當と思われる部分を除外した公開用の記録を作成する。

### 五 記録の保存及び公開方法

音声データ及び作成した全ての記録については、衆議院が全ての権利を保有するものとし、衆議院が責任を持って永久に保存する。

公開については、衆議院ホームページ上での公開を原則とする。出版については、本人又は出版社等の要請があれば、別途、検討する。

音声データ及び第一次速記録については、原則として、上記の初回の公開時点から三十年後に公開することとするが、その時点で、公開の是非について、改めて検討する。

#### 六 謝金

インタビュアーに応じて頂いた当該正副議長経験者に対しては、規定による謝金を支給する。また、交通費が発生する場合は、支給する。

#### 七 所管

本件事業は、議事部資料課の所管とする。当該正副議長経験者に対するオーラル・ヒストリー事業に携わる職員は、実施期間中は議事部資料課兼務とし、インタビュアーを務める元正副議長秘書等の職員が既に退職している場合は、議事部資料課の非常勤職員とする。

#### 八 細目的事項

その他の細目的事項については、必要に応じて、事務総長が定める。



# ○略歴・年表

西暦	和暦	月	年齢	経歴	備考	内閣
1937	昭和12	1月	0	15日、神奈川県平塚市で父・一郎、母・照子の次男として生まれる。	盧溝橋事件(S12.7.7)	廣田 ～
1943	18	4月	6	平塚第一国民学校入学		
1945	20	4月	8	母、姉とともに祖父・治平が住む神奈川県足柄下郡豊川村に疎開。千代小学校に転校。	日本自由党結成(河野一郎、初代幹事長)(S20.11) GHQによる公職追放発令(S21.1) 河野一郎、公職追放による議員辞職(S21.6)	東條 ～
1949	24	4月	12	私立相洋中学校入学		
1952	27	4月	15	早稲田高等学院入学(目黒区で父・一郎と同居)	河野一郎、公職追放を解除され、三木武吉氏と自由党復党(S26) 造船疑獄(S29.1.7)	吉田 (第2次)
1955	30	4月	18	早稲田大学第一政治経済学部経済学科入学	河野一郎、農林大臣就任(S29.12) 自民党結成(S30.11) 河野-フルシヨフ会談、日ソ共同宣言(S31.10) 春秋会(河野派)結成(S31.12) 河野一郎、経済企画庁長官就任(S32.7)	鳩山 石橋
1959	34	4月	22	丸紅飯田株式会社(現丸紅)に入社(～昭和36年5月退社)		岸
1960	35		23	サンフランシスコ支店に在籍し、スタンフォード大学に聴講生として留学	日米安保条約改定(S35.6発効) 河野一郎、新党結成断念の声明発表(S35.8) 河野一郎、農林大臣就任(S36.7)	
1961	36	5月	24	飼料商社の日本糧穀の取締役役に就任		
1962	37	4月	25	結婚(丸紅・伊藤忠の創業者・伊藤忠兵衛氏のひ孫の武子)		池田
		5月		日本糧穀社長就任 日・ソ漁業交渉のため河野一郎農林大臣に同行しモスクワを訪問(フルシヨフ共産党第一書記と面会)		
1963	38	1月	26	長男・太郎誕生		
1965	40	7月	28	父・河野一郎逝去(享年67) 河野密議員が追悼演説	アジア・アフリカ問題研究会(A・A研)設立(S40) 黒い霧解散(S41.12)	
1967	42	1月	30	第31回衆議院議員総選挙 旧神奈川3区から出馬、トップ当選 当選同期で『拓世会』結成	政府が衆予算委で、非核三原則を表明(S42.12) 米原子力空母寄港(S43.1) NPT調印(S43.7)	
1969	44	秋	32	サイパン島視察	大学運営臨時措置法成立(S44.8)	佐藤
		12月		第32回衆議院議員総選挙		
1971	46	4月	34	文教委員会で委員長代理として「学校教職員給与特別法」を混乱の中採決		
		7月		叔父・河野謙三、参議院議長に当選	松村謙三氏、逝去(S46.8)	
		10月		福田赳夫外相不信任決議案採決に際し、本会議欠席		
1972	47	12月	35	第33回衆議院議員総選挙 第2次田中内閣において、文部政務次官就任	沖縄返還(S47.5) 日中国交正常化(S47.9)	田中
1973	48	6月	36	肝臓の異変を認知	金大中拉致事件(S48.8)	
		12月		政治工学研究所(通称・政工研グループ)発足		
1975	50	秋	38	自民党政策綱領改正起草委員会において新綱領案を起草		
<b>新自由クラブ</b>						
1976	51	6月	39	自民党離党、新自由クラブを結党	ロッキード事件(S51.2)	三木
		8月		京都で応援演説中に暴漢に襲われる	政府、毎年度の防衛費をGNP1%以内と決定(S51.11)	
		12月		第34回衆議院議員総選挙(選挙区が分割され旧神奈川県第5区からの出馬) 新自由クラブとして初の選挙、18名当選	福田内閣発足(S51.12)	
1977	52	2月	40	新自由クラブとして初の代表質問		福田
		7月		第11回参議院議員通常選挙 新自由クラブは3名、推薦で2名当選	日中平和友好条約発効(S53.10)	
		9月		河野代表を団長とする新自由クラブ訪中団(鄧小平副首相と会談)		
1979	54	7月	42	西岡武夫幹事長、他3名が離党	大平内閣発足(S53.12)	
		10月		第35回衆議院議員総選挙 新自由クラブは惨敗し、当選者4名 自民党は前回選挙獲得議席数を下回ったものの、大平総理、政権担当の決意表明。反大平派は退陣要求(40日抗争開始)		大平

西暦	和暦	月	年齢	経歴	備考	内閣	
1979	54	11月		首班指名選挙で、大平正芳議員に投票（円山議員離党、河野代表辞任、後任は田川誠一議員）			
1980	55	6月	43	第36回衆議院議員総選挙（衆参同日選） 新自由クラブは12名当選。参院は、推薦候補2名当選。翌7月「参議院新自由クラブ」を解消し「新政クラブ」を結成。12月、木村守男議員離党	大平内閣不信任決議案可決（S55.5） 大平総理、逝去（S55.6）	大平	
1981	56	3月	44	映画『ええじゃないか』公開。「原市之進」という改革派幕臣役で出演	鈴木内閣発足（S55.7）	鈴木	
		9月		社会民主連合と統一会派「新自由クラブ・民主連合」を結成（昭和58年9月統一会派解消）、柿沢弘治議員離党			
1983	58	6月	46	第12回参議院議員選挙 新自由クラブは3名当選	中曽根内閣発足（S57.11） 武器輸出三原則等の例外化（S58.1）		
		12月		第37回衆議院議員総選挙 新自由クラブは8名当選（中曽根内閣と連立政権）。田川代表が自治大臣として入閣			
1984	59	6月	47	新自由クラブ代表復帰			
		10月		第2次中曽根内閣で、山口幹事が労働大臣として入閣			
1985	60	1月	48	母・照子逝去		中曽根	
		4月		日本・ハンガリー友好協会会長就任			
		9月		党首会談で防衛費対GNP比1%枠厳守を申し入れ			
		12月		第2次中曽根第2次改造内閣で、科学技術庁長官として初入閣（～昭和61年7月）			
1986	61	7月	49	第38回衆議院議員総選挙（衆参同日選） 自民304議席の大勝、新自は衆院6名当選、参院比例区で宇都宮徳馬氏が当選 自民との連立解消	米スペースシャトルチャレンジャー号爆発事故（S61.1） チェルノブイリ原発事故（S61.4）		
		8月		新自由クラブ解党。自民党に復党（田川誠一議員は進歩党を結成）			
1987	62	1月	50	自民党宮沢派（宏池会）入会			
1989	平成1	4月	52	平成元年度予算の本会議を欠席	竹下内閣発足（S62.11） リクルート事件（S63.6） 消費税導入を柱とする関連法案成立（S63.12）	竹下	
		6月			宇野内閣発足（H1.6）	宇野	
		8月			海部内閣発足（H1.8）	海部	
1990	2	2月	53	第39回衆議院議員総選挙			
		3月		自民党外交調査会長就任（～平成4年12月）	イラクによるクウェート侵攻（湾岸危機）（H2.8）		
1991	3	10月	54	自民党総裁選、宮沢喜一議員が選出される。 永年在職議員表彰	宮沢内閣発足（H3.11） ソ連崩壊（H3.12）		
1992	4	1月	55	自民党政治改革本部党改革部会長就任（～平成4年12月）	PKO協立法成立（H4.6） 東京佐川急便事件（H4）	宮沢	
		12月		宮沢改造内閣において内閣官房長官就任（～平成5年8月）			
1993	5	6月	56	18日、宮沢内閣不信任決議案可決、衆議院解散	カボ・ジブチで国連ボランティアの中田厚仁氏、 文民警察官の高田晴行警部補が死亡（H5.4）		
		7月		第40回衆議院議員総選挙（選挙結果：自民党223、社会党70、新生党55、日本新党35、 新党さきがけ13、その他）自民党は下野	新党さきがけ結成、新生党結成（H5.6） 第19回先進国首脳会議（東京サミット）（H5.7）		
自民党総裁							
				第16代自由民主党総裁に当選（～平成7年9月）		細川	
				8月	「慰安婦関係調査結果発表に関する河野内閣官房長官談話」（いわゆる河野談話）を発表 第127回国会（特別会）召集 土井議長、鯨岡副議長が当選 細川護熙君を内閣総理大臣に指名（8/6）		細川内閣発足（H5.8）
				9月	第128回国会（臨時会）、政治改革特別法案の審議		
1994	6	1月	57	政治改革関連法案に関し河野総裁、細川首相のトップ会談 29日、小選挙区比例代表並立制と政党交付金の導入等を柱とする政治改革関連四法が成立			

西暦	和暦	月	年齢	経歴	備考	内閣
1994	6	4月		28日、細川内閣総辞職。羽田孜君を内閣総理大臣に指名	羽田内閣発足 (H6.4)	羽田
		6月		村山富市君を内閣総理大臣に指名 (6/29)、自社さ連立内閣成立 河野副総理 (~平成7年10月) 兼外務大臣 (~平成8年1月) に就任	村山内閣発足 (H6.6)	
		7月		イタリア・ナポリサミット		
		11月		区割り法案成立 (12月、公職選挙法改正法 (小選挙区比例代表並立制等) 施行)		
1995	7	6月	58	本会議において「歴史を教訓に平和への決意を新たにする決議」	阪神淡路大震災 (H7.1) 地下鉄サリン事件 (H7.3)	村山
		7月		妻・武子逝去 (享年53) 第17回参議院議員通常選挙 (選挙結果: 自民111、新進党57、社会党37、共産党14、公明党11、新党さきがけ3、その他) 自社さ党首会談。村山総理から政権禅譲の打診		
		8月		村山談話発表「戦後50周年の終戦記念日にあたって」	在沖繩米兵少女暴行事件 (H7.9)	
		9月		自民党総裁選、橋本龍太郎議員が選出される。		
1996	8	1月	59	5日、村山総理退陣表明。 11日、村山内閣総辞職。橋本龍太郎君を内閣総理大臣に指名	橋本内閣発足 (H8.1)	橋本
		10月		第41回衆議院議員総選挙 (小選挙区比例代表並立制で初の選挙) 神奈川県第17区から当選		
1997	9	6月	60	天皇皇后両陛下下南米公式訪問 (ブラジル・アルゼンチン) に首席随員として随行	韓国で金大中大統領就任 (H9.12)	
1998	10	7月	61	第18回参議院議員通常選挙 30日、橋本内閣総辞職。小淵恵三君を内閣総理大臣に指名	小淵内閣発足 (H10.7) 日韓共同宣言 (H10.10)	
1999	11	1月	62	大勇会結成		小淵
		4月		日本陸上競技連盟会長就任 (~平成25年6月、7期)		
		10月		第2次小淵改造内閣において外務大臣就任		
		11月		外務委員会で河野外相に対する太郎議員が質疑		
2000	12	1月	63	パリの仏国際関係研究所 (IFRI) で「日欧ミレニアムパートナーシップ」の推進を提唱 (河野イニシアチブ)		森
		4月		5日、小淵内閣総辞職。森喜朗君を内閣総理大臣に指名 外務大臣再任 (~平成13年4月)	森内閣発足 (H12.4) 小淵前総理、逝去 (H12.5)	
		6月		第42回衆議院議員総選挙		
		7月		史上初の日朝外相会談。宮崎G8外相会合において、紛争予防や軍縮・不拡散・軍備管理等について議論		
		9月		第55回国連総会の一般演説で、軍縮をテーマに演説		
2001	13	1月	64	カタールで「日本・イスラム文明間対話」を提唱 (河野イニシアチブ)	外務省機密費事件 (H13.1)	
		4月		24日、自民党総裁選挙、小泉純一郎君選出 26日、森内閣総辞職。小泉純一郎君を内閣総理大臣に指名	小泉内閣発足 (H13.4) 米国同時多発テロ (H13.9) テロ対策特措法案成立 (H13.10)	
2002	14	4月	65	生体肝移植手術を受ける		
		9月		総理・自民党総裁経験者と意見交換 (北朝鮮問題について)		
2003	15	2月	66	金大中韓国大統領をソウル・青瓦台に訪ね懇談		小泉
		3月		総理・自民党総裁経験者と意見交換 (イラク対応について)	イラク戦争 (H15.3) イラク人道復興支援特措法案成立 (H15.7)	
		9月		20日、自民党総裁選挙、小泉純一郎君再選 (小泉399・亀井139・藤井65・高村54)		
		10月		衆議院解散 (中曽根・宮沢元総理が引退)		
					衆議院議長	
		11月	66	第43回衆議院議員総選挙 第158回国会 (特別会) 召集 (11/19~11/27 会期9日間) 第71代衆議院議長に当選 (副議長: 中野寛成君) 小泉純一郎君を内閣総理大臣に指名	第2次小泉内閣発足 (H15.11)	
2004	16	1月	67	第159回国会 (常会) 召集 (1/19~6/16 会期150日間) イラク復興支援活動等に承認を求める件承認		
		2月		「国会議員の互助年金等に関する調査会」を設置		
				アジア・アフリカ問題研究会 (AA研) が総会を開催。約10年ぶりの活動再開を宣言 イスラム圏30か国の駐日大使を議長公邸に招き、文明間対話の重要性を強調		
		3月		5日、平成16年度予算可決 (参議院3/26可決成立) 社団法人日本軽種馬協会会長就任		

西暦	和暦	月	年齢	経歴	備考	内閣	
2004	16	4月		国民年金法等改正案外関連2法案可決 小泉内閣全閣僚及び民主党「次の内閣」担当、国民年金保険料納付状況を公表（未加入・未納問題が表面化）			
		5月		福田内閣官房長官辞任			
		7月		第160回国会（臨時会）召集（7/30～8/6 会期8日間）			
		8月		全国戦没者追悼式で追悼の辞（アジア諸国の戦争被害者に対する加害責任に言及）			
		9月		第3回主要8カ国（G8）下院議長会議（於：米国・シカゴ） ハスタート米国下院議長に衆議院との公式な議会交流を提案、合意 中国親善訪問（公式招待）、呉邦国全人代常務委員長に議会交流を提案、合意			
		10月		第161回国会（臨時会）召集（10/12～12/3、会期53日間）			
2005	17	1月	68	英国及びエジプト・アラブ共和国親善訪問（公式招待） 第162回国会（常会）召集（1/21～8/8解散 会期200日間） 「国会議員の互助年金に関する調査会」から答申（9月の総選挙後、議会制度協議会で議論されるも、互助年金制度は廃止）		小泉	
		3月		2日、平成17年度予算可決（参議院3/23可決成立）			
		4月		衆議院と中国・全人民代表大会による日中議会交流委員会初会合			
		5月		議院運営委員会理事会で、院内の服装等について本会議場以外で「ノーネクタイ、ノー上着」の軽装を認めることを申し合せ			
		6月		小泉総理の靖国神社参拝等について総理経験者と意見交換（小泉総理に申し入れ）			
		7月		衆議院で郵政民営化法案外関連5法案議決			
		8月		「国連創設及びわが国の終戦・被爆六十周年に当たり、更なる国際平和の構築への貢献を誓約する決議案」可決 参議院で郵政民営化法案外関連5法案否決 衆議院解散（8/8）			
		9月		第44回衆議院議員総選挙 第163回国会（特別会）召集（9/21～11/1 会期42日間） 第72代衆議院議長に当選（副議長：横路孝弘君） 小泉純一郎君を内閣総理大臣に指名			後藤田正晴氏、逝去（H17.9） 第3次小泉内閣発足（H17.9）
		10月		11日、郵政民営化法案外関連5法案可決（参議院10/14可決成立） 衆議院議会制度協議会、国会議員互助年金について平成18年3月末で制度廃止に合意			第3次小泉改造内閣発足（H17.10）
		2006		18			1月
9月	第5回G8下院議長会議（於：ロシア・サンクトペテルブルク）及びハンガリー親善訪問 日本国際貿易促進協会会長就任 自民党総裁選挙、安倍晋三君選出 第165回国会（臨時会）召集（9/26～12/19 会期85日間） 安倍晋三君を内閣総理大臣に指名		安倍内閣発足（H18.9）				
11月	16日、衆議院で教育基本法可決（参議院12/15可決成立）						
12月	議会制度協議会 河野議長から「公聴会の開会時期」について提案						
1月	第166回国会（常会）召集（1/25～7/5 会期162日間）						
2007	19	4月	70	国会図書館長に長尾真氏就任			
		4-5月		日本国憲法施行60周年記念行事			
		6月		議員内山見君懲罰事犯の件議決（登院停止30日間） 衆議院議長河野洋平君不信任決議案提出、否決			宮沢喜一氏、逝去（H19.6）
		7月		第21回参議院議員通常選挙、民主党が参議院第1党（ねじれ国会）			
		8月		第167回国会（臨時会）召集（8/7～8/10 会期4日間） 参議院議長に江田五月君が当選			
		9月		第6回G8下院議長会議（於：ドイツ・ベルリン） 第168回国会（臨時会）召集（9/10～翌年1/15 会期128日間） 10日、安倍総理が所信演説、12日、辞任表明 23日、自民党総裁選挙、福田康夫君選出 25日、安倍内閣総辞職、福田康夫君を内閣総理大臣に指名（参議院は小沢一郎君を指名）			福田内閣発足（H19.9）
							安倍

西暦	和暦	月	年齢	経歴	備考	内閣			
2007	19	11月		自民・民主党首会談 会期延長を議決（11/11～12/15 35日間） 13日、テロ対策補給支援活動特別措置法案可決					
		12月		会期延長を議決（12/16～翌年1/15 31日間）					
2008	20	1月	71	11日、参議院でテロ対策補給支援活動特措法否決、衆議院で再可決成立  第169回国会（常会）召集（1/18～6/21 会期156日間） 22日、衆参正副議長、いわゆる「ねじれ国会」での国会運営の在り方を協議 30日、総務委員会及び財務金融委員会で「つなぎ法案」可決 河野・江田両院議長あつせん案「総予算及び歳入法案について」を提示（与野党受諾、総務委・財金委「つなぎ法案」撤回、国会正常化）				福田	
		2月		29日、平成20年度予算可決（参議院3/28否決）					
		3月		12日、日本銀行総裁同意人事（衆議院同意3/13、参議院不同意） 19日、同同意人事（衆議院同意、参議院不同意）、福井日銀総裁退任（総裁空席）  27日、福田総理が道路特定財源の平成21年度からの一般財源化等を表明 28日、両院議長が歳入法案について与野党幹事長・書記局長会談を要請 与野党幹事長・書記局長会談において「つなぎ法案」の年度内成立で合意					
		4月		9日、日本銀行総裁同意人事（衆議院及び参議院同意）  フランス政府より、レジオン・ドヌール勲章コマンドゥールを受章  30日、ガソリン税の暫定税率を復活させる等の税制改正関連法案について、参議院否決とみならず議決、再可決成立					
		6月		11日、参議院で内閣総理大臣福田康夫問責決議案可決 12日、衆議院で福田内閣信任決議案可決					
		7月		フランス及びイタリヤ訪問					
		8月		全国戦没者追悼式（靖国神社に代わる新たな無宗教の戦没者追悼施設の建設の必要性について言及）  第7回G8下院議長会議（於：広島市）（8/31～9/3）					ロシアがジョージアに侵攻（H20.8）
		9月		1日、福田総理、辞任表明 18日、河野議長、政界引退を発表 22日、自民党総裁選挙、麻生太郎君選出  第170回国会（臨時会）召集（9/24～12/25 会期93日間） 福田内閣総辞職、麻生太郎君を内閣総理大臣に指名（参議院は小沢一郎君を指名）					米国証券大手リーマン・ブラザーズ経営破たん（H20.9）  麻生内閣発足（H20.9）
		11月		20日、帝国議会時代を含め衆議院議長在任歴代最長（1,785日）を更新					
		12月		衆議院議長としてハワイの真珠湾を初訪問「アリゾナ記念館」で献花					
		2009	21	1月	72	第171回国会（常会）召集（1/5～7/21解散 会期198日間）			
5月				民主党代表選挙、鳩山由紀夫君選出					
6月				18日、臓器移植法改正案可決（参議院7/13可決成立）  19日、参議院で海賊行為対処法案、租税特別措置法改正案及び国民年金法等改正案否決、衆議院で再可決成立					
7月				13日、麻生内閣不信任決議案否決 同日、参議院で内閣総理大臣麻生太郎君問責決議案可決  21日、衆議院解散  衆議院議長在任期間は、2,029日間 議員在職期間は、42年10カ月					
		8月		第45回衆議院議員総選挙					
		9月		早稲田大学特命教授として、早稲田大学大学院公共経営研究科で政治学の講義を開講					
2010	22		73		菅内閣発足（H22.6）	菅			
2011	23	11月	74	桐花大綬章受章	野田内閣発足（H23.9）	野田			

---

正副議長経験者に対するオーラル・ヒストリー事業

第71代・72代 衆議院議長 河野 洋平

発行日 令和5年12月27日

編集・発行 衆議院事務局

〒100-0014 東京都千代田区永田町1-7-1

電話 03(3581)5111(内線31310)

03(3581)5195(直通)

---

ISBN 978-4-911228-01-2

○オーラル・ヒストリーは、インタビュー対象者及びインタビュアーの個人的な回想や意見を表したものであり、衆議院又は衆議院事務局の公式見解や意見ではありません。

○著作権等については、衆議院ホームページの[リンク・著作権等について](#)をご覧ください。